

2010

アートに携わる何者かになりたいと思っていた

2010

# ボランティアが創った アートプロジェクト

「心地よい面倒さ」いつもの 適当なノリ

定例ミーティングが終わったら、  
だいたい飲み会

TERATOTERAの **沼** にハマる

テラッコたちが、よく落ち込んでいる 作家たちと飲むのが  
すごく楽しかった 妙な高揚感と

展示の **ハチャメチャ感** 心地よい疲労感

**えっ、これもアートだったの？**  
には驚きました  
テラッコ愛が止まらないeeeeeeeeeeeeeeee~!

# コノコエヲキケ!



TERATOTERA

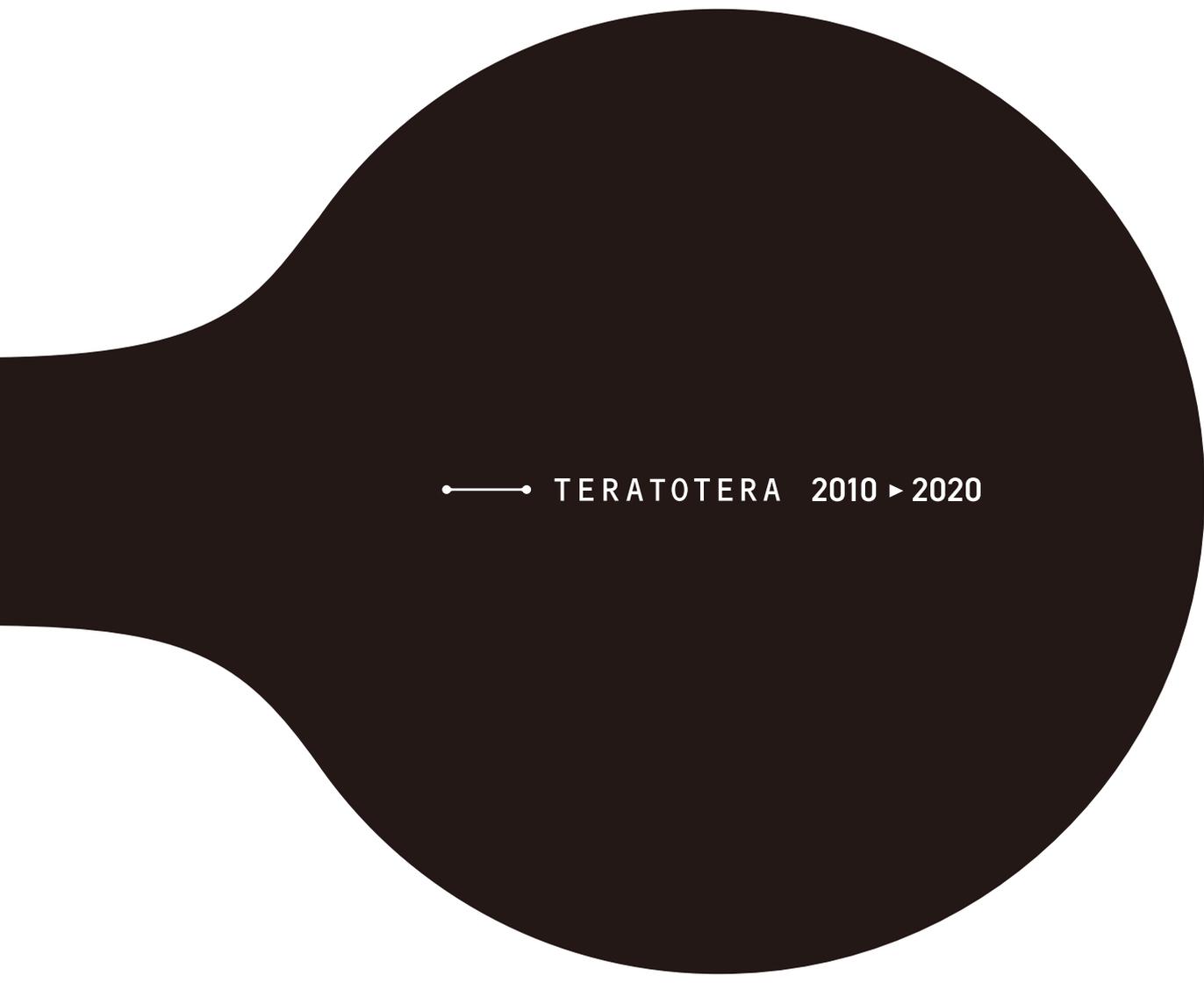
2010-2020

ボランティアが創った  
アートプロジェクト



TERATOTERA





—• TERATOTERA 2010 ▶ 2020

ボランティアが創ったアートプロジェクト

## アートに結ばれた大地

中央線の高円寺・吉祥寺・国分寺を繋ぐ周辺地域で展開するアートプロジェクト TERATOTERA。国分寺まで活動範囲が伸びたのは2012年からであって、2010年に始まった当初は高円寺から吉祥寺がその舞台であった。まずはプロジェクトのタイトルを決めることからスタートしなければならなかったのだけど、なかなかいい名前が思いつかない。横文字にするか日本語にするか。僕は考えごとがある際、お風呂の湯船に長い時間つかることが多いのだけど、10年前のその日もお湯がぬるくなりはじめたぐらいに、「寺」という文字が急に気になりだし、「寺と寺」を結ぶプロジェクトだから英語の to を使って「寺 to 寺」、それをカタカナにして「テラトテラ」なんてどうだろうかと閃いてしまったのだった。お風呂から出てすぐに調べてみたら、「テラ」という言葉には、ラテン語で大地とか地球とかいう意味もあって、「寺 to 寺」でもあり「大地と大地」を結ぶみたいな壮大なスケールも感じられ、けっこう悪くないのではと。「寺と寺」→「寺 to 寺」→「テラトテラ」→「TERATOTERA」のはじまりである。

本書は、アートプロジェクト TERATOTERA の2010年から2020年の営みをまとめたドキュメントである。あの湯船の閃きが、まさか10年以上も続くプロジェクトになるなんて思いもよらなかった。このドキュメントの制作にあたり、これまで開催したプロジェクトを見返してみたら、文字通り休むことなく多種多様なイベントがひっきりなしに行われていたことに驚きを隠せない。街なかを舞台とした実験的なアートの展覧会をはじめ、様々なトピックを掲げたトークやシンポジウム、著名なミュージシャンによるミュージックライブ、老舗映画館でのアート映像祭、一般人を巻き込んだパフォーマンス、さらにはアートプロジェクトを学ぶ連続講座やアートにまつわる英語を学ぶ授業、そして東南アジアからアーティストを招聘したプロジェクトなんてのもあった。こうしたアートにまつわる多岐にわたるプロジェクトを、中央線の西側を舞台として10年以上にわたり TERATOTERA は起こしてきたのだ。

その推進力となったのは他でもないテラッコと呼ばれるボランティアスタッフである。テラッコは、学生、デザイナー、エンジニア、テレビプロデューサー、整体師、主婦、大学職員、広告業、新聞記者など、本当に多様な人々で構成されている。そんな彼ら彼女らは、ボランティアといっても、そんじょそこらのボランティアではけっしてない。企画の草案から運営まで、TERA

TOTERA の全てのプロジェクトの根幹を担ってきたのが外でもないテラッコたちだったのである。本ドキュメントの大部分は、こうしたテラッコたちの声で埋め尽くされている。なぜそこまでアートプロジェクトに自らの時間の多くを捧げられたのか。本書を読み進めていけば、その秘密が垣間みえるかもしれない。

10年以上にわたり、東京の西側で展開されてきた、寺と寺、大地と大地を繋ぐアートプロジェクト TERATOTERA、そして、それを支え続けたテラッコたちの生の声。ぜひゆっくりと時間をかけてその軌跡の数々をご覧くださいと思います。

TERATOTERA  
ディレクター 小川 希

## Art Connecting Teras and Terrains

TERATOTERA is an art project linking the neighborhoods of Koenji, Kichijoji, and Kokubunji along the Chuo Line in western Tokyo. Initiated between Koenji and Kichijoji in 2010, the project extended its activities to Kokubunji in 2012.

We first needed a good name for the project, which was no easy task. Should it be in Roman alphabet or Japanese? Whenever I have something to mull over, it is my habit to do so while soaking in the bath. Likewise, on that day, just as the water was beginning to turn lukewarm, my mind alighted upon the kanji character for “temple”: usually pronounced “tera,” but also “ji” in names like Koenji, Kichijoji, and Kokubunji. Then I had a flash of inspiration. Since the project was connecting different “temples,” how about if we take the Japanese conjunction “to” (“and”) and interpret it as the English preposition “to”—TERATOTERA—so that the name worked in English as well as Japanese? Upon exiting the tub, I looked up “tera” and found the similar “terra,” a Latin term meaning “land” or “the earth.” Not bad! While linking one temple to another, it would also suggest a more grandiose scale of linking one terrain to another. Thus, TERATOTERA was born.

This pamphlet documents the activities of TERATOTERA from its beginnings in 2010 to its conclusion in 2020. From that flash of inspiration in the bathtub, I never would have guessed that the project would continue for more than ten years. While working on this pamphlet and looking back over everything that we did, I couldn’t help but feel surprised at the sheer number and variety of events that we managed to put together, one after another, literally without rest. Starting with experimental art exhibitions that used the street as their stage, we hosted talks and symposia on a large number of topics, live performances by famous musicians, art film festivals at aging theaters, performances that pulled in passersby,

lecture series about community art projects, Art English lessons, and projects with guest artists from as far as Southeast Asia. What a grand panoply TERATOTERA had succeeded in mounting along the western section of the Chuo Line over these past ten years.

The driving force behind this achievement was none other than the volunteer staff of TERACCO. Students, designers, engineers, TV producers, physical therapists, female heads of household, college professors, people in the advertising industry, newspaper reporters… the group’s composition has been truly diverse. And they weren’t just casual helpers. From the initial planning stages to business administration, TERACCO was responsible for all facets of TERATOTERA. Accordingly, the present pamphlet is filled largely with their words. Why did they invest so much of their time in this project? Perhaps you will gain glimpses of the answer in these pages.

TERATOTERA: ten-plus years of linking temple to temple, terrain to terrain, through community-based art projects. TERACCO: the voices of the people who made it happen. As you read this pamphlet, we hope you enjoy lingering over the accomplishments of both.

Nozomu Ogawa,  
TERATOTERA Director



吉祥寺駅(右下)から三鷹駅、さらに国分寺駅方面にのびるJR中央線。TERATOTERAは、高円寺駅とこの3つの駅を結ぶエリアで活動を続けた

## 002 はじめに Introduction

アートに結ばれた大地 …………… 小川 希

## 006 目次 Index

## 009 I TERATOTERA 祭り2020 TERATOTERA Festival 2020

- 010 コンセプト：Collective ～共生の次代～ …………… 小川 希  
 012 Ongoing Collective …………… 鈴木颯良・鶴見香月  
 016 Chiang Mai Art Conversation …………… 永野千晴・中野美緒  
 020 hyslom …………… TK・中野美緒・裴潤心  
 022 Ruang MES56 …………… 上田和輝  
 024 Sapporo Dance Collective …………… 高須賀真之  
 026 Sa Sa Art Projects …………… 国広綾子・常泉佑太・林 真実  
 028 Special Live and Forum …………… 蔵田章子・野島優一  
 030 参加コレクティブ / アーティスト・プロフィール

## 033 II はじまりの日々 The First Days

- 034 TERATOTERA のはじまり …………… 大内伸輔  
 035 多様性を求めたディレクション …………… 國時 誠  
 036 震災と確信 …………… 小川 希  
 037 「アートボランティアなんて知らなかった」私の、57 歳からのテラッコ …… 前川順子  
 038 私がテラッコになった理由 …………… 脇屋佐起子

## 039 III テラッコの熱量 The Passion of TERACCO

- 040 2011 年のエンドレス・ジェットコースター …………… たこ (飯川恭子)  
 042 アーティストという存在の強さ …………… 遠山尚江  
 044 きっかけは東日本大震災、現在もアートと人々をつなぐ …………… 吉田絵美  
 045 いまも不思議、「あんなに夢中になれた」テラッコの日々 …………… ファン・タンミン  
 046 アートの「土壌」開拓から始めた TERATOTERA …………… 東 晶子  
 047 吉祥寺とベルリンを結ぶ 街なかのアート体験 …………… 土井美穂  
 050 古民家で電子音楽ライブ 完全燃焼の夏 …………… 竹内友貴  
 051 TERATOTERA という沼にハマる …………… 脇屋佐起子  
 052 わたしが愛した「西荻シリーズ」 …………… 高村瑞世  
 054 私の「第2の青春」TERATOTERA …………… 宮久美那  
 055 「当たり前」が反転する瞬間 ボランティア活動で体感 …………… (匿名)  
 056 何気ない暮らしにアートは潜んでいる …………… 伊藤真希子  
 057 何かをかたちにすることが日々の活力になる …………… 田中秀康

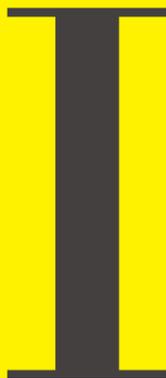
- 058 実感！アートプロジェクトを仕込む難しさ …………… 三田真由美  
 059 「作家さん」と身近に過ごした「日常」 …………… 森 聡史  
 060 多様な人々と未知の感覚に出会わせてくれた、大切なモノ …………… 千葉佐奈子  
 062 作家やテラッコの全力で向き合う姿に学んだ …………… 後藤響子  
 063 英語を話す、だけじゃない TERA English …………… 弘川有希絵  
 064 「音楽」を問う音楽イベント「熱量」で実現 …………… 加藤裕士  
 065 日常の傍らにある非日常の魅力 …………… 都賀田一馬  
 066 「共感せずとも受け止める」誠実さの発現 …………… 梅澤光由  
 067 テラッコが「作品」になれる喜び …………… 立山周一郎  
 068 「アートなホストクラブ」がもたらした高揚感 …………… 三浦留美  
 069 アートに食に温かなつながりに感謝 …………… 柳本紀子  
 072 TERATOTERA から東南アジアのアートシーンへ …………… 池田佳穂  
 073 ボランティアなのに落ち込む、テラッコという謎 …………… 宮崎有里  
 074 お金ってなんだろう？ お金を介さないマーケットで考えた …………… 海老原千佳  
 075 自由でテキトーで面倒、だから面白い …………… 佐藤卓也  
 076 民俗芸能を通じて、「豊かさ」を問い直す …………… 浪江航一  
 079 仲間たちと交歓する文化が生むテラッコの「熱量」 …………… 山上祐介  
 080 芸術と政治と「駅伝芸術祭」 …………… 岩尾庄一郎  
 084 側からみた …………… 森 ゆうな  
 085 Can't stop ongoing …………… 吉末真由美  
 086 ウルトラランナーを追い、カメラを止めるな …………… 永野千晴  
 087 ヘンリー・タンを待ちながら …………… 上田和輝  
 088 アート講座から始まった様々な出会い、豊かな経験 …………… 内藤 桃  
 089 意識の越境 現代アートで体験 …………… 裴潤心  
 090 非「縦型の意思疎通」で緩やかに繋がる …………… 林 真実  
 091 お金で動かないということー「オンライン・テラッコ屋」傍聴記 …… 秋山きらら

## 094 IV テラッコとともに歩んだ11年 Eleven Years with TERACCO

- 095 ディレクター対談 …………… 小川 希 × 森 司  
 099 事務局長対談 …………… たこ × 高村瑞世 × 森 ゆうな  
 102 アートプロジェクトの <sup>オンライン</sup>0123 …………… 小川 希

## 104 V TERATOTERA を観察する Observing TERATOTERA

- 105 都市におけるアートプロジェクト実践の地平 …………… 加藤 惟  
 108 芸術を通して開かれる公共性への可能性 …………… 梅澤光由  
 110 内側から見た TERATOTERA と街の関係 …………… 常泉佑太



# TERATOTERA 祭り2020

## コロナ禍のアートプロジェクト 全企画をオンラインで開催

2020年はTERATOTERAのファイナルイヤー。「TERATOTERA 祭り2020」は、国内外から「コレクティブ」と呼ばれるアーティスト集団6組を東京に招聘して、5月に開催する予定だった。ところが、春先から国内外で広がった新型コロナウイルスの影響で、10月に延期し、全企画をオンラインで開催することになった。テーマは「Collective～共生の次代～」。パンデミックで加速する分断と格差を乗り越える可能性を、「共生」をキーワードに探った。

[会期]	2020年10月15日(木)～18日(日)
[参加コレクティブ]	Chiang Mai Art Conversation (CAC、タイ) hyslom (ヒスロム、日本) Ongoing Collective (日本) Ruang MES56 (インドネシア) Sapporo Dance Collective (SDC、日本) Sa Sa Art Projects (カンボジア)
[参加アーティスト]	AMOK (インドネシア) Senyawa (インドネシア) テニスーツ (日本)

113	VI テラッコの可能性 The Potential of TERACCO
114	TERATOTERA —— 未知のアートへの想像力…………… 福住 廉
116	「ボランティア主体」が開くアートの可能性…………… 杉原環樹
118	VII TERATOTERAと私 TERATOTERA and Me
119	ギトギトコテコテの制作 笑顔で支えたテラッコたち…………… 和田昌宏
120	私は待っていた、暴力的な「非日常」を…………… 山本 篤
121	『たきを (実家)』再訪…………… 東野哲史
122	テラッコとTERATOTERAについて知っている2、3の事柄…………… 永畑智大
124	大事な作品はTERATOTERAで作ってきた…………… うらあやか
126	TERATOTERA 奮闘記…………… 田中義樹
127	TERATOTERA に関してフスケを一考察、というか楽しい思い出…………… 遠藤一郎
130	TERATOTERA の幽霊…………… 浅井裕介
131	レジデンスで夢が実現した…………… ターウィーバツ・プレーヌーン (ヨド)
132	金銭が介在しない「市場」の試み テラッコが引き継ぐ…………… ジェニファー・ティオ
133	忘れがたいTERATOTERAとの協働…………… トゥアン・マミ
134	マチへ…………… 手塚一郎
135	吉祥寺の「隙」…………… 武川寛幸
136	TERATOTERA 全記録 2010→2020/ビジュアルアーカイブ TERATOTERA 2010→2020: A Complete Survey - Visual Archive
158	おわりに Conclusion TERATOTERA が、終わる。…………… 高村瑞世
160	編集後記 Editor's Note TERATOTERA の「熱源」を探って…………… 西岡一正

### [注記]

TERATOTERAのボランティアスタッフの呼称は、当初は「TERAKKO」と表記していたが、2018年に「TERACCO」に変更された。同年にボランティアスタッフを中心として発足した、アートを支援する集合体「Teracollective(テラッコレクティブ)」と欧文表記をそろえるための処置だった。ただし、本書では煩雑さと混乱を避けるために原則的に「テラッコ」で統一する。

TERATOTERAの小川希ディレクターは、一般社団法人Ongoingの代表理事であり武蔵野市吉祥寺東町にあるアート複合施設「Art Center Ongoing」を運営する。また、「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」をはじめとする一連の「アートプロジェクト」講座のコーディネーターと講師を務めた。それらに関連する記述について、本書では説明を省いた箇所がある。

## Collective ～共生の次代～

2011年にスタートした「TERATOTERA 祭り」が10回目を迎える。1回目にメインテーマとして掲げたのは“post”というものだった。それは「～以降の」「～の次の」を意味する接頭語であり、無論のこと、同年3月におきた東日本大震災、そして福島第一原子力発電所事故を念頭に置いて、「あるとき以降」どのような表現がこの世界で可能なのかを問いかける企画であった。あれから随分と月日は流れたけれど、私たちは“post”の時代に今なお生き続けている気がする。

ポピュリズムが世界を席卷し、グローバリゼーションは貧富の格差を生み続け、移民や難民問題は解決の糸口さえ見えない。絶対にないとされた男が大統領となり大国は世界の警察を退こうとしている。もう一つの大国は巨大な経済力を背景に中央の権力を拡大し続けている。自国に目を移せば、福島の放射能の問題、沖縄の基地問題、隣国との歴史認識をめぐる問題、そして切実な貧困問題など、どれもがアンダーコントロールとは程遠い。

分断、格差、孤立、これらは“post”の時代を表すのにつけてつけの言葉であろう。富や権力はある一部に集中し、社会には分断が生まれ、人々は孤立し続けていく。なんとも未来の見えない、お先真っ暗な世界であるけれど、それが事実なのだから仕方がない。抗いがたい現実に対する無力感、そして思考停止。

ただ本当にそれでいいのだろうか。あるとき掲げた問いは、「諦め」という答えで終わってしまうのか。いや決してそんなことはないはずだ。では、分断、格差、孤立、それらに対抗するものはいったい何かがあるというのか？

その答えを導くため、今回の「TERATOTERA 祭り2020」では「Collective ～共生の次代～」というコンセプトを掲げる。コレクティブとは、複数のアーティストが共同で恒常的に表現活動を行う際に使われる言葉であり、参加をお願いしたのは国内外で精力的に活動を続けるアート・コレクティブである。彼・彼女たちは、コト・モノ・時間をシェアし、自分たちが信じる表現のもとに集い、そして共生=共に生きている。私は、そうしたアーティストたちの日々の営みの中に、今我々が直面している様々な困難を乗り越えていくヒントが多く隠されているように思えてならない。

少し考えればわかることだが、表現活動において共同で何かをすることは、個人で制作をするよりもずっと面倒なこと

ある。それぞれの考え方や意思をぶつけ合いながら相手を理解し、自身を変えていく必要があるからだ。ただそうした面倒なプロセスにこそ私は未来を感じるのだ。他者を受け入れ、自身を変え、共に何かを生み出していくこと。どうしようもないほどにバラバラになってしまったならば、再び個と個が集うことから始めればいいのか。たとえそれが愚直であろうとも。

分断には対話を、格差にはシェアを、孤立には繋がりを。「TERATOTERA 祭り2020」に集う多種多様なコレクティブの活動は、私たちが生きるこの荒涼とした世界の次の時代への道筋をきつと指し示してくれるはずだ。“post”のその先へ。次の一步は踏み出せる。すぐそばにいる自分ではない誰かと共になら。

TERATOTERA ディレクター  
小川 希

## Collective : Next Generation of Coexistence

The TERATOTERA Festival, which started in 2011, is celebrating its 10th anniversary. The principle theme for the first event was “post.” With the prefix “post” meaning “since/after” or “following” something, organizers of course had in mind the Great East Japan Earthquake and the accident at TEPCO’s Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant which happened in March the same year. The idea was to question what manner of artistic expression was possible in the world after those events. A long time has passed since then, but my feeling is that we continue to live in the “post” era.

Populism has swept the globe, globalization continues to create a gap between rich and poor, and we are not even close to resolving issues surrounding immigration and refugees. A man they said could never be president has become just that, and this major power is retreating from its role as world policeman. Another global player is continuing to expand its centralized authority on the back of its huge economic power. If we look at own country, we are far from having control over issues such as radiation in Fukushima, the US military bases in Okinawa, historical issues with neighboring countries and acute poverty.

Division, disparity and isolation are probably the best words to describe the “post” era. Wealth and power are concentrated among a certain group, leading to social division and continued isolation for people. It is a world with an unseeable future and darkness ahead, but this is a fact, so there is nothing we can do about it. There is a feeling of powerlessness and inability to think in the face of inexorable reality.

But are we really going to accept this? Do the questions raised previously end with “resignation” as the answer? This simply can’t be. So what exactly are the divisions, inequalities and isolation, and what can we do to fight them?

To guide us to an answer, the concept for the TERATOTERA Festival this time around is “Collective: Next Generation of Coexistence.” We invited art collectives active at home and oversees to participate, and by collective we mean multiple artists regularly working together on creative activities. These collectives share and exchange ideas, things and time, gathering to engage in a form of expression they believe in and living together, in symbiosis. I can’t help thinking that there are many things we could learn from the daily lives and work of these artists to help us overcome the various difficulties facing us today.

If you think about it, engaging in creative activities in collaboration is much more of a headache than working alone. This is because you need to understand the other people involved and make changes within yourself as you come up against different ways of thinking and intention. But in fact, I sense the future in precisely such a tedious process. Accepting others, changing oneself, creating something together. If it all falls hopelessly apart, you just begin with a gathering of individuals again (at the risk of making it sound overly simple).

Bringing dialogue to division, sharing to disparity, connection to isolation. The wide variety of work by the collectives gathering for TERATOTERA Festival 2020 will surely point the way towards the next era of this bleak world we live in, beyond “post.” We can take the next step, with other people right alongside us.

Director of TERATOTERA  
Nozomu Ogawa

## Ongoing Collective

『オンゴーイングコレクティブプレゼンツ「痒みのプラクティス」』

[期間] 2020年10月15日(木)～10月18日(日)

[会場] シャトー小金井地下1階(小金井市本町)、オンライン配信

### メンバーの総意で「個展」を開催 地下の闇に潜む不穏な映像と轟音

Ongoing Collective には国内のアーティストやアート関係者ら約 50 人が参加する。「TERATOTERA 祭り 2020」の展示に向けてオンラインで企画を話し合った結果、「メンバー 1 人による個展」という、コレクティブとしては異例の形を選択した。その個展に対してメンバーがテキストや映像などによる「批評」を公開することで、他のメンバーの関与を担保した。テラッコによる選出過程と展示についてのレポートと、メンバーによる批評の一部を掲載する。

#### コレクティブの発信 直感投票で阪中作品に託す

「TERATOTERA 祭り2020 Collective ～共生の次代～」は、新型コロナウイルスの影響により例年と同様の開催が難しく、展示内容、方法の再検討を迫られた。それまで当たり前だったフィジカルな展示が制限される今、作品の発信にどのような手段をとるべきか。Ongoing Collective のメンバーは、オンラインツール Zoom を利用したオンライン会議で話し合った。その内容を紹介する。

ミーティングは始終、和やかでラフな雰囲気の中で進められた。最初の議題は「展示を有観客で行うのか、無観客で行うのか」。Ongoing Collective の展示は、JR 武蔵小金井駅ちかくの複合ビルの地下空間を会場とすることが決まっていたからだ。新型コロナウイルスのリスク管理を徹底するならば無観客。しかし、有観客でなければ既に押さえてある会場に作品を置く意味がなくなる。意見交換の末、無観客かつオンライン上でも立体的な視点から作品を鑑賞してもらうこと、そのために Ongoing Collective の作家たちの感想、解説を収録した映像を作品とともに公開することが固まった。

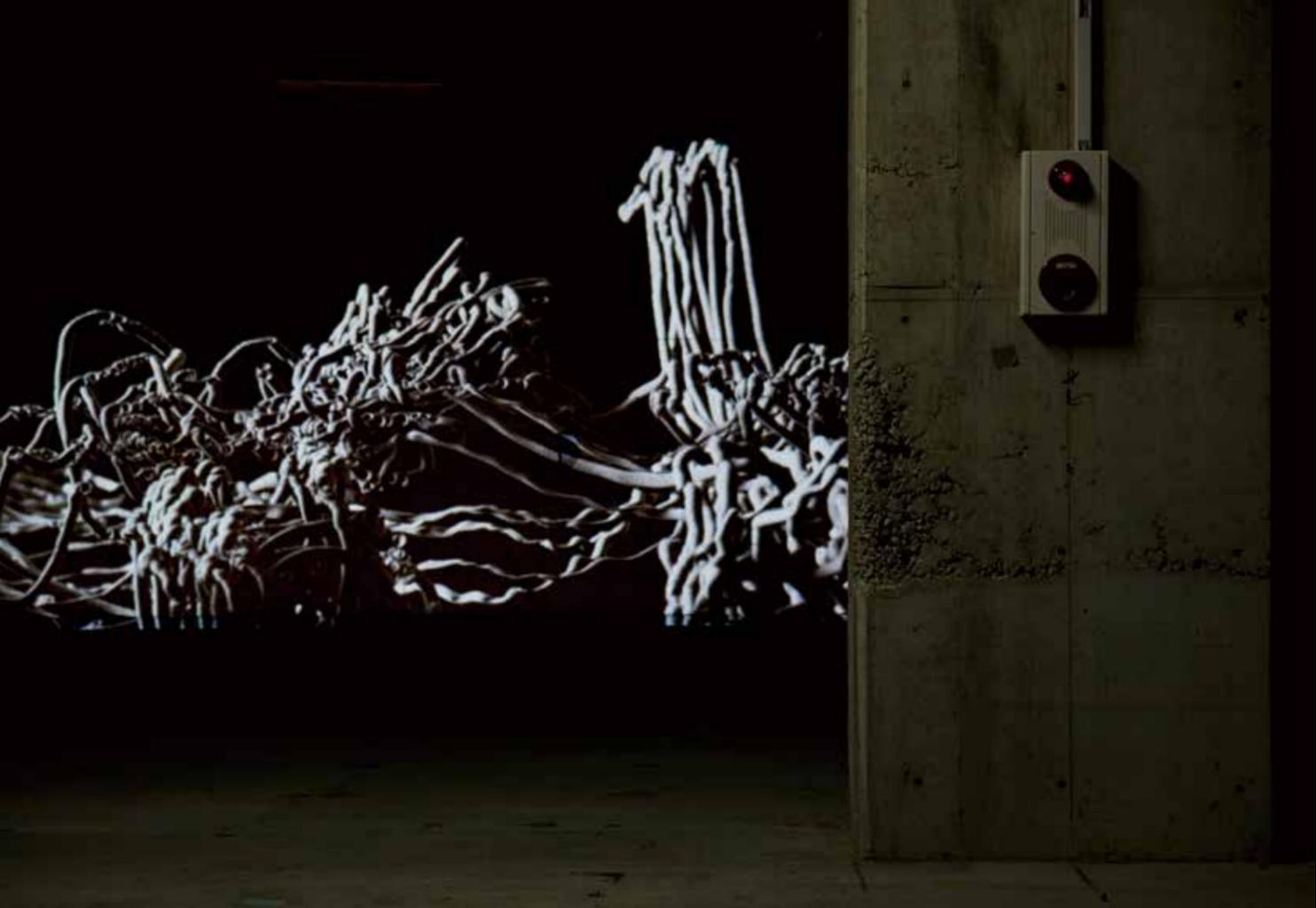
この決定を踏まえた展示の方向性として「Ongoing Collective の現在の在り方をプレゼンできる展示にしたい」という

声があがり、話題は具体的な展示内容の検討に移る。メンバーがやりたいことを個々で行うのではなく、Ongoing Collective が今見せたいものを強く発信することを念頭に置き、インパクトの強い「個展」を開催する方針で意見が一致する。

さらに、「この個展に出展する作家は、Ongoing Collective に属する作家50人の直感投票で選出する」という提案が出され、議論的となった。選ばれなかった作家のモチベーションの問題や、メンバーが互いの作品や活動をまだ深く理解しあっていない状況についての不安が挙げられた。同時に、展示内容を作家50人の直感に委ねるという偶然性、不安と期待、そして最終的に展示作品を全員で叩き上げる点が、参加する全員にとって刺激になることが注目された。

ミーティングの後に行われた投票では、柴田祐輔と阪中隆文が同票で1位という結果になった。それぞれがプランを提案した後、決選投票に。結果はわずか3票差で阪中が選出された。こうして、50人の作家の直感から選出された阪中による、これまでにない個展プログラムを Ongoing Collective の展示として行うこととなった。(鈴木颯良)

無観客で開かれた阪中隆文の個展『痒みのプラクティス』。眠る男たちの映像とともに、皮膚を掻きむしる音が大音量で会場に放たれる



皮膚を掻きむしる指先の動きを、VRの空間に「彫刻」として再現した映像作品

## アトピーの「痒み」を深掘りする

「TERATOTERA 祭り2020」の開催中、ひとり自宅で動画を再生した。ゴソゴソ、ポリポリ、ガサガサ……。体を掻きむしる音が耳元で響き、「どうしてそんなに掻いちゃうの」と思わず体がこわばる。阪中隆文の作品『痒みのプラクティス』だった。『痒みのプラクティス』は、2つの映像作品によるインスタレーションとして、古いビルの地下の空間で展示された。映像の1つでは、阪中を含む男4人が眠りながら体を掻きむしる。全員がアトピーを患っているという。男たちの指先に着けた集音マイクが拾った、皮膚を掻く音が大音量で響く。もう1つの映像は、阪中の指が皮膚を掻く動きをVRでキャプチャし、VR空間で彫刻化したという。

阪中の説明によれば、「アトピー」という言葉はギリシャ語の「特定されていない」「奇妙な」を意味する「アトポス」に由来する。つまり、アトピーの痒みの原因は分かっていないらしい。「お肌が敏感だと好きなコスメが使えなかったり、朝起きると血だらけになっていることがあるんだよ」。以前、アトピーをもつ友人がそんなことを教えてくれた。自分には想像できない、辛い症状なのだと思った。巷ではアトピーに効果的な療法や食事、化粧品などが紹介されている。プレゼントしても、「肌に合うかしら」「喜んでくれるかしら」と考えると、心が少し陰る。「痒み」は、程度の差こそあれ、誰もが経験したことがある感覚

だから共感性が高い。ポリポリと掻いたら気持ちがいいので、無意識に掻いてしまうけれど、行き過ぎたら傷になり、ヒリヒリとした痛みの感覚に変わる。そんな「痒み」が嫌おうなくつきまとう存在となるのが、アトピーという症状なのだ。原因不明の状態は、周りも不安にさせてしまうらしい。阪中はそんなアトピーの「痒み」を深掘りして作品化した。

動画を再生してみると、なんだか親しみを感じてしまう。ポリポリと掻きむしる音は生々しいが、こだまして耳に残る。アトピーという症状からこんなことを考える人がいるのか、と気持ちが少し軽くなった。(鶴見香月)



『痒みのプラクティス』展は原則として無観客だったが、Ongoing Collectiveのメンバーは批評のために会場で鑑賞した。写真は伊佐佐雄悟の批評動画から

## 〔Ongoing Collective メンバーによる批評〕

『痒みのプラクティス』阪中くんへ 江藤佑一

「阪中くん、昨日お尻の割れ目のはじまりのあたりが痒くなったよ。そのとき、阪中くんの展示を思い出したよ。掻いて気持ちよくてびっくりした。掻いたときの気持ちよさも場所によって違いが結構あるね。だけど掻きすぎると痛いね。改めて思ったよ」

阪中くんの展示を観てから1週間が経った。阪中くんとはもともと友人であることに加え、今回の展示についてちょくちょく話してきていたために僕は少なからず阪中くんを内面化した状態で展示を鑑賞した。この1週間の間に阪中くんと電話で話す機会がありそこですでに感想は伝えてあるが、それも込みで改めて思い返し書いてみたい。

初めて訪れたシャトー小金井の地下。いつもの2階のスペースとは雰囲気全く違う。完全に裏面。1回クリアしてからじゃないと行けないエリア。ワクワクがあった、でもなんか匂いもするし、ちょっと怖い。そんなおどろおどろしい空間に響きわたるポリポリ！カシュカシュ！という音。話がそれるが、自分は小さいときに熱をだすときまってみる夢があった。平衡感覚を失った状態であらゆる角度から壁がせまってくる、そんな怖い夢。だっ広い、ひとりでのいるのは不安になるような空間で、展示を観ていたらその夢のことを思い出した。しかしそれは最初のうちで、落ち着かない気持ちながらも2つの映像を行き来していると、次第に掻きむしる音に揉まれるような感覚が不安を飲み込む。まるで何かの声、鳴き声のような……。VRを用いた映像では掻いた指の痕跡が映し出されていたが、そこから手の動きや痒みに結びつくことは自分にはなく、放りだされた不思議なイメージはさながら遠い惑星の微生物との唐突な出会いであり、痒みのもつ温度感よりも静かで潔癖な冷たい印象をもった。不安ではなく蠱惑的な緊張と心地よさが漂う打ち捨てられた宇宙船を想像した。

……なんてロマンチック。だが、阪中くんはこれまでの作品で穴を掘ってギャラリーをカメラオブスキュラ化(『Anagraph』、2015年)したり、古墳のある穴に向かってテニスボールを投げ入れた映像(『スーパープレイ』、2019年)を撮ったりなど、無垢な衝動を興味という穴に向かって具体的にも抽象的にも投げ入れてきているように見えた。それは制作というよりも、その常にある穴に突き進んでいく果てしない探検とも言える。これをロマンと言わずなんと言おう。今回僕が勝手に感じた宇宙的なイメージも宇宙を開かれていながら閉じている領域として考えるならばそれも1つの穴であり、痒みの穴(内部)に誘われた結果の産物かもしれない。

痒みのための作品ではなく、作品のための痒みに見えるこのモチーフはどこにも向かっていないように感じた。大きな穴がただある。“痒み”から剥がれ落ちた“痒み”。痒みを作品化しましたという阪中くんの言葉が聞こえてくるが、音にならず届かない声は穴を漂う。だが1週間経って気づいたことがある。掻くことで自分自身を傷つけながらも気持ちよさを得る

には、正しい力加減が必要だということ。あまりに当たり前にやっていたから気づかなかったけど。

その絶妙な力加減が阪中くんの展示にあったことを昨日お尻を丁度いい力加減で掻いているときにふと感じた。阪中くんは掻いていた、弱すぎず強すぎず。

痒みの彫刻は存在するのか 片山真妃

武蔵小金井ってこんな感じだったっけ?という戸惑い。駅前には大型マンションが立ち並び、大きなスーパーが併設している商業施設、店の看板を見ただけで味覚のイメージもすぐにわかるチェーン店がその中には入っている。都内に通勤しながら、快適に暮らすメリットが凝縮されている。この世の無駄を絶対に許さない。そんな印象。

阪中さんの個展会場は、シャトー小金井の地下。駅前の無駄を絶対許してくれなさそうな整ったゾーンのワンブロック先にある。46年前に高級分譲マンションとして建設され、商店街とスポーツジムも同じ建物に併設されている。

建物に入る。小さな飲み屋があって、ごちゃっとしている。天井が低い。プールの塩素消毒の匂いがかかりキツイ。消毒が当たり前になった昨今でさえ、この塩素消毒の匂いの密度には圧倒される。そして肝心の個展会場は塩素消毒の匂いがさらにキツイ地下の(RPGの隠し扉の裏のような)わかりにくいドアの向こう側にある。

会場の床は下がっている。天井は高い。そして全体が把握できないくらい広いし、暗いし、怖い。会場の奥からゴリゴリゴリっと大きな音が響き渡っている。突き当たりの両サイド壁に作品映像が大きくプロジェクションされている。

巨大な怪物に丸呑みにされて腹の中にいる気分。

入って右側の壁。

4人の男たちがちゃぶ台を囲んで酒を飲みリラックスしている。ゴリゴリ、ゴリゴリゴリ、シャッシュシャッシュ、ポリポリ、ガーガーガーツ、、、ゴリ、ゴリ……、4人の男たちはそれぞれの方法で己の身体を掻き筆っている。身体のカローズアップ、手の動き。ゴリゴリ、ゴリゴリゴリ……シャッシュシャッシュ、ポリポリ、ガーガーガーツ、、、ゴリ、ゴリ、背中がゾクゾクする音。身体のある所へ伸びて来る手、執拗に追って来る指が怖い。痒みを身体から追い出そうと掻き筆る行為は途切れることがない。

痒みという共通の感覚は激しい痒みを抱えている人の体験を追体験できると思っていたが、実際会場で作品を観ると掻き筆る指から逃れる痒み側の意識が変わった。

入って左側の壁。

糸の集積のような同形状で立体的な図像は痒みの彫刻と言ったらいいか、巨大3Dプロジェクションという方法で映し出された映像は視覚として認識できるが実態としては存在しない。この浮遊感のある彫刻は睡眠状態で身体が休んでいる時でも唯一痒みに対して追従を許さない指先が痒みを捕まえ、痒みを消すという消える痒みの実態までもが表現されている。視覚化できない痒みという存在を見事に彫刻化した素晴らしい作品。

## Chiang Mai Art Conversation

『World War 2 Sites Northern Thailand Project』

[期間] 2020年10月15日(木)～10月18日(日)

[会場] オンライン配信

## 戦争の記憶とアート作品とこれからのこと

Chiang Mai Art Conversation(CAC)はタイ・チェンマイを拠点とする、アーティスト主導の非営利プロジェクト。今回の作品『World War 2 Sites Northern Thailand Project』は、タイ北部に点在する第2次世界大戦の遺跡を地図に記し、オンラインで公開するというもので、大戦をとおして、同地域の歴史的背景を紹介するために、CACが始めたプロジェクトである。

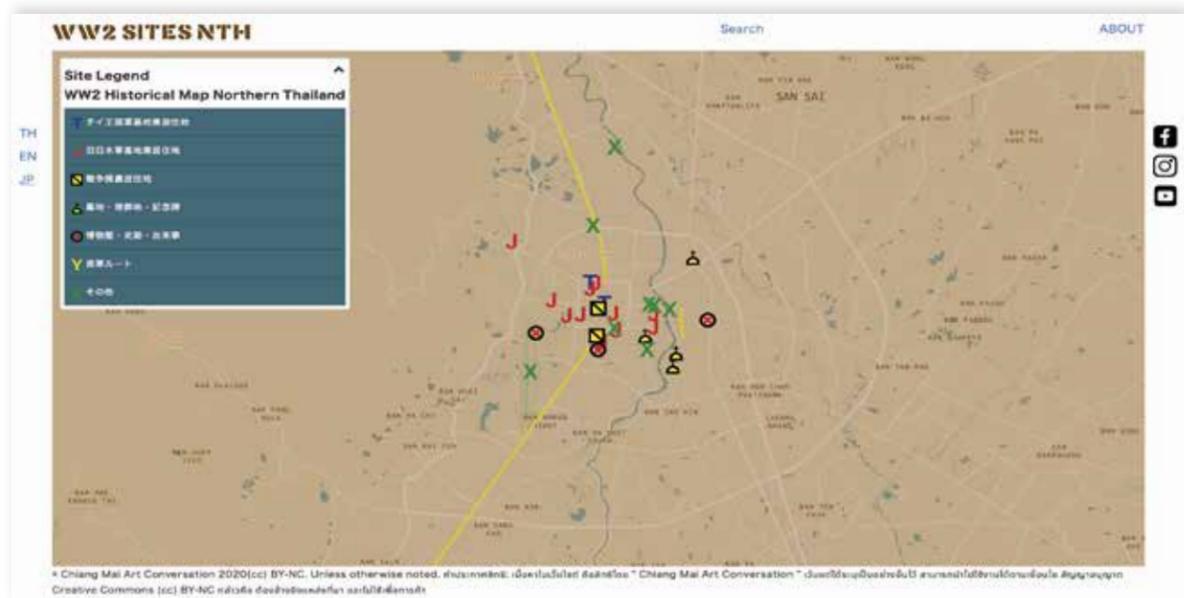
CACが制作した地図は、遺跡の位置とそれが何であったかを記したのみで、詳細な説明は一切ない。ただ、タイ軍事基地や囚人の宿泊施設など様々な施設があるなかで、日本軍基地であったことを示す「J」の文字が多いことは一目瞭然だ。この地域は、大規模な戦闘が行われた地ではないが、旧日本軍がビルマ(現ミャンマー)やインドに侵攻する際に重要な拠点となっていた。なかでもチェンマイは、軍関係の施設が多くの場所を占拠したため、住民はその地を離れることを余儀なくされた。旧日本軍の動きを止めようとした連合軍の爆撃により命を落とす人もいた。

今回なぜこのテーマを選んだのか。戦争のような重く難しい題材を、アート作品として、彼らの視点からどのように表現するのか、不安に似たような何ともいえない気持ちになった。

日本のアートイベントへ参加するにあたり、彼らがこの作品を出品するにいたったのは、日本に対する葛藤をこえて、当事者同士として歴史的事実を共有したかったからではないだろうか、と推測する。

終戦から75年が過ぎ、生存する戦争体験者が減りゆくなかで、戦争が私たちの記憶から薄れていくことは否めない。今回この作品をとおして、他国が記憶している日本の姿を突き付けられたように感じた。これまでの自分の視点とは違う角度から、歴史を再認識したのだと思う。私たちがあらためて戦争について学び、後世に伝えていかねばならない。

タイでは2020年7月ごろから、若者が中心となり、政治や王政に対する不満を表明する大規模なデモ活動が行われ、ニュースでも度々取り上げられている。その一方で、日本では若年層の政治離れが問題になっている。CACは会期中に、台湾・香港のアーティストとともに、ディスカッション形式のトークショー『The Artist's Milk Tea Alliance』を実施し、各自の国・地域の政治情勢について意見を交わした。国の情勢が違うため一概に比較することは難しいが、これからを担う若者たちの、自国に対する意識の差が大きいと感じた。(永野千晴)



Chiang Mai Art Conversationが作成した、第2次世界大戦中のタイ北部の地図。タイ語、英語、日本語の3カ国語版がある。地図中の「J」は旧日本軍基地兼居住地、「T」はタイ王国軍基地兼居住地。そのほかに、戦争捕虜居住地、進軍ルートなどが表示されている

## Chiang Mai Art Conversation

『The Artist's Milk Tea Alliance』

[日時] 2020年10月18日(日)17時～19時45分

[会場] タイ(チェンマイ、バンコク)、香港、台湾を結びライブ配信

[登壇者]〈タイ、チェンマイ〉 スティラット・スパパリンヤー Sutthirat Supaparinya(通称ソム Som):ホスト/ビジュアルアーティスト、Chiang Mai Art Conversation(CAC)、同創立者  
アティコム・ムクダープラコーン Atikom Mukdaprakorn:モデレーター/メディアアーティスト、CAC  
ターウィーパツ・プレーヌーン Thawiphat Praengoen(通称ヨド Yodo):アーティスト、アクティビスト  
〈タイ、バンコク〉 ティラワット・ムンウィライ Teerawat Mulvilai(通称カゲ Kage):劇団B-Floor 主宰、劇作家、パフォーマー、プロデューサー、演出家  
〈香港〉 ケーシー・ウォン Kacey Wong(黄國才):パフォーマンス/ビジュアルアーティスト、香港アーティスト組合  
カイン・ウォン Ka Ying Wong(通称KY、黄嘉瀛):アーティスト、ライター、香港アーティスト組合  
〈台湾〉 ハーフウェイ・カフェ halfway café(半路珈琲)  
ボサック・ジョディアン Posak Jodian:ドキュメンタリーアーティスト  
ヤン・ツージェン Yang Tzu Hsuan:企画  
ルーホン・シャ Luhung Hsia:通訳、文筆家  
シンイ・リン Hsin Yi Lin:劇作家、プロデューサー、演出家

## 「ミルクティー」でつながるアジアの現在 香港、台湾、タイのアーティストが語る

香港国家安全法で民主派の活動が制圧された香港、「一つの中国」を標榜する中国と対峙する台湾、反政府の抗議活動が急速に広がったタイ。この3つの社会の間で2020年春ごろ、「Milk Tea Alliance(ミルクティー同盟)」が自然発生的に結ばれた。それぞれの社会で愛飲されるミルクティーをシンボルにして、地域を越えた連帯を目指す動きだ。この運動に各地のアーティストが様々なレベルで参加し、それぞれの方法で支援を表明している。タイのコレクティブ「Chiang Mai Art Conversation(CAC)」がホストとなって、各地域のアーティストがオンラインで語り合った。

「ミルクティー同盟」とはキャッチーで親しみやすい名前だ。しかしそのミッションは歴史や政治的背景を踏まえるとともに、自由を希求しようとするむしろ骨太なものだ。今回のトークイベントには、香港、台湾、タイから10名のアーティストらが参加。それぞれの社会的、政治的な状況にアーティストはどう取り組んでいるのか、社会運動における彼らの役割は何かを語り合った。その発言の要旨を収録する。

### 【香港】サステナブルな運動で 自分と作品を守るしたたかさを

香港は2014年の雨傘運動\*の後、2019年から再び活発化した民主化運動のただ中にある。横行する低賃金や無給、不払いを改善すべく設立された「香港アーティスト組合」のKYはアーティストの待遇の悪さを「政治的格差」と表現した。政府にとってアーティストは邪魔な存在だ。2019年の反逃亡犯条例改正デモ\*\*に共感し、組合と所属アーティストはプレスリリースを発表した。リーダーを設けず組合もイニシアチブをとることなく抗議活動を「サポート」というスタンスは、今の香港で欠かせない自己防衛術だ。

\*香港の行政長官選挙をめぐる、中国政府の意に沿わない人物の立候補を排除する方針を中国の全人民代表大会常務委員会が決定したことをきっかけに起きた、中国政府に抗議するデモ。

\*\* 犯罪容疑者を中国本土に引き渡すことが可能になる法改正に反対するデモ。同法改正案や普通選挙の実現など「五大要求」の達成を目的とする民主化デモに発展した。主催者のデータでは香港人の4人に1人がデモに参加、2020年4月15日までに約8000人が逮捕された。スローガンは「水のように(Be Water)」。水のようにとらえどころなく個人の特権を回避しつつ、しかし水滴が集まっていつか大きな流れを作るように、たゆまず運動しようと呼びかける。

ケーシーは精力的に活動するアクティビストだ。変装し匿名で、政治問題を扱うパフォーマンスを路上で行う。現場状況に合わせた即興であることが特徴だ。基本はデモの徒歩移動で負担にならない軽さ。完成度が高ければ報道や群衆の視線をとらえ、ほどなくSNSで画像が拡散されるだろう。通りすがりの人々が一目で理解できるストレートなメッセージを込める。



オンラインで参加したアーティストたち

路上パフォーマンスには大きな危険が伴う。国家安全法の施行によりアーティストの財産を剥奪し、中国へ強制送還するのが可能になったからだ。

とはいえ、他にも有効な手はある。自宅からコンピューターや携帯を使えば、小学生でも参加が可能だ。活動場所がオンラインなら観客を危険にさらすこともない。雨傘運動のロゴをインターネットで公募すると無数のデザインが送られてきた。ロゴを印刷して街中に貼る。ネットの投稿は消去できない。街のポスターが剥がされグラフィティが消されても、また印刷して貼ればいい。サステナブルに運動を続けることを呼びかけ、そのために自己防衛の手立てとして、例えば作品を自宅に保管せず海外へ持ち出すことを挙げた。「自由や平等は自分が生きているうちに獲得できるかわからない。だからこそ継続が肝要だ。自分なりの短期目標を設定しその都度達成感を得よ。アーティストらしく物語性とユーモアを忘れないこと」と訴えるケーシーの言葉には、果てしない闘いへの疲れは感じられない。

KYは、香港で勢いを増すコミュニティアートの一例としてグラフィック\*の活動を紹介した。グラフィックは、街の壁面に描かれたプロテスト作品が当局によって乱雑に撤去された痕跡を、カラーテープで縁取り人々の注意を再喚起している。これに関連して、ケーシーは「アートは解決策ではなく、社会問題を追及する手段。問題を可視化するのがアーティストの役割だ」と語った。

\* Giraffe Leung (梁洛熙)。下記のサイトを参照。  
<https://giraffeleung.wixsite.com/mysite/press-review>  
<https://hongkongfp.com/2020/04/12/giraffe-leung-the-artist-who-framed-the-scars-left-by-months-long-protests-in-hong-kong/>

### [タイ] 抑制されてきた不満が噴出、アーティストは市民とともに路上へ

ヨドはアーティストが推進力となって人々を牽引するのではない、アーティストはむしろ人々の流れについていく立場だと

考える。サポートに徹し、人々の考えやニーズや空気感をインプットして創作で貢献する。活動の効果は目に見えにくくてもいい。デモでただ不満を吐き出すのではなく、政治への要求を簡潔に明確化すれば政治家や組織の上層部との対話が実現する。ふさわしい言葉とタイミングで活動するには多読し知識を深めることだ。タイでは王政、軍政への批判が常に水面下で語られてきた。タイにも検閲が存在するから、拘束されれば活動が中断されてしまう。妥協が必要な時もあると言いながら、ヨドは「苦痛矯正」というタイトルでエクスペリメンタルなコンサートを開催した。もちろん2014年の政変以降の凄惨な思想矯正への挑戦だ。参加者と企画段階から話し合いを重ね、痛みを共有するグループセラピーのようでもあった。

カゲは自身の経験を語った。王室不敬罪を定めた刑法112条を扱う舞台に検閲が入った。王政批判ではなく法律をテーマにしていると説明したが、公演ごと軍関係者が来て録画する。牽制されつつ上演できたのは、不敬罪は表現の自由への侵害だとする国際的批判を受け当局が摘発を抑制しているからかもしれない。

バンコクでは活動家の多くが拘束され無秩序な状況だが運動は続く。以前は一つの大きな集団で1人のスピーカーの話を聞いたが、主導者不在でスピーチがない現在も人々は集会を続けている。広場に小規模集団が散在し、誰かが何かを叫び集団のメンバーがただそれを繰り返す状況は、まるであちこちで火花がはじけているようにカゲには見えた。活動が新しい局面に入ったと感じた。リーダーでもアーティストでもない一般市民が運動をしているのに感銘を受ける。彼らは彼らなりのアートをしている。今のような運動ならきっと継続して行われ、そして継続的に成長していくだろう。長年市民の憩いの場だった王宮前広場は、王室のものとして立ち入りが禁止されたが、市民がフェンスを破壊して占拠する暴動が起きた。王室の所有物をその一日だけでも奪還したところに大きな意味がある。

### [台湾] 運動は沈静化 歴史を振り返り、真のデモラシーを問う

リンは、脚本執筆やリハーサルに時間を割くより路上デモに参加するほうが生産的ではと悩んだが、アーティストとして自分の創作に全力を注ぐことに決めた。きちんとした生活をして、きちんと食べて寝る。そこから戦い続ける精神力が生まれると思う。昨年、白色テロ\*をテーマに音楽劇『Clear White Song』を制作した。1987年まで続いた戒厳令下で多くの人生が翻弄された。弾圧された人々が処刑前に書いた最後の手紙は、家族へ届けられることなく政府のアーカイブに眠っていたが、遺族が存在を知ったのを発端に2011年に返還を求める運動が起きた。ささやかな家族の記憶を通して歴史を見つめなおしたいと考えて、この作品を制作

した。新たな冷戦が迫ると言われる今見てほしい。

\*1947年に大衆的な抗議運動を武力で弾圧した「二・二八事件」以降、戒厳令下に国民党政府が行った政治弾圧。1987年に戒厳令が解除されるまでの期間、反体制派とみなされた国民が投獄、処刑された。この時代をテーマにした文学・芸術作品は多い。

『Clear White Song』は移行期正義委員会\*からの委託制作であるが、独立機関とはいえ政府の一部。難しい駆け引きののち、最終的に芸術作品として受理された。国内での上演ツアーを今後も続ける。大都市では白色テロの記録が残っているが、小さな町ではより悲惨な出来事さえ数年後に風化してしまっているからだ。物語が時代を50~60年遡るのに対し観客は20代や30代が中心。親や祖父母世代が元気だったころの記憶を伝えることで、世代をまたぐ対話を促し、人々をつながりたい。この作品を高校の人権学習教材として使うよう働きかけているところだ。

\*過去の権威主義的な統治の下で行われた人権侵害やその結果の真相究明などを旨とする行政院(台湾の最高行政機関)の委員会。2018年5月に設立された。

台北の「ハーフウェイ・カフェ」にはカフェ、スタッフや利用者が実際に居住する「住空間」、屋外イベントスペースと3つのエリアがある。ネットワーキングプラットフォームを兼ねた生きた



ヨドがチェンマイで開いたコンサート



「ハーフウェイ・カフェ」のイベントのフライヤー。アーティストと近隣住民が関心事とそれに対するリアクションを共有する

空間で、近隣の住民との料理体験などコミュニティとのかかわりも大切にしている。アーティスト、活動家、マッサージ師、リサイクルショップなど多様なメンバーに地下スペースを無償提供する。香港のイエローエコノミー\*と同じく、民主派の店舗をサポートする動きが台湾にもあるとはいえ資金は潤沢ではない。それでもカフェからの収入で施設の維持とスタッフの給与、メンバーの芸術活動、抗議活動への援助を賄っている。今の台湾政府は民主的に見えても現実はどうも言えないという。真のデモクラシーとは何か。企画担当のツーシェンは「アートはリフレクションにとどまらず、鋭い疑問を人々に投げかけるものであってほしい。様々な人が集まり一つのトピックを話し合うことに価値がある」と考える。ハーフウェイ・カフェを一つの芸術活動としてとらえるならば、社会運動における彼らの最も大事な役割は対話の場を提供することだ。(中野美緒)

\*香港で民主派を支援する飲食店を、民主派の人々が応援する運動。名称は、民主派のデモで民主選挙、平和、政府体制の改革への望みを込めたシンボルとしてイエローリボンが使われたことに由来する。



シンイ・リン「Clear White Song」の舞台



カゲのステッカー『ARTIST RESISTANCE』。下部に「アートは犯罪じゃない」と記されている

『シティII』

[日時] 10月16日(金)、17日(土)、18日(日) 21:00～23:00

[会場] ライブ配信

河口から山林へ 夜のフィールドを駆ける

関西を拠点に活動する hyslom は、メンバー全員で演出・出演する映画『シティII』の撮影現場の様子を3日間にわたってライブ配信した。原作は劇作家・カゲヤマ气象台による戯曲『シティ』3部作の1つ。hyslomはこの戯曲を2019年1月に京都の劇場で舞台作品として上演しており、今回は映像化に挑んだ。撮影の現場は大阪。淀川の支流から近郊の山へと移動しつつ、3夜連続で撮影した。出演者は hyslom のメンバー3人と青柳拓(映像作家)、南大輔(くまのプーさん愛好家)、テッセイ(ファイヤーアート集団「AbRabbi-油火-」代表)。川と山で原作にも現れる水と火を操り、それぞれの振る舞いをリアルタイムで公開した。



造船所で火術を繰り広げる。戯曲では、吊るされた「下等生物」が死に、落ちる

[第1夜:夜を焦がす火術]

戯曲の映像化について、原作者のカゲヤマ气象台は「魂レベルで合えばなんでも(どんな表現でも)いいです」と太っ腹に語る。確かに様々なアプローチが可能な戯曲なのかもしれない。今回、hyslomは淀川の支流を航行する船上で表現することを選んだ。船上で火を操り、そこに橋から水上の船に移るアクション、甲板にローションを撒いてスライディングダンス、その間ずっと男が宙に吊られたまま、など内容は盛りだくさん。テッ

セイが松明を激しく回転させる演出には、モニター越しで鑑賞している私たちが肝を冷やした。挑戦が多いだけにトラブルも発生するが、それに対応しながら、戯曲の解説やスタッフの次作品の予定などをたゆまず報告する。観客への愛情を忘れていない。第1夜は予定時間を大幅に超え、配信終了は日付をまたいだが、ひたむきにクリエイションに向かう hyslom と、その熱意を共有するチームから目が離せなかった。一心不乱、真

撃、迷いが無い。

[第2夜:船上のダンスと遊び]

第2夜は夜のパフォーマンスで、川面を背景に炎を使ったダンスを繰り広げた。闇夜の怪しい雰囲気や周りを見通せない不安の中、炎が目をつきつける。激しく燃える炎に交じって、小さいけれど魅力的なオレンジの光が淡々と輝く。これはオリンピック聖火リレーのオマージュだろうか。もし「TERATOTERA祭り2020」が予定通り5月に開催されていたら、この作品は吉祥寺で制作され、別の様相を見せたのかもしれない。

船工場のようなところで、スノーケルを着けて hyslom の3人が顔を水に浸けて息を止め続ける勝負をする場面もあった。その後に「はいをぬりなさい」と連呼し、裸の上半身に灰を塗っているようだった。何をやっているかわからないナンセンスにも、曰くありげなパフォーマンスにも見える。意味を考えると「？」が繰り返される。また、撮影の合間にあった、休憩中の船主のインタビューが気になった。「昔は人力で砂を船まで運んでいた。そして船上は、子どもたちが鬼ごっこをする場所でもあった」。「人間」のパフォーマンスが人工物と自然が入り混じった背景とうまく調和した、不思議な映像だった。

[第3夜:ヒトと山が一体化する]

真っ黒の画面、遠くにかすかに人に見える。静かな山中から「カット」の声とカチンコの音、「オッケー」の声が聞こえてくる。『シティII』は、作品収録の風景を観るというオンラインの創作だ。対話型美術鑑賞ならぬ「オンライン生中継型の創作風景上演」となる。中継は興奮した議論のシーンで始まる。夜中、慣れない山道での演技・撮影のリスクを検討しているようだった。臨場感ある創作場面に立ち会うと発表作品への見方が深まっていった。

そして樹上の謎めいたパフォーマンス。遠くで棒を持って歩いているように見えるし、ゆっくりと動物の歩行を真似ているのかもしれない。このシーンは不可思議ながら、見ていると落ち着いてくる。ヒトと夜の山々が一体化した姿が安堵感をもたらしてくれる。演者が大自然の中で自由気ままに動く映像自体が



映画『シティII』の場面から。旅の終わりに海上でパンを食べる

心地良いのだろう。懐かしい感じもする。電気のなかった時代の人と自然の営みを見るようだった。

ラストシーン。ひとりの演者の腹がどンドン膨張していく。ついに腹が弾け散って、白煙が上がり『シティII』は終焉を迎えた。

[後日譚:『シティII』は終わらない]

hyslom は今回なぜ、以前に舞台で発表した作品『シティII』の映画化を試み、その撮影の様子をライブ配信したのか。後日、hyslom に直接質問を投げかけてみた。

—『シティII』をライブ配信するに至った経緯は?

本来は舞台で再演する予定でした。しかし、コロナの影響で集客を多く見込めないことになり、さらにパフォーマンスもオンラインで、という話になりました。舞台作品をオンライン配信してもあまり良くなるとは思えなかったので、映像化する方向に舵をきりました。土地勘のない東京でロケをするのはハードルが高いので、身近な場所である関西で撮影する様子をライブ配信することに決めました。「TERATOTERA祭り」終了後に、別の期間に撮影した日中の場面も交えて映画化しました。本来は編集や音響の調整などに時間をかけるものですが、もともと舞台作品であり、身体ありきの生(なま)の作品だからこそ、粗削りでもいいので早くお見せしたいと思いました。そこで、10月30日に東中野の「ポレポレ坐」で上映させてもらいました。その後、京都や別府でも上映しています。

—『シティII』は映画化で一区切りですか?

いいえ、今後もいろんな形で試してみたいと思っています。カゲヤマ气象台という劇作家を知っていくために何度も上演して、もっと『シティII』に触れていければいいと思っています。映画化したことで風景がついてきました。風景のついた状態から、今度は風景がない舞台で何ができるか。あるいは、今回とは別のロケ地で同じセリフを言うとうどうなるか。戯曲を理解して体に蓄積していきたいと思っています。

『シティII』は、コロナの影響でロケ地を大阪に移して配信された。だが、どこで行われていても hyslom の作品をもっと知りたいと思わせる力に変わりはない。今後の『シティII』にも目が離せない。(KT、中野美緒、裴潤心)



映画『シティII』の場面から。淀川を航行しながらの撮影風景

## Ruang MES56

『Seri Bincang Seni Unstocking Room X TERATOTERA』『Café Society X TERATOTERA』ほか  
 [期間] 2020年10月15日(木)～10月18日(日)  
 [会場] ライブ配信、オンライン配信、現地で2つの展示を開催



肖像写真展「We Are The Pose」から

## コレクティブの活動に強い信念

Ruang MES56は、インドネシアのジョグジャカルタを拠点とするアーティストコレクティブ。今回はオンラインのプログラムの他にも、現地で2つの展示を開催。新型コロナウイルスの影響で来日はできなかったが、「TERATOTERA 祭り2020」に積極的に参加した。

Ruang MES56の主なプログラムは、4日間連続で行われたインスタライブ「Seri Bincang Seni Unstocking Room X TERATOTERA」と、「TERATOTERA 祭り2020」に参加した6つのコレクティブの映像作品をオンラインで上映する「Café Society X TERATOTERA」だった。前者は彼らがコロナ以後に隔週で実施しており、後者は本来はRuang MES56の拠点にあるシアターで開催している映画観賞会だが、現在はコロナの影響でオンライン開催となっている。

加えて、「TERATOTERA 祭り2020」の期間、彼らは現地で2つの写真展を開催した。ジョグジャカルタで活動する5つのアートコレクティブの肖像写真展「We Are The Pose」と、彼らが持つアナログ写真のスタジオ「Afdruk 56」で制作されたプログラムとシルクスクリーンの作品の展示である。「Unstocking Room」では、4日間を通して、特にコロナ以降の彼らの様々な活動について、関わっているMES56のメンバーや現地コミュニティの協力者が議論を交わした。扱ったテーマは、現地で開催中の2つの展覧会について1日ずつ、そしてコロナ禍の影響を受けているジョグジャカルタのアーティストに食糧を提供する「Dapur Umum (Public Kitchen)」に1日、MES56が自立して活動資金を得るためにアーティストグッズな

どの商品開発を行っている「Toko56」に1日だった。議論は全てインドネシア語で行われたため、全容を把握することはできなかったが、和気藹々としながらも真剣な表情で語り合う様子から、メンバーや現地の人々との信頼関係の強さを垣間見ることができた。

今回実施されたプログラムは、いずれも彼らがこれまで実施してきた、現地コミュニティやアーティストたちの協働を促していく活動の延長にある。「Unstocking Room」が醸していた彼らの魅力的な雰囲気は、異国の地にいる私たちも彼らの活動に関わってみたいと思わせるものであったし、「Café Society」はジョグジャカルタから離れて、海外の5つのコレクティブとの協働を実際に試みたものだ。

コレクティブとして活動することで、このコロナの困難な状況も乗り越えられる。その強い信念が、メンバーのAkiqが「Unstocking Room」で語った言葉に集約されていた。「特に個人のアーティストにとって協働するのは骨が折れる。でも集まればなんだってできるんだ」(上田和輝)



インスタライブ「Seri Bincang Seni Unstocking Room X TERATOTERA」から



Instagramに投稿された画像から



「Café Society X TERATOTERA」で公開された映像の1つ

## Sapporo Dance Collective

「さっぽろ文庫101巻『声』」

[期間] 2020年10月15日(木)～10月18日(日)

[会場] オンライン配信

### 取り零された「声」を掬い上げる

Sapporo Dance Collective(SDC)は、北海道の緊急事態措置(2020年4月17日～5月31日)後の新作「さっぽろ文庫101巻『声』」をオンラインで公開した。かつて札幌で刊行されていた叢書「さっぽろ文庫」にインスパイアされて、現在の「声」をダンス作品化した。



「さっぽろ文庫101巻『声』」から「さっぽろ」という名前の少女の軌跡

最初に劇場が映る。劇場にはひとがだれもおらず、だれも座っていない客席の椅子たちはところどころ傾いており、ひとが不在の長い時間を想像させられる。と想像していたら、突然巨大な軍手人間(?)が現れ、音楽に合わせてステージ上で踊りだす。この劇場はミニチュアであり、ほんものの劇場の舞台上に置かれているのだと判明する(とはいえ、客席にひとはいないほんものの劇場もまた、どこかミニチュア然としている)。これ以降いくつかのパートに分かれたダンスやパフォーマンスが舞台上で繰り広げられ、それらを編集された映像として視聴者は作品をみることになる。

SDCの新作「さっぽろ文庫101巻『声』」は、昭和52年(1977年)から平成14年(2002年)まで実際に刊行された「さっぽろ文庫」から着想を得たダンス映像作品だ(なお、「TERATOTERA祭り」で配信された映像は、8月に札幌市文化芸術公演補助金「さっぽろアートライブ」として配信されたものと同内容)。もともとの「さっぽろ文庫」は、明治時代に入ってから急速に発展を遂げた反面、「都市化により、ふるさとと心を失いかねない可能性も高まって」いる札幌市の現状に対する危機感から、「札幌の風土の中で生まれ育った芸術、文化、社会、自然の諸相をとらえ、過去・現在・未来をつないで独自の〈さっぽろ文化〉の創造と、新しい〈ふるさと札幌〉を築くた

めの糧とし、ひいては文化遺産として後世に残すため」に刊行された(「 」内は「さっぽろ文庫」HPからの引用)。全100巻を成す「さっぽろ文庫」にはそれぞれにテーマがあり、テーマに沿った内容がおさめられている。SDCの今作は「さっぽろ文庫」のそうした精神を踏襲し、その“101巻目”として「声」をテーマに制作された。

実際、このダンス作品にはたくさんの「声」が散りばめられている。ある「少女」=「さっぽろ」の一生について男性が語るシーン(はじめ、「少女」のことは「彼女」としか示されないが、途中「さっぽろ、ちいさな少女」という台詞が挿入され、ここで語られる「少女」とは「さっぽろ」のことだと判明する)では、「さっぽろ」=「少女」の死の間際の声とその死を見届ける男の視点をとおして語られる。また他のシーンでは、新型コロナウイルスに感染したひとの実体験やホームレスのおっちゃんの声が語られ、別のシーンでは、ある女性の学生が抱く性差別に対する憤りや、行動すること/「声」を出すことに対する周りからの視線や意識の差への違和感が語られる。最後のシーンでは、2020年5月に札幌市文化芸術関係者有志によりつくられた『新型コロナウイルス感染長期化に対峙する札幌の文化芸術関係者活動再開への道を探るアンケート調査第1章 影響と損失』に寄せられた自由回答をもとに、現状に対する切実な声語られる。ソーシャル・ディスタンス(ひととの距離/ひとと触れること)やマスクをテーマとしたダンス作品もあり、この作品集(=コレクティブ)自体がまさにいまのこの状況に対する一つの応答(体)となっているといえる。

ところで、「さっぽろ」の語源はアイヌ語であり、アイヌ語は文字を持たない口承言語なのだから、「さっぽろ」ということば自体が「声」として表されているといえるのではないだろうか。そのように考えると、「さっぽろ文庫」の精神を引き継いだSDCの今作のテーマが「声」であったことは、とても自然なことのように思える。「さっぽろ文庫」が、このままでは本来の「さっぽろ」の姿が失われるという危機感からはじまったのと同じように、その101巻目となるSDCの作品もまた、このままでは「声」が失われてしまう、すべてがなかったことにされてしまうのではないか、という危機感から生まれた作品のようにみえる。そしてそれは、コロナ禍によってあらたに現れてきた「声」のみならず、むしろそれ以前から世の中に蔓延していた矛盾や欺瞞や



パンデミックのなかで先行きが見えない不安を語る声が背景に流れる



SDCのメンバーたちが札幌の街を歩き、ホームレスのひとの「声」をさく

暴力に対する違和感や抗議の「声」であり、そしてこの状況のなか、マスクに覆われますますますみえづらくなっている「声」ではないだろうか。

<墓だれか物いへ声かぎり>。この句は加藤楸邨(しゅうそん)が日中戦争の最中、昭和14年(1939年)に書いた句だが、この句を例に出すまでもなく、戦争のような極限状態でもなくとも、同調圧力によってひとは簡単に「声」を出せなくなってしまう。だれもが「墓(ひきがえる)」のように本能的に声を出せるわけでもなく、場合によってはそもそも声を放棄してしまったひともいるかもしれない。そうした声—抑圧され、奪われ、埋もれ、放棄された声に耳を傾けるということ。パフォーマンスの合間に、SDCディレクターの羊屋白玉とパフォーマーたちが札幌市内のホームレスの方たちを訪れ、話をきいたり食べ物を届けたりするシーンが何度か挿入されるが、これらのシーンは社会に埋もれ、あたかもないことにされてきた「声」に耳を傾けるという行為に繋がっているように思える。そして、受け取った声をだれかに届けるための行為としてのダンス。

「声」とはつまるところ、ことば以前のものであり、ことばとからだのあわいにあるものなのかもしれない。その「声」をからだで繋ぎ止め、届ける行為としてのダンス。それはSNSなどで氾濫していることばと対峙する。SNSによってことばは加速度的に更新されるようになったが、結果としてほんとうに助けを求めているひとの「声」はますます埋もれていくばかりだ。前述の「さっぽろ」=「少女」の一生が語られるシーンのなかで、急速な発展のために死を迎えた「さっぽろ」の弔辞で読み上げられるあることば—「自然のなかでは、はやく動くものにはすべて、罪がある」—が端的に言い表しているように、過剰な速度はその分滅びをはやめる(そしてだれしもその「罪」に無自覚である)。SDCの作品には音楽のビートに乗ってガンガンからだを動かすようなダンスはないし、目を眩(みは)るような華麗なダンスもない。むしろどこか(語弊があるかもしれないが)ある種の躊躇いや恥じらいのようなものがひとつひとつの所作に滲んでいるようにみえる。だけどむしろ、そのような(「はやく動くもの」とは対極にあるような)訥々とした所作こそが、この社会やどこか狂ったようないまの状況において取り零されてきた「声」を掬い上げ、われわれをわけも分からずどこかへ連れ去ってしまいそうな過剰な時代の速度に楔を打ち、風穴をあける行為に繋がっていくのではないだろうか。

(エンディングに流れる歌は、墓の声のようにどこかぶきつよだけれど、暗い雰囲気風穴をあける突き抜けた声だった。そんな声再び劇場に溢れ返る日が来ることを祈って)。(高須賀真之)

## Sa Sa Art Projects

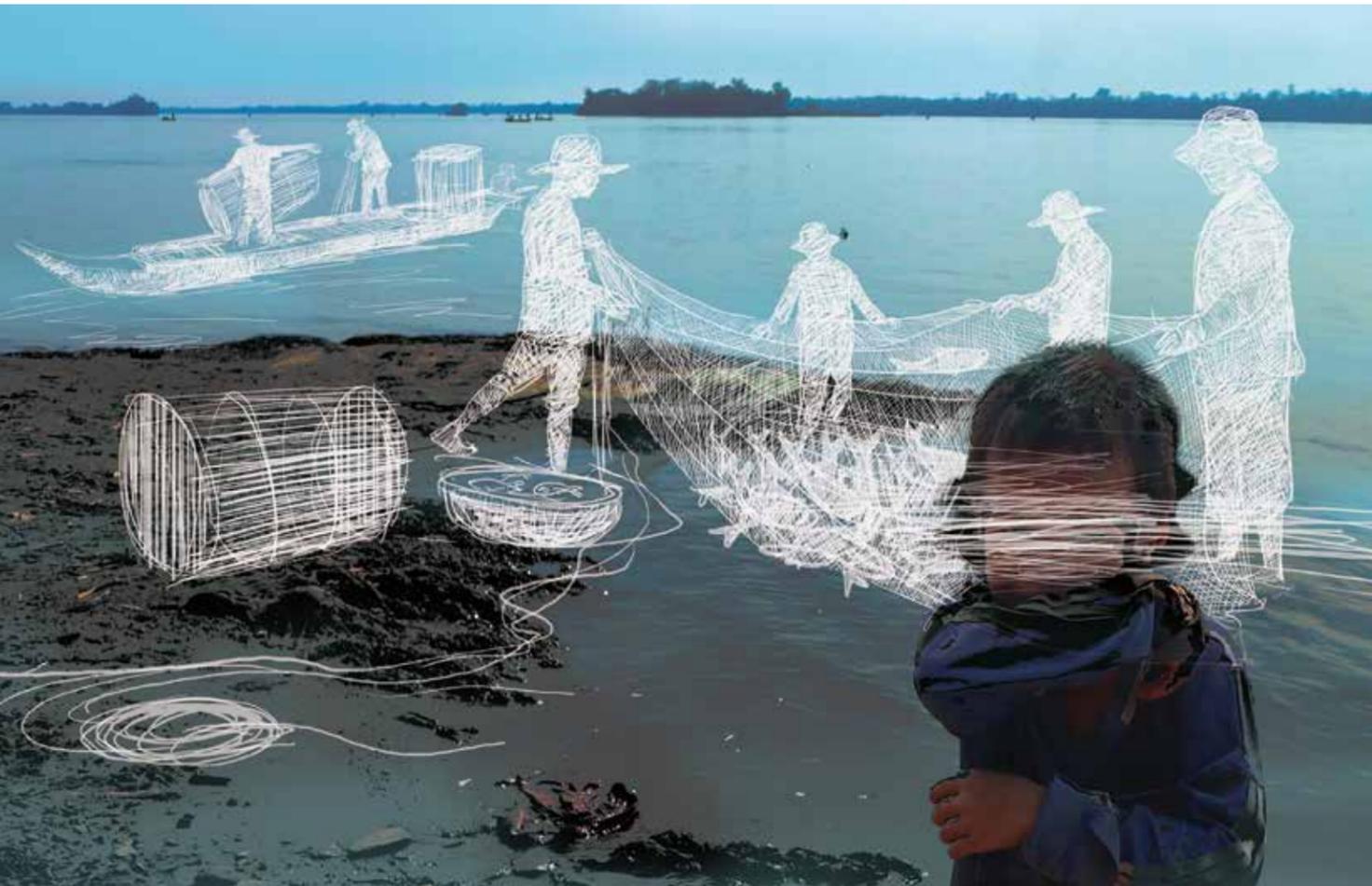
### 『Spirit of Community』

[期間]2020年10月15日(木)～10月18日(日)

[会場]オンライン配信

### 移ろう社会と暮らしへ 静かなまなざし

Sa Sa Art Projects(以下、Sa Sa)は、カンボジアの首都プノンペンを拠点とするコレクティブ。アーティストだけでなく、学生や協力者、支援者、そして観客も含めたコミュニティとして活動する。「ホワイトビルディング」として知られた歴史ある集合住宅でアートスペースを自主運営してきた。今回は、2017年に取り壊されたホワイトビルディングにちなむ写真など4作品を公開した。



写真にドローイングしたSao Sreymaoの作品『Under the Water』と、ミニチュアの家を燃やすパフォーマンス



ホワイトビルディングは建設された1960年代当時、カンボジアの近代化を象徴する最先端の集合住宅でした。芸術家などの文化人も多く暮らしていました。しかしポル・ポト政権による暗黒の時代を経て、白壁の外観は汚れて黒ずみ、そこに暮らす住民は貧困層が増え、売春婦や薬物の売人なども出入りするようになり、いつからか近づくのが危険な地域だと見なされるようになりました。

Khvay Samnangの作品『Human Nature』は、ホワイトビルディングの住民を彼らが暮らす住宅の中で撮影したポートレート。被写体の顔は仮面で隠されていますが、彼らがいる部屋の様子がその人のアイデンティティを浮き彫りにします。外から見ると、混沌として近寄りたがたい雰囲気をたたえる建物の中で、たくましく生きる人々。本質とは内側に分け入ってみないとわからないものなのです。

Vuth Lynoの作品『House - Spirit』は、百近い数のスピリットハウス(東南アジアで見られる祠または神棚のようなもの)から成るインスタレーション。それらは2017年にホワイトビルディングが再開発のため取り壊しとなる前に、住民から譲り受けるなどして集めたものです。ホワイトビルディングのほとんどの住宅にスピリットハウスがあり、住民はそこに祀られた精霊に様々な祈願をしてきました。精霊たちは、住民の人生や街の歴史の静かな目撃者と言えるかもしれません。

Sa SaのContemporary Art Classを卒業したSao Sreymaoは、写真の上にデジタルスケッチを重ねた作品を発表しました。ダム建設のために水面下に沈んでしまった村。ダム建設や気候変動によって河川の生態系が変化し、漁業ができなくなった村。そうした風景を撮影した写真の上



Soojin Chang『The Death Ritual (Shown in the Mirror)』から

に、かつてあったであろう人々の生活を描きました。主に白い線で描かれた人々は、やむなく村を去った哀愁を感じさせます。また、彼女は鏡の上に蠟でミニチュアの村をつくり、観客の前で燃やすパフォーマンスを行いました。水力発電用のダム建設のために村は水面下に沈みました。利便性を求めることと引き換えに失うものはないかと、幻想的なパフォーマンスを通じて問いかけます。

かつてSa Saのレジデンス・アーティストだったSoojin Changの作品『The Death Ritual (Shown in the Mirror)』は2画面の映像が同時進行で流れます。一方はカンボジア・ラタナキリ県のクルン族が行う豊作祈願の儀式です。縄で縛られた子豚と鶏が焼かれ、取り出した内臓が供物として捧げられます。もう一方では、葬儀の専門家兼サウンドアーティストであるKhvay Loeungが同行し、市場で購入した牛の部位が伝統的なクメールの歌とともに火葬されます。仮面を被った女性が太陽の指す方向へと海をボートで走りながら、灰を体にまぶす場面で映像が終わります。仏陀によると悪く残酷な行いをする者は、動物として生まれ変わります。Loeungは語ります。「……そして将来について知りたいのなら、私たちは現在何をしているのかを見なければなりません」。 (国広綾子、常泉佑太、林 真実)



Vuth Lyno『House-Spirit』のイメージ図



Khvay Samnang『Human Nature』から

## [Special Live & Collective Forum vol.3]

[日時] 2020年10月17日(土)Special Live:18:00~19:00 / Collective Forum vol.3:19:00~

[会場] オンラインでライブ配信

オンライン開催となった「TERATOTERA祭り2020」には、オンラインのメリットを生かした企画も盛り込まれた。「Special Live」はインドネシアと日本のミュージシャン3組が競演。それに続いて開かれた「Collective Forum vol.3」は、札幌、東京、チェンマイ(タイ)、プノンペン(カンボジア)、ジョグジャカルタ(インドネシア)を結び、5つのコレクティブがそれぞれの活動と未来への希望を語り合った。



インドネシアの伝統文化とバンクを融合させた AMOK



フォークロアと現代の実験音楽をミックスする Senyawa

### 生活の中にある音楽 オンラインで堪能

ライブの開幕を飾ったのはジョグジャカルタのバンクバンド AMOK。そのパフォーマンスは庭で植物を採ることから始まる。樹木の葉と果実を摘み、川で洗い、実を絞り、飲み物を作る。生活の一部を切り取った風景から演奏が始まる。さらに火をおこし、料理をする空間で演奏し、そこから屋外に出て、熱帯の緑に囲まれた庭で演奏が続く。AMOKは伝統的でスピリチュアルな人々や知恵に関心を寄せている。その音楽もまた、彼らの生活の中にあることを強く感じさせるライブ映像であった。

Senyawaは、伝統楽器を使いながら実験的なライブを繰り広げた。緑豊かな背景のスタジオで演奏される音楽は、耳ざわりが心地よく、いつまでも聞き続けることができた。

テニス Courtsの2人が奏でる音楽は、日常を切り取った歌詞に心地よい演奏が伴う。その中に時折、ナイフでえぐるような歌詞が挟まれ、胸に刺さる。オンラインだったにもかかわらず、演奏の現場にいるような感覚になった。

3組の演奏はいずれも、音楽が生活とともにあることを感じさせた。とくに AMOKと Senyawaは、生活風景の中での演奏を聞かせてくれた。コロナ禍の中、オンラインライブだからこそ実現した、特別なライブとなった。演奏中に音量障害などがあり、YouTubeのチャットを通したやりとりが頻繁に発生したことも、世界が繋がっているという面白さを感じさせる貴重な機会となった。(蔵田章子)



テニス Courts。アーツカウンシル東京のレクチャールーム兼配信スタジオ ROOM302からライブ配信した

### 個別の意思を持ち周囲と連携する コレクティブの可能性を語り合う

「Collective Forum」は、TERATOTERAが続けてきた企画の1つ。2019年5月と2020年の2月は東京都内で実施したが、「vol.3」は初めてのオンライン開催となった。ライブ・パフォーマンスと時間が重なっていた hyslomを除く、5コレクティブからメンバーが参加した。2020年はそれまでの政治的・社会的要因に加えて、新型コロナウイルスの影響で様々な分断、格差、孤立が世界を覆った。フォーラムのテーマは、その中での各コレクティブの戦略と未来への展望について、というものであった。そのテーマに即して各コレクティブのプレゼンテーションがあった。

タイ・チェンマイを拠点とする Chiang Mai Art Conversationからはファウンダーである Sutthirat Supaparinyaが参加した。コロナの感染拡大後に多くのコレクティブが台頭してきており、自身を含む周囲のアーティストやクリエイターたちが複数のコレクティブに参加して活動していることを伝えた。2020年の春ごろには、協力してアーティストの重要性を政府に訴えて支援を要請した。夏には政治的な抗議活動が、物理的手段だけでなく、展示やイラスト表現などによって多面的に展開された。他の都市に比べて活動が活発であり、緊迫感が強い印象を受けた。

カンボジア・プノンペンから参加した Sa Sa Art Projectsの Vuth Lynoはアーティスト・ディレクターを務める。プノンペンでの活動はチェンマイほど活発ではなく、コレクティブも数えるほどしかないが、感染拡大の影響で多くのアートプロジェクトがキャンセルされ、アーティストの収入が激減した。Sa Saも運営するスペースを一旦閉めることになったが、自分たちの役割やできることを改めて考え、オンラインでインタラクションを含めた展示を行うなどしてプロジェクトの継続を試みている。将来が予測しにくい状況でも、アーティストが必要な支援を受け続けられることの重要性を訴えた。

札幌を拠点とする Sapporo Dance Collectiveからは演出家の羊屋白玉とダンサーの櫻井ヒロが参加した。アーティストの活動環境や労働環境にまつわる活動も行う羊屋は、コロナ禍ではアーティストの権利と社会的存在の弱さのようなものが露呈したと話した。現在のアーティストの声を集めた映像作品を紹介したほか、北海道に緊急事態宣言が出た直後に公演を行った際の状況と複雑な心境を語った。感染拡大後は配信のみの公演も行っている。プレゼンテーションには、コロナの現状への戸惑いや必ずしも的確でない行政支援に対する苛立ちも表れており、彼らの活動にも意識にも大きな変化が起こっていることが感じとれた。

インドネシア・ジョグジャカルタの Ruang MES56から参加したディレクターの Anang Saptotoは、地震や津波など災害の多い国であることから、社会に対する自分たちの責任や役割を常に意識して活動していると話した。インターネット上で新しいプラットフォーム構築を進めていたが、コロナでストップしてしまうなど活動に影響が出た。しかし最近では、ギャラリーでの展示を再開したり、近隣の人にマスクや食事を提供するプロジェクトを行うなど、パンデミック下でも積極的な試みが続いており、周囲の社会ともつながりを持っている。これまでも他の企業や機関との協業は行ってきたが、今回の「TERATOTERA祭り」のように他国の団体やアーティストとのコラボレーションは初めてのことであった。

東京を拠点とする Ongoing Collectiveからは美術作家の阪中隆文と柴田祐輔、そして TERATOTERA 事務局長も兼ねる高村瑞世が参加した。また TERATOTERA ディレクターでありフォーラムの司会を務めた小川希は、Ongoing Collectiveのファウンダーでもある。他のコレクティブと異なり、共通の目的を持たずに個人やその人間関係をベースとしてつながっている特徴がある。今回の「TERATOTERA祭り」への参加も、メンバーの1人である阪中が「痒み」をテーマとした個展を行い、それを他のメンバーがサポートし、批評するという形をとった。

最後の小川のコメントにもあったように、東南アジアのコレクティブは、他のアーティストやコレクティブと協力して活動している点が特徴的であった。一方で、個別の意思を持ちつつ周囲とつながっていくというスタイルにおいては、どのコレクティブにも共通する部分が見られた。今回のフォーラムは日本と海外のコレクティブそれぞれの意識や活動形態を知る貴重な場であった。小川が数年かけて続けてきた海外コレクティブとの交流があつてこそ実現できた、TERATOTERAならではの企画だったと言えるだろう。(野島優一)



オンラインで話し合う各コレクティブからの参加者たち

参加コレクティブ / アーティスト・プロフィール  
COLLECTIVE/ARTIST PROFILE

Chiang Mai Art Conversation (CAC)

from THAI



CACはタイのチェンマイで2013年1月に設立されたアーティスト主導の非営利プロジェクト。アート情報の収集と提供、文化的活動を通じた交流と協働の強化を主な目的としている。アート情報を作成し、共有するためのプラットフォームとしてウェブサイト運営し、最新のアートマップ、アートのリスト、イベント、アーティストプロフィールや記事を掲載している。このプラットフォームのデータベースを通して、チェンマイのアートシーンの歴史を反映するとともに未来を予測することを目指している。

彼らはまた、アートコミュニティと観衆を育てるために、様々な活動形式で人との繋がりや交流を築いていくことにも力を入れている。2016～2019年の3年間、CACは国際交流基金アジアセンターと共催でアジア・カルチャー・ステーション(ACS)を運営。このプロジェクトでCACの活動は東南アジアや日本の芸術文化の専門家たちとの交流、協働へと広がった。ACSはCACの初オフィスでチェンマイのニマンヘミン通りにあったが、現在、このオフィスは終了し、同エリアの新たな場所への移転を待っている。

CAC is an Artist Initiated Nonprofit Projects that was founded in Chiang Mai, Thailand in January 2013. The main objective is to collect and provide art information, enhance exchange and collaboration through cultural activities. We are running a website as a platform for us and the public to create and share art information. The website contains update art maps, a list of art spaces, events, artist's profiles, and Journals. This platform aims to reflect the history and also predict the future of the art scene in Chiang Mai through data bank. However, they do encourage and build physical connection and interaction in the form of various activities to further the growth of the art community and its public audience. For 3 years (2016-2019), CAC partnered with the Japan Foundation Asia Center to operate Asian Culture Station (ACS). It was a project that CAC extended our activities to exchange and collaborate with art and culture experts in Southeast Asia and Japan. ACS was CAC's first physical office on Nimmanhemim Road, Chiang Mai. Currently, the physical office has closed down and waiting to move to the new place in the same neighborhood.

WEBSITE <http://www.cac-art.info/>

hyslom (ヒスロム)

from JAPAN



Photo: Dawid Misiorny

加藤至、星野文紀、吉田祐からなるアーティストグループ。2009年より活動をはじめ。造成地の探検で得た人やモノとの遭遇体験や違和感を表現の根幹に置き、身体を用いて土地を体験的に知るための遊び「フィールドプレイ\*」を各地で実践し映像や写真、パフォーマンス作品としてあらかず。またその記憶を彫刻作品や舞台、映画へと展開させている。2015年から任秀夫氏と共に「任・ヒスロム鳩舎」として日本鳩レース協会に入会。レース鳩に関するワークショップや展示なども行っている。グループ名は、「hysteresis(ヒステリシス:物質の状態が、現在の条件だけでなく、過去の経路の影響を受ける現象)」をもとにした造語。

\*劇団 維新派を主宰した故・松本雄吉による呼称

Formed in 2009, hyslom consists of Itaru Kato, Fuminori Hoshino, and Yuu Yoshida. The periodic exploration of developed land and encounters with people and objects there, as well as a sense of incongruity resulting from these experiences, serve as a basis for their artistic expression. hyslom turns "field-play", their method for physically and playfully experiencing a given environment, into video, photography, and performative artwork. The group further develops the memories of "field-play" into a wide array of other media, including sculpture, theatre, and film. In collaboration with Hideo Nin, a well-known figure in the world of racing pigeons, hyslom became a member of the Japan Racing Pigeon Association under the name Nin-hyslom Hatosha (Nin-hyslom Pigeon Home), in 2015. hyslom also organizes workshops and exhibitions related to racing pigeons, thus gradually merging the roles of care takers and artists. In 2018, hyslom was awarded the Kyoto City Special Bounty for Art and Culture.

WEBSITE <http://hyslom.com/>

Ongoing Collective

from JAPAN



2016年、東京で結成。アーティスト、ミュージシャン、キュレーター、コーディネーターからなる全48名。東京の吉祥寺にあるArt Center Ongoing ディレクター 小川希の呼びかけによって集まる。国内外の展覧会、アートプロジェクト、シンポジウム、レジデンスやイベント等に積極的に参加。Ongoing Collectiveが目指すのは、オーガニックな集団。それは、なんらかのシステムや規律のもとに形成されるのではなく、より人間的な関係性によって成り立っていくもの。メンバーの間にヒエラルキーは存在せず、集団としての決定は、話し合いやその場のノリによって行われていく。個人主義の限界を超えて、その先にあるであろう明るい未来を目指す。

Formed in Tokyo in 2016. The formation of Ongoing Collective was first proposed by Nozomu Ogawa, Director of Art Center Ongoing, and it consists of 48 startup members (36 artists, 2 musicians, 6 curators and 4 coordinators). Ongoing Collective will actively participate in international / domestic exhibitions, symposiums, residency programs and



Ongoing Collective

Ruang MES56

from INDONESIA



other events.

Ongoing Collective's aim is to form a flexible and free thinking, organic organization, connected through interpersonal relationships, not by mechanistic functions or formal regulations. No hierarchy exists. All the group's decisions will be made via lateral communication. No more small territorial disputes, this is an attempt to share and aspire to forming common goals together.

WEBSITE <http://ongoingcollective.jp/>

Ruang MES56は、スタジオ、学びの場、遊び場、住居として使用されている家屋を、様々なコミュニティやネットワークと協働して運営するインドネシアのアートコレクティブ。2002年に自己資金で設立され、批評的かつ文脈的な作品で様々な分野を横断しながら写真と現代アートの発展に注力している。

MES 56 is an artist collective working cooperatively with their communities and networks to manage a house for studio, education, playground and a place to live in. Formed in 2002 with self funding, this community focusing on the development of photography and contemporary art crossing over with other disciplines in critical and contextual works.

WEBSITE <http://mes56.com/>

Sapporo Dance Collective (SDC)

from JAPAN



2017年、北海道札幌市の西方に位置する、劇場も兼ねた生活支援型文化施設「コンカリーニョ」から生まれたコレクティブ。ダンサーを中心に、クリエイターが集い、個人の夢や社会の課題と向き合いながら、ダンスへの昇華を臨むゆるやかで水平的な集まり。ダンスと観客をつなぐSuKiMaチームや、アーティストの労働環境に関する勉強会を進める北海道アーティストユニオンスタディーズと共に、複層的にダンスに向き合っている。

The collective was born in 2017 from the ConCarino, a lifestyle-supportive cultural facility with a theater, located in the west of Sapporo, Hokkaido. It is a loose and horizontal gathering of dancers and other creators who come together to face their individual dreams and social issues and sublimate them into dance. With the SuKiMa team, which connects dance and the audience, and Hokkaido Artists Union Studies, which promotes study groups on the working environment for artists, the group faces dance in a multitiered way.

WEBSITE <https://sapporodancecollective.jimdofree.com/>



Sa Sa Art Projects

from CAMBODIA



Sa Sa Art Projectsは、実験的かつ批評的な現代アートの実践に取り組むカンボジアのアーティストランスペース。2010年にカンボジアのアートコレクティブ Stiev Selapak によって設立され、「ホワイトビルディング」として知られた歴史的建造物の集合住宅にて、2017年にこの建物が再開発のために取り壊されるまで運営された。新拠点では、カンボジアの若手作家や美大卒業生たちともより強く関わりをもつようになり、創造的な教育プログラム、展示、「Pisaot」という実験的なレジデンスプログラムやその他の協働プロジェクトを通じて、アジア中のアーティストたちとのより深い対話を構築し続けている。

Sa Sa Art Projects is a Cambodian artist-run space dedicated to experimental and critical contemporary art practices. It was founded in 2010 by the Cambodian arts collective Stiev Selapak and operated from the historic and vibrant apartment complex known as the White Building until 2017, when the building was demolished making way for new development. At its new location, Sa Sa Art Projects has shifted toward a stronger engagement with Cambodian young artists and art graduates while continuing to build a deeper dialogue with artists within Asia through its creative education programs, exhibitions, its signature Pisaot artist residency, and other collaborative projects.

WEBSITE <https://www.sasaart.info/>

Connecting the TERA of the JR Chuo Line – A Project of Cultural Transmission Commences  
 In 2009, we initiated a project to transmit culture from neighborhoods along the JR Chuo Line. The name "TERATOTERA" derived from the fact that the project linked two stations with the character for "temple" in their names: Koenji and Kichijoji. Former participants of a lecture series on community art projects, organized by Director Nozomu Ogawa, joined TERATOTERA as members of the volunteer staff of TERACCO. Beginning in June 2010, symposia, movie screenings, live musical performances, and other events were staged at various sites under the collective title of "Get Off Before Your Stop."

# II

## はじまりの日々

### JR中央線沿線の「テラ」をつなぐ文化発信プロジェクトが始動

JR中央線沿線地域から文化を発信することを目指すプロジェクトが2009年に始動。高円寺駅と吉祥寺駅という2つの「テラ」をつなぐことから「TERATOTERA」と名づけられた。そこに、小川希ディレクターがコーディネーターを務めたアートプロジェクト講座の受講者らがボランティアスタッフ「テラッコ」として参加。2010年6月から、中央線の各地でシンポジウムや映画上映、音楽ライブなどを開く「途中下車の旅」が始まった。

#### from INDONESIA

#### AMOK



2014年後半に活動を開始したジョグジャカルタ出身のパンクバンド。インドネシアの伝統的でスピリチュアルな人々(特にジャワの文化)や知恵に興味を持ち、そこにDIYパンク的な考え方をミックスした集団が結成した。バンドメンバーは90年代以降のインドネシアにおけるパンクとメタルの歴史の中で著名な人物たちである。彼らはまた、Disform, Deviated Symphony, Realino Resort, Agent 57の元メンバーでもある。AMOKは、dビート、モーターヘッド的なロックンロール、スラッシュメタル、ストリートパンクをミックスした独特の音楽スタイルを生み出した。彼らのライブは常にジャワ式の伝統的な儀式から始まる。

A punk band from Yogyakarta that kickstarted in late 2014. AMOK was founded by a collective interested in traditional spiritual Indonesian people (especially Javanese land culture) and wisdom mixed with DIY punk attitude. The band members are prominent figures in the history of punk and metal in Indonesia since the 90s. They are also ex-members of Disform, Deviated Symphony, Realino Resort, and Agent 57. AMOK produced a music style distinctive mixture of d-beat, motorheadish rock n roll, thrash metal and streetpunk. Their live act always started with a traditional ritual of Javanese style.

#### from INDONESIA

#### Senyawa



Senyawaは、現在至るところで起こっている伝統音楽を経由した実験的な音楽の最も深い例の一つを生み出している。インドネシアのフォークロアのなムードと現代的なジャンルのハイブリッドを織り交ぜながら、Senyawaは10年以上にわたって未踏の音楽の領域を探っている。

Senyawa produce one of the most profound examples of experimental via traditional music happening anywhere today. By weaving Indonesian folkloric moods with various shades of modern genre hybrids, Senyawa has been navigating unexplored musical terrain for more than a decade. Their sound is comprised of Rully Shabara's deft extended vocal explorations punctuating the frenetic sounds of instrument builder, Wukir Suryadi's modern-primitive instrumentation.

#### from JAPAN

#### テニスーツ



1995年よりmajikick recordsを始動、1996年よりさや (Vocal)と植野隆司 (Guitar)により活動。近年は他に、日独英の混合バンドSpirit Festや、管楽団ざやえんどう、ソロ活動など。2020年は、さやが編集を担当したJapanese Indieコンピレーション、テニスーツの5LP Box、またSpirit Festのニューアルバムがヨーロッパ・日本などで発売されている。また、5月、ストリーミングサイトMinna Kikeruを立ち上げ、インディ音楽を広く掲載、テニスーツは黄倉未来と制作したアルバム『Changing』などをリリースしている。

Started by majikick records in 1995 and Saya (Vocal) and Takashi Ueno (Guitar) have been active members since 1996. In recent years, Tenniscoats has been working with the band Spirit Fest, consisting of members from Japan, Germany, and the UK, and the brass band Zayaendo, as well as their solo projects. In 2020, a compilation album of Japanese Indie music selected by Saya, 5LP Box of Tenniscoats, and a Spirit Fest's new album were released in Europe, Japan and etc. Also, in May, the streaming site "Minna Kikeru" was launched and they widely posted indie music, and Tenniscoats released the album "Changing" produced with Mirai Kikura.

Streaming site <https://minnakikeru.com/>

#### 運営 / Operation



#### Teracollective (テラッコレクティブ)

TERATOTERAのボランティアスタッフであるテラッコの歴代コアメンバー16名によって2018年に設立。メンバーの職業、年齢、性別は様々だが、アーティストやアートの現場を支援し共に作り上げていきたいという強い想いを共有し活動している。裏方だけのコレクティブとして、アートにまつわる様々な人や現場を支え盛り上げていくことを目指す。

Formed in 2018 by 16 core members from among past TERACCO volunteers. Their occupations, ages and genders may differ, but they share a passion for supporting artists and the front lines of art, and building them up together.

TERATOTERA Festival 2018 is the first project for Teracollective to be involved in. Members will remain behind the scenes for the collective's initial engagement, supporting the various people involved in art, and creating a festive on-site atmosphere.

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー。茨城県出身。「取手アートプロジェクト」のインターン、東京芸術大学音楽環境創造科教育研究助手を経て、2009年の「東京アートポイント計画」立ち上げ期より現職。共著に『これからの文化を「10年単位」で語るためにー東京アートポイント計画2009-2018ー』（アーツカウンシル東京、2019年）。

## TERATOTERAのはじまり

### 大内伸輔

東京アートポイント計画がスタートしたのが2009年。地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを展開することで、東京の文化の基盤（創造拠点）を創出することを目的としてはじまりました。事業立ち上げにあたり、都内で地域活動や文化芸術に関わるさまざまな人へヒアリングを行いました。その中のひとりが吉祥寺に「Art Center Ongoing」立ち上げて2年目の頃の小川希さんです。

すでにアーティストとのネットワークを持っており、吉祥寺という土地に根を張り場所としての「拠点」をはじめていた小川さんと「次にチャレンジすることは何か」という対話をしました。いくつか出たアイデアの中で、「アートプロジェクト」として展開できる2つのことに照準を合わせて、プロジェクトを立ち上げることになりました。

1つめは「小川さんが一人でできていることを開くこと」。アートプロジェクトを動かすにはチームが必要です。そこでまずは「3人体制」で運営をスタートすることをお願いしました。また、参画の機会を開くことも重要なポイントとなりました。関わりの機会は「テラッコ1000人計画」と名付けられ、立ち上げ時の企画書に盛り込まれました。「テラッコ」はTERATOTERAに参加するボランティアの呼称です。小川さんの持つアートや社会への視座、プロジェクトのつくり方を、1000人も人が共有することで、何か社会を揺り動かす状況が生まれるのではないかと。そんな期待がありました。

2つめは「地域で展開すること」です。都内に創造拠点をづくりだす東京アートポイント計画にとって、「Art Center Ongoing」は「すでにできている」存在でした。それもあってArt Center Ongoingを中心に、というよりは小川さんにその外で活動をつくってもらうこと、中央線沿線の活動のひとつとしてネットワークを生み出すことを目指しました。この指針をもとに、プロジェクトの名称は、中央線の高円寺駅と吉祥寺駅、2つの「寺」の駅を結ぶ地域を対象にすることから「TERATOTERA」となりました。

コンセプトやプロジェクトメンバーを整えたのち迎えた2010年2月21日、「TERATOTERA はじまりの日」。井の頭公園にほど近い老舗焼き鳥店のフロアを借り切って行ったオープニングプログラムには、中央線沿線にゆかりのあるアーティストやアートスペースの関係者130名ほどが集いました。小

上がりには書道の先生である小川さんのお母様がしたためた「めぐり」\*と、座布団の上でプロジェクトのこれからを語るチーフディレクターの小川さん。お座敷では思い思いに語らう参加者たち。沿線のエネルギーとポテンシャルを感じるとともに、何か新しいことがはじまる期待感を目の当たりにした時間でした。

\*寄席など演芸場で出演者の名前などを記した紙製の札。出演者が代わる度にめくっていく。

担当したTERATOTERA 立ち上げの3年は、同時に東京アートポイント計画立ち上げの3年でもあります。TERATOTERAの道筋や空気感をかたちにすることは、そのまま東京アートポイント計画とは何か、をつくることに直結していました。これをすれば正解、というセオリーのない3年。ならばできることは何度でも現場に出かけ、対話し、次の一手のための最適解を編み出すことでした。常にスリリングでチャレンジングだった「次の一手」の積み重ねは、プロジェクトに強度を与え、しなやかさを育みました。10年以上経ってもTERATOTERAが豊かな場である所以（ゆえん）は、その持続的な所作にあります。社会と向き合い、対話し、表現によってつながる場。それらを経験した推定1000人が、まもなく社会を揺り動かす状況を生み出すのではないかと、いや、もう生まれているのかもしれない。私もこれまで関わった多くの人と同様、社会の「Post」へと進んでいきます。説明しがたい、でもなんだか勇気が湧くような「TERATOTERA 的なもの」を携えて。



「TERATOTERA はじまりの日」にスピーチをする小川希ディレクター(左)。右側に「めぐり」があり、その右隣りに筆者が座っている

デザイナー、ファッションブランド「SUTOA」主宰。西荻窪で直営店を運営するほか、全国の美術館などでポップアップショップを開催する。西荻窪エリアで2009年から、飲食店やギャラリーなどがお茶を振る舞う「西荻茶散歩」を主催。近年は100店舗以上が参加するイベントに発展している。

## 多様性を求めたディレクション

### 國時 誠

2009年に以前から交流のあった小川希さんから「中央線のアートプロジェクトを立ち上げるのでディレクターをやりますか?」と突然、お誘いがありました。当時は「面白そうなことは何でもやってみよう」という時期だったので二つ返事で快諾したのを憶えています。

期間でいうと2010年の立ち上げから、ウェブ上のコラム「途中下車の旅」最終回(2015年)までの在籍でした。発足時は小川さんと私、長内綾子さんの3人で時々集まっていた話合い。まずは小川さん考案のプロジェクト名「TERATOTERA」が決まり、それ以外は白紙の海原を漕ぎだすような始まりでした。

ディレクターといっても私自身は組織に属したことがなく、大学卒業後即自営業でしたので、決められた職務をそつなくこなすということが苦手というか、仕事のパートナーとしてはあまり使えない?部類の人材だったのではないかと自戒を込めて振り返るのですが、小川さんはそんなことも見抜いた上でお声をかけてくれたのかなと思っています。特にやらなければいけないノルマ的なことはなく、私が自発的に思いついたプロジェクトを一任してくれていたため、自営業気質を損なうことなく個性を発揮することができました。

短い在籍ではありましたが、ディレクターを任せていただいている間は、良くも悪くも「小川色」に対して違う答えはないかな?と、多様性を求めることが自分の仕事でした。

具体的には、私は西荻窪がベースですので西荻の地の利を生かした企画であったり、デザイナーやジャーナリスト、ダンサー、小説家、ファッションデザイナーなど、いわゆる現代美術の作家ではない方にお声がけして、イベントやコラムのゲストとして出演していただきました。

もう一つ、私にとって大切でそして、日々戸惑っていたことはテラッコとの関わり方です。こちらも発足時に、ボランティアを募って運営していくということから「テラッコ」が誕生したわけですが、それぞれバックボーンの異なるテラッコのみなさんとプロジェクトを行うにあたって、当時は意思の共有に四苦八苦していました。イベントで使用する会場や、お誘いするアーティストに対して細やかな気遣いが普通の仕事以上に必要な場面が多々あるのですが、ボランティアという立場からそ

こが欠けてしまうことがあったりして、私は交渉事については基本的な商習慣を判断基準にテラッコと接していたので、頭を悩ませることが幾度となくありました。

それに関連して思い出したのが、私が担当していたコラムの最終回、小川さんのコメントです。インタビューの中で小川さんが「自主主導の『TERATOTERA 祭り』を初めてテラッコに全て任せてみた。でも満足いかなかったため、その次の回は自主主導に戻した」と発言されていて、普段は飄々としている小川さんも同じようなジレンマがあるのだな、と共感したことを憶えています。

そういった不完全燃焼感も抱えつつ、数年でTERATOTERAのディレクターを終えたわけですが、その後の「TERATOTERA 祭り」やアートプロジェクトの講座など、TERATOTERAの活動の幅がどんどんと広がっていく様子を目にして「すごいなあ」と素直に感動しています。また、今も繋がりのある元テラッコが、エネルギーに自分の分野で活躍されている様子を見聞きして、これまた「すごい!」と感心しきり、とても嬉しいです。(あの時はいろいろと厳しいこといってごめんね。)

TERATOTERAが区切りを迎えることは残念ではありますが、関わる方々が悩みながらも進んでいくプロジェクトは本当に大きな力になるのだなと、私自身振り返ってみて改めて感じました。ありがとうございました。



JR中央線沿線で地域に拠点を構えて活動する3人が語り合う「まちプロ会議」にパネリストとして参加した筆者(2012年10月)

1976年、東京・神楽坂生まれ。2001年、武蔵野美術大学卒。2004年東京大学大学院学際情報学府修士課程修了。2008年に吉祥寺に芸術複合施設「Art Center Ongoing」を設立。同施設代表。2010年からJR中央線高円寺駅～国分寺駅区間をメインとしたアートプロジェクト「TERATOTERA」のチーフディレクターを務める。

## 震災と確信

小川 希

2010年2月21日、吉祥寺の老舗やきとり屋「いせや公園店」の2階、畳の大広間は、足の踏み場のないほどたくさんの人で埋めつくされていた。TERATOTERA初の公式企画「TERATOTERA はじまりの日」である。企画といっても、傍から見れば単なる「呑み会」。ただ、その規模が尋常ではなかった。約130人の参加者、そしてその全員が中央線沿線で活動するアート関係者だったのだ。アーティスト、デザイナー、写真家、ダンサー、ギャラリスト、映画館やライブハウスのディレクター、イベントのオーガナイザーやプロデューサーなどなど。自分たちで企画したにもかかわらず、東京の西側のアート関係者が一堂に会したその光景を目の当たりにして、日本ってこんなにアートが盛んな国だったかと驚くと同時に、これから何かが始まっていくかもしれないという漠然としたアートへの期待を感じていた。「はじまりの日」に集まっていた人のほとんどが初めて出会う人たちばかりで、そこにいた全員と小さなグラスで幾度となく乾杯を繰り返しながら、まずはこの人たちをよく知ることから始めないといけないと思った。誰が、どこで、どんなことを、どんな思いでしているのか。それを知ったうえで、この地域で自分ができていることを考えてみよう。それでTERATOTERAの1年目は「途中下車の旅」と称し、いくつかのアートスペースにおじゃまし、その場所を舞台に共同でイベントを考えてみることにしたのだった。

華々しくスタートしたTERATOTERAであったけど、はじめは結構厳しい状況が続いた。ギャラリー、映画館、野外アートイベント、洋服店、ライブハウスなど、数カ月おきに会場や内容を変えながらイベントを開催していったのだが、全てが手探りで、運営も思うようにいかず、集客も芳しくなかった。「チーフディレクター」とは名ばかりで、何か問題が起きるごとに、ひたすら頭を下げていた記憶がある。そしてその都度、このプロジェクトで自分ので

きるこつて一体なんなのだろうと自問し続けていた。

たくさんのお客に来てもらってイベントとしては大成功というものもいくつかはあったが、その時であっても、自分がTERATOTERAでやりたいことは「人をよべるイベント」なのかという疑問がいつも頭をよぎるのだった。そして、はっきりとした答えを出せないまま、TERATOTERAの1年目が終わろうとしていた。この年度の最後のイベントは2011年3月12日に、阿佐ヶ谷でTERATOTERAの活動を総括するトークが開催される予定だったのだが、その前日の午後、大地が大きく大きく揺れた。

その数時間後、翌日のイベントの中止が決定。もちろん僕らのイベントだけではなく、この日を境に、この状況ではアートどころではない、という世論が瞬間に日本中を覆いつくしていく。凄惨な状況が徐々に明らかになり、漠然とした不安と恐怖に包まれる中で、ただ僕は何かを見つけつつあった。そして最終的にたどり着いたのは「自分が今できることを精一杯やるしかなく、僕にとってそれはアートしかない」という素朴な答えであったのだ。そしておそらく、その頃から僕の「TERATOTERAディレクター」としての活動は、漸く時を刻み始めた気がするのだ。



2010年3月、TERATOTERAの存在を周知するために開かれたイベント「TERATOTERA お披露目の日」で、乾杯の音頭をとる筆者(左端)。このイベントに約260人が参加し、TERATOTERAが対象とする地域の文化的ポテンシャルや課題を語り合うトークや、パフォーマンスなどが行われた

大好きな少女漫画の舞台が吉祥寺だった。縁あって憧れの街に引っ越したのが25年前。その縁に感謝して、吉祥寺の街を盛り上げるボランティアとして活動するうちに、「TERATOTERA」に出会った。街を現代アートで飾る！想像するだけでワクワク。街には詳しい、役に立てるかも。そんな思いで10年が過ぎた。アートを通して見た景色は、人々が集う姿と重なって、えらく美しい。

## 「アートボランティアなんて知らなかった」私の、57歳からのテラッコ

前川 順子

TERATOTERAとの出会いは2010年の4月ごろ、吉祥寺の武蔵野商工会館で開かれた地域活性化の会議。吉祥寺の街の経済を担う重要な場で、会員のおじさま方は明らかに空気感の違う青年たちが紹介された。当時私は「街なか観光案内」のボランティアをしていて、たまたまこの日の会議に出席していたのだった。この後、10年もの間、TERATOTERAと密に関わることになるなんて想像もしていなかった。

青年たちは、東京都の関連団体が主催する都市型アートプロジェクトTERATOTERAのディレクターだった。中央線沿線をアートで繋いで盛り上げるとか。「アートで地域おこし」の都会版？それとも「街ごと美術館」？頭の中は疑問符ばかり。ふとパンフレットを見ると、「ボランティア『テラッコ』募集」の文字。「テラッコ」？またも疑問符が浮かんだが、可愛い名前に惹かれてディレクターに歩み寄った。

アートに特別興味があったわけではない。しかしテラッコになるとなれば、基礎知識ぐらいは仕込まないといけない。そんな折り、ディレクターの小川希さんによる現代アートの基礎講座「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」が7月に開講されることを知り、早速参加した。

そこはワンダーランドだった。見るもの聞くもの新しいことだらけ！ワクワクが止まらない。ゲスト講師はアートの今を代表する作家たち。授業が終われば若い同級生たちとビールで乾杯。これは楽しい！受講生は多種多様だが、芸術に対する畏敬の念は半端ない。アートはよくわからなくても、そこに集まる若い子たちは魅力的だ。そこからテラッコが何人も誕生した。めでたし。現代アート、いいじゃない！

私の初テラッコ体験は、吉祥寺の名物映画館を会場に「街おこし」をテーマにしたドキュメンタリー映画の上映会とトークイベントだった。地元の居酒屋からは樽酒の振舞いなどもあり、都市型プロジェクトに対する街の期待が伝わってきた。

ところが集客は、あらら、テラッコの数のほうが多い!? 地方の寂れた商店街を舞台にした映画も、出演者やミュージシャンが登壇したトークも面白かったのに……。テラッコができるこつて何だろう?そこがスタートだった。

その後も、中央線沿線の各地で開催したイベント「途中下車の旅」では、思わぬ事態やハプニングが続出。区営プール

を会場にするとテラッコが間違っってプールに落ちる。井の頭公園のイベントでは、観客で混み合ったためか、知らないおっちゃんに怒鳴られた。ああ、これが街でアートする、ということなのか。「途中下車の旅」はイベントごとに駅が違う、だから街も違う。毎回、面白く、でも難しい。失敗して落ち込んだ時もテラッコに教えられ、助けられた日々。ハートは熱々だったな。

東日本大震災から半年後の2011年秋、吉祥寺で被災地復興の祈りを込めて「TERATOTERA祭り」が開催された。使命感に燃えたアーティストたちを迎え、甘えや失敗の許されない運営がテラッコたちに課せられた。

テラッコたちは献身的に動いた。仕事を持ちながら、徹夜作業を覚悟して寝袋を持参したテラッコもいた。だが、吉祥寺は商業の街。アートが理解されないこともある。テラッコだけでなく、調整や折衝を担う事務局の苦労はMAXに。それでも、彼らはアートへの想いを武器に難問をクロッと乗り越える。そしてアートに彩られた街からは東北へ確かなメッセージを伝えられたと確信する。

その後、10年近くテラッコを名乗ってきた。回を重ねる毎に、知識や経験が豊富な「大人テラッコ」が増えた。私はちょいとズルを覚え、今はひっそりと亜テラッコとなっている。

それでも私がなかなかTERATOTERAを離れられないのは、瞳を輝かせて走り回るテラッコたちが大好きだから。そんなテラッコのおかあさん、みたいなものになりたかったから。

そう、テラッコ愛が止まらないeeeeeeeeeeeeeeee～!のだ。



テラッコの定例ミーティング「テラッコ屋」の集合写真。前列左端が筆者(2012年)

2010年度～2013年度のTERATOTERAに、現代美術を楽しむ層の裾野を少しでも広げたいとの思いからテラッコとして参加。TERATOTERAでは、展覧会の企画や事務局スタッフなどを手がける。趣味は現代美術と映画鑑賞、南インドカレーと猫動画。

## 私がテラッコになった理由

脇屋佐起子

現代美術との出会いは、中学生時代に遡る。馬事公苑によく連れて行ってくれた両親が、なぜかその日は世田谷美術館に行こうと言い出し、現代美術なるものと遭遇したのである。「無題」と名付けられた円環状に並んだ石、何を描いているのか判然としない「○○のための習作」とか「No.45」といったような、中学生の私には暗号のようにしか思えない理解不能なもの、それが初めて出会った現代美術だった。今思えば、ありがたいモノ派の巨匠の作品だっただろうが、よく人々が口にする「現代美術はわからない」の呪文を手に入れてしまった日でもあった。

こうしてアレルギーになっていた私も、社会人の辛い日常から逃げ出す現実逃避の手段として、2000年にミッドセンチュリーモダン家具を皮切りに近代美術を見始めた。週末ごとに美術館を梯子するようになると、友人から「わかる/わからないではなく、好き/嫌いで見てもいい展示らしいよ」と勧められ、2005年に東京オペラシティ アートギャラリーで行われた『アートと話す アートを話す』を鑑賞してみることに。「生業にしているわけじゃないんだし、わからなくてもいいよね」と聞き直るきっかけを得て、堰を切ったように現代美術にのめり込み、2007年には学芸員資格を取得、2009年からはギャラリーでバイト、作品制作補助や運営ボランティアを行ったり、2010年に現代美術のスクールに通うようになったころには、狭い美術業界での人脈は面白いように広がっていった。

そんなころに通いはじめたのがTERATOTERAのディレクターでもある小川希さんが講師を務めていた「アートプロジェクトの0123」(2010年)という講座。10名ほどの受講生たちと、アーティストやライター、美術評論家やアートコーディネーターの活動を学んだり、展覧会についてテキストを書いて添削を受ける、といった初歩的な内容だったが、「アートプロジェクトに関わってみたい」という志を同じくする仲間たちと、情報や考えを交わすことは大きな励みにもなり、自然とTERATOTERAの活動に誘い込まれていった。

当時一般企業で働きながら活動をしていた私にと

って、お昼休みに「普通の」OLさんたちと世間話を交わす話題は、単館上映の映画の話をするのが精一杯。美術は好き者の趣味で、現代美術なんて面倒なワードを出せば中学生の私のように「現代美術はわからない」のシャッターがすぐさま目前で降りる。現代美術は何かを解決するものではないし、誤解を恐れずに言えばなくても困らない。でも、狭まった視野や固まってしまったものの見方を少しずらしたり、転覆してくれる、なくても困らないけどあったらうれしいスパイスみたいな作用をもたらしてくれる。それはほんの少し普段の生活を豊かで新鮮なものにしてくれる。だからこそ、現代美術に関心のない「普通の」人にこそ美術は必要だし、その効果を共有したい。たった一握りのコレクターを奪い合うようなアートマーケットでは裾野が広がらない状況を打破する必要がある。それには、美術館のような守られた場所にだけ美術があっても彼らとの距離は縮まらないし、声は届かない。だから、TERATOTERAのように街に介入していく必要があって、彼らの視界に滑り込み、まずは美術というものの異質なものに偶然に半ば強制的に触れてもらう必要がある。

だから私はテラッコになったのだ。



2010年に開かれた「アートプロジェクトの0123」。受講者の多くがテラッコとしてTERATOTERAに参加した



## テラッコの熱量

### ボランティアから運営の主体へ プロジェクト支えた多彩な集団

TERATOTERAのボランティアスタッフは「テラッコ」と呼ばれる。2021年現在で、メーリングリストに登録されているテラッコは約150人。過去の参加者を加えれば、総数は数百人になると思われる。年齢も職業も異なるテラッコたちは、参加経験を重ねるにつれて、各自の技能と経験を生かして各種イベントを主体的に担う存在へと成長していった。テラッコたちはどのような思いでプロジェクトを担ったのか。テラッコ39人のエッセイがその「熱量」を伝える。

## The Passion of TERACCO

**From Volunteers to Administrators – A Diverse Group Takes Charge of Art**  
The volunteer staff supporting TERATOTERA was named TERACCO. 150 people had joined its mailing list as of 2021. If one also adds past members, the total number of participants since TERACCO's founding probably exceeded a few hundred. Coming from various professions and diverse in age, they contributed their respective experiences and expertise to the successful organization of TERATOTERA's events, growing as a group and as individuals in the process. Below, read the 39 individual articles by TERACCO members to learn about the passion they felt while being involved in TERATOTERA.

2010年度、TERATOTERAディレクターの小川希さんがコーディネーターを務めた講座「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」を受講。一緒に受けていた「カトリヌ様」(前川順子さん)の勧誘でテラッコとしてスタート。その翌年から事務局長として2014年度途中までお手伝い。後任の事務局長が産休中の2018、2019年度の「TERATOTERA祭り」をお手伝い。

## 2011年のエンドレス・ジェットコースター

たこ(飯川恭子)

2011年度「TERATOTERA祭り」と称して大々的にイベントを開催することになったと耳にしたのはいつだったか。そのために事務局みたいなものをつくるという話も、ふわっとテラッコの集まりで聞いた気がします。

私はちょうど契約の仕事が終わり、経験なしお金なしだったけど、それでも事務局としてぜひ関わりたいと伝え、それから6月に事務局をやることに決定し、10月の開催までは「エンドレス・ジェットコースター」でした。

まずスタートは、それまで以上のスタッフ(テラッコ)が必要なため、実践を交えながらアートプロジェクトを学ぶと題して「テラッコ屋募集」の説明会を6月中旬に開催。会場(アートセンター「アーツ千代田3331」の一室)は聞きに来た人で溢れ、ディレクターの小川希さんが話す「TERATOTERA祭り」構想にみんなすっかり聞き入り、その後参加表明して集まったテラッコは総勢45名! 様々な職業・年齢の45名がチームごとに分けられ、それから開催までの4カ月間、毎週末ミーティングで事務局に集まることになりました。

毎週って?! 今考えるとにかくすごい。もちろんテラッコのほとんどは他に仕事をしているので、毎週末に集合してくれたのです。さらに、東日本大震災後に福島で立ち上がった「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携した企画も「TERATOTERA祭り」と同時開催となりました。イベントのボリュームは尋常ではなく、しかも小川さん以外は言うなればアートイベント素人集団。でも、そんな私たちにどこまでできるのか?! という心配は全くなく、逆に素人だったので誰も気負うことなく、淡々と向き合っていたように思います。私はチームごとの課題や問題点などを吸い上げ、その結果を次のミーティングまでに戻してクリアにするという役割をしていますが、進行はほぼチームのみんなに任されていて、ひとりひとりに適した役割もあり、それぞれのそれまでの経験が仕事以外のところでちょうどよく噛み合っている感じで、解決力・充実感は半端なく、まさに祭りに向けて猪突猛進でした。

それでもさすがに切羽詰まってきた頃に、全体会議で小川さんから「仕事じゃないからたのしんでやってください。自分たちがたのしくないイベント自体もたのしいものにならないから」と、いつもの適当なノリの雰囲気でお話があったことをよく覚えています。それでみんなも程よく力が抜けて、上下関

係のようなものは一切なく、アーティストの作品をたのしみながら、「飲みにけーしょん」を忘れずに、最後までひとりもやめずに全員で走り抜けました。

「開催できちゃったよ」と東京都の方々も驚いているのを見て、やはり偶然ではない必然的に人が集まったのだなと実感しました。

2011年に起こった震災によるそれぞれの思い、仕事や生活への考え方の変化、そういったものがどう影響したのかは正直わかりません。ただ、6月に出会ったみんながまるで合宿のような濃密さで同じ課題に挑み、10月までを一緒に過ごしたこと。特別な夏の思い出のような感覚。そこで生まれたしなやかな信頼関係が現在のテラッコにもつながっているかもしれない。9年経った今、彼らの各方面での活躍ぶりもこの経験がどこかで生きているように思えます。

私個人のことでは、この2011年ほど自分の脳を余すことなくフル活動させたときはありませんでした。休みなく追われ続け、アドレナリンによる覚醒と快楽はたまらなかった。そしてとにかく「たのしかった!」と心の底からいえる1年であり、天職との遭遇?ともいえるハプニングな2011年だったのです。

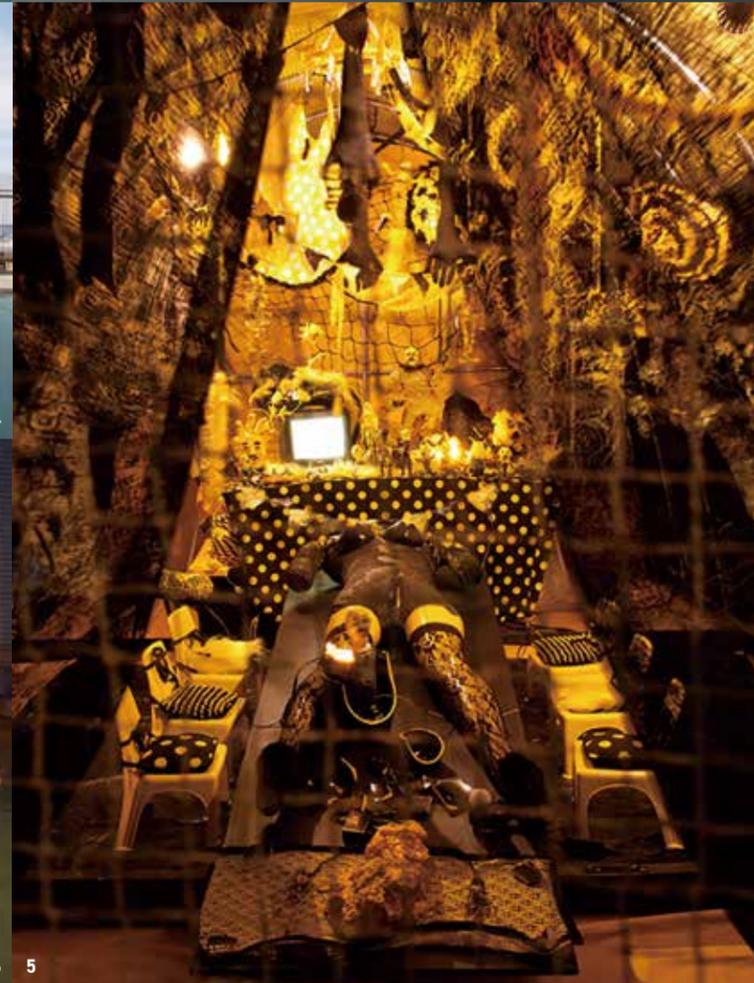


吉祥寺に設けた事務局で「TERATOTERA祭り」の準備をするテラッコたち(2011年)

2010年度の「アートプロジェクトの0123」を受講する筆者(中央)



TERATOTERA  
P H O T O  
S E L E C T I O N



2011年10月、「TERATOTERA祭り」のアート展示を吉祥寺で開催。会場の1つ、吉祥寺バルコ屋上で展示した作品の一部。日常の風景を変容させる作品が並んだ。  
1. SONTON『吉祥寺ガッパ』 2. 永畑智大『シナプスは音をたてて夢精する』 3. 利部志穂『黎明』 4. 和田昌宏『何も持たずに生まれ、何も持たずに死ぬだろう』  
5. 有賀慎吾『Fragments of the Yellow Swamp』 6. 東方悠平『夏の日の0815』

アルバイトをしながら演者を目指していたが、隣人の孤独死をきっかけに自分の中にある表現者としての思想や執着に疑問を持ち、裏方となるべくTERATOTERAに参加する。同時期に整体師の職を得て現在も従事している。その他、多数のパフォーミングアーツにスタッフとして関わる。最近、ヨーガ講師の資格を取得し、通信制大学で心理学と宗教を学んでいる。

## アーティストという存在の強さ

### 遠山尚江

テラッコとしての活動も気がつけば10年が経過していました。裏方として芸術に関わりたかった私にとって、TERATOTERAはそのステップであり、ホームでした。テラッコという多くの優秀な友人たちと、気鋭のアーティストたちに揉まれて、学びを得られる場でした。その10年間の活動の中でも特に印象的な出来事だったのは、2011年の「TERATOTERA祭り」のダンスプログラムと、和田昌宏さんの作品に関わったことです。

「TERATOTERA祭り」では、作家担当と兼任してダンスプログラムのチームリーダーを務めました。私はもともとTERATOTERAディレクターの小川希さんのゼミ「アートプロジェクトの0123」の受講生でした。講座が終了した数カ月後に、先輩のテラッコと「0123」の修了生が参加して、TERATOTERAとして初の試みとなる大規模展覧会「TERATOTERA祭り」の企画会議が開かれました。東日本大震災から3カ月ほどたった頃でした。もともとパフォーミングアーツの世界にいた私は、ダンスをプログラムに入れて欲しいとお願いしたと思います。当時はまだ現代アートとコンテンポラリーダンスに境界があり、その状況に寂しさを感じていたのです。プログラムに取り入れられたと知った時はとても嬉しかった記憶があります。

ダンスプログラムは会期のオープニングとクロージングに行われることになりました。まず印象的だったのは、出演者を決める段階でした。

すでにテラッコと関係性のある数名の出演が決まっていたのですが、もう1人、出演者を決める必要がありました。アーティスト選びについての常識がなかった私は、世界的なタップダンサーの熊谷和徳さんを、面識がないにもかかわらず提案してしまいました。理由は、その数年前に放映された熊谷さんの密着ドキュメンタリー番組を見て、パフォーマーとしてのシンプルな視点に感動したということと、他の出演者とのバランス、ということだけでした。

いま振り返っても、当時の私の非常識ぶりは恐ろしいくらいです。それでも、小川さんも事務局長のたこさんも、私の提案を拒否することなく、逆に面白がってくださいました。交渉も担当してください、熊谷さんの出演が決まりました。とても驚き、ワクワクしたことを覚えています。自分のアイデアが現実となる景色を見られるワクワク感は、テラッコの何よりの醍

醐味です。

ダンスプログラムをチームで進めたことも思い出深いです。チームの主な役割は、出演者との連絡や当日の準備などでした。メンバーは6人ほどいたと思います。年齢も職業も異なり、アートの知識にも差がある女性陣でした。私は20代前半に劇団制作を兼任する演者だったとは言え、それから10年も経ってしまえば、社会人経験の浅い人間でしかありませんでした。やる気のあるメンバーのリーダーとなって進めていくには、私は力不足で信用に欠けていました。チームは少しずつバラバラになっていきました。

いま思えばプログラムのボリューム感に対して、要領を得ず真面目に取り組み過ぎていたのかもしれない。そんな私がリーダーとなって、時には分裂をしながらも、結果的にはチームは事務局とともに進むことができ、イベントを成功させることができました。

当日を思い出すと、事前に準備しても予想通りに行かないことが多いと改めて思います。ですが万全の準備しておくことは非常に大切で、そのうえで各々が状況を見て臨機応変に補いあっていくことが、現場の良い空気を作ることになり、参加者、出演者、運営者の記憶に残るものになるのだろうと信じています。

当時のチームメンバーはすでに現役のテラッコではありませんが、いまも友人関係の続いている方もいます。ダンス関係の仕事をしていくことになった方もいますし、その後ダンスを始めた方もいます。関わったテラッコのその後には何かしらの影響を与えたイベントになり、その後のTERATOTERAでもダンスプログラムが多く取り上げられることになっていくきっかけになったのかもしれない。

和田昌宏さんの作品には、出演者兼担当者として関わりました。作品は、映像作品の展示とその会場で私が整体を行うという仕立ての映像インスタレーションでした。特に印象に残っているのはその制作過程です。

和田さんは「TERATOTERA祭り2014 Encounter—邂逅—」にむけて、テラッコと作品を作ろうと考えていたようです。当時の私は整体師の仕事しながら、タップダンサー熊谷和徳さんのダンススタジオでインターンを経験し、タップダンスを

踊っていました。運営とタップダンスを通して、踊ることと自分の仕事が感覚的に地つぎにあること、タップダンスによって精神面を支えられていることを日々感じていました。「TERATOTERA祭り」の準備のための集まりで和田さんとそんな話をしたこと、声をかけていただきました。

作品名は『コブ』。和田さんには小さな息子さんがあり、毎晩息子さんを寝かしつける際に昔話をしてあげていたそうです。その中の一つに、「こぶとりじいさん」がありました。そのような穏やかな日常の中で、仕事の移動中に道路際に乱立するマッサージ店に目が行き、現代人の「こぶ」は過剰な競争社会で生まれた心身の疲労なのではないかと連想し、作品のモチーフにしていました。和田さんとの制作では私へのインタビューがありましたが、当時の私は尊敬する上司を始め職場の同僚たちからモラルハラスメントを受けて軽うつ病のような症状が出ていたため、和田さんのアイデアとは違った視点で延々と話をしてしまった記憶があります。

撮影は1月下旬から、奥多摩の山で2度にわたって行われました。撮影部隊は和田さんとその助手で映画監督の久保寺晃一さん、出演者は「国立奥多摩美術館」館長でアーティストの佐塚真啓さんと木工職人の五十嵐茂さんと私の3人でした。撮影場所は、和田さんが納得する場所が見つかるまで探しました。私たちは機材を、和田さんは重い施術ベッドを背負って、真冬の雪が残る山の急斜面を登っていきました。和田さんの作品にける妥協のなさに畏敬の念すら感じ、アーティストという存在の強さを目の当たりにした機会として強く記憶に残っています。

撮影場所は山の頂上付近になりました。佐塚さんが整体の師匠で、私は弟子、五十嵐さんは患者さんという役割でした。師匠の施術、それをじっと見ている私。ひとり山道を登り、森の中で風に合わせて踊る私。最終的に3人でダンスナンバーに合わせて楽しげな即興ダンスを踊り、焼き鳥店で鶏肉の解体を見てから焼き鳥を食べる、そして患者さんである五十嵐さんが踊り出す、という流れでした。その後、奥多摩美術館でタップダンスの撮影もありました。出来上がった作品を見て、職場でモラルハラスメントを受けていた私は、純粋に身体へ向かう自分の奥底にある本質をやっと肯定されたような気がして、精神面で大変救われました。いま改めて撮影時の情景と作品を思い出し、その時には理解しきれなかった、和

田さんの構成力と思考の柔軟さに感服しています。

TERATOTERAは2020年で終了になり、今後、テラッコのメンバーが参加する集団「Teracollective(テラッコレクティブ)」が法人化されますが、形を変えて活動が継続されるのかわかりません。私は、一旦ここで終了かな、と感じています。新型コロナウイルスの影響で芸術への人々の関わり方もコロナ以前の世界と同じではありません。これまでのようなアートプロジェクトの形式は終わったのだと気持ちの区切りをつけると同時に、TERATOTERAによって良い時代を生きさせてもらったことに感謝しています。



2011年10月の「TERATOTERA祭り」で熱演するタップダンサー熊谷和徳さん



和田昌宏さんの映像作品『コブ』の会場で、整体を施術する筆者。パーテーションを隔てた奥の空間で作品を上映。観客は作品鑑賞後、映像作品に登場した筆者の施術を受けることができた(2015年2月)

大学在学中、東日本大震災をきっかけにアートの現場に関わりたいという思いが強くなり2011年にTERATOTERAに初参加。美術系大学院に進学後もテラッコとして2015年頃まで活動を続け、事務局スタッフを経験。現在、関東圏の美術館学芸員として展覧会、教育普及プログラム、広報等に携わる。

## きっかけは東日本大震災、現在もアートと人々をつなぐ

吉田絵美

テラッコとして初めて参加したのは2011年のこと。TERATOTERAの企画の中でも一大イベントとなる「TERATOTERA祭り」が初めて開催された年です。2011年は、忘れもしない東日本大震災が3月に発生。その頃私自身は就職活動中で、あまり気乗りしないながらも一般企業にエントリーする日々を送っていました。しかし未曾有の事態で採用スケジュールも遅れ、突如として進路を考え直す時間が生まれたのです。

現代美術の展示や演劇の公演などには好んでよく足を運んでいたし、社会とアートの関係性について関心はあったものの、「アートを仕事にする」ことには具体的なイメージも自信もなかった当時。それが震災によって生活も一変し、目が覚めたような感覚になり、「面白いと思ってきたものを自分の中で見直してみよう」という思いが湧いてきたのです。その思いを胸に、とにかく現場に入ってみようとしてネットで検索して辿り着いたのがテラッコ募集の説明会でした。

参加するとすぐに「TERATOTERA祭り」の担当割りがあり、なぜか「オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA！」グループのリーダーに(じゃんけんか何かで決定)。井の頭公園を会場とした1日限りの野外音楽イベントでしたが、大友良英さんをはじめ注目度の高い出演者が揃っており、来場者数は数千人規模でした。そんな現場をまわすことは完全にキャパオーバーでしたが、未熟な大学生だった私にこの経験をさせてくれたディレクター小川希さんの寛容さはありがたく、小川さんのその寛容さがテラッコの在り方にも大きく影響していたのだと思います。

その後、大学院でアートマネジメントを学ぶことを決めた2年間は、TERATOTERAにどっぷりと関わった時期でした。同じくテラッコの高村瑞世さん、宮久実那さんらと「西荻映像祭—TEMPO de ART—」を企画。「アーティストの作品にふいに会える場所を作りたい」という思いから、西荻窪エリアの店舗で展示ができないかと考案したイベントです。この企画を実現させていく過程で「地域の中でアートを展開する」ことの意味や難しさと向き合うこともあり、大変さもありましたが得難い経験でした。住まいも西荻近辺に移し、展示を交渉していた飲食店へテラッコメンバーと足繁く通い(飲み)、終電も気にしなくて良いため気づいたら深夜……ということもたびたび。生活とアート

の活動に境目もなくエキサイティングな日々。振り返ると反省点も多くありますが、あらゆる立場の方々や同時代のアーティストとひとつのイベントを作る醍醐味を味わったのもこの頃です。

大学院修了後、学芸員として就職した美術館で最初に配属されたのは、アートの受け手である人々との接点が多い「教育普及事業」の部署でした。美術館のボランティア、小学校の児童、インターンの学生などとともにする仕事が多く、TERATOTERAでの経験が通じる場面は少なくありません。そして就職後も、面白い作品と出会えるのではという期待とどこか懐かしさも相まって、毎年訪れていた「TERATOTERA祭り」。テラッコが毎年入れ替わっていても、顔を出すといつも受け入れてもらえるような雰囲気に救われていました。これからもあの2011年からの数年間で味わったことをたびたび思い出しながら、学芸員としてアートと人々をつなぐ魅力的な接点をどのように作り出せるか、探り続けていくことと思います。



2011年の「TERATOTERA祭り」で来場者の受付を担当する筆者(左)



筆者が企画した「西荻映像祭—TEMPO de ART—」の会場の1つ。壁面に映像を展示している(2012年10月)

## いまも不思議、「あんなに夢中になれた」テラッコの日々

ファン・タンミン

2011年は日本に来て6年が経ち、これからも日本で生活していくことを考えはじめたところでした。変化の少ない会社勤めの生活を続けることに不安を覚え、自分の日常を変えるきっかけを探していたときに、「TERATOTERA祭り」のボランティア募集の情報を目にしたのが始まりでした。街なかでアート作品を展示することは? 当時は見たことも想像したこともないプロジェクトを、「はじめまして」の方々と一緒に、やりましょう!という流れになりました。何でも勢いが重要ですね。

吉祥寺の街なかで開催された2011年の「TERATOTERA祭り」では、吉祥寺パルコの屋上やハモニカ横丁、井の頭公園などでの展示に向けて、アーティストさんの作品制作をサポートするテラッコとして関わることができました。10年近くも前の出来事になると、記憶は曖昧になっていきますが、アーティストさんが構想中の作品プランを共有してくれて、実現に向けて練り直して形にしていく過程がとても面白かったなあ、という感覚はしっかり残っています。

それと、断片的な記憶ではありますが、早朝のハモニカ横丁を掃除したり、人形劇の裏方をやったり、映像作品の撮影で阿佐ヶ谷の区民プールに潜ったり。ある作品では、あやしげな売り子に扮したことも覚えています。吉祥寺パルコ屋上での展示設営は、連日、夜になってから作業を始め、深夜に及びましたが、設営を終えた展示のハチャメチャ感には驚きました。武蔵野公会堂のライブでは、ホールの外まで透き通る前野健太さんの歌声に聴き入り、東急百貨店屋上であった「クロージングダンス」では「contact Gonzo」の体の動きによる摩擦音も忘れられません。設営・撤去作業でヘトヘトになりながらもテラッコたちと飲むお疲れビールのおいしさ、作品を見にきた観客の反応、通りすぎようとしていた人たちが展示に気づいたときの様子、それまで知らなかった体験ができたときのしびれた感覚、などなど、記憶が蘇ってきました。

なぜそんなに夢中になれたのか、ずっと不思議でした。でも、そのときはじめて触れた「アート」というものが、私にとっては今や日常になっています。そういえば、かつてテラッコの脇屋佐起子さんがつづった「軍手 high デイズ」という文章がありました(2011年度の記録冊子に掲載)。「(作業を始めるために)

軍手をはめると、妙な解放感を伴うお仕事スイッチが入る感覚が癖になってくる。完全に軍手 high—。」という内容でした。

テラッコとしてやって来たことを文章に起こそうとしたら、実際の出来事はおぼろげで、自分の記憶のかけらばかり出てきました。仕事の傍らにやっていたテラッコとしての活動が生活の重心になって、アート関連のお仕事を体験することもできました。一つの現場で異なる背景を持つ人たちと一緒に何かを成し遂げていくことの楽しさも大変さも、これからも大事にしていこうと思えたのは、きっとテラッコとしての活動経験のおかげだと思えますね。

では改めて、出会ったすべての方に。心から感謝しております。



井の頭公園に出現したあやしげな屋台は、和田昌宏(写真右)の作品「頂級好吃極品井之頭団子」。傍らに佇むのが、謎の女性に扮した筆者(2012年10月)



2011年の「TERATOTERA祭り クロージングダンス」で熱演する「contact Gonzo」

2011年の初夏の説明会に参加し、2012年の年末までテラッコとして活動。その後、インドに渡航。2014年に黒く日焼けしてTERATOTERAに舞い戻る。2015年3月末まで在籍し、その後に宮城県石巻市に移住。現在は川崎市に戻り、婚活に励む日々。

## アートの「土壌」開拓から始めた TERATOTERA

東 晶子

TERATOTERAの説明会をアートマネジメントの情報サイト「ネットTAM」で見つけた。2011年6月のことだ。もともとアートに興味があり、そのボランティアを募集していたので、気づいたら参加していた。説明会ではまず、小川希ディレクターの格好がとてもラフだったことに驚いた。次に淡々と説明している姿に、「頭の回転が速い都会の人だなあ」と思った。刺激を求めてテラッコとして参加することを決意した。その後、TERATOTERAで人生の価値観が大きく変わった。

「TERATOTERA祭り」の会場は吉祥寺の街なかだったため、吉祥寺というオシャレな街が作品越しに見ると一気に「土臭い」街になった。既成概念を変えるインパクトのある作品を作る作家が多く起用されていたからかもしれない。街がいくら一生懸命着飾っても、アートが「人間臭い」部分を洗い出していたような印象であった。街なかに突如現れ、街のゴミゴミした部分を露わにする作品の制作に一から関わったことで、街の暗がりを駆け回るドブネズミも愛らしく見えるようになった(言い過ぎかな?)。そうしたことに感化されたのか、打ち上げの席で居酒屋の店主に会計でイチャモンをつけ、喧嘩になったことがある。そんなこんなで、小川さんの中で私の印象は一転したらしく、気づけば小川さんから「そのまんま東」と呼ばれていた。

TERATOTERAの活動の中で印象に残っているのが、山本高之さんの作品である。

山本さんは教員の経験もある作家で、子どもとともに多くの映像作品を制作していた。子どもと動物を作品化するにはテクニックを要すると聞いたことがある。山本さんは過去の作品で、子どものやる気を引き出しつつ、大人に媚びない子どもの姿を映像に収めていた。そこには、「子ども=無垢」と思い込もうとする現代社会を風刺する皮肉めいたものが感じられ、見ていて痛快であった。当時私は学童保育で働いていたこともあって、山本さんの制作過程を見たいと思っていた。そんな山本さんがTERATOTERAに参加することになったので、担当を志願したのである。

山本さんは2012年の「TERATOTERA祭り」で、子どもを対象としたワークショップを開催し、『チルドレン・プライド11.4 in 吉祥寺』という作品を発表した。それは、十数人の子どもが自

分たちの願望をプラカードに掲げて井の頭公園をデモ行進するというものであった。

山本さんに初めて会ったのは、「TERATOTERA祭り」の準備を始めたばかりの頃の飲み会だったと思う。こどもの参加者を10人ほど集めてほしいと要望された。それが簡単なようでいて難しい。地域にネットワークを持っていない中、どうしようかと不安を感じた。その時に、TERATOTERAのボランティアは、既に用意されている土壌の上で活動するのではなく、土壌の開拓そのものから始めるのだということマジマジと感じた。

こどもを募集する方法の一つとして、吉祥寺駅構内の商業施設「アトレ」に事前告知のブースを設けた。その前を行き交う親子連れを呼び止めてワークショップに勧誘したのだ。簡単には説明できないワークショップであるため、多くの親子は不審な表情を浮かべて去っていった。4歳の女の子が参加してくれることになったが、嬉しい反面、年齢が低すぎるのでは?という疑問が生まれたことも。それでも、なんとか10人あまりのこどもが参加してくれることになった。

イベントの当日、山本さんが壇上に立ってワークショップが始まった。こどもたちはそれぞれに個性的な訴えをプレートに書き込み、デモ行進用のプラカード着々と出来上がっていった。いざ行進となると、一番異彩を放っていたのが前述の4歳の女の子であった。先頭に立ち、一生懸命声をあげて練り歩いたのである。その姿に、私はぶったまげたのだった。

いま改めて振り返ると、4歳の女の子に潜む可能性を引き出した山本さんに、私は感銘を覚えていた。同時に、何が起きるかわからないTERATOTERAのアートにすっかり魅了されていた。それでも、イベント終了後はしっかり打ち上げ会場に向かったのだった。



山本高之『チルドレン・プライド11.4 in 吉祥寺』(2012年11月)

成蹊大学文学部国際文化学科卒業。在学時、世界一周中に訪れたベルリンに恋をする。大学卒業後、雑誌編集者として出版社に就職。2016年にベルリンに移住し、2018年からはデュッセルドルフで再び雑誌編集者として働いている。

## 吉祥寺とベルリンを結ぶ 街なかのアート体験

土井美穂

TERATOTERAの存在を知ったのは、2010年も終わりの頃。その当時、大学3年生だった私は街なかのアートをテーマに卒業論文を執筆したいと思っていました。そのきっかけというのが、旅行で訪れたドイツの首都ベルリンでの体験でした。ベルリンには、巨大な石がいくつも並んだホロコースト記念碑やグラフィティが描かれたベルリンの壁など、ドイツにおける歴史がアートを介して街なかに残されています。あえて人目につく場所に負の歴史を残していることは、私にとって衝撃的なことでした。そして、「街なかのアートが人にどんな影響を与えているのか」という疑問が思い浮かんだのです。

残念ながら東京にはアートで歴史を残すという事例はなかったため、私の興味は次第にアートプロジェクトへと移っていきました。そんななか、2010年夏に開幕した「瀬戸内国際芸術祭」にボランティアスタッフとして参加することに。同芸術祭を研究材料とすることも考えましたが、もっとローカルなプロジェクトを扱いたいと思っていた矢先、大学が所在する吉祥寺を活動エリアとしていたTERATOTERAにたどり着きました。最初にテラッコとして参加したのは、2011年2月5日に井の頭公園で行われた大友良英さんの船上ライブ。馴染みのある公園がいつもと違う空間になったことに感動するとともに、2500人規模のイベントをボランティアが支えていることにも感銘を受けたのを覚えています。

ところが、ほどなくして東日本大震災が発生。震災の翌日に予定されていた「TERATOTERA FORUM」も中止となり、活動再開の目処が立たなくなりました。また、父方の実家のある宮城県石巻市が津波によって被災したことで個人的にも大きなショックを受け、震災から数週間は卒論はおろか、何も手につかない状態でした。少しずつ日常を取り戻した頃、TERATOTERAが再び動き始めることに。「震災復興」と「東京をアートで元気に」をモットーに、「TERATOTERA祭り」の開催が決まったのです。

このプロジェクトでは、私は記録係およびボランティアの世話係を担当。プロジェクト全体を俯瞰できたことに加え、各チームのテラッコや当日ボランティアの方々に関わることができました。卒論執筆に役立ったことはもちろん、世代を超えて多く

の方と交流できたことは、当時震災で元気をなくしていた私にとって大きな支えに。いつしかTERATOTERAは生活の大半を占めるようになり、とにかく大変な毎日でした。そして迎えた本番、10月の下旬に11日間かけてさまざまな展示やイベントを同時多発的に開催し、多くの方が足を運んでくださったことをこの目で確かめられ、とてつもない達成感を味わうことができました。でも、今こうして振り返って一番に思い出すのは、ともに汗水たらして頑張ってきたテラッコたちの顔です。

卒論は最終的に「アートプロジェクトは人とまちをつなぐのか」というタイトルで執筆しましたが、結局納得のいく答えは見つからず……(笑)。しかし、「同じ地域に住み、アートが好き」という共通項で私たちテラッコが出会い、活動を通じて絆が生まれたというのは、ある意味でTERATOTERAの大きな成果といえるのかもしれません。社会人になってからは、TERATOTERAへはほとんど参加できなかったのですが、たまに顔を出すと、いつもテラッコとして受け入れてくれるのがこのプロジェクトの良いところ。ちなみに、2016年に自分の疑問の原点となったドイツに移住しました。街なかのアートが人にどんな影響を与えるのか……この答えを探す旅はこれからも続きそうです。



筆者はテラッコとして活動した後、会社勤務をへて2016年にドイツ・ベルリンに移住した。「ベルリンの壁」に描かれたグラフィティの前で(2016年11月)



井の頭公園で開催された音楽家・大友良英による「船上ライブ」。約2500人の観客を動員した(2011年2月)



「オーケストラTOKYO-FUKUSHIMA!」。音楽家・大友良英(写真前列右から2人目)が東日本大震災後に立ち上げた「プロジェクトFUKUSHIMA!」と連携した野外コンサート。井の頭公園の広場に約4000人が集まった

2011年に井の頭公園で開催されたTERATOTERAの「船上ライブ」に感銘を受け、同年からテラッコとして参加。主に音楽イベントを担当し、2012年度には自ら企画して、「江戸東京たてもの園」での電子音楽ライブを運営、実行する。2013年以降は仕事に集中するためテラッコとしての活動は停止。音楽会社の勤務を経て現在はカナダでソフトウェア工学を専攻中。

\*プロフィールは38頁参照

## 古民家で電子音楽ライブ 完全燃焼の夏

竹内友貴

私がTERATOTERAを知ったきっかけは、2011年に吉祥寺の井の頭公園で行われた大友良英さんの船上ライブでした。もともと自身でも音楽活動をしており、実験的な音楽やライブイベントなどに興味があった私にとって、日の沈んだ薄暗い井の頭公園の池に浮かぶ一隻の船の上で大友さんがギターをかき鳴らす演奏を、老若男女問わず何百人という人々が岸辺から見守りノイズに浸るといった光景は凄く衝撃的で、こんなことができる団体があるんだと、とても興奮したのを鮮明に覚えています。その興奮冷めやらぬままに、自分もこんなイベントをやってみよう!と、アートプロジェクトや音楽以外のアートについてほぼ無知な状態でテラッコとして参加し始めた私にとって、TERATOTERAでの活動は全てが新鮮で、とても刺激的なものでした。

最初に参加した2011年度はTERATOTERAにとっても変革期で、テラッコの多くが私のように初参加、かつ企画運営が未経験な人たちばかり。そんな人たちが「テラッコ主体」の方針の下に、右往左往しながら手探りでアートフェスティバルを開催するという、今思うととても混沌とした現場でした。それでも、美大生からサラリーマンまで、いい意味で雑多で個性的なテラッコたちのアートに対する物凄い熱量と、バックで静かに見守るディレクター小川希さんの舵取りによって、おそらく吉祥寺の長い歴史を振り返ってもかつてない、変テコで面白いアートフェスティバルが無事開催されました。

そんな現場でテラッコたちと時間を重ねていくとともに、自分の思い描く音楽イベントの実現のために、ある意味その実現性を報酬として活動に参加した私とは違い、アートへの情熱に突き動かされて膨大な仕事をこなしていく彼らの、そのまっすぐな姿勢に密かに圧倒されていました。彼らを見ていて、ボランティアなどのいわゆる無報酬な仕事について、それに参加することが個人にとってどんな意味をもつのか、それがどう生活に関わっていくのかを考え始めました。そんな混沌とした初年度が瞬間に過ぎ、参加2年目となった2012年度、ついに発案した企画が採用され、小金井市の「江戸東京たてもの園」で電子音楽ライブを開催することができました。

歴史的建造物を保存する同園で、電子音楽にカテゴライ

ズされるアーティストさんをお呼びして演奏していただくという、時代が交差するような不思議なライブイベントは、毎年同園で開催されている夏祭りと並行して開催したことも相まって予想外の客入りとなり、夏祭りに来ていた人たちにとっても、アーティストのファンたちにとっても、新しい体験を提供する場になることができました。はるか昔の建物の前で行われる現代的な音楽パフォーマンスに魅入る人々の顔を見ていて、ひとり満足感に浸っていたのを覚えています。

同イベントに全力投入していたのでその後はほぼ完全燃焼状態で、仕事の都合も相まって翌年からはあまり活動に参加できなくなってしまったのですが、とても濃密だったTERATOTERAでの経験は、今でも私のアートやボランティアワークに対する考えの基盤になっています。TERATOTERAは、社会のなかでのアートの役割の大きなところにある、公共での人との交わりによって起こる、個人への新たな体験や視点、疑問の喚起を、来場者にだけでなく運営側(テラッコ)にも与えていたという意味で、社会におけるアートプロジェクトの役割をとてぬ臭く体現していたと思います。そして私自身も、常に公共と交わり、人々の好奇心を刺激していったTERATOTERAの変テコさや面白さに喚起されて行動を始めたひとりでした。



「納涼の音」の演奏を見守る筆者(右)



小金井市の「江戸東京たてもの園」で開催したライブ「納涼の音」(2012年8月)

## TERATOTERAという沼にハマる

脇屋佐起子

いつからだろう、電車に乗ると携帯電話の画面しか見なくなったのは。それが2012年度に企画立案した岩井優『What happened on the pool?』の発端。車窓からは樹木や雲、夕暮れの時間帯の変化など、季節の移ろいを感じるチャンスが山ほどあるのに、携帯の液晶画面に釘付けの毎日のなかでほんの刹那でも顔を上げて車窓を眺めてもらうきっかけを作りたいかった。

中央総武線の上り快速路線の阿佐ヶ谷・高円寺駅間のほんの一瞬、車窓からしか見られない、そんな無茶な条件に付き合ってくれたのが岩井優さん、そして中央線ユーザーには馴染みの車窓から見える夏限定の屋外区民プール(2016年に廃止)、それが展示の舞台。プールの中で洗濯する群像劇をプールの底からカメラで撮影し、プールサイドの不織布製のスクリーンに投影した。言葉にすれば簡単だが、時は当時流行しはじめたゲリラ豪雨と、台風の多い9月。毎日風雨にさらされるスクリーンをちぎれては縫いを繰り返す天候との壮絶な戦いの果て、9日間の展示を実現した。

完成してみれば、映像の水音と電車の通過音、騒がしいほどの虫の音に、岩井さんならではの美しい映像が相まって、多くの人に見てもらいたい空間になり、プールサイドに観客を招き入れての1日限りの上映会を行うことになった。集まってくれた近隣住民やアートファンの誰もが息を飲みながら、その詩的な空間を静かに共有する様は本当に美しい光景だった。SNSには「中央線から見えた不思議な光景はアート作品だった」「服を着たままプールに入る集団がいた」「電車では外を見ず携帯を見ていることが多いが、目線を上げるって大事。窓に映る自分が疲れていたのでゆっくり寝ようと思った」などの反響があり、たった1人でも思いを伝えることができたことに大きな満足感を得た。

2013年には、大型店舗の隆盛による商店街のシャッター街化をテーマに、「商店街サミット」を企画した。当時は地方都市の過疎化を要因とした国際芸術祭が各地で頻発し、会場に使われる廃校や空き店舗の多さを目の当たりにしていたが、また違った視点で、商店街をユニークな手段で活性化している事例を集めてトークをしたら、面白い議論が行われるのではないかと、というきっかけから始まった。高円寺北中商店街で古着店「素人の乱」を営む松本哉さんと知り合い、アナーキーで柔軟すぎる発想に度肝を抜かれた出会いも大きかつ

たと思う。他事例を探してリサーチを開始すると、大阪の新世界市場を舞台に「セルフ祭」という奇祭を手がけるコタケマンさん、六角橋商店街で「商店街プロレス」などのユニークなイベントを次々に仕掛ける石原孝一さんに出会い、彼らの斬新な着想と実現力に大きな手応えを感じた。モデレーターには、客観的な視点を求めて社会学者で「商店街はなぜ滅びるのか」著者、新雅史さんに入ってもらった。

松本さんの影響力とネットワークの広さも相まって、定員35名の枠はすぐに埋まりキャンセル待ちが出るほどで、当日は狭い会場に立ち見が出るほどの大盛況。私設大使館を立ち上げたというグローバルに活動を展開する松本さんのプレゼン、ド派手なメイクと衣装で芝居がかったコタケマンさんのパート、飄々としたたざまいからは想像もつかない商店街の枠組みに収まらない石原さんの活動紹介に、実は酒屋のご子息という新さんからの鋭い分析を交えながら展開し、会場は大いに沸くこととなった。ド派手な活動からは想像し難いコタケマンさんの「よそ者が受け入れてもらうには挨拶と掃除が基本」、「行政からお金をもらおうと自由度が低くなるから断る」という石原さんの発言に深く頷く松本さんの姿が印象的だった。

こうして企画に手応えを得てしまい、TERATOTERAの沼にハマることになるのだ。



阿佐ヶ谷の屋外区民プールを会場とした岩井優『What happened on the pool?』の撮影風景(2012年9月)

2013年10月に開催した「商店街サミット」。狭い会場が聴衆で溢れた

2011年の「アートプロジェクトの0123」を受講。小川希コーディネーターに「アートの現場、ありますよ」と囁かれて、TERATOTERAに参加する。テラッコとして活動していたが、2014年、前任者が東京を離れたため事務局長を任せられる。2020年1月から、墨田区で若手アーティストの作品展示を中心とする「Token Art Center」を運営している。

## わたしが愛した「西荻シリーズ」

高村瑞世

2020年10月28日、美術家の泉太郎さんと東京都墨田区の曳舟駅で待ち合わせをしている。約1カ月後にわたしが企画している、街なかでの展覧会に参加してもらうために、一緒に会場の下見をするのだ。

泉さんと初めて顔を合わせたのは2012年。当時すでに公立美術館などで個展を開催していた彼を、TERATOTERAのボランティアスタッフ(テラッコ)だったわたしは、ほとんど知らなかった。

泉さんには、わたしがTERATOTERAの中で初めて企画運営を担当した2012年の「西荻映像祭」に参加してもらった。当時の企画は、営業時間中の個人経営店で映像作品を展示するというもので、「西荻映像祭 TEMPO de ART」と名付けていた。その後、わたしが2017年まで毎年度実施する「西荻シリーズ」の始まりだった。

この始まりは、わたしがまだ表参道に勤務するOLでテラッコだった2011年の終わり。その年の10月に小川希ディレクターの下で、40人以上のテラッコが懸命に、そして嬉々として大規模な街なか展覧会「TERATOTERA祭り」を作り上げていた。「TERATOTERA祭り」終了後初の会議のとき、小川さんが「来年度はテラッコ主導で企画を進めていくので、それぞれやりたいことを発表してください」と言った。そのとき、当時大学生だった吉田絵美ちゃんが「古着屋とかで映像作品を展示してみたい」と発言をして、OLだった宮久実那さんとわたしが「面白そうだから一緒にやりたい」と手を挙げ、3人で企画を進めていくことになったと記憶している。

この3人は、小川さんが行っていたアートプロジェクトの講



アーケイド街で夜間のみ、精肉店のシャッターに投影された秋山由希の映像作品(2013年)

座をたまたま一緒に受講していた。3人とも酒豪だったため、講座終了後の飲み会に毎回漏れなく参加し、仲を深めていたのだった。

わたしたちの企画は西荻窪で実施することになった。当時、わたしと絵美ちゃんが西荻窪に住んでいた、というのが理由だった。実施が決まってから数カ月間は、参加作家選定のため、手当たり次第若手アーティストの展覧会に足を運んだ。絵美ちゃんは大学で美術史を学んでいたが、わたしと実那さんはそういった経験はなく、とにかく作品を見て、面白い、街なかでやってみよう、と思う作家を必死に探した。

そうしてなんとか本番にこぎつけた「西荻映像祭 TEMPO de ART」(2012年10月)は、8組の作家により12店舗で開催された。そしてそのときの記憶は、わたしのTERATOTERAの活動の中で一番苦い思い出として心に残っている。アートプロジェクトの運営経験が全くなかったわたしは、2会場で展示する予定だった泉さんの1会場目の撮影に気を取られ、2会場目の搬入に1時間近く遅刻したのだった。営業中の店舗を展示会場として使わせていただいていた西荻映像祭。当たり前だが店主は激昂しており、泉さんと2人並んで、何度も深く頭を下げた。

大遅刻の後、ディレクターだった小川さんが店主と一緒に謝罪に行ってくれた。迷惑をかけてしまってさぞ怒られるだろうと身構えていたのだが、小川さんはただ「まあ、大変な仕事だよ。いろんな人がいるからね」と言って、その後はなんで



西荻窪のサンタクロースが実在する、という設定の短編映画『西荻サンタクロース』(小鷹拓郎作)の撮影風景(2014年)

もない話をしながら、日付をまたぎ一緒に酒を飲んだ。

その後、公募により集まった作家たちの互選で選ばれた人が展示をするというかたちで開催したり(2013年10~11月)、もう少し長いスパンで街に関わってほしいという思いが生まれたので企画を滞在制作型に変更し、「西荻レヂデンス」と名前を変えて開催したり(2014~2016年)しながら、2017年まで、毎年西荻窪で企画を続けた。なぜ西荻窪でやるのか、なぜこの作家なのか、どうして企画をやるのかを考え続けていた。

最後の2017年には「不可分な労働と表現」というテーマを掲げた。店主が店にいることや商品をセレクトすることは労働だが、西荻窪の個性的な店の多くは、美術家に負けず劣らず店主の主張や表現が感じ取れるところが多分にある。わたしはこの街のそういうところに魅力を感じていて、そこにアーティストが入り込むことで生まれる想像を超えた化学反応が、本当に好きなんだなあと感じた。

映像作品の展示は機材トラブルも多く、両手を挙げて満足できる回は1度としてなかった。ただ、企画担当だった3人組と他のテラッコたちで、作家や展示方法について頭を捻ったり、西荻窪の店で飲み交わしながら恋愛の話をしたり、搬入やチラシ作りに翻弄されたりした日々は、ただただ精一杯で、本当に楽しかったと思う。

今も時折、泉さんと並んで頭を下げたあの情景と、精一杯だった自分の姿を思い返し、笑ってしまう。当時は本当に辛かったのだが、今は展覧会準備や開催会場への交渉で息が詰まったとき、思い出して肩の力を抜いて挑むことができたりする。

2017年に最後の回を実施して以降、わたしは結婚、出産、引っ越しなどを経て、今は墨田区で自分のアトスペースを運営している。そして自分のスペースだけでは飽き足らず、また街なかで展覧会を開催しようとしているのだ(2020年12月に開催)。それは必死だったあの日々と、作家が見せてくれた、あのときあの場所でしか実現できなかった大切な作品たちが、わたしを支え、突き動かしているからだと思う。

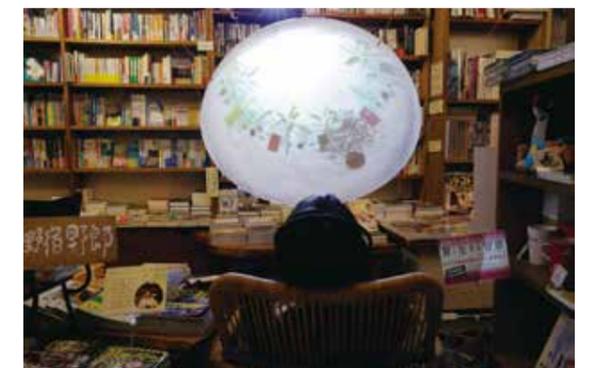
わたしは2014年に、思いがけずTERATOTERAの事務局長を任せられた。未熟過ぎるわたしに、企画、運営、そこに関わ

る経理処理などなど、とにかく企画周りの全てを任せ、困ったときには相談に乗り、駆けつけてくれたのが、前任の事務局長のたこさんとディレクターの小川さんだった。2人には、驚きと感謝でいっぱい。こんな経験ができたのは間違いなくTERATOTERAだからこそだと感じる。

さて、また今日も明日もアートの現場の調整に駆け出す。大変なのだけど、展覧会当日が楽しみでたまらない。またいつか、最初に西荻映像祭と一緒に企画し、今や母となった3人組で、お酒を飲み、今度は子育ての愚痴なんかこぼしながら企画を立てられたら面白いかなあなんて考えている。



アーティスト林千歩(写真中央)は、老舗ビリヤード場で夢幻的な映像作品「林千歩劇場『崖の上のティボリ』編」を制作した(2016年)



旅の本を専門に扱う書店で、半球状のスクリーンに世界各地の自然や建築の映像を投影した伊阪稔の作品『Portal Yantra』(2017年)

小さな広告代理店勤務。「横浜トリエンナーレ2005」で現代アートの洗礼を受け、TERATOTERAディレクターの小川希さんがコーディネーターを務める「アートプロジェクトの0123」を受講。2012年から2014年までテラッコとして活動。現在はアートプロジェクト「ナイロ(toiro)」(<http://facebook.com/toiro.pjt>)を主催する。

## 私の「第2の青春」TERATOTERA

宮久実那

平日、午前2時。残業帰りでくたくたの私はなぜか、西荻窪にある小さなヴィンテージショップでたくさんの洋服や雑貨に囲まれて、店主の弾き語りを聴いていた。もう1時間はたったというのに終わる気配はない。彼のオリジナルカクテルを思い切って飲み干すと、やけに強いお酒で、なにやら不思議なハーブの香りがする。クラクラ遠のく意識の向こうから、ビートルズの「Blackbird」の弾き語りが聴こえてくる。私、何をしにここに来たんだっけ……。

TERATOTERAはアーティストが魅力的なことはさることながら、公園や市民プールなど街なかで図らずもアートに出会ってしまうところが大好きだ。いままで現代アートに興味がなかった人が不意にその作品に出くわし、面白がってくれるのを間近に見られるのは、裏方の特権だと思う。

私がテラッコになり特に深く関わったイベントの1つが、店舗に現代アート作品を展示してみたいというテラッコが企画した、西荻窪の「西荻映像祭」(2012年)だった。通常の展示会場探しとは異なり、自分の店に現代アートという名の異物を置いても良いという、いわばこの企画の共犯関係になってくれるお店を探さなければならない。テラッコたちと街を歩き回り、気になるお店を見つけては店主に声をかけ企画書を開き熱く語った。不思議と店主たちから冷たくあしらわれることは殆どなかった。どうしても展示したいタイ料理屋があって、毎日のように会議と称してその店で飲み会をしては、その後誰かの家に転がり込み翌朝そのまま会社に出勤……というような生活を送っていた。

参加店舗は、前述のアンティーク店のほか、店主がレジ横からマルセル・デュシャンの本をさっと取り出して持論を展開してくれる雑貨屋、「俺と結婚してくれたら人気メニューのレシピを教える」が口癖の親方がいるラーメン屋など。とにかく店主が個性的だった。彼らとの打ち合わせは、冒頭のような思いがけない方向に進んでいくことも多々あった。そんななか、作家がやりたいことを店主に提案し、すり合わせていくのだが、もちろんすんなりうまくはいかず、特に参加作家はかなり頭を悩ませたと思う。それでも作家たちは素晴らしい跳躍をみせて、その問題を乗り越えてくれた。作品は「アートと鑑賞者」という構図を壊し、その店を訪れた客を不意に巻き込んで、くすっと笑わせたり、いままでの常識を覆したりしてみせた。

その後、本企画は2年目に「TEMPO de ART 2013」と題し

て、店舗数を拡大し若手作家を公募する形式で実施した。私たちはさらに荒れた生活を送りながら運営に奮闘した。会社勤めかつ複数のイベント掛け持ちで多忙だったものの、ディレクターの小川希さんや事務局長のたこさんがやりたいことを後押ししてくれたり、テラッコの彼氏ができたり、みんなでしょっちゅう飲んだり、充実していた。

その年の暮れ、西荻窪でのアートプロジェクトが東京都の一大団として独立できるかも、という話が持ち上がった。テラッコを始めて以来、一番ドキドキした。アートを仕事にしたい気持ちがあった。ただアートが好きなら満足できず、アートに携わる何者かになりたいと思っていた。結局独立には至らず、そのまま私はアートを仕事にすることを諦めた。しかしながら、様々な形でアートに携わる人々を見てきたし、苦戦しつつ自分たちの力でアートイベントを作り上げてきた。いくつになってもアートには関わることができるし、やりたければ自分の手で一から始めたいと思えるようになった。

あれから6年がたち、振り返ってみると誰も無傷な人はいなくて、それぞれが四苦八苦しながら何かを掴んでいたと思う。自分は何者なのかということにアートに関わる部分に求めていたテラッコ時代は、まさに第2の青春だった。いまは新米ママとなり、慣れない子育てに奮闘しながら第3の青春を謳歌中だ。まだ道半ばで、これからまた第4、第5の青春がやって来るのかもしれない。



西荻窪のワインバーの壁面に投影した映像作品。プロジェクターの設置に頭を悩ませた(2012年10月)

## 「当たり前」が反転する瞬間 ボランティア活動で体感

\*筆者の希望により匿名

現代美術にどっぷりはまっていた私は、もっと深く知りたいと美術館やギャラリーなどでインターンやボランティアをしていました。土曜日は水戸の美術館で作品解説のボランティアをし、翌日曜日には港区のギャラリーでインターンをする、そんな休日の多くの時間を費やしていました。そんな中で、自分の住んでいるJR中央線の高円寺駅～吉祥寺駅沿線エリアでTERATOTERAというアートプロジェクトが行われているのを知り、早速説明会に足を運び、参加することにしました。2011年、まだ震災から数カ月が経った頃のことです。

そこでは、立場、経歴、美術への興味の度合いも様々な人々がボランティアとして、それぞれ熱意を持ってイベントの運営に尽力していました。私は吉祥寺バルコの屋上で行われた展覧会に出展するアーティストの制作補助などを担当していました。一方その頃、世間はまだ震災直後、東北の復興もまだまだ途上であり、多くの人が止むに止まれぬ思いで東北へ向かい災害ボランティアとして活動していました。ご存知の通りこちらのボランティアは、瓦礫の撤去や炊き出しなど被災者の支援が主な活動です。

私の携わっていた美術のボランティアと東北の災害ボランティアとの間には動機や意識に大きな隔たりを感じながらも、一方で深いところでは何か共通項が見いだせる予感がしていました。自分たちはなぜボランティアをしているのか。自分たちのボランティア活動を振り返り、やってきたことの意味を考えたいと思いました。それとともに当時の私は、お金以外の対価、お金で測れない価値というものを探していたように思います。

その翌年、TERATOTERAはボランティア主導で企画を行うことになり、私たちはボランティアをすることの意味を考えるためのトークショー「ボランティアをてつがくする!」を企画しました。パネリストとして、鷲田清一さん(哲学者)、稲葉剛さん(NPO法人生活サポートセンター・もやい\*)、磯部昌子さん(武蔵野傾聴クラブ\*)、片山実季さん(NPO法人越後妻有里山協働機構\*)をお招きしました。会場は荻窪の老舗旅館の大広間で、多くの方々にお出でいただきました。

\*肩書、所属はいずれも2012年当時。

トークでの私の司会の未熟さばかりが思い出されますが、8年前のメモを見返すと様々な興味深い意見が交わされていました。

——ボランティアの多くは集団で行うものであり、その集団で行動をシェアしながらワン・オブ・ゼムになること。／自分の行動が全体の中でどう機能し繋がっているのかを確認することでやりがいを感じられること。／現代の消費社会の中で、外部サービスを楽しむだけの「客」から抜け出て社会に関わりたいという潜在的な思いが、人々をボランティアへと駆り立てているのではないか。／仕事における人間関係で重要な地位や年齢、性別といった属性も、ボランティア活動では意味をなさず、ボランティアはみな属性を取り除いて認め合う関係にあること。／ボランティアは職業人としての自己が解体されて自分の所掌範囲を拡げる経験になること。／……

私も含めテラッコの方々の多くは仕事をしながらボランティアをしています。ボランティアをしていると、仕事や労働で当たり前だと思っていたことが反転するような瞬間があり、私自身TERATOTERAのボランティアの活動を通して仕事や普段の生活を考えるきっかけをいただきました。この文章を書きながら久しぶりに8、9年前を思い返しました。当時関わっていたテラッコの活動は有意義で楽しかった。仕事とは全く違う人間関係、まるで学生時代の部活動のような日々でした。



筆者が司会を務めた「ボランティアをてつがくする!」。写真右から鷲田清一、稲葉剛、磯部昌子、片山実季の各氏(2012年9月)

失業してフラフラしていたところを TERATOTERA の事務局長に拾ってもらい、2011 年の「TERATOTERA 祭り」を手伝う流れでテラッコになる。テラッコたちと JR 中央線で飲み明かしつつ、2014 年ごろまで付かず離れずお手伝いをしていました。今では立派な阿佐ヶ谷の民です。

## 何気ない暮らしにアートは潜んでいる

伊藤真希子

私が TERATOTERA を初めて知ったのは 2011 年。「横浜トリエンナーレ」開催中の黄金町で「たこ」と名乗る、当時の事務局長をしていた女性と偶然出会いました。翌週、「TERATOTERA 祭り」の準備のために、吉祥寺の街を他のテラッコと一緒に散歩をしたことから始まりました。

震災があった春に愛知から上京し、社会に放り出されたものの、なんだか燻っていた時期の私には、ボランティアとして作家の表現を楽しみながらサポートするテラッコたちがキラキラとして見えました。それから数年ほど、当時住んでいた横浜から手伝いをするため毎週末のように吉祥寺へ通ったものです。

仕事の都合で、一からプロジェクトに参加するのが難しかった私は、いろいろな企画にヘルプ的な立ち位置で参加しました。「西荻映像祭 TEMPO de ART」(2012 年)ではお店とアーティストの間に立って展示準備をしつつ、夜の西荻窪をテラッコたちと駆け回りました。肉屋のシャッターに映像を投影するために、梯子を登って、向かい側の店舗の 2 階部分に設置したプロジェクターの電源を入れたり、切ったり。阿佐ヶ谷の区民プールで岩井優さんの映像作品を投影するために、大きな不織布を晩夏のプールサイドで延々シンを使って縫って繋げたり、閉館する吉祥寺パウスシアターの壁を浅井裕介さんの作品で埋め尽くすべく、骨折してヒビの入った足を引きずりながらマスキングシートを貼りまくり、そしてマーカーで一日中塗りまくり……。

その中でも特に印象的だったのは「TERATOTERA 祭り 2012」でおこなった現代美術活動家、加藤翼さんの『いせや CALLING』プロジェクトです。これは、吉祥寺の人たちから長年愛されてきた老舗焼き鳥店「いせや公園店」が老朽化して建て替える際に出た廃材を譲り受け、アーティスト自身が井の頭公園で原寸大に再建したものを、みんなで力を合わせて引き起こし、そして倒すという企画でした。

加藤さんチーム数名はだいぶ寒くなった井の頭公園に 1 週間ほど泊まり込み（本当は宿泊するのはダメだったらしい）、もらった廃材を使って横倒しになった状態のいせやをテキパキ再建していきます。しかし私には学校の授業以外でアートをつくった経験も、作家をサポートできるような建築現場の経験もありません。なので「引き興し、引き倒しは参加してくれる人がいないと始まらない！テラッコにできることは集客することのみ！」と割り

切り、お店にポスターを貼らせてくれないか、週末にイベントがあるから来てくれないかと交渉して歩きまわることになりました。「いせや公園店」での楽しい思い出、変わる吉祥寺の街が寂しい……。そんな住民の方たちの声を聞き、みんな吉祥寺に愛情を持って生活をしているのだと伝わってきました。俄然この企画を成功させなければ！と気持ちが燃え上がる一方で、意外と自分たちの住む街を舞台にアートプロジェクトが進行していることを知っている人は少なく、この状況で本当に人が集まってくれるのだろうか？と、不安を抱えたまま当日に。

しかし私の心配なんてどこ吹く風で、多くの人（約 300 人！）が井の頭公園に再建された「いせや公園店」前に集まりました。秋晴れの空の下、ドーンという建物が倒れる大きな音とともに、その場にいたみんなの歓声があがる。成功だ！胸を撫で下ろして、倒れて折れた木材たちをぼんやり眺めていると、店に貼られたポスターを見て参加したという方から声をかけられました。「いせやとの最後の思い出ができた、ありがとう」「こんなアートのかたちもあるんだね、知らなかった」「今日は楽しめたよ」……。

だいぶ時間が経っているので内容はあやふやですが、確かそんなことを言われ、自分なりにテラッコを続けた価値はあったのかなあ、と感じた瞬間でした。

特に何ができるわけでもないボランティアのひとりでしたが、何気なく生活している中にもアートは潜んでいるかも、そんなことを自分以外の人に伝えることができたら嬉しいなと思います。



復元された焼き鳥屋「いせや公園店」の建物(2012年11月)

アートプロジェクトに興味があり、講座「アートプロジェクトの0123」を受講。そこから2011、2012年度の「TERATOTERA」に携わりました。2019年末にこどもが生まれました。新型コロナウイルスのために、リモートワークでこどもと過ごす時間が多く持てるのが不幸中の幸いと感じています。

## 何かをかたちにすることが日々の活力になる

田中秀康

10 年近く前のことなので記憶が曖昧なのですが、自分が参加した 2 年間で振り返りたいと思います。

そもそも私がテラッコに応募したのは、小川希さんの講座「アートプロジェクトの0123」を第1期生として受講したことがきっかけでした。講座で学んだ知識を実際のアートプロジェクトの場で活かしてみたいと思っていたところに、TERATOTERA の説明会があるとうかがい、説明会に参加しました。その時はまだ、テラッコになるかどうか迷っていたのですが、受講生だったこともあって、小川さんにけしかけられるかたちで参加を決めたように記憶しています。

2011 年度は小川さんが企画したものに従ってテラッコが一緒になってイベントをかたちにしていくという形式でプロジェクトが進みました。私は最初のミーティングで「0123」の受講生であった「たこ」さんに声をかけていただき、同じく受講生だった前川順子さんも一緒に事務局のメンバーとなりました。とくに私は広報チームを中心に全体のサポートとして関わらせていただきました。

広報チームのメンバーは学生と社会人合わせて 5 名程度で、私を含めて広報活動の経験者はおらず、小川さんやたこさんのアドバイスを受けながら手探り状態で進めていました。広報は他のチームに比較しても裏方色の強いチームでしたが、裏方な分もあってか、いろいろチャレンジしていたように思います。

Twitter や Facebook といった SNS を使った広報などにも挑戦させてもらいました。当時は SNS 活用のノウハウも一般的ではなく、何度も話し合っただけでしたが、なかなか手応えを感じられなくて悔しく思ったのを覚えています。

他には事務局がリストアップしてくれた施設や店舗などに一軒ずつ足を運び、イベントのチラシやポスターを置いてもらうためにお願いに回ったりと、地道な活動が多い印象でしたが、TERATOTERA を盛り立てるためにみんなめげずに頑張っていたように思います。私の場合は、この経験を通じて、イベントを広く知ってもらうためには置きチラシやポスターの配布など地道な活動の必要性が身に染みしました。

また、全体の活動を通じて感じたことは、プロジェクトの舞台となる地域に縁のある人ほど企画に提案をしたり、町の人の協力を取り付けたりと積極的だったように思います。地域

に対する思い入れが、TERATOTERA の活動に反映されていたように感じました。

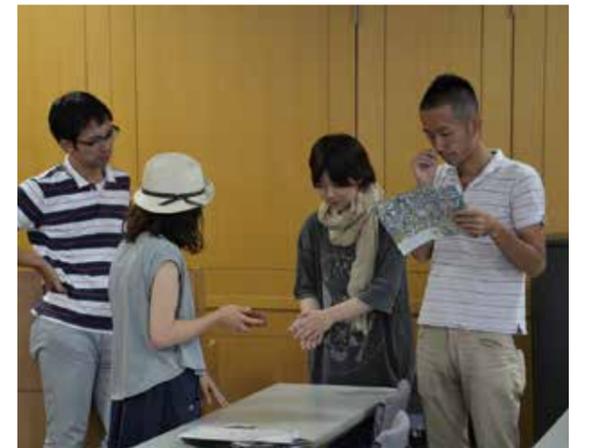
2012 年度は 2011 年度とは違い、小川さんの方針のもと、ボランティア主導で企画立案から運営まですべてに関わる形式になりました。

企画が盛りだくさんだったので、ひとつひとつを語るのには難しいですが、前年よりもテラッコ同士の関わり方の密度が濃くなっているのを感じました。企画や人によっては打ち合わせや準備などで徹夜になることもしばしばで、テラッコ同士がともに過ごす時間が増えていたように思います。

正直、前年よりもテラッコへの負担は大きかったように思うのですが、前年とは違い、自分たちの作り出した企画を実現させるという強い意志があったように思います。だからこそ、しんどい中でもみな楽しみながら乗り越えられたように感じます。

2 年間の経験で感じたのは自分たち主導でやったほうが関わっていて面白いということでした。そういう自由に挑戦してもいい場所を提供できる小川さんの存在が大きいのだと思います。

そして、自分にとっては 2011 年の震災で気持ちが沈んでいた中で、新たに出会った人たちと、何かをかたちにしていくというプロセスが日々の活力になっていたようにも思います。



テラッコの定例ミーティング「テラッコ屋」で、打ち合わせをする筆者(右端、2012年)

TERATOTERAをはじめ様々なアートプロジェクトを手がける「東京アートポイント計画」のプログラムオフィサーとして、2013年度の「アートプロジェクトを456(仕込む)」を受講。2014～2015年度のTERATOTERAにかかわりました。最近はコロナの影響で家の周りを散歩することが増えて、商店街での買い物にはまってしまいました。野菜は八百屋、魚は魚屋……大型スーパーは味気なく感じられるようになり、買い物ひとつをとっても、住む街に文化があると暮らしが楽しくなるなど感じています。

## 実感！アートプロジェクトを仕込む難しさ

三田真由美

アートプロジェクトの仕事に関わるのは、プロデューサーやディレクター、コーディネーターだけではない。街なかで繰り広げられているアートプロジェクトには、そのイベントを安全に楽しんでもらえるよう、点在する会場の数×数カ月にわたる会期の日数分と、掛け算で考えてよいくらい、多くのスタッフが働いている。

そのようなアートプロジェクトに携わる人たちに向けた人材育成プログラム等を展開する「Tokyo Art Research Lab (TARL)」で、2013年に講座「アートプロジェクトを456(仕込む)」が開催された。「アートプロジェクト」を観るだけでなく、「運営してみることに興味を持っていて、自分でもやってみたいという人」に向けたものだった。

個人的な話になるが、当講座が開講された2013年4月、私は東京文化発信プロジェクト室(現アーツカウンシル東京)で、アートNPOと共催し街なかでのアートプロジェクトを展開する「東京アートポイント計画」担当のプログラムオフィサーに転職したばかり。スタッフでもあるのに受講生になった経緯は、新人の私には「まずはアートプロジェクトをきちんと学んでみなさい」という上司からの言葉があったからだ。

講座は、TERATOTERAというアートプロジェクトの現場を事例かつ実践の場として、企画をどのように立ち上げるのか(コンセプトづくりから、作家選定など)、運営していくのか(広報、会場探し、記録の残し方、作家が作品をつくるまでのマネジメントなど)を、TERATOTERAディレクターの小川希さんや、写真家の細川葉子さん、評論家の福住廉さん、デザイナーの原田光丞さん等々、プロの方々の講義を聴き、体当たりでやってみよう!というものだった。講座名称そのもの、アートプロジェクトを仕込む(456)のだ。

6月から月に2回程度の講座があり、2月頃にはイベント本番を迎えたのだから、かなりのタイトスケジュールだったと思う。講座でいろいろ教えてもらいつつとはいえ、当たり前だが素人の私を含む受講生一同がスイスイとアートプロジェクトをつくれるほど世界は甘くない。集まった受講生は、好きな作家も様々、これまでアートプロジェクトに参加した経験も人それぞれで、本当にイベント開催に至ることができるのか……。一抹の不安を誰しもが抱えていたと思う。講座の終盤、いよいよイベントをつくるための企画プレゼンの日、出し合った企画

のプレゼンを聞き終え、ディレクターの小川さんはそれらをぐいっとひとつの企画に仕立ててくれた。バラバラでマチマチの受講生のプレゼンがちゃんとイベントの形になるとは……。ディレクターってこういうことなのか、とその時の驚きは今でもよく覚えている。

そうして、なんとか立ち上がったのが「Civic Pride わたしたちのマチ わたしたちのアート」(2014年2月)というアートプロジェクトだ。イベント当日はJR三鷹駅周辺の喫茶店や柔道場、公園などでライブペインティングや、子どもたちの公開制作、トークイベント等を行った。私は、小説家であり、美術にまつわる執筆も多々している福永信さんにピクニックをテーマにした作品で参加してもらった。京都で活動している福永さんに東京でのアートプロジェクトに参加してほしいなど、今考えると無謀な依頼に違いなかったが、小説同様に奇想天外で面白い作品をつくってくださり、なおかつアートプロジェクトの後でピクニックにまつわることを新聞のコラム記事に書いてくださるという後日談もあり、胸が熱くなる思いをした。

入場者数がどうだったとか、出来栄がどうだったとか、評価はひとまずおいておきたい。実地体験をしてみて、アートプロジェクトを仕込むというのは、それはもう一筋縄でいかないものだというのを実感し、この講座はアートプロジェクトの世界へと一歩踏み出すための入り口だったと思っているからだ。



「Civic Pride」の福永信の作品。冊子の記述に導かれて歩くと、公園などに設置されたノボリにメールアドレスが書かれていて、メールを送ると冊子の文章の続きが送られてくる(2014年2月)

2012～2014年度にテラッコとして参加。事務局の広報担当として各イベントの告知を行っていました。現在はボランティア活動からは離れつつも、アートイベントや展覧会には足を運んでいます。

## 「作家さん」と身近に過ごした「日常」

森 聡史

「東京でアートに関わる活動ができればいいなあ」という漠然とした思いから参加した「六本木アートナイト2012」(2012年3月)の当日ボランティアで、偶然1人のテラッコ(脇屋佐起子さん)と出会いました。

当時、私が大好きだった未来美術家・遠藤一郎さんにも会えるという言葉につられ、また、何より脇屋さんが前年の「TERATOTERA祭り」のことを魅力的に語ってくれたこともあり、その翌月の「テラッコ屋」(テラッコの定例ミーティング)に初めて参加しました。その後に飲み会があり、みなさんが新参者の私を温かく迎えてくれたおかげで、すぐに打ち解けることができましたと思います。テラッコの一体感を感じた瞬間でした。

TERATOTERAの活動では、事務局として主に広報活動に携わっていた期間が長かったと思います。本業として広告の仕事をしてきたことがどれほど役に立っていたかは定かではありませんが(苦笑)、プレスリリースを作ったり、チラシやポスターの原稿を書きつつ配布先を考えたり、SNSで告知メッセージを配信したり。作品制作の現場を手伝う機会は多くはありませんでしたが、それでも作家さんの活動がすぐ身近に感じられました。

TERATOTERAの活動の醍醐味は、作家さんとの距離の近さでした。

私は美術が好きで、美術作品を神聖なものとして捉え、それを生み出す作家さんには尊敬の念を抱いていました。地方で育った私にとって作家さんとは決して身近ではなく、実在するかどうかわからない神様のような存在でした。

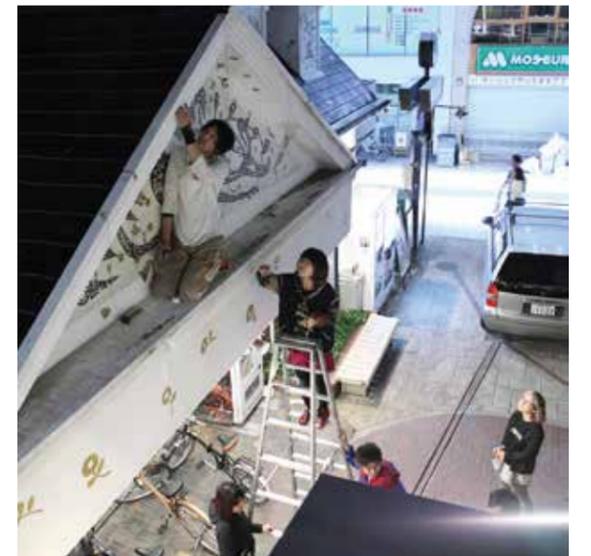
しかし、TERATOTERAの活動を通して、作家さんが作品を創っていく過程に立ち会えることや、作家さんと一緒に打ち合わせをしたり、食事をしたり、同じように日常を過ごすことができたことは何より刺激的でした。

ときには、音楽の趣味の合う作家さん(例えば、山下拓也さんとはHIPHOPというジャンルの音楽で意気投合しました)からオススメのCDを借りたこともありました。神様からCDを借りるという経験は、かつての自分にとっては想像もしていなかったことでした。

打ち上げで同席させていただいた作家さん(浅井裕介さん)が、みんなと会話しながらも、まるで呼吸をするように箸袋に醤油で絵を描いているところを目の当たりにし、作家さんという存在を改めて神秘的に感じたこともありました。

TERATOTERAで知り合った作家さんの作品を美術館やアートイベントで拝見すると、今でも応援したくなくとも、かつ同じ時間を過ごしていたことに対し誇らしい気持ちにもなります。

今振り返ると、TERATOTERAでは作家さんはもちろん、協力させていただいた地域の方々もお客さんも(テラッコも)含めて、みんなが一体となってイベントを創っていたのだと思います。アート、映像、音楽、ダンスといった芸術としての「文化」だけでなく、TERATOTERAを取り巻く人々を中心とした「組織文化」のようなもの生み出してきたのかもしれない。この組織文化もまた、関わった人たちの価値観に多少なりとも影響を与え、さらにその人たちが今後関わる人たちの価値観にも影響を与えていくといったかたちで、価値観の連鎖の起点になっていくといったなあと思います。



閉館する映画館「吉祥寺バウスシアター」とTERATOTERAがコラボした『世界の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている』。美術家・浅井裕介(写真上部)が映画界の内外の壁面に絵画で埋め尽くした(2014年5～6月)

2011年からテラッコとして参加。当時、通信教育で文化支援を学んでいたので、一番近くのアートプロジェクトに参加するべくTERATOTERAのボランティア募集に応募。初年度は記録とボランティア対応担当、2013年度は、テラッコ持ち回りの事務局に1クールだけ参加。

## 多様な人々と未知の感覚に出会わせてくれた、大切なモノ

千葉佐奈子

記憶というのは、常に新しいものが書き加えていくものだと思う。年を重ねていくと、新しい記憶は表皮がむけるようにはがれ落ち、内側の古いその人にとって特別な記憶だけが残されていくように感じることもある。だから、人は自分が何者でどんな人生を歩んできたか忘れないように、それを思い出させるモノをいつまでも傍に置こうとするのかもしれない。

2014年に武蔵野市クリーンセンターとの共同企画「すてたいけどすてられないモノ」展を担当した。そこで、人が実用性を失ったモノを捨てられないのは、多くの人が、それを記憶の縁にしているからという発見があった。

これは焼却炉の建て替えに伴い、クリーンセンターが、ゴミをテーマに作品を作るアーティストとイベントをやりたいということで持ち込まれた企画だった。最初のアーティストとの話し合いの中から、そうしたゴミになる一步手前のモノを集めるということに決まった後は、その集め方から、展示方法まで、ほぼテラッコとクリーンセンターの担当者に委ねられた。

断捨離やミニマムな生活が理想のようにいわれる中、実用性を失ったモノに未練を残し持ち続けている自分が少し恥ずかしい、それを公開するのは戸惑われるという理由もあるのか、モノ集めは最初から難航した。また、そういうモノを集めて何が面白いのか、うまくいかないのではという声もきかれた。

そこで、まずはテラッコの間で、捨てたいけど捨てられないモノのエピソードを集めて回覧してみることにした。そうすると、そのモノにまつわるエピソードの中に誰にとっても身近で共感を呼ぶものがひとつくらいはあるということがわかった。そんな風に、実際、そのモノを捨てられない理由を文字化してみない限り、なぜ捨てたいと思いつつながらなく捨てられないのかが、自分でもわからない。そんなガラクタを他人が見て面白いのかと誰もが考えるようだった。そのために、この企画を理解してもらうためのプレイベントや地域住民へのインタビューを、事前に何度か行わなければならなかった。

「すてたいけどすてられないモノ」展では、一見、ゴミのようなモノに、持ち主の言葉を添えることにした。それだけで、

モノの見え方が変わり、価値が変わるように見えるから不思議だ。最終的にどんなモノが集まるのか、同じようなモノが集まってしまわないか、全く未知の状態からスタートしたが、終わってみると、集められたモノやエピソードがさほど重なることもなく、それでいてクリーンセンターがある武蔵野市や隣接する三鷹市など、その地域の住民ならではの特色も見えてきた。

モノ集めの過程では、地域のコミュニティや公共施設、ショッピングセンターや大学など様々なところへ協力を求めなければならなかった。テラッコはJR中央線沿線の住民ばかりではないので、地域の人々との連携が得意ではない。その穴を埋めてくれたのが、既に地域住民との関係性が構築されているクリーンセンターの存在だった。実際に地域のコミュニティを訪ねてインタビューする際も、クリーンセンターの担当の方がセッティングし、付き添ってくれた。そのおかげで、この地域に縁のない若い世代のテラッコたちも、初対面であったにも関わらず、地域の年配の方々からそれぞれの捨てられないモノにまつわる貴重で興味深いエピソードを、それぞれの活動に関わる思いとともに聞き出すことができた。

実際、捨てられないくらい思い入れのあるモノを借りて展示し、また本人へ返却しなければいけないという手間や、紛失・破損等のリスクを考えると、クリーンセンターの協力なしには、成立し得ない企画でもあった。

そうやって半年余りの準備期間を経て迎えたイベント当日は、12月の極寒の日だった。プラットホームと呼ばれる、だだっ広い屋内のゴミ集積場には即席の暖炉を設置した。一般の方だけでなく、小川希ディレクターが親しいアーティストやテラッコの協力もえて、どうにかかき集めた「すてたいけどすてられないモノ」を、それぞれのモノにまつわるストーリーとともに展示した。会議用の長机の上に無造作に置かれた100点余りの捨てられないモノたちは、数が集まるとそれだけで面白いということを示してくれた。ただ、観客はというと、同時に行われたワークショップやトークショーの盛況とはほど遠く、ゴミの見本市かと、遠巻きに見てやり過ごす人が多かった。そのなかで、うっかり近づいて展示の意図に気づき興味を持った一握りの人々が、いつまでも熱心にキャプションを読み込んでいくという印象であった。



「すてたいけどすてられないモノ」展の事前リサーチの一環で、地域の年配者の思い出を聞く。右が筆者(2014年9月)

「すてたいけどすてられないモノ」展は、「クリーンセンターとあそぶ」というイベントの一部として開催された。「クリーンセンターとあそぶ」自体が、オフシーズンにひっそりと行われた1日限りのイベントだった。そのなかに、展示という本来はある程度の期間を設けて観てもらおうようなものを取り合わせたことは適切ではなかったのかもしれない。何が展示されているのか、来場者をうまく誘導し、興味を持たせるような工夫ができていただろうか。そういった反省や悔いも残るが、当日までの長い助走期間を、多くのテラッコたちが、他の企画に関わりながら入れ替わり立ち替わり並走してくれた。応募チラシのアイデアを出してくれたり、地域のコミュニティにつなげてくれたり、イベント終了後の冊子作成時にアドバイスをくれたり。それぞれの経験や得意分野を生かしながら協力してくれたことが大きな支えとなった。

実用性はないけれど、その人にとってはそれを手にした頃の様々な記憶を思い起こさせたり、それを贈ってくれた人の気持ちに思いを馳せたり、何かその人の心の在りようを映すようなモノたちの存在は、私にとってのアートの立ち位置に似ているような気がする。そこまで必要ではない気がするのに、ないとそれが呼び起こすモノや感情を永遠に失ってしまい、それが何であったかさえ忘れてしまうような感じ。

テラッコの活動は楽しいだけじゃない、踏み込むと必ずやっかいなことに巻き込まれ、逃れられなくなる。やり遂げても、なにか心残りがある。せつかく良いものができても、なかなか気づいてもらえない。でも、手放せない、他人にはゴミかもしれないけど、私にとっては多様な人々と出会い、未知の感覚を呼び覚ます大切なモノ。そろそろすてたいけど、すてられない。



地域の人々から集められた「すてたいけどすてられないモノ」。そのモノにまつわる思い出をキャプションとして作成した(2014年10月)



「クリーンセンターとあそぶ」のなかで開かれた「日本廃品打楽器協会」会長の山口ともによる「ガラクタ音楽会」(2014年12月)

大学の外でいろんな人たちと関わりながらアートや社会について考えていける活動の場を探していたことがきっかけで、2014～2015年度に参加しました。運営する人たちや作家さん、扱うテーマなどに惹かれました。卒業後は観客となることが多いものの、活動を通じたご縁を大切にしていきたいと考えています。

## 作家やテラッコの全力で向き合う姿に学んだ

後藤響子

大学で日本画専攻に在籍していた私は、他学科の人たちとも言葉を交わしていくうちに、もっといろんなものごとを見聞きしたいと思うようになりました。そこで、大学のそとで人と関わっていける活動の場を探すようになり、そのころ出合ったひとつがTERATOTERAでした。JR中央線沿いは比較的訪れる機会が多かったこともあり、「とりあえず話を聞きに行ってみよう」と説明会に参加。帰り道、いい予感を抱きながら帰路についたのを覚えています。

その年の6月から、月に1、2回行うボランティアのミーティング「テラッコ屋」やトークイベントの手伝いをするように。テラッコ屋では、開催を控えるイベントについて話し合ったり、ときにはアーティストの方がやってきて自身の活動について話してくださいたり。トークイベントは、内容はもちろん街なかのいろんな会場に行けたのも面白かった。片付けを終えてそのまま飲みに行く流れも多く、お店に着いてからも、最近興味深かった展示や気になる作家さんのこと、それぞれの近況、社会情勢についてまで、話題が尽きなかった。

ボランティアをはじめた2014年度は、11月と翌年2月に、規模の大きなイベントの運営にも携わった。11月の「TERATOTERA SOUND FES. 一音とアートが高架下に舞う」では、村田峰紀さんによる作品展示・パフォーマンス『強引な関わり方(集団による)』のサポートをさせていただき、映像作品にエキストラとして参加したり、会場当番をしたりして関わった。撮影中すごく緊張しつつ、だんだん手を動かすことに没頭していき、いつの間にか時間が経っていたこと。村田さんがドローイングパフォーマンスをしている圧倒的なパワーを前に見入ってしまったこと。今も覚えている。

2月に行われた「TERATOTERA祭り Encounter—邂逅—」では、東野哲史さんによる作品『Karaoke Machine on the Floor』のサポートをさせていただいた。会場は、レストラン喫茶「上床」。今はお店を畳まれたが、“日本一へたな歌手”を名乗る上床敬子さんが経営していたお店で、東野さんは段ボールでカラオケマシーンを模造。スピーカーなどの配線に仕掛けをして、曲をリクエストすると、メロディーを声でまねた伴奏が聞こえてきて、お客さんはそれに合わせて歌う、という作品。伴奏は録音されたものではなく、段ボール製の

カラオケマシーンの中に潜んだ東野さんが即興で歌っているのだった。

想像もしていなかった状況に戸惑いながら、なんとか口を開き、不思議がって歌っていくうちにだんだん笑いがこみ上げてくる。そんな反応のお客さんが多かった。途中、息を切らせて汗だくになった東野さんが段ボールから出てきたところも、作品に負けないくらい陽気なマスターの店主ご夫婦のことも。印象深く記憶に残っている。

その後2015年度も、「SOUND FES. 一音の陽炎」や「TERATOTERA祭り2015—Sprout—」を中心に関わらせていただいた。出展作家に歳の近いアーティストの方たちも多くいた年で、そういった意味でも刺激が多かった。

他にもここには書ききれないほど、テラッコの活動を通じて得たことはたくさんあり、それらが、ものごとを捉えたり考えたりするうえでの価値観の幅を広げてくれました。作家さんはもちろん、同じテラッコとして一緒に活動させてもらった人たちを含めて、尊敬する先輩たちや同世代の方たちが全力で向き合う姿。それを自分の目で直接見られたことは、とても大きかったと感じています。私もかつてよく歳を重ねたい、そんな気持ちです。



JR東小金井駅近くの高架下で行われた村田峰紀のパフォーマンス。パイオリンの表面をボールペンで削り続けた(2014年11月)



「TERATOTERA祭りEncounter—邂逅—」の東野哲史の作品。左の段ボール製のカラオケボックスの中で東野が「カラオケ」を奏でる(2015年2月)

国際教養大学卒業。アメリカ、イギリス留学を経て、2009年よりArt Center Ongoingのスタッフとして現代アートの現場に関わり始める。大学生やビジネスパーソンに英語を教える仕事を経て、Ongoing AIR(Art Center Ongoingのアーティスト・イン・レジデンス・プログラム)などアート関連の翻訳、通訳等をおこなう。2014年にTERA Englishを内藤貴美子と共同で立ち上げ、2018年度まで講師をつとめる。

## 英語を話す、だけじゃないTERA English

弘川有希絵

もしもあなたがアーティストで、海外の滞在制作プログラムに応募したいと思ったら、どのような英語が必要になるでしょうか？あるいはアートギャラリーのスタッフで、海外のアーティストを日本に呼びたいと思ったらどうでしょうか？たとえば以下のような場面で英語が必要になります。

公募情報へのアクセス(あるいは作成)、応募書類のアーティストステートメントやCV、到着までのメールのやりとり、プログラムがはじまってからの日常会話、作品やプロジェクトのプレゼンテーション、作品についての質問、制作プロセスの中での特別なニーズの対応、展覧会の告知、作品の感想を伝えること、おすすめのアーティストやギャラリーについての情報交換、お互いの文化のちがいやアートシーンについてのお喋りなど。

「TERA English」は、こうした場面を想定して、役に立ちそうな表現を学ぶための英語講座です。開催年度やコースによって内容は異なりますが、たとえば2016年度の中級クラスの授業は以下のような流れでした。

- ①フリートーク(展覧会やニュースについて英語で話す)
- ②滞在制作プログラムで使える会話表現を練習する
- ③国内外の有名なアーティストについて英語でふれる
- ④アート作品やプロジェクトについて解説や質問をしたり、感想を伝える練習をする

全13回ほどの授業の中に、2、3度ゲストを招く回をつくり、海外のアーティストや日本で活躍するバイリンガルのキュレーターの方に、トークやワークショップを行ってもらい、大変好評でした。また、コースの最後には受講生の皆さんにプレゼンテーションを行ってもらいました。

授業は基本的にすべて英語で、クラスメート同士のペアワークの際も英語で話してもらいました。「いつかどこかで英語を使うときのために勉強する」のではなく、「いま目の前にいる人に、自分の考えていることを伝えたい」「相手の話していることを分きたい」という気持ちで英語を使うことに慣れてもらうことを大切に考えていました。受講者の皆さん

は、アーティスト、キュレーター、ギャラリースタッフ、アートが好きなデザイナーや文化施設の方たちだったので、授業はじめのフリートークの際に「先週みに行った展覧会が面白かった」「こんな作品をみたけどイマイチだった」などと、皆さんが英語で盛り上がっている様子を見て「しめしめ」と思っていました。

そういった雰囲気のおかげかどうか分かりませんが、クラスメートの皆さんがコース終了後も交流を続けるケースが多いようです。「普段なかなか出会えない人たちとの繋がりができた」「いろんなアーティストから作品について聞いて面白かった」などと感想を頂いたのは嬉しい副効果でした。受講生の皆さんにとって、TERA Englishが英語をつかう場だったと同時に、それ以外の何か面白いことを見つけた場だったとしたら幸いです。



代表講師をつとめた筆者



TERA Englishの授業風景(2015年度)。2016年度には「初級」「中級」に加えて「上級」の3クラスが開かれた

### TERA English概要

開催年度:2014、2015、2016、2018\*  
会場:アーツカウンシル東京ROOM302(千代田区外神田)  
日程:隔週の平日19:30-21:30  
期間:7~8カ月程度  
講師:弘川有希絵、内藤貴美子(2014・2015)、本村桜アリス(2016)  
\*2018年度のみ、Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)で単発ワークショップの形式で開催。

音楽家。2011年度と2015年度にイベント運営の勉強のためにTERATOTERAに参加。2018～2020年、豊島区上池袋にて『anoxia』というプロジェクト/イベントスペースを運営。現在は栃木県足利市(2019年～)、神奈川県鎌倉市(2020年～)で『anoxia』を運営している。

## 「音楽」を問う音楽イベント「熱量」で実現

加藤裕士

私は学生時代から音楽の演奏活動をしており、それに伴って音楽イベントの企画・運営を頻繁に行っていました。音楽家の仕事はざっくり分けると「現場での生演奏」と「作曲・音源制作」の2つの側面があります。私は「現場での生演奏」への愛着が非常に強く、ライブイベントをより面白いものにするためには何をしたらいいか考えていました。

そんなとき、東日本大震災直前の2011年2月に井の頭公園で開催された、大友良英さんのポートでの船上ライブの告知情報で初めてTERATOTERAの存在を知りました。もともと大友良英さんの音楽をとて好んで聴いていましたし、あり得ないシチュエーションで演奏をすることにとて興味を持ちました。実際の演奏を聴きに行き、こんなことを自分もやってみたいと思いました。TERATOTERAには美術という確固たる柱があるからこそ、常識や習慣から少し離れたかたちの音楽イベントをやることができそうだと感じました。震災からしばらく経ってからボランティアの募集情報を知り、参加させていただくことになりました。

TERATOTERAでは2011年度以外にも2015年度の「TERATOTERA SOUND FES. 一音の陽炎」などの取りまとめを行いました。コントラバス奏者の齋藤徹さんをはじめとした音楽家の方々をお招きして実現したこのイベントは、分かりやすい意味や解釈を拒否しつつ聴衆の方々に強烈に音楽の良さだけを印象づけるイベントにしたいという考えからスタートしました。メロディーやリズムを一つに固定せず、複数が同時進行し名前のつけられないハーモニーが鳴らされる音楽が中心でした。通常考えられる「音楽」ではなかったと思います。このイベントを体験することによって、音楽とはいったい何か分からなくなった方もいたのではないのでしょうか。音楽とはいったい何かという問いかけがあったと思います。

このような性質のイベントとなった理由は、単純に私の興味のあることを好き勝手にさせていただいたからです。変にバランスを取ろうとせずに少々強引にまとめていたように思います。テラッコの方々にはついていけない部分も多々あっただろうし、申し訳ないと感じながら作業を行っていたのですが、だからこそ普通だと実現しなかったイベントを作り出せました。スタッフ同士でやろうとしていることを共有する必要はもちろ

んあると思いますし、その努力も自分なりにしましたが、最終的には自分の一番やりたいことを優先することにしました。

結局のところ大事なのは、芸術に対するある意味極端に歪んだ「熱量」に尽きると思います。それは作家であろうが裏方のスタッフであろうと一緒にです。もちろん、その熱量を具現化するためには様々な障害はありますが、それをある意味強引に突破できるかどうかはどこかのタイミングで問われるのでしょう。「常識のない人」のままではなかなかその強引さは出ません。どうしてもこれがやりたいという気持ちがないと何もできないですし、こんな当たり前のことをしっかりとやり遂げたことが収穫でした。



美術やダンス、演劇など多様なジャンルと関わるコントラバス奏者・齋藤徹の演奏



↑箏(ことう)奏者・八木美知依の演奏。即興演奏や自作曲を織り交ぜて進行した ↓「SOUND FES. 一音の陽炎」の現場で出演者と打ち合わせる筆者(写真右)



バリトンサックスのバンド「東京中低域」による特別編成のライブ

\*いずれも2015年8月の「SOUND FES. 一音の陽炎」から。「江戸東京たてもの園」(小金井市桜町)内の古民家で開催された

2015年は、ちょうど仕事だけの生活からいろいろな地元の活動に目を向け始めた頃で、TERATOTERAにも目が留まりました。アートと人の生活との距離が近いこと。そして自分にできる範囲で参加できることから、広報活動を中心にこれまで継続して参加することができました。

## 日常の傍らにある非日常の魅力

都賀田一馬

TERATOTERAの活動は驚きの連続だった。毎年開催の「TERATOTERA祭り」では、一つのテーマに作家の皆さんが思いもかけないアプローチを試みる。初めて体験した「SOUND FES. 一音の陽炎」(2015年)は、慣れ親しんだ「江戸東京たてもの園」の景色を変えた。「西荻レヂダンス」(2015年)、「西荻映像祭」(2016、2017年)は西荻窪の街に溶け込んでいた。「リアリー・リアリー・フリーマーケット(RRFM)」(2017年)では、普通の人たちがいつの間にか非日常のコミュニケーションを創造していた。「踊り念仏」(2018年)、「駅伝芸術祭」(2018、2019年)は人々の生活空間とアートの垣根を踏み越えて見せた。様々な「トークイベント」からは大きな影響を受けた。どれを思い返しても自分の想像を超えてくるおかしみに頬が緩む。

テラッコは作家ではないがただのお手伝いとしてのボランティアでもない。作家を通じて実現してみたい夢を描いていた。「こんな場があったらどんなに面白いだろう」「あの作家だったらここでどんな世界を描いてくれるだろう」「このテーマにこの作家はどんなアプローチを見せてくれるのだろう」。いくら打ち合わせをしてみても、作家の皆さんが何をしようとしているのか、自分たちがやっていることが何なのかはわからない。準備はもやもやの霧の中を進む。

下見が好きだ。テラッコだけで行く下見と作家の皆さんと行く下見。会場とその周辺を確認し、そして街を歩きながら何が起ころのかかわからないが、勝手に想像して記憶し、何か役に立てるように気持ちを整える。必ず想像を超えてくる作品の力を楽しみにしながら。そして当日、初めてその作品を味わった時に感じられる驚きや心の捻じれ、心地よさや異物感。「あっ、自分の心が確かに影響を受けている」と感じられる心の高まりがある。だからまた味わいたくなる。

TERATOTERAの活動はその多くが人々の生活のすぐ傍らにある。かしまってドアを開ける必要はない。日常生活の傍らに非日常のにおいがあり、驚きがあり、音が入り込んでくる。足早に目的地に向かう人々の傍らにいつも違う風景が広がっている。それに気づき、じっくり向き合ってくれる人もいれば、一瞬目を向けるだけの人もいるが、本人も気づかないうちに何かしら影響を受けているに違いない。私にとっては

それがたまたま楽しい。興味を持って深く味わいに来る人も、まったく無防備な状態で作品を浴びてしまった人も、心のスタート地点は違えど受ける影響の深さは変わらないのではないかと。自覚していてもいなくても、すぐに効果が現れなくても、将来どこかに影響してくる。そんな気がする。

だから広報活動の中でも、普段アートに対するアンテナを張っていない人にどうしたらこの情報を届けられるのかが関心事だった。この一枚のチラシがもしかしたら一人のこれからに影響を与えるかもしれないという妄想を糧に行動する。一枚でいい。一人でいい。あるいは面白いものに対してアンテナを張っている人が集まる場所や活動を狙い撃つ。自分たちの足元にこんな面白いことが行われているということに気づいた時に生まれる変化について期待してしまうのだ。

テラッコ、他ではこの面白さは味わえないよ。



エピソードやスキルを交換する「リアリー・リアリー・フリーマーケット」。シンガポール発の企画の東京版が、武蔵野の広場で開催された(2017年7月)



ボランティアの定例会議後によく街を歩いた。写真は、2011年の「TERATOTERA祭り」で、アーティストが引率した作品『街歩きツアー』

筑波大学人文社会科学研究科に在籍中の2015～2016年、「社会の中の芸術」と「芸術の中の社会」を記述するためTERATO TERAに参加。同大卒業後、ITベンチャーでエンジニアをしつつ、編集の力で芸術・社会・工学の交差点を模索中。

## 「共感せずとも受け止める」誠実さの発現

梅澤光由

「アール・ブリュットはセンシティブだから司会が重要」  
「社会活動家みたいに濃い人を連れてきた方がちゃんと人は来る」  
「そこに課題解決=ビジネスにアートを使っている人をぶつけたら面白いんじゃない？」  
「タイトルは...『(仮)暮らしとアート』で」

社会学の研究者として初めて本格参加した「テラッコ屋」会議。テラッコの思いつきと、小川希さんのディレクションで次のトーク・セッションのテーマと人選があれよあれよと決まっていた。確かにこれが実現すれば面白い会になるけれど、落としどころや具体的なトークの方向性を決めるのは誰がやるのだろうか？後日自分が司会者となったとき、まさか小川さんに「じゃ、頑張って！」とだけ言われて概念設計を自分がフリーハンドでやるなんて一切思っていなかった。最後まで残っていた仮のタイトルでそのままテーマは本決まりしてしまったが、暮らしとアートとなれば人間の全部である。何も決まっていない。ヒントも特にない。

自ら障害者支援活動も手掛けながらアール・ブリュットのプロデュースもする奥山理子さん、現代アートをファッションに取り込んだ独自ブランドを立ち上げた米田年範さん。自身もホームレス生活をしながら、マイノリティ排除の問題に言論と実践の両面から抗議していく社会活動家のいちむらみさこさん。芸術の実践者たちを招いての分野をまたいだ鼎談をシロウトがデザインするなんて、そんなことしていいのだろうか。想定される話の内容や、そこからどうトークを膨らませていくかを考えてみるのだが、テラッコの勢いと思いつきで出てきた人選からは共通項など見つからない。ホームレス生活に五輪反対運動、どう考えてもいちむらさんの色が濃すぎる。マイノリティサイドの人々を支援しつつ、五輪の文化プログラムも務めている奥山さんはどう思うだろう。そして米田さんは2人の討議においてげぼりになるのがオチではないか？何も定まらぬまま当日を迎え、本番1時間前に登壇者3人と打ち合わせをする。みんな「あのお、わたしなんで呼ばれたんでしょう？」と喉まで出かかっているのがよくわかる。ごめんなさい。残念ながらこの会場にいる全員が、焦点が定まってないのです。

頭を真っ白にしながらか司会席につき、セッションを始める。パネラーの自己紹介をそれぞれにお願いしながら、私はふと思

ついた。奥山さんといちむらさんのプロフィールに聴衆の注意のカーソルがグッと向いている。ならば2人に五輪の話を最初に向けてしまおうと。ギャラリーの期待から2人がどんな話を切り出してくるか見たくなかったのだ。予想された最も重たいテーマから話題が広がっていったからか、そこからはマイノリティの政治参加、公共性へのアクセスの不自由性、アートとビジネスの関係へとトークは広がっていった。司会者の手を離れたまま……。

トークセッションとは聴衆の前で共通のテーマ=のりしろの上で話し合うことで、お互いの考えを混ぜ合わせた新しい意見が立ち上がってくるものかと私は思っていたのだが、この日は全員が平行線だった。米田さんに消費とアートと資本主義の関係性について論を求めても「いや、僕の活動は事業なので前提が違いますね。社会批判とか特に考えてないです」。いちむらさんにアートが事業や消費活動といった身近な暮らしへ展開していく可能性を問うても「いやそもそも消費というより経済システム全体から根本的に問い直していく必要がある」。3人とも思考のOSが全く違う。司会者として苦しい展開であったがしかし、鼎談の中でパネラーの3人はあまりにも異なる価値観で仕事をしているお互いの「わからなさ」に興味の目を向け始めていた。普段視界にはなかった業界や活動が目当たりになり、意見を求められることで自身の活動の位置付けを再確認する。自分の活動と直接結びつくことはないだろうけれど、それでもどこかで関係している予感が、お互いの活動に対する関心を連れてきた。そこには「共感せずとも受け止める」という誠実さが働いていた。

最後は登壇者全員がトーク終了後も熱気そのままに談話していたり、テラッコたちもすごい面白かったと評判がとても良かった。見ていた誰かが言っていた。「予測不可能なことが飛び出るのは現代アートの作品もトークセッションも同じだねえ」。え、これもアートだったの？



トーク「暮らすアート」。左からいちむらみさこさん、米田年範さん、奥山理子さん、筆者(2016年8月)

会社員。家族にアーティストが多く、大学は美術系。仕事が一段落していた2016年から2018年まで、パートナーに誘われてTERATOTERAに参加。最近はまだ仕事ばかりしています。できれば社会人大学院に行って学び直したいと考えています。

## テラッコが「作品」になれる喜び

立山周一郎

テラッコの説明会に初めて参加した時に、「ボランティアスタッフが主導的に動く組織です」と聞いたような気がしないでもない。もう数年も以前のことだから、記憶が曖昧なこともあるが、他にボランティアと名の付くものに参加したことがなかったのも、重要なことだとは思っていなかったのだ。今思えば、迂闊だったかもしれない。それが本当だとわかるまでそれほど日にちはかからなかった。

僕が初めて担当したアーティストは林千歩さん。TERATO TERAで3回担当となり、「六本木クロッシング」(2019年)の搬入も個人的にお手伝いするようになったのだが、ボランティアスタッフとして、とてもやりがいのある作家さんだった。なんというか、ほっとけない感じがする作家さんなのだ(それも作家さんが持つ力の一つだと思う)。

林さんは映像作品が多く、初めてお手伝いした作品でも、西荻のビリヤード場で神話的な映像作品を撮影した。昼間はスクリーンの制作を手伝いながら、夜には(指で)劇中人物を演じることになり、指がすりすりになりながら演技指導をされた。夜遅くまで収録作業は続いたが、ビリヤード場で上映された時には、作品の一部として参加できたことが純粋に嬉しかったし、作品として完成したことに安堵した。作品が完成する時の嬉しさと安堵感。それが、僕のテラッコとしてのスタートだったように思う。

ところが、「TERATOTERA祭り2018」では、本人がいないままパフォーマンスすることになった。当初、JR三鷹駅の駅前広場でライブペイントを3日間行う企画だったが、林さんが2日目は会場に来られないことがわかった。林さんから指導を受けてパフォーマンスを覚え、当日は僕がコンセプトなどを伝えながら、テラッコだけでパフォーマンスを行った。最終日、どうにか作品が完成した時の安堵感は、僕が一番感じていたと思う。たぶん。

「TERATOTERA祭り2016」では、河口遥さんのお手伝いで、作品中の宇宙人になりきった。ご自宅までお邪魔して、作品のコンセプトや宇宙人の衣装について事前に打合せを行ったのだが、打合せまでに衣装のデザイン案を描いて来てほしいという無茶ぶりにも、どうにか対応した(しかも、その場で見せたところあっさりOK)。その後は、河口さんと一緒に衣装を作り、一緒にパフォーマンスをして、一緒に作品の一部となった。この時は、お客さんとの「会話」も作品の一部であり、作品のコ

ンセプトを守りながら、即興でお客さんと会話する必要があった。そういった会話の一つ一つ、自分の行為の一つ一つが作品となっていく。その過程で、おそらく誰よりも深く、河口さんの作品の中に入ることができたのではないと思う。「TERATOTERA祭り2017」では、村上慧さんのお手伝いをした。三鷹の個人商店の看板を作らせてもらって、三鷹駅南口のデッキに仮設した「図書館」に書籍兼看板として陳列する作品だった。この時は、商店への取材依頼は初日だけは村上さんと一緒だったが、その後はテラッコだけで取材依頼を行った。店主にコンセプトを伝え、写真を撮り、コメントをレイアウトして、作品制作を手伝った。開催当日に自分が担当した作品が実際に並べられて、ささやかながら誇らしかったのを覚えている。会期中は、村上さんとひたすら、「図書館」のこたつで書籍を読み、来る人にお茶をふるまって、取材協力してくれた店主の対応をした。最後まで作品の一部になっていたのを思い出す。

林さん、河口さん、村上さん。振り返ってみると、僕が担当した作家さんでは、作品と一体になる感覚を覚えることがとても多かったように思う。そういう意味でも、やはりテラッコは特別なチャンネルなのかもしれない。普通、芸術作品には観るもの、作るものの境がある。そこには、どうしても非対称性があるし、格差がある。しかし、テラッコとして参加すると、どちらにも属さず、「作品」になれる瞬間がある。大仰に言えば、観ることや作ること、論じることや評価することとも、また別の、テラッコでしか感じるができない芸術体験なのかもしれない。このような経験をさせてくれた懐の深い作家の皆様と、楽しませてくださったTERATOTERA事務局の皆様へ深い感謝を。



河口遥『\*最後に私になぞなぞを出してね!あと、あなたの考えた星の名前をつけてね!』。筆者が宇宙人に扮して来場者と会話した(2016年10月)

2016年よりテラッコ。現在、「Terracollective」の設立手続きが終わり安心してるところです。普段は大学の非常勤講師をしています。仕事はコロナ禍でオンラインになり現在も継続中。運動不足と肩こりに悩まされる日々。

## 「アートなホストクラブ」がもたらした高揚感

三浦留美

東京にはいくつものアートプロジェクトがあるが、そのなかから TERATOTERA に参加し、「テラッコ」と呼ばれるアートボランティアになったことに、何か特別な意味があるわけではなかった。ただ、2010年に「瀬戸内国際芸術祭」に行った際に、現代アートと瀬戸内海の自然の融合を目の当たりにし、以来、アートプロジェクトへの興味が強くなっていったことは動機と言えるかもしれない。

TERATOTERA に参加して4年余りだが、現在では、他のテラッコたちとともにアートプロジェクトを運営するボランティア集団を法人化するに至っている。「Teracollective(テラッコレクティブ)」である。いったいどうしてなのか。自分でも不思議でならないが、少なくとも「TERATOTERA 祭り2016」の風景が自分にフィットしていなかったら、いまもテラッコを続けてはいなかったはずだ。

テラッコとして初めて参加したイベントは、2016年の「TERATOTERA 祭り」。その年は「Involve-価値観の異なる他者と生きる術-」がコンセプトだった。

テラッコにはそれぞれ担当する作家が割り当てられる。会期中だけでなく、その前後も連絡をとったり、作品の搬入搬出をしたりする。インスタレーションの場合には作品に参加することもある。

2016年、テラッコ1年生の私は、2人のテラッコとともに美術家の田中義樹さんを担当することになった。田中さんの展示は、インスタレーションにパフォーマンスを組み合わせた『ホストクラブ uwatoko 君の瞳をインボルブ』。「uwatoko」は、当時JR三鷹駅の北口近くにあったレストラン喫茶「上床」で、展示会場だった。開幕前、田中さんは企画書で丁寧に説明してくださった。その時、私たちテラッコには「当日は黒スーツで来てください」とリクエストがあった。

会期が始まると、私たち3人は黒スーツ持参で会場入りした。普段は年配のご夫婦が営んでいる喫茶店は、見事に田中さんの作品としての「ホストクラブ」に様変わりしていた。壁面や窓が黒いシートで覆われたなかに、真紅のソファが並ぶ。この空間で、鑑賞者を待ち受けるのは、田中さんとその友人たち。全員が若き芸術家である。

鑑賞者はホストクラブにやってきたお客さんとなる。入口で

ホストの紹介ボード(顔写真とともに作風が書いてある!)を見て指名すると、そのホストが自身の作品のポートフォリオを手にもって来て、おしゃべりをしながら鑑賞者を美術の世界に巻き込んでしまうという仕組み。つまり、若き芸術家たちがホストとなり鑑賞者と芸術談義を交わすという「アートなホストクラブ」なのだ。

入口でホストを指名できるという特典付きのこの展示は、当然のように人気を博し、3日間を通して絶え間なくお客さんが足を運んでくださることになった。

そこで「黒スーツ」の私たちテラッコは何をしたのか。それは、入口でホストクラブの「黒服」として指名を受け、マイクでホストを呼び出すパフォーマンスだった。私たち3人の普段のイメージからは程遠い役割を仰せつかったのだった。そのせいもあってか私はこの間、妙な高揚感と心地よい疲労感を味わった。いま思えば、あれはアドレナリンによるものだったのかもしれない。

この時の経験で、ほんの少しでも制作や展示に関わらせてもらうと、その作品への愛着が一層増すことを実感した。「TERATOTERA 祭り」は、作家とテラッコが期間限定のチームとなって創り上げていくのだが、そこにはすでに完成した作品を一人で鑑賞するという行為からは得ることのできない「感覚」があった。この確かにあった「感覚」は、いまでも存在するのだが掴めそうで掴めない。テラッコでいるとそれを掴むことができそうに思える。これがいまもテラッコでいる理由かもしれない。冒頭で紹介したコンセプト「Involve」には「巻き込む」という意味がある。どうやら私も巻き込まれたようである。



田中義樹『ホストクラブ uwatoko 君の瞳をインボルブ』の会場

TERATOTERAには2014年から参加しました。当時ディスプレイの仕事に携わり、ときにアート作品の展示をする機会もあったため、アーティストの制作過程や展示方法、考え方など、もっといろいろ見てみたいと思ったのが、きっかけです。

## アートに食に 温かなつながりに感謝

柳本紀子

雨上がりの井の頭公園で、イスを並べる。発電機のブーンという音が響く。美術作家の藤浩志さんをゲストに迎えた「アートプロジェクトで789(なやむ)」(2014年7月)がわたしの TERATOTERA 初体験だった。青空トークイベントはとても新鮮で、面白かった。とくに、藤さんが話された「反重力ジョニー」のことは今でも忘れられない。逆さ吊りで演奏するパンクバンドで、現代美術家の伊藤存さんが参加していたとか……(いつか活動を再開されないかなあ)。

イベント後は、TERATOTERA ディレクターの小川希さんが運営するレジデンス(ゲスト・アーティスト用の宿舎)に移動して飲み会。結局朝まで続いた飲み会は、イベントを上回るくらいのインパクトも残し、わたしにとって TERATOTERA の濃い幕開けとなった。

その後も、翌年2月までにトークや展覧会などの企画が合計8本、予定されていた。そのスピード感に圧倒されながらも、だんだんと成り行きを見届けたい気持ちになり、会議に参加する日々が始まった。行き帰りには、元映画館「吉祥寺バウシアター」の前を通り、アーティストの浅井裕介さんが描いた壁画\*を眺めながら。

\*2014年5~6月、吉祥寺バウシアターとTERATOTERAの共同企画で制作した。

テラッコとして関わったイベントの一つは「TERATOTERA SOUND FES. 一音とアートが高架下に舞うー」(2014年11月)だった。JR東小金井駅の高架下を会場に、電車が響くなかで、山川冬樹さん、灰野敬二さんのライブなどがあった。たくさんの観客が集まり、アートに音楽に、自分も楽しい2日間だった。翌年2月の「TERATOTERA 祭り Encounter-邂逅-」では、初めて作家担当というものになったり、作品のなかに参加して小人を演じたり。それはボランティアであり、最も近い鑑賞者でもあった。これらをきっかけに、はまった作家さんも少なくない。もちろん、いつもその後は飲み会。

それからはことあるごとに、小川さんの「Art Center Ongoing」とレジデンスにお世話になった。テラッコの自主企画(?)で、「各国のインスタントラーメン食べ比べ」「インドカレー食べ比べ」「鴨そば」「築地市場直送の鯛しゃぶ」「いわき直送のサンマ祭り」などなど、食三昧。微力ながらも展示やイベントのお手伝いを続けられたのは、「宴会部長」はじめテラッコの皆さん、アーティストとの交流があったことも大きな理由だった。

数年経った2017年、元テラッコのHさんが宮城県石巻市の牡鹿半島に移住していたこともあって、初開催の「Reborn Art Festival 2017」を訪れた。数えきれないほどのご縁と活動のなかで、印象深いものの一つだった。このきっかけがなければ足を運ぶことはなかったかもしれない石巻は、津波で残った住宅の基礎と真新しい建物が混在し、東日本大震災から6年も経ったとは思えないほど、痕跡だらけの街だった。以前に TERATOTERA にも出展されていた岩井優さんをはじめ、石巻ならではの感慨深い作品をたくさん観ることができた。アート作品だけでなく、自然環境や被害の痕跡も実際に体験・体感することの大切さをしみじみ教えてくれた。忙しいなかに、泊まる場所を手配し、ずっと車を運転してくれたHさん、同行してくれた元テラッコに、本当に感謝。牡鹿半島では獣害被害もまた深刻だということで、そこから派生した作品も多かったが、Hさんの最高のおもてなしの手土産は、まさかの鹿肉。帰り道、大ぶりの鹿肉の塊をどう2分割するか、悩んだことは忘れられない記憶となった。

TERATOTERA はアーティストとの距離感が近いことも特長だが、わたしがうまく時間を作れず、中途半端なサポートになってしまうこともしばしばだった。それでも久しぶりに会えば、みんな温かく声をかけてくれる。作品の制作過程を見られたり、意図や考えを聞けるのも醍醐味。多くの記憶に残る展示作品やイベントに関われたこと、事務局、テラッコ、そしてアーティストとのご縁と温かさ、楽しかった日々、感謝しかない!



「TERATOTERA SOUND FES. 一音とアートが高架下に舞うー」で熱演するパフォーマンスアーティスト山川冬樹(2014年11月)



【上】田中義樹『ホストクラブuwatoko 君の瞳をインボルブ』(2016年10月)。前列中央が田中  
【下】ハンバーグ隊『石』の展示(2016年10月)。青い衣のヒロインが謎の行動を繰り返す

【上】民謡や祭りの音楽にパンク感覚を取り入れた「切腹ピストルズ」。2017年11月、JR三鷹駅前で演奏した  
【下】舞踏家・阿目虎南(大駱駝艦)の公演。2016年10月、JR三鷹駅近くの高層マンション前の広場で踊った

2016～2017年にTERATOTERAに参加。シンガポール発の『リアリー・リアリー・フリーマーケット』や、タイのアーティストを迎えたレジデンス事業「TERATOSEA」に関わったことがきっかけで、東南アジアのアートシーンに興味を持つ。現在は都内の私立美術館でキュラトリアル・アシスタントとして勤務。プライベートでは高円寺と新宿のバンク・DIYシーンに緩やかに関わる。趣味は銭湯と漫画。

## TERATOTERAから東南アジアのアートシーンへ

### 池田佳穂

2016年の春に「現代美術に関わる仕事がしたい」と一念発起で広告会社を辞め、数カ月後にはTERATOTERAの事務局スタッフとして働き始めていました。アートは好きでしたが、実はそこまで詳しくなかった私を、小川希さん、高村瑞世さん、テラッコの皆さんが温かく受け入れてくれたからこそ、肩肘を張らずに作品を楽しむことができました。現在でも現代美術に関わる仕事をしているのは、このときに作品を純粋に楽しみ、刺激的な作家さんたちと交流し、テラッコたちと現場を作り上げた喜びが大きく影響していると思います。

TERATOTERA参加時を思い返してみると、「西荻映像祭2016」で上映した『林千歩劇場「崖の上のティボリ」編』の制作過程が特に印象的です。実は初めて作家の制作過程に参加し、林千歩さんの型破りなユーモアのある発想と、そんな彼女につき巻き込まれてしまうテラッコたち、そしてギリギリの制作スケジュール、などいい意味で混沌とした状況でした。終電まで残り、作品制作や会場準備を行う作家とテラッコをみて、熱量を感じ、胸の奥がじんわりと熱くなった記憶があります。映像祭当日は異彩を放つ映像作品とインスタレーションに圧倒され、この世界観の作品を制作した作家と、それを支えたテラッコに感動しました。この経験から、作家をサポートする重要性や面白さを知り、また作家に対してリスペクトを持つようになりました。

その後、小川さんが東南アジアをリサーチしてまとめた本の翻訳と、TERATOSEAでタイの作家、ターウィーパツ・プレーヌーン(通称:ヨド)の担当を経て、東南アジアのアートシーンに関心を持ち、仕事の合間を縫って2017年の初夏にフィリピン・インドネシア・タイ・シンガポールのアートスペースを巡る旅にでました。『リアリー・リアリー・フリーマーケット(RRFM)』に招聘する予定だったPost-Museumの作家ジェニファー・ティオにも、この滞在中に会い、現地の視察をしました。旅が終わるころには、東南アジアの作家の有機的な活動と、社会問題に回答した手法や表現にすっかり魅了されました。RRFMにおいても、「お金」を使わない交換という設定を用いて参加者のコミュニケーションを促したり、プロジェクト全体がシンガポールの加速する資本主義を批評したりと、学びが多かったです。また『RRFM』は、武蔵野プレイスという地域に根付いた図書館を

会場に、シンガポールからジェニファーが来日、さらに日本人パフォーマーのAokidも参加し、それまでにはないRRFMだったと思います。地域住民だけではなく国内外の作家が参加することで、モノとスキルの交換から生まれる交流の他に、シンガポールの現状に思いをはせたり、身体表現の可能性を知ったりと、よりアート体験に近い文化交流が生まれたと感じました。

事務局を卒業した後は、東南アジアのリサーチを続けつつ、インディペンデント・キュレーターのアシスタントを経て、都内の私立美術館で勤務しています。2年と短い時間でしたがTERATOTERAでの経験は私にとってかけがえのないものです。未熟な私でしたが、多様なプロジェクトに関わらせていただき、本当にありがとうございました。



『林千歩劇場「崖の上のティボリ」編』の展示。画面右のピリヤード台で人形などを使った映像を撮影し、上映した(2016年9月)



2017年7月に開催した「RRFM」でジェニファー・ティオと対談する筆者(左)

ニックネームは「ゆりえる」。大学4年次に休学をし、都内のアートプロジェクトを渡り歩いていたなかでTERATOTERAに出会い、2017年5月から参加する。現在は、東京都を舞台に音楽とアートのプロジェクトをおこなうNPO法人トッピングイーストの事務局を務める。

## ボランティアなのに落ち込む、テラッコという謎

### 宮崎有里

大丈夫です、私もテラッコを「変だな」と思っている一人です。なぜって、テラッコたちが、よく落ち込んでいるから(笑)。アーティストに怒られて。イベント運営が上手いかわなくて……。本人たちが言っていたわけではないですが、「ボランティアだし」という気持ちと、「でもやると言ったのは自分だし」という気持ちが拮抗しているのではないかと想像します。

私が参加したことのあるアートプロジェクトでは、ボランティアが落ち込んでいるところはあまり見かけません。なぜなら現場を支えるボランティアは、責任のない守られたなかで活動をし、基本的に怒られることはなく、むしろ「手伝ってくれてありがとうございます!」と感謝される対象として扱われるからです。一方テラッコは、もちろん感謝される対象ではありませんが、本来のライスワークを日々こなしながら、企画の準備を同時並行で進め、しかもその役割はアーティストとの調整や、広報などプログラムの運営そのものに関わる立場としています。そしてさらに不思議なのは、テラッコはやらされている感じがしません。

それからテラッコの特徴として、中心メンバーに30代以上の男性が多いと思います。しかももともと美術系のお仕事をされていたわけではなく、割としっかりとしたキャリアを積まれている方々です。もしかしたら普段のお仕事では絶対にできないような企画を実現できることに魅力を感じられているのかもしれないですし、キャリアを積みながら築き上げられた自分の得意分野とテラッコでの立ち位置が合致し、プロジェクトの歯車のひとつとして掛け替えのない存在になっているのかもしれない。先に言ったプログラム運営に主に関わっていらっしゃるのも中心メンバーの皆さんです。「やらされている感じがしない」のは、もしかしたら皆さんが積み上げられてきた経験ゆえに、運営としてなにをやれば良いかがわかり、そしてそれを実際にこなす力があるのかもしれない。

TERATOTERA、そしてテラッコは私にとって、中学生の頃の図書室や保健室のようです。ずっと開いていて、ふとしたときに門を叩けば必ず誰かいて、しばらく気が済むまで通って、ぱったりと行かなくなって(すみません)、でも3カ月後くらいにひょっこり顔を出してみるとまた必ず誰かいて……。 “必ずいる”というのは物理的なことではなく、「TERATOTERAの活動、最近どんな感じかな、手伝いたいな」と思ったときに、“あ

の人に連絡すればTERATOTERAの近況がわかり、携わらせてもらえる”という窓口になる人がいることです。

一番重要なのはその「必ずいる誰か」で、不思議なのはその「必ずいる誰か」はディレクターの小川希さんでも事務局の方でもなく、テラッコだということです。そして「必ずいる」ことを、小川さんも事務局の方もコントロールしていません。必ず誰かがいてくれるから、私はいつでも立ち寄ることができます。

そして、窓口となる人は、人を巻き込むのが上手です。人の懐に入り込み、職能を見極め、的確な場所へ人を配置します。「ゆりえる、これやってみればいいじゃん」とよく言われている気がします。また人手が足りなくて困っているときは、すぐに頼ってくれます。頼られると「やりますぞ!」という気持ちに私はなってしまうので、人をそんな気持ちにさせられる人がそこにいることが、TERATOTERAのひとつの強みなのかもしれません。ブレない中心メンバーがいて、その周縁はぐるぐると入れ替わっていると思います。

そんな皆さんが次は、コレクティブを作ろうとしています。TERATOTERAが2020年度で終わり、台風の目であるディレクターの小川さんが海外研修に出るため、日本からいなくなるというタイミングにです。いったい、なぜ、どのようにして、ボランティアの集まりからコレクティブ結成となるのでしょうか。これは私にとっても謎でなりません。

この謎を紐解くために、その「ブレない中心メンバー」にこそ、話を聞いてみたいものです。



二藤建人『誰かの重さを踏みしめる』に協力する筆者(左下)。他者を足の裏に載せたり、背負ったりして体重を感じることを通して、他者という存在の重さに気づく作品(2017年11月)

派遣で事務職を務めている30代女性です。派遣の仕事で「Tokyo Tokyo FESTIVAL」のためのリサーチに関わり、アートを応援したい気持ちに火が付きました。TERATOTERAの活動を知り、2017年度に参加しました。

## お金ってなんだろう？ お金を介さないマーケットで考えた

海老原千佳

私は大学で美術の勉強をしましたが、それを職業にはしませんでした。それでもアートに対する想いはあり、「自分が好きなアートで役に立てることがあったらな、好きなアートを語り合える仲間ができたらいいな」と思っていた時に、TERATOTERAの活動を知り、説明会に参加しました。

参加して感じたのは、テラッコの皆さんは肩に力が入ってなくて、好きだからやるというシンプルな動機でそこにいるので、堅苦しい感じがなかったことです。「テラッコ屋」というテラッコの定例ミーティングが終わったら、だいたい飲み会になるのですが、それもとても楽しかったです。現在は新型コロナウイルスの影響で、職場や友人と飲み会で語り合うこともなくなってしまいましたが、「あの頃は楽しかったなあ、また語り合いたいなあ」とよく思い出しています。

私が参加したのは2017年度の『リアリー・リアリー・フリーマーケット(RRFM)』で、武蔵野プレイス前の広場で実施されました。出展者が用意したモノやスキルや情報など、人とシェアしたいものをお金を介さずに交換するマーケットでした。私はヨガインストラクターをしていたので、「身体との対話」と題して、整体師のテラッコと筋トレが趣味のテラッコと一緒に出展しました。

普段、モノやサービスに対してあまり意識することなくお金を支払っていました。ところが、「お金」というものがない!? では何を交換して人とコミュニケーションするのか? 私に何ができるのか? そう考えると、自分にヨガを伝えるスキルがあることにうれしさを感じました。伝えたいことがあり、それを交換できる人がいる。しかも通りすがりの人であり、私にもまだできることがあるんじゃないかと思えました。

「お金」がなくても知らない人と時間をともにすることができる、「お金」を介さないコミュニケーションも成立すると身をもって実感しました。私がヨガを伝えた人が満足したかどうかはわかりませんが、お金を払ってもらったらもっと違う伝え方をしたのかというと、心構えとしては何も変わらないといえます。「お金」を介するかどうかに関わらず、自分の想いに気づいた瞬間でもありました。サービスの価値、モノの値段、お金って何なんだろうと自分の体験を通して考えるきっかけになりました。

もう一つ印象に残っていることは、その年の9月に石川県珠

洲市で開かれた「奥能登国際芸術祭2017」のツアーにテラッコの皆さんと一緒に参加させてもらったことです。自分一人だったら行こうと思えなかったかもしれませんが。夏休み気分でも楽しみにして参加しましたが、奥能登の風景や作品を見るうちに、日本にこんな場所があるのかと自然に癒されるのと同時に少しショックを受けました。かつて人が集って住んでいた場所は、過疎化で建物だけ残っていました。そうした建物の一部は作品として新たに生命は吹きこまれているけれど、もし芸術祭がなかったらどうなっていたのだろう。このままでいいのだろうか? アートにできることは何なのだろうか? 私たちにできることはないのだろうか? と考えるようになりました。

この考えは今もずっと続いていて、アートの自由さやアートができること、アートの地域社会との関わり方はどんな方法があるんだろう、とこれからも考え続けていければと思っています。



『リアリー・リアリー・フリーマーケット』でヨガのスキルを参加者に伝える筆者(2017年7月)



『奥能登国際芸術祭2017』の作品の1つ、深澤孝史『神話の続き』(2017年9月)

「アートプロジェクト」という言葉を知り、その実践の場をネットで検索したところTERATOTERAと出会った。2016年からテラッコとして参加する。関わり方などを自由に選択できるTERATOTERAというコミュニティの懐の広さと、そこに集まる多彩な人々に魅力を感じている。2018年から「Teracollective」メンバー。

## 自由でテキトーで面倒、だから面白い

佐藤卓也

「心地よい面倒さ」がTERATOTERAの魅力だと感じている。本来、負の要素となるべき「面倒さ」がTERATOTERA10年の歴史の中で熟成され、テラッコを惹き付ける風味となっているのだろう。私もその魅力に取り憑かれたひとりである。

「心地よい面倒さ」の1つ目は「自由」である。TERATOTERAでは「つなぎますね」という合図で作家の担当となる。事務局から何をするか?を指示されることはない。作家に連絡し、作家の表現したいことを聞き、そこから自分ができることを見出し、実行する。一見とても魅力的な環境である。しかし、テラッコの場合、自分が見たい風景を実現させるために、もう1、2歩踏み込んでしまうのである。自由であるがゆえに、自身でコミットすべきタスクを増やし、結果としてボランティアの域を超えたタスクを実行することになる。

例えば、私は「TERATOTETA祭り2019」で美術家・岡田裕子さんの『ナニカライワウ』を担当した。JR三鷹駅前の広場を会場とする観客参加型のパフォーマンスで、参加者には岡田さんが制作した小さな木の作品を進呈した。その作品を設置するための棚を私が製作したことなどが、まさにボランティアの域を超えたタスクである。岡田さんがラフに描いたイメージを実現するために、その風景を見たいという欲求に、際限なくタスクを増やす「自由」が発動する。作家との関係が深まることと比例して、タスクを増やす自由が影響力を増すことは、面倒なことである。

2つ目は「好奇心」という面倒さである。TERATOTERAではテラッコがイベントを企画することがある。好奇心旺盛で個性的なメンバーがそろうから、他では見られない面白い企画案が生まれてくる。しかし、度を過ぎる好奇心が企画に反映し、多少の無茶が交じってくる。『駅伝芸術祭』(2018年、2019年)がその典型だろう。芸術家が走者となってタスキをつなぐことで、芸術とスポーツの融合を図るという企画である。私には、「10時間程度、移動し続ける作家たちの映像を、途切れることなくライブ配信できる方法を用意する」というタスクが与えられた。作家の移動スタイルは、匍匐前進やパフォーマンスをしながらの走行、全力でのダッシュが考えられるという。当日行われる「どんな状態にでも対応できるように」という要請は、既にアマチュアレベルのタスクじゃないかと苦笑

いをしたのを覚えている。好奇心を満たすために妥協を許さない姿勢など、面倒としか思えない。

3つ目は「テキトー」という面倒さである。テキトーとは、小川希ディレクターの言葉で、アーティスト集団のオーガニックなあり方を指す。メンバー間にヒエラルキーは存在せず、集団としての決定は、話し合いやその場のノリによって行われる様を表す。テラッコがまさにテキトーな集団なのである。長年在籍しているメンバーでも宴会部長としてお店の確保に動いたり、1年目の新人でも作家とともに作品制作をし、年度末には、記録冊子に掲載する原稿の執筆を求められる。在籍年数も年齢も全く関係がない。フラットな関係が自然に作られている。もちろん、発言権に強弱はなく、話が盛り上がればなんとなくその方向に進み出す。集団活動を進めていくうえで、多少のヒエラルキーがあった方がやりやすいこともあると思われる。リーダーが存在しない組織は、なにかと面倒なはずである。好奇心旺盛な面々が野放しにされている、リーダー不在の組織を想像してほしい。カオスな状況が思い浮かぶだろう。そもそも組織なのか?とも感じるかもしれない。しかし、TERATOTERAでは、好奇心をエネルギーに変え、自由を十分に生かして作家とともに創造し、互いに役割を補いながら、楽しみながら活動する文化が生まれている。

テラッコが発する「面倒」は「面白い」という意味だと私は感じている。



岡田裕子『ナニカライワウ』。岡田(中央)が壇上の参加者に「祝い状」を読み上げている。左後方の棚を筆者が製作した(2019年11月)

2016年からTERATOTERAに関わり始めた会社員。高校が中央線沿線にあったことや小劇場や街なかアートが好きだったこともあり、土日の時間を使って参加。テラッコには少ない「男子」枠として、重いものを運ぶ、「駅伝芸術祭」のカメラ伴走をするなどで貢献。最近は茶碗蒸し作りに精を出す。

## 民俗芸能を通じて、「豊かさ」を問い直す

### 浪江航一

2018年8月、真夏の阿佐ヶ谷の街にアーティスト武田力を招いて、街を舞台とした観客参加型のパフォーマンス『踊り念仏』を実施した。「踊り念仏」は本来、太鼓や鉦(かね)を叩いて踊り、念仏を唱えて遊行する宗教的舞踊。平安時代中期に始まり、室町時代には大衆化し、盆踊りの源流ともなった。こうした庶民に親しまれ、民間に伝わる風習や風俗である民俗芸能に関心を寄せる武田は、この「踊り念仏」を読み換えて、主体的にその土地と関わろうとする行為そのものを「踊る」と呼んでいる。

デモをするには警察に届け出る必要があるように、街頭での行為には(暗黙のものも含めて)さまざまな規制やルールがある。それらを武田は「街の条件」と呼び、パフォーマンス当日は、集まった参加者たちに事前にリサーチした阿佐ヶ谷の街の条件を武田から伝えた。参加者はその条件を読み、それぞれの解釈にしたがって街頭でパフォーマンスを繰り広げた。その姿は、街の日常に潜む「イブツ(異物)」の趣だった。

それから2年が経った2020年、阿佐ヶ谷どころか世界の街は様相を一変し、街はマスクをした人たちが溢れるイブツだらけの街になってしまった。今のこの状況をどう捉えているのか、今後の踊り念仏や武田の活動、作品制作に関して、10月10日、福岡県八女市にて滞在制作中の武田にオンラインで話を聞いた。

— 新型コロナウイルスによる緊急事態宣言が出た頃の数カ月間、どこでどのように過ごしていましたか？

**武田** 昨年12月は中国・武漢に滞在していました。武漢でアートスペースがオープンし、12月半まで展覧会をしていたんです。ちょうどその頃から最近周りで咳をしている人が多くないかといわれ始めていました。1月は日本にいましたが、2月、3月は国際交流基金を通じて、民俗芸能と芸術の関係をリサーチするためにフィリピンとタイに行っていました。民俗芸能の調査は山奥に行くことが多く、特に3月はタイ北部の山奥に滞在していました。3月24日に帰国したんですが、2日後の3月26日からタイでロックダウンが始まったので、直前の帰国でしたね。当時はタイの空港も雑然としていて、怒号が飛び交う中を帰ってきた感じです。

日本に帰国後は、実はこどもが産まれたんですよ。

— なんと、おめでとうございます！

**武田** 最初は東京で産もうかなとパートナーと話していたのですが、東京はすでに感染が広がっていたことと、僕の生まれが熊本だったこともあり、5月の初めには熊本に引っ越ししました。その頃の熊本は自粛期間で、市内は閑散としていたんですが、7月以降は感染者数も少なくなっており、通常通りに戻っていました。7月3日に無事に出産したのですが、その翌日は豪雨に見舞われました。幸いにも熊本市内はそこまで大きな被害はなかったので、出産後、僕は大雨の中を自転車で病院に通うというような生活をしていました。

— 怒涛の時期を過ごされていたんですね。今は福岡に滞在されているそうですが。

**武田** 8月24日から福岡県八女市の笠原という集落にいて、農業とアートの関係性を現代にどう編み直すことができるかというテーマで、アーティスト・イン・レジデンスをしています。

この奥八女でのプロジェクトに僕が関わるのは3年目で、昨年「八女茶山おどり」を作らせていただきました。奥八女には「八女茶山唄」という作業歌がありました。その唄を歌いながら、かつてはお茶を摘んだり揉んだりしていたそうです。お茶摘みの八十八夜の頃には、集落を越えて、柳川や有明からもお手伝いの方が訪れ、お茶を作る過程で、いろんな縁が結ばれてきました。しかし、今は全てが機械化され、唄は歌われなくなり、次第に忘れ去られていきました。

お茶作りを介して、いろいろな方との関わりが生まれ、唄をはじめとする文化や生活が営まれてきたんです。この唄は、その土地にとって、ある種のアーカイブの機能を持っているので、機械化によって消えていくのはもったいないですよ。八女茶山おどりの振り付けは、笠原集落にある「よかよか」という高齢者福祉施設の方々にお茶摘み、お茶揉みの所作や、その頃はどんな集落だったのかなどのお話を伺い、八女茶山唄に当てていきました。

— コロナウイルスで社会の風景は、その前と比べるとイブツだらけの世界と一変しましたが、今の状態をどう感じていますか？

**武田** 自分にとっては産まれてきたこどもがまずイブツなので、コロナ以外のニューノーマルの時代が個人的に始まったなという感覚です。民俗芸能を用いながら、作品を劇場の外で、かつ参加型で作ってきた立場として、新自由主義のグローバル化の弊害がコロナによって露わになったのかなと思っています。コロナウイルスの発生原因は現状はわかりませんが、温暖化によって永久凍土が溶けてしまったからとか、ウイルスを持った動物が山の中の食べ物がなくなって里へ下りてきてとか、いろいろわれていますよね。

大事なのは、自分たちの生活をどう立て直すかを考えたときに、土地ごとの条件に照らした循環性とどう繋がるかであると思います。その条件に気づき、繋がるために自分の持

っている身体や感覚をこのコロナの時代にどう取り戻せるか。踊り念仏はまさにその問いに関わるもので、誰かが決めた物差しではなく、自分の物差しで街を眺めてみるという行為です。都市に住んでいると、誰かが決めた様々な物差しにしたがって生活してしまいます。しかし自然と関わっているとそれが何度もひっくり返されます。災害などが顕著で、大雨や地震などをきっかけに自然と対話を続けていくことで、自然との循環性を生み出していけると思っています。だから人を含む森羅万象と対話をし、その関係性を再構築していく必要はあるのではないかとも思っています。

— 武田さんは観客を巻き込んだ作品づくりを多くなさってきましたが、コロナウイルスによって、集まることがよしとされない状況になりました。作品づくりにどんな影響がありますか？

### 『踊り念仏』参加者が体感した「街の相貌」

『踊り念仏』には公募に応じた十数人が参加した。武田から「街の条件」の説明を受けた後、阿佐ヶ谷の街に散り、思い思いのパフォーマンスを繰り広げる。約30分後、再び集合し、それぞれの体験を語り合った。

アーケード街を「二人三脚で歩いた」参加者は、「見て見ぬ振りをしたり、驚きつつ道を空けてくれたり、と通行人の反応は様々だった」。飲み屋街では「阿波おどり風に踊ったが、ほろ酔いの人も多く、それほど浮き立った感もなかった」という。「海外からの観光客という設定」を加えて英語で道を尋ねた参加者も。「皆さんがとても親切に頑張って道案内をしてくださった」が、その分だけ、「人の善意を欺いてしまった罪悪感」が残った。「確実にそこにいるのに、空気のような存在として扱われた」という参加者は、マイノリティとマジョリティのどちらが「イブツ(異物)なのか」と煩悶する。

平穏に見える街も、「異質な他者」には異なった相貌を見せているのかも知れない。そんな気づきを、『踊り念仏』がもたらしてくれた。



『踊り念仏』に参加し、アーケード街で肩を組んで歩く女性たち(2018年8月)



パフォーマンス後に「振り返り」で語り合う参加者たち(2018年8月)

3次元設計者。TERATOTERAには2015年度から参加している。アーツカウンシル東京の人材育成事業「思考と技術と対話の学校」2期生。和田昌宏の映像作品『黒い廊下、あるいは2人の男と21人のネルシャツ』に現代美術家・山本篤とW主演。個人的な営みとして東京の街なかで焚火を囲むプロジェクト「火床Café」を行なっている。趣味はサウナと建築巡り。

## 仲間たちと交歓する文化が生む テラッコの「熱量」

山上祐介

街なかで行なうアートプロジェクトは実に面倒だ。公共空間がゆえの制限が数多く立ちちはだかるためである。まして東京都やアーツカウンシル東京との共催事業となればなおさらだ。そのような状況下でもテラッコはJR中央線沿線に11年間、多様な価値観と人々が交流するテンポラリーな場を創ってきた。

TERATOTERAにはテラッコが中心となり、企画発案からアーカイブまで一貫通貫でプロジェクトを創りあげる文化がある。作家とも距離が近いアートプロジェクトと言えるのだが、これだけがテラッコの熱量の源であると考えするには少し短絡的すぎるような気がする。

“自発的に携わった物事には何かしらの愛着が生まれるのではないか?”。TERATOTERAに関わり5年が経ち、私は最近そのように思う。

ここで、私がTERATOTERAの活動において最も印象に残った出来事について触れてみたい。

2015年にTERATOTERAに携わってから、私はある欲求を持ち始めていた。設計者としてのスキルが畑違いであるアートの世界でどれくらい通用するものか試してみたくなった。これは自己実現欲求であり、承認欲求ではない。

そんな折、この欲求を実行に移す機会が訪れた。2018年の「TERATOTERA祭り」で以前から気になっていた作家を招聘作家として提案したところ、その提案が通ったのである。作家の名前は小林清乃さんといい、そのまま作家担当を任されたのである。

そのとき私は今後取り組むべきフェーズとして次に挙げる4段階に切り分け、実行してみた。第1段階は作家にオフアを行なう営業のフェーズ、第2段階は作家と作品の概要を決める設計のフェーズ、第3段階はその概要をもとに作家が動きやすいよう環境を整える施工のフェーズ、第4段階はこれまでの活動をアーカイブとして記録冊子にまとめる収穫のフェーズである。

特に第3段階、施工のフェーズではテラッコをはじめ、地域の皆さまなど、多くの方々に協力をいただき、この作品は私がTERATOTERAで最も思い入れのある作品の1つとなり、私の良い活動事例になったのである。

その後、小林さんとは資生堂ギャラリーの公募展「第13回 shiseido art egg」でもお手伝いする機会に恵まれた。このときの作品は、「TERATOTERA祭り」のようなアート型のプロジェクトというよりプロジェクト型のアートであり、会場は銀座、私の立場は作家からの相談を受け状況に応じて立ち振る舞うというものだった。TERATOTERAとはアプローチが大きく異なる展覧会であったが、ここでの経験で見えてきたのが前述した仮説“自発的に携わった物事には何かしらの愛着が生まれるのではないか?”である。

テラッコはバックグラウンドが異なる老若男女、多種多様なメンバーで構成されている。そんなテラッコが公共空間に多種多様な価値観と多種多様な人々が交流するテンポラリーな場を創る。テラッコの視線で言うならば創るというより、テンポラリーな場を獲得すると言った方が合っているだろう。そこで獲得した場には作品はもちろん、そこに至るまでの出来事やそこで出会った人々があり、当事者でなければ得られない愛着が生まれる。

そのような、場の獲得感や愛着を会期中はもちろん会期後も仲間たちと交歓し合う文化がTERATOTERAにはある。これこそがテラッコにおける熱量の源、火床(ひどこ)ではないか? 私は最近、そのように感じる。



小林清乃「交わる時、あなたの語るここの声」の会場風景(2018年11月)



「Asian Art Award 2018」で上映された和田昌宏『黒い廊下、あるいは2人の男と21人のネルシャツ』。画面右が筆者(2018年3月)

与えてくれます。ただそのままではその価値を共有することが難しいので、アートという手法を用いながら現代に再表象していきたいです。

民俗芸能をアーカイブすることは、地域活性化するために行っているわけではないですが、そこに回収されていくことはある程度仕方のないことだと思っています。そもそもPRはいかに物売るかという消費構造の中に埋め込まれているものですね。例えば、八女茶山おどりには実は元祖があるんです。それを踊られていた方に、その経緯を伺うと、八女茶の販売PRから生まれていて、百貨店などで踊られていたそうです。

踊りを介して八女茶を紹介するだけでなく、生活になにかしらが返って来るような関係性や縁がつながっていく仕組みをデザインしたいと思っています。PRの概念そのものも、売上などの数値化できる指標だけでなく、八女茶をきっかけにどういった交流ができたのか、たとえ一人だとしても、縁をつないでいける仕組みを八女茶おどりから作っていけたらいいなと思います。

これはいま進めている他のプロジェクトにも通じることです。従来のやり方では現代の多様な分断を乗り越えられない。アートをを用いながら、人に限らず、魑魅魍魎も含めて繋がるコーディネートをすることで、新しい生き方を模索し、提案していきたいですね。



福岡県八女市の笠原集落で「八女茶山おどり」を創作し、指導する武田力(2019年)＝撮影:富永亜紀子/提供:九州大学ソーシャルアトラボ

武田 もちろん、オンライン化は進みました。アジアの若手アーティストたちが集う「アジア舞台芸術ファーム(APAF)」\*ではファシリテーターを務めさせてもらっていますが、プレゼンテーションもオンラインで行います。人と人とが対面して出会うという意味では厳しくなっていますが、考え方はとしては、資本主義経済に代わる社会の仕組みの提案を民俗芸能のフィールドからできるのではと思っています。

\*アジア舞台芸術ファーム <http://butai.asia/ja/>

例えば今年、土を育てるというテーマで「奥八女芸農学校」\*\*を行っています。今年もそれもオンラインで実施しています。農産物とテキストを郵送して、週に1回オンラインで集まって、議論しています。

\*\*奥八女芸農学校 [http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/200909-0930\\_okuyame.html](http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/200909-0930_okuyame.html)

1週目に送ったのが、田んぼの土です。水が張っていた田んぼの土を2、3日乾かして、小さな袋に入れて送りました。田んぼには5000種類ぐらいの生物がいて、その中で循環が保たれているんです。なので水をあげたり、日の光を当てたりすると何かの生物が出てきます。何が出てくるのは、送られた受講者の生活環境や育て方によって違ってきます。どのぐらいの太陽の光を土に浴びせるか、どのタイミングで水をあげるかなどが変わってきます。土の中には卵も入っているので、ミジンコが出てきたりします。田んぼの社会が小さな袋の中に広がります。送られてきたその土をどう育て、何を考えて、どういった実践をしたかを参加者同士で共有していきました。2週目に米、3週目にお茶、4週目はどのように土を還すかというテーマでした。なぜ還すことをテーマにしたかという、土は固有性を持っているので、今回の土を無作為に捨てると、その土地の生態系を壊してしまいます。自分が育てた土をどういった風に次の未来に繋げることができるかを最後は考えました。

どういった風に循環性のある生活を都市空間の中でも実践できるかという実験的なワークショップですね。

—今後の活動について教えてください。

武田 お金だけでなく、生活の豊かさをどう追求できるかと考えるときに、今の時代も農業や民俗芸能は大きなヒントを

2016、2017、2019年度の「アートプロジェクトの0123」を受講し、2017年ごろからTERATOTERAの活動に参加。2018年と2019年にそれぞれ『駅伝芸術祭』、『駅伝芸術祭リターンズ』を「iwaosho」名義で企画する。「東京リアリー・リアリー・フリーマーケット(TRRFM)」世話人。年間100超の展覧会を鑑賞している。

## 芸術と政治と「駅伝芸術祭」

### 岩尾庄一郎

「あんたあたしと一体何を共有したいっていうのよ」。年配の女性が作家に嘸みついています。2017年の「TERATOTERA祭り2017」にスタッフとして参加していた祭り当日、昼の短い休憩時間に担当外の作品を見ていたときに出くわした光景です。これが味わい深くてなかなかいい。

このやり取りの面白みを感じるには、少しばかり展示の説明が必要です。山本篤『REMAKE』は、パブロ・ピカソの大作絵画『ゲルニカ』を黒板にチョークで再現するパフォーマンス。山本さんは目隠ししてピッチングマシンから射出される球を避けながら、観客によって指示された場所に記憶したゲルニカのパーツを描きます。

なぜ球を避けながらなのでしょう。ヒントは会場入り口脇の壁に貼られた画像コピーにあります。上部には絵のモチーフ『ゲルニカ』の写真、下部にはヴィト・アコンチ『目隠しキャッチ』の画像。アコンチは1960年代から70年代にかけて自らが出演するビデオ作品を数多くつくっていてこれもそのひとつ。目隠ししたアコンチに向けて次々とボールが投げつけられますが、視覚が奪われているので全く捕れません。捕球するアクションは常に当たったあとに起きます。アコンチの手は虚しく宙をつかむばかり。

山本さんは『ゲルニカ』を描く方法に『目隠しキャッチ』を選んだのです。しかも球は人ではなく機械が放つ豪速球。会場に来た女性はこの組み合わせに混乱して冒頭の発言に至ったようです。「私はモダンアートが好きなのよ。でもあんたがやっていることは全然分からない」。ピカソまでは理解するが、それがアコンチ以降に結びつくことは受けとめがたい。アコンチは美術史上でモダニズムからコンテンポラリーアートにかかるあたりに位置していて、山本さんはそうしたことを意識してピカソとアコンチの2者を組み合わせたのかもしれない。目隠しを外さぬまま、モダンとコンテンポラリーを橋渡しして女性との溝を埋めようと努めているのでしょう。ところが昼の休憩はもうまもなく終わる時刻。私はこのの成り行きを見届けられぬままその現場を去ったのでした。

\*



山本篤『REMAKE』。目隠しをしたアーティストが観客の指示を受けて『ゲルニカ』を描く(2017年11月)

『ゲルニカ』はスペイン内戦でフランコ将軍側と組んだドイツ空軍による史上初の無差別空爆を描いた油彩画です。不当に飛来物の危険に晒される『目隠しキャッチ』と『ゲルニカ』は、人間が人間に振るう暴力の理不尽でつながっています。立場や意見の異なる人が敵対的関係をとることであらたな価値が生まれることを説く美術評論家のクレア・ビショップは、近著『ラディカル・ミュゼオロジー』のなかで、『ゲルニカ』を所蔵するマドリッドのソフィア王妃芸術センターが、スペイン内戦期の歴史的背景や文脈を踏まえたいうで、『ゲルニカ』を鑑賞するようキュレートしていることを示しています。「その結果、『ゲルニカ』は、形式的な革新性や並外れた才能といった美術史上の言説のなかというよりも、むしろ社会的で政治的な歴史のなかに位置づけられることになる」。ビショップは、コンテンポラリーがそもそも政治的概念なのだと言います。

政治的、そう、「TERATOTERA祭り2017」のテーマが「Neo-political～わたしたちのまつりごと～」、まさに政治なのでした。この年に私が担当した山城知佳子『ヒューマンビートボックス・War』も、日本と近隣国の政治的思惑に翻弄される沖縄が置かれた複雑な状況を、非言語音声と身体表現、映像を通じて鑑賞者に想像させるパフォーマンス&インスタレーションです。祭りのテーマを案出したTERATOTERAの小川希ディレクターは、政治的な事象をコンテンポラリーアートの大きな要素と考えています。

やはり小川さんがコーディネーターと講師を務める、連続講座「アートプロジェクトの0123」(「0123」の読み方は「オイッチニーサン」…この名前を呼ぶとき毎度気恥ずかしさを感じます)でも、モダン以降のアートをめぐるムーブメントとして、フォーマリズム(形式主義)、コンセプチュアリズム(概念主義)、そしてポリティカル(政治的…これだけ形容詞なのがアートにおいても暫定的な位置づけになること意味しているのかも。ポリティカリズムという領域はまだありません)を、モダン～コンテンポラリーの大きな潮流を捉える3本柱に据えます。講義では先述したヴィト・アコンチもビデオ映像を駆使したパフォーマンスアートとして紹介されます。ビデオ表現はそれまでのフィルム映像に比べて、撮影・上演形式がより個人的になるため、制作する側と鑑賞する側の境界線をあいまいにするメディアであることを意識させます。アコンチは後の世代の作家にも様々な影響を与えます。福島第一原子力発電所事故現場で監視カメラを指さす「指さし作業員」映像も、アコンチ作品へのオマージュであると作業員本人が声明をだしました。きわめて政治的アクションです。

\*

アートの政治性をめぐって、ひとつ印象に残っている経験があります。TERATOTERAの活動に関わりのない作家による、アトリエを使った展覧会を見たときの話です。その若い作家は、空間展示のひとつの要素として日章旗をアトリエの窓いっぱいに掲げていました。窓外からはぼんやり日の丸が見えます。ほかに展示されている絵画などの平面作品からはその意図をはかりかねてなぜなのか訊きました。作家の返答は「なんか日の丸って気持ち悪いじゃないですか」。その衝撃。何か変わったもの、目をひくものとして日の丸を使っているようなのです。

1965年生まれの私は、安保闘争、大学紛争の熱が引き、極左組織が先鋭化して三菱重工ビル爆破事件や日航機ハイジャック事件などが相次ぎ、世の中が左翼思想に幻滅していった時代に幼少期を過ごしました。1970年代に青春期を送った私よりも上の世代は「しらせ世代」などと呼ばれ、政治的無関心をかこつことが時代の空気であり、ファッションであり、身を守る術でした。当然、保守思想とも距離を置くことが

自然な姿勢となります。一方で、高度経済成長の活況のなか、(これは私の生まれる前年開催なので実は体験していませんが)東京オリンピック、大阪万博、と続いた国家規模の催事に誇らしげに日章旗が掲げられた記憶があり、身近な人から伝え聞かされました。日の丸は実に親近感を覚える図像です。こうして(明治期に仮構された)伝統的日本を表象する日の丸に対して、忌避と愛着がないまぜになったアンビバレントな感情を抱くようになります。しかしそれは決して「気持ち悪い」ものではありません。日章旗をモチーフにしたアートは連続とあり、1959年生まれの柳幸典や私と同じ1965年生まれの会田誠などはそれぞれ日章旗をモチーフにした作品をつくっていますが、それなりの覚悟をもって心身に刻まれた記憶と対話しながら制作しています。

明治期に新しく日本画というジャンルを創造した岡倉天心は、その過程で、詩と書と画が一体化した中国に由来する文人画を排除して、浮世絵は傍流視しました。ここには国粹主義思想に基づく政治的思惑があります。少しばかり大きなことをいうと、西洋でも、信仰とともにあった美術が、ルネサンスを境に王侯貴族や豪商を支援者とするように変わります。近代の幕開けとともに市民層が芸術文化を享受する主役におどりてたのは民主主義・資本主義の勃興と関連します。

芸術のあり方はときの社会情勢や権力構造に寄り掛かり、または反発し、を繰り返しながら新しい表現を生んできました。未来派然り。ダダイズム然り。社会活動と芸術活動を一体のものとしたヨーゼフ・ボイスはドイツで緑の党結党に深く関わります。日本で1964年の東京五輪や1970年の大阪万博のときに生まれた芸術も、丹下健三の建築や岡本太郎の『太陽の塔』のみではありません。再編される東京の美化を揶揄するハイレッド・センターによる『首都圏清掃整理促進運動』や、ダダカン(糸井貫二)による全裸パフォーマンスなどが敢行されたことは国家規模の催事に違和を投げかける行為の芸術でした。

\*

TERATOTERAで2018年度、19年度と2年連続して開催した「駅伝芸術祭」もまた、その成り立ちからして多分にアー



トと政治に関わる訴えをはらんでいます。特に、2020年に予定されていた再びの東京オリンピック・パラリンピックへ向けてスポーツ文化行政への違和表明でもあります。それは端的にいうと、近代オリンピックを組織したクーベルタン男爵が唱えたオリビズムの理念「スポーツと芸術の祭典」を十分に体現しているのか、という問いかけです。

近代オリンピックでは、その草創期に、スポーツ種目に並んで芸術種目が設けられていました。芸術競技は古代オリンピックでも重要視されていて、クーベルタンは芸術とスポーツが相補的にその意義を高める教育の権能を重要視したのです。そこでオリンピック・パラリンピック開催都市は、カルチュラル・オリンピアドと呼ばれる文化行事開催を義務付けられています。一体このことをどれくらいの人知っているのでしょうか。「Tokyo Tokyo FESTIVAL」や「日本博」というプロジェクトの名前をみかけたことがあるのでしょうか。名前を知っていたとして、それがカルチュラル・オリンピアドの一環として催されていることがどれだけ認知されているのでしょうか。

そんな疑問から芸術・スポーツ・教育が相まみえるクーベルタンの思想をもう一步進める試みとして、芸術とスポーツを融合させてその意義を人々に知らしめるプロジェクトである「駅伝芸術祭」が実現したのでした。芸術しながらスポーツする。スポーツしながら芸術する。タスキを受け渡して進む「駅伝芸術祭」は、参加する者、偶然目にする者を、否応なくスポーツと芸術を往還するまだ見ぬ荒野に導きます。唯々ほふく前進する参加選手。タスキを争奪しながら舞い踊る白塗り半裸と黒尽くめのペア選手。たぶん路上で誰もが初めて見る光景。なぜ駅伝で芸術なのか。見た者は自分で考えなければいけません。なかには不快に思う人もいます。あまりに不審に感じたのでしょう。沿道の商店会からはクレームが入りました。110番通報を受けて警察官も事情を聴きにきました。市民が行き来する路上で、公園や商店街など公共の空間で、展開する駅伝芸術は、参加者と鑑賞者に、表現の自由が厳然としてあることを、しかしそれは無制限ではないことも、体感させます。

の政治学』で、参加型アートについて「そうしたアーティストは、社会的・政治的な組織の新たなモデルを築き上げるといふ途方もない重責を、〔芸術の〕内部において構造化させるのだ。」と断定します。そのように生まれるアートには、かつてなかった回路を発生させてつなぐ力があります。つないだ先が軋轢に満ちてなめらかでない関係となる場合もあるのです。

\*

私は、この文の冒頭でゲルニカ&目隠しキャッチを憤っていた女性や、駅伝芸術を見て警察に通報した人と話せるならば、身体を通じた芸術と政治の関係について考える契機をあなたと共有したいのだ、と伝えたいと思っています。その姿勢は、新型コロナウイルスの感染拡大に対して行政がとる施策によって、幸福度や生死までもが左右されるいまの状況にも適合するでしょう。哲学者のミシェル・フーコーは、人間の自然的な生が権力機構に取り込まれていくことを「生政治」という概念で説明します。コロナ禍で生政治が人々の行動を統治するなか開催される2021年の東京オリンピック・パラリンピックがどんな形になるのか。オリンピックが文化芸術の祭典でもあるからには、生政治と芸術の関係を提起することがいままさに必要です。



「駅伝芸術祭」第1区間で桃太郎とキジに扮した山崎皓司(右)と前川遙子(2018年10月)

クレア・ビショップは、主著『人工地獄 現代アートと観客

【上】「駅伝芸術祭」(2018年10月)の第2走者、舞踏家・松原東洋(左)と美術家・村田峰紀  
【下】「駅伝芸術祭リターンズ」(2019年6月)の第3走者、ダンスグループ「新人Hソケリッサ!」

文化系女子大学在学中、2010年から2012年までArt Center Ongoingにインターンとして在籍。就職を機にインターンの座を降りることに。現在は団体職員として人事労務の仕事をしなが、2018年から事務局としてTERATOTERAに携わっている。

## はた 側からみた

森 ゆうな

私は大学時代に、小川希さん(TERATOTERAディレクター)が運営するArt Center Ongoingでインターンをしていた。その繋がりから2018年に声をかけてもらい、TERATOTERAとのご縁ができたのだが、テラッコとして携わることをすっ飛ばして、事務局として関わらせてもらっている。

TERATOTERAのイベントには、インターン時代から観客として何度か参加したことがあり、顔見知りのテラッコも数名いた。その当時のテラッコの印象といえば、インターン時代によく目にしてきた宴会風景が思い浮かぶ。老若男女のテラッコがみんな楽しそうで、愉快的なたちだ、というものだった。ところが、TERATOTERAの内側に入ると、テラッコの別の一面を見ることになった。

私が事務局として最初に参加したイベントが、テラッコが企画立案から進行管理、運営などを行う、テラッコ企画だった。しかも立て続けに2本。私が事務局として何をすべきかわからず、右往左往していたからでもあるが、その時のテラッコたちの動きが、凄かった。ここまでテラッコが対応するのか、と驚いた記憶がある。企画実現のための作家とのやりとりはもちろん、現地視察から会場交渉等々。そして本番が近くつれ、テラッコも睡眠時間を削りながら日々のタスクをこなしていた。アドレナリン大放出の状態ですべての間にかテラッコ一同が一体となり、本番を迎えた経験は学生時代の学園祭のようで楽しかった。

作家から厳しい指摘を受けた場面でも、自分の企画したイベントだからと、全面にその言葉を受け止めたテラッコもいた。その時、事務局の職務を全うできていない自分の不甲斐なさやテラッコの勇姿に、人前で涙してしまった記憶は恥ずかしい過去である。

テラッコたちのパワーと熱意に圧倒されながら、迎えた「TERATOTERA 祭り2018」では、テラッコの中心メンバーで構成されたTeracollectiveが主体となり、コンセプトの立案、作家の選定を行った。私もTeracollectiveのメンバーの一人として参加した。そこで振付家・ダンサーの砂連尾理(じゃれお・おさむ)さんをお呼びしたいと声を上げ、オファーができることになった。砂連尾さんも快く承諾してくれた。祭り当日に到るまで、砂連尾さんが講師となるワークショップに参加

してみたり、パフォーマンス実現のためにどうするか一緒に考えさせてもらったり、とても楽しい時間を過ごさせてもらった。こんなことを思うのはおこがましく、実際は全くもってありえないのだが、一緒に作品を作っているような錯覚を覚えてしまう場面さえもあった。

当日のパフォーマンスは、それはもうとても素晴らしく、感動した。パフォーマンスを見ることができて嬉しく思ったことはもちろんだが、それまでに至る経緯で砂連尾さんと過ごせた時間も宝物のように感じた。このような素晴らしい経験をテラッコはしてきたのか、とこの時自分自身でも同じ経験をし、羨ましく思った。テラッコたちのあの原動力がどこからやってくるのか、理解できた気がした。

この文章が載るTERATOTERAの記録集には、他のテラッコたちが見てきた風景や、経験し感じてきたものが収められる。私はきつと、テラッコたちの文章を羨望の眼差しで読むことになるだろう。



『妊婦さんと踊る』で、アートコーディネーターで妊娠7カ月の古原彩乃と踊る砂連尾理(2018年11月)



『妊婦さんと踊る』の開幕を告げる筆者(左)

2018年春、自身の企画でアーツカウンシル東京の助成金に応募したのが事の始まり。その流れで「アートプロジェクトの0123」を知り受講。授業の一環で秋の「TERATOTERA 祭り2018」を裏方として体験しました。アートについて語り合えるこの楽しい居場所を見つけてくれて幸運です。

## Can't stop ongoing.

吉末真由美

初めての「TERATOTERA 祭り」でお手伝いすることになったのは、maadm(まどえむ=現代アート作家の原田賢幸さん)の『Can you stop?』という作品で、とても印象に残っています。

笑っていいショーなのか、笑ってはいけない真面目な展示なのか、その場にいたみんなが戸惑っていました。maadmは白衣を着て髪を爆発させ、裸足で電気椅子に拘束され苦しうに座っています。これはその電気椅子に電流を流すスイッチを観客が押す参加型のパフォーマンス。奥の壁面にmaadmが痛みに顔をしかめる様子がプロジェクターで映し出され、参加者の「快・不快」の反応が脳波を計測する装置でチェックされます。

わたしは快の反応を示した参加者に、ボルテージをさらに強くして続行するか、それとも途中で終了するかを尋ねる役をしました。暗くて荒廃気味の会場はぼんやりと赤く、冗談めいたマッドな実験場。でもmaadm自作の装置は本当に目盛り通りの電流を彼の体に流していました。すぐに止める人もいれば、笑いながらどんどん上げていく人もいます。初めはわたしもよくわからなくて笑っていたことを告白します。しかしお手伝いで3日間をともに過ごすうちにmaadmの真剣さに気づき、心を打たれました。彼は真面目にあの作品を人間の良心を呼び覚ますための装置として作っていたのです。

それがわたしにとって初めての現代アート作家との触れ合いでした。突飛なことをやっているにも関わらずアーティストがとにかく真剣であることが驚きでした。また、アーティストは怖くなく、わたしと別種の人間というわけでもなかった。むしろ常識のある、どちらかというとても賢い人でした。

わたしは書道が好きで、その頃はどうかして書道をビジネスにしたいと考えて模索していました。プロフィールに書いた、助成金に応募した企画というのもその関連。堅苦しいイメージの書道だけども実は古くから前衛的だったんですよ、という切り口で、外国からオリンピックを見に来てくれるみなさんに伝え、そしてわたしたち自身の固定観念を壊したいと立案した、書の歴史を辿る展覧会でした(結果は落選)。

TERATOTERAも東京都とアーツカウンシル東京との共催事業です。当時研究のため、東京アートポイント計画の前年度活動報告会にも行き、TERATOTERAの発表を見ています。内容は得体が知れず、こんなゆるい活動が共催事業になるんだ、などと思ったことを覚えています(笑)。現代アートは横浜トリエンナーレや原美術館などのメジャーな美術館でごくたまに見るくらいで、ディレクターの小川希さんも、小川さんが運営している「Art Center Ongoing」も知らなかったし、全然詳しくなかったのです。

あれから3年くらい経ち、今では現代アートへの理解も少しは深まりました。TERATOTERAにも微力ながら関わり続けています。ボランティア活動の中では特にアーティストと話をするのが楽しいです。彼らは自分がどんな人間で何をしたいか、何をやるのか何をしないのか、その問いに答えを出しながら、目に映る世界を解釈し、それを人々に伝えるために表現し続けている、そんなふうに見えます。

2020年、コロナ禍でオリンピックは延期になりました。わたしのプロジェクトも滞り、別の仕事をするしかなくなりました。しかしステイホームの生活の中で自分の作品づくりに目覚め、テーマを模索し始めました。先は見えないけれど、足下に道があることは確かです。わたしも少しずつでも進みたいと思っています。



maadm『Can you stop?』の展示。実験用の椅子にmaadmが座り、参加者が機器を操作して電圧を上げていく(2018年11月)

2018年、事務局長が出演したラジオ番組を偶然聴取して、TERATOTERAの存在を知る。「駅伝芸術祭」(2018、2019年)、「TERATOTERA祭り」(2018~2020年)に参加。Facebookなど広報を担当。

## ウルトラランナーを追い、カメラを止めるな

永野千晴

TERATOTERAに参加して、今年(2020年)の7月で3年目に入りました。

2019年6月の「駅伝芸術祭リタ〜ンズ」は、TERATOERAに参加してから3回目のイベントでした。

第1走者は前年度のリベンジをかけた佐塚真啓さん、第2走者は若木くるみさん、アンカーとなる第3走者は、「新人Hソケリッサ!」に担当していただいたのですが、私は第2走者の若木さんのカメラマンを担当しました。頼まれた理由は単純で、私もランナーの端くれだからです。ある日、「駅伝芸術祭」の担当者から、「永野さんは、カメラを持ったまま、走って塀を乗り越えたりすることはできますか?」と聞かれ、一抹(以上)の不安がよぎったものの、アーティストとしてだけでなく、ランナーとしての若木さんにもひかれて、担当させていただきました。カメラマンの経験なんて全くないにもかかわらず……。

若木くるみさんは、北海道出身の版画家ですが、剃り上げた自身の後頭部に、顔などの絵を描くパフォーマンスをご存じの方も多くいらっしゃると思います。

一方で、200km~300kmのコースを走破する、「超ウルトラ」と称されるマラソン大会に出場して、好成績を残してきた健脚としても知られています。フルマラソンでも倒れそうな自分にとっては、未知というか、想像もできない世界です。実際に若木さんにお会いしてみると、にこやかで親しみやすい人柄の方で、いったいどこにそんなガッツを秘めているのかと、不思議に思ったのを覚えています。

若木さんのカメラマンを引き受けるにあたり一番不安だったことは、「若木さんが本番をどれくらい(本気で)走られるか」でした。ご本人に確認したところ、「自分はそんなに速いランナーではない、1km7分程度で行きます」と仰っていましたが、それでも、健脚の「速くない」は全くあてにならないと思っていました(自分のランナー友達がそうだからです)。

振り返って、本番の若木さんのパフォーマンスを思い出してみると、当日は、後頭部に精密に猿人の顔を描き、身体をクラフト紙で覆った状態で、西荻窪の駅前に現れました。第1走者の佐塚さんから襷を受け取り、まずは「猿人風」に四つん這いで歩み出すところからスタートします。そこから徐々に

体をもたげ、二足歩行へ移行し、徐々に走り始めました。

体を覆っていたクラフト紙は、四つん這いで進むうちに、やがてボロボロになって来るのですが、それらを全て破り捨てると、ダークスーツ姿が現れました。最後は、菅義偉官房長官(当時)が新元号「令和」の額を掲げる姿を模して中継地点へ。最終走者の新人Hソケリッサ!へ襷を渡して、若木さんのパフォーマンスは終了しました。

歩むペースや姿を変化させながら展開するパフォーマンスでしたので、見る方に楽しんでいただくためにも、なるほど、確かに速く走る必要はありませんでした。ウルトラランナーではあるけれど、やはり若木さんはアーティストなのだ、当たり前前のことをあらためて実感しました。

二足歩行になる過程で、後頭部の“顔”も猿人から人間の顔へ移行していくのですが、“顔”を書き直すために、途中で何度か公園に入りました。水飲み場で後頭部を洗い、ボランティアスタッフが目の位置や鼻の位置などを伝えて、描くサポートをしましたが、鏡も見ずに書き上げていく若木さんの姿は、かなり見応えがありました。こうして、ごく間近でアーティストの作品に触れられることも、TERATOTERAに関わる面白さの一つだと思います。



「駅伝芸術祭リタ〜ンズ」で、四足走行から二足走行へと「進化」する若木くるみ(写真は全て2019年6月)



ダークスーツで「令和」の額を掲げて中継地点に向けてひた走る

「アートプロジェクトの0123」の受講をきっかけにTERATOTERAに参加。2018~20年度の「TERATOTERA祭り」「駅伝芸術祭」などに関わる。職業は公務員。活動には一介の美術ファンとして参加。

## ヘンリー・タンを待ちながら

上田和輝

9月下旬、タイのアーティスト、ヘンリー・タンの展示プランはまだ白紙だった。

ヘンリーの来日は10月1日。日本に来たら「TERATOTERA祭り2019」まで残りひと月しかない。一日でも早くアイデアを固めるため、遥かバンコクにいるヘンリーから宿題を課された。「展示場所の歴史」についての情報だった。

宿題が出てからは、図書館やネットで三鷹の歴史にまつわる記述をかき集めて英訳する日々だった。古代から始めて、明治まで来たところで10月になり、東京にヘンリーがやってきた。会うなりヘンリーは「ハーイ、ウエダサン!」と陽気に挨拶をして、人懐こい笑顔を見せる。ただ、腰を落着けて話を始めると、彼は陽気で人懐こくもあるのだけれど、とても理知的な語り口をしていて、三鷹の歴史もしっかり読んでいた。しかし作品のアイデアはやっぱり白紙で、また2日後に話し合うことになった。

2日後、今度は会うなり「ハッピーバースデー!」と言われた。実はその日は僕の誕生日で、ヘンリーはプレゼントまで用意していた。僕の故郷の料理ということで、九州料理を食べた。話したのは、僕がウナギに関わる仕事をしていることや、ヘンリーの飼い猫や、家族の話や、辛子蓮根が熊本の郷土料理の代表になっているのが納得できないことなど、ひたすら身の丈話。「TERATOTERA祭り」のチラシに掲載する原稿の締め切りまで残り3日だったけど、作品のアイデアは煮詰まらずお終い。ヘンリーがなんとか考えると言ったまま締め切り当日を迎え、唐突なコンセプトが送られてきた。『Young Eel』(=幼いウナギ)である。

ウナギは細長い姿になる前に、葉っぱのような形の幼生期を過ごす。しかしその生態は謎だらけで、人工的にこの幼魚を大人まで育てる技術はまだ実用段階にない。現代人は生涯未婚率が高い。こどもを増やすための政策はあるし、社会的な圧力もあるけれど、個人がこどもをつくる意思を持つこととの間にはギャップがある。あの日、全く別の文脈で話した2つの話題が、ヘンリーの中で癒合していた。『Young Eel』は、再生産しない個人をウナギの幼魚に見立て、再生産を求める社会や、再生産を可能にするための技術との関わりを問う。作品のアイデアができて、新しい宿題が課された。僕自身の幼少期の記憶にまつわる音や匂いや味を思い出して、それを再現するための材料を集めてほしい。そう言い残して、ヘンリーはボストンで開催されるプログラムに参加するため1週間アメリカへ。僕は熊本に帰省する用事があり、実家周辺の

環境音を録音。その後東京で合流すると、集めた音などにまつわる記憶を文章にしてほしいと言われ、今度は僕がカナダのビクトリアへの出張中にその宿題をこなす。そんなことで、バンコク、東京、ボストン、熊本、東京、ビクトリア、とディスタンスを乗り越えながらの制作だった。

僕が東京に戻ったのが「TERATOTERA祭り」のほぼ1週間前。準備が間に合うか不安に駆られる中、ヘンリーはなぜか「不忍池弁天にお参りに行こう」と言う。そんなにのんびりして大丈夫か、とも思ったけれど、集まったテラッコや展示会場のマスターと交わす会話を聞いていて、これもヘンリーの制作のプロセスなのだと思うようになった。ヘンリーはアイデアを誰にでもオープンにし、興味を持った人々とコミュニケーションを取る中で作品を形にする。自然な会話の中から相手の記憶を引き出したり、思いついたアイデアに意見を求めたりして、プロジェクトと相手との関係を結び、緩やかに巻き込んでいく。この穏やかな時間が、ヘンリーにとっては作品をかたちづくるための大切な時間なのだろう。

「TERATOTERA祭り」の3日間は、準備もギリギリだったし、僕自身も作品の一部になってとても疲れたけれど、プロジェクトが終わった気がしなかった。それが日常会話になってしまったからか、ヘンリーがバンコクに帰るまで、『Young Eel』のアイデアについて話し続けていた。ヘンリーは翌年の春にも東京に滞在する予定があり、そこでアイデアの続きを話すことにした。しかし、コロナで予定は大きく狂ってしまった。

今年(2020年)の10月も“Happy birthday. Ueda-san!”というヘンリーの無邪気なメッセージが送られてきた。東京で、バンコクで、あるいはまた別の場所で、再びこのプロジェクトを動かすときを待望して。



ヘンリー・タン『Young Eel』の展示。カーテンの向こうで筆者が眠り、その夢がウナギの幼魚の夢としてカーテンに投影されている(2019年11月)

中央大学文学部心理学専攻学部生2年。2019年6月から「アートプロジェクトの0123」を受講し、秋の「TERATOTERA祭り2019」に参加。中学の3年間はタイにいたので、タイのアーティスト、ヘンリー・タンを担当する。

## アート講座から始まった様々な出会い、豊かな経験

### 内藤 桃

山梨県で過ごした高校時代の恩師の影響で、現代アートに関心があった。恩師は性格が少々ひねくれていたが、教養豊かで知的な人物だった。「ポストモダンの時代には〈感情〉を求めて生きることが豊かさを得るヒントになる」と語り、〈感情〉の例としてアートを挙げて、しばしば私を芸術鑑賞に連れ出してくれた。演劇を鑑賞したり、日本史の史料を考察したりもした。甲府のアートプロジェクトもともに見に行った。恩師は月に2回ほど各地に赴いて芸術を体験して Facebook にレビューを投稿していた。私は彼の「文化活動日」(と私が勝手に称していた)の話が学校で聞くことが楽しみだった。東京の大学に進学し、彼のように自分の文化活動日を設けたかったので、通年でアートを学べる「アートプロジェクトの0123」を受講した。

「0123」では、アーティスト自身による作品紹介やコーディネーター小川希さんの現代アート解説を聴いた。講座の後はほぼ毎回、近く中華料理屋で交流会(飲み会)があった。その場も含めて、過剰なほどのアートの情報を受け取った。私にとっては刺激的な芸術活動であった。

初めて現代アートを体験したときは、西洋の古典絵画とは異なり、作家は現存しているの!という率直な感想を抱いた。「0123」では目の前で作家が話しており、彼らによって現在も作品が作り出されていることを知った。デュシャンに始まる現代アートは、1世紀をへた今日では、形式や他の芸術との「境目」とらわれることがなく、表現の可能性は無限にあることを知った。

現代アートの親しみやすさも「0123」を通して感じる事ができた。作家は生きているのだから、意味が分からなければ解説書やインタビューで確かめることができる。また意味が分からないままでも、自分で作品について考えて解釈をすれば良いと知った。答えはないし、あるとしても重要ではない。今を生きる作家の、表現されたディープな思想を受け取ることが出来る刺激的な体験にいつしか熱中していた。

この講座で同年代の友人に出会えたことも幸運であった。初回で年齢が同じ2人の女子学生に出会って意気投合し、それ以降現在も交流は続いている。「課外活動」として、夏は「瀬戸内国際芸術祭2019」に出かけた。今年(2020年)の春にはイギリスへ行き、ロンドン、エディンバラ、リバプールをまわって、行く先々でアートに触れた。瀬戸内芸術祭では地域に溶け込む

芸術を見た。イギリスでは美術館は入館無料。家族で遊びに行く公園のような存在で、日本よりもアートが身近だと感じた。

関心は同じ芸術にあっても、それぞれ学業分野は異なるので、対話することで自分にはない視点が得られる。彼女たちとそのような良き関係が得られた。加えて、2人の友人だけでなく、この講座によってアートに関わりがあるコミュニティを知ることができたことは、アートに対する共感が得られるので嬉しいことだった。どれも大学の中だけでは得がたいものだったと思う。

「0123」の授業で「TERATOTERA祭り」にボランティアとして参加、アートプロジェクトを実践的に経験することができた。準備段階における打ち合わせでは、全体のテーマに基づいて、展示の目的や役割、展示方法の選択から広報までの制作のプロセスを直に見て学ぶことができた。展示のためのやりとりが作家とテラッコ間で行われることで、作家を身近に感じられた。特に私が担当した作家のヘンリー・タンは、担当のテラッコと会場のオーナーと、そこで出会ったミュージシャンの記憶を材料に作品を作っていたので、距離がより近くに感じられた。ヘンリーはこのプロジェクトで出会った人とのつながりを尊重していたため、彼の作品にはコンセプトと同様に、場所や人も作品の必然性となっていたのだと思う。

このように私は、「0123」と「TERATOTERA祭り」でアートの面白さを知り、学び、人とのつながりを得た。この刺激的な経験に影響を受けて、現代アートへの考え方が変わった。現在は大学で専攻する心理学で、芸術体験によって得られる心的影響について研究をしたいと考えている。経験的に、芸術体験を通して豊かさを感じることができるのではないかと思ったからだ。



「アートプロジェクトの0123」の講座が終わると、いつも会場近くの中華料理店で講師も交えて懇親会を開いた(2020年2月)

「Tokyo Art Research Lab」(アーツカウンシル東京主催)の2015年基礎プログラム1思考編、2016年基礎プログラム2技術編、2017年体験を紡ぐコース修了。受講生時代に「TERATOTERA祭り」を鑑賞者として体験。その分かなさが気になり過ぎて2018年からテラッコとして正式参加。普段は会社員として広告関連の仕事をしなが、週末は現代アートを鑑賞する日々。

## 意識の越境 現代アートで体験

### 裴 潤心

「出会ってはいけないものに出会ってしまった…」2016年秋、JR三鷹駅の玉川上水前の広場で河童の姿をした数名の人々を見た瞬間、私の頭をよぎったのはその言葉だった。

その頃住んでいた目黒区から中央線沿いの三鷹駅は新宿経由で約1時間、やっと着いた駅の北口のエスカレーターを降り、「TERATOTERA祭り2016」の会場である玉川上水沿いに着いた時のことだった。眼鏡をかけた河童姿の男性に「どうもー」と声をかけられアウトドア仕様の椅子を推められた。腰かけながら出された日本茶のようなものを飲んだかは記憶が定かでない。ただ彼らの存在と雰囲気警戒心を抱いたことだけはよく覚えている。その時は自分が3年後にTERATOTERAでアーティスト担当をするとは想像していなかった。眼鏡の男性は現代アーティストの遠藤一郎さんで、周りにいた人たちは「TERATOTERA祭り」を支えるボランティア、通称テラッコだと後で知った。

3年後の2019年秋、私は初めて「TERATOTERA祭り」にアーティスト担当として参加した。19年は女性作家が良いとディレクターの小川希さんがおっしゃったので、2017年に東京都美術館で開かれたグループ展「境界を跨ぐと、」に出展されていた鄭梨愛さんと李晶玉さんを推薦したところ、あっさりOKが出た。私は早速アーティスト担当として出品作品の趣旨を伺いに彼女たちのアトリエがある朝鮮大学校に向かうことになった。私事ではあるが、私は在日コリアンの韓国籍で、朝鮮籍の友人はいるが朝鮮大学校に行ったことはなかった。韓国籍の自分は大学の正門で「あなたは入れません」と言われ、門を越えることはできないのではないかと内心ドキドキしながら現地に向かった。

意外にもすんなりと学内に入れ、鄭梨愛さんに学内を案内されながら「韓国籍の人間が学内に入ることは稀ですよ?」と問いかけると、鄭さんからは「いえいえ、いま朝鮮大の学生の国籍で一番多いのは韓国籍の人ですよ、半分以上の比率だと思います」という答えが返ってきた。私はすっかり拍子抜けしてしまった。自分の思い込みが根拠のない知識であったことが何だかとても恥ずかしかった。

それから数カ月間の準備期間を経て、三鷹駅近くのスペース「SCOOL」で鄭さん、李さんの『近視／遠視』が展示され

た。2人の作品はとても重層的で、単純な国籍やマイノリティーに関する問題を抽出しただけではない深さがあった。そしてその時、自分の身近な題材として捉えていた在日コリアンという立場も様々な解釈や想いがある、それを受け取り手側へ託すという現代アートの特性を改めて理解した。

コロナ禍で遠い土地への移動は制限され、物理的な越境をすることは以前よりも難しくなった。だけど人は意識の上ではいつでもどこへでも越境することができる。想像することは人間という生物に託された稀有な能力だからそれを使わない手はない。そして意識の越境に現代アートは非常に有効な手段だと思う。それを言葉だけでなく体験を通じて知ることができたのはTERATOTERAの活動に関わったことが非常に大きいと、いま感じている。



李晶玉×鄭梨愛『近視／遠視』の展示。李の絵画と鄭のインスタレーションが響き合う(2019年11月)



筆者がJR三鷹駅近くの公園で出会った「河童」姿の未来美術家・遠藤一郎(2016年10月)

2016年にTERATOTERAの活動を知り、2017年度からテラッコとして活動に参加。平日は鉄鋼商社で働き、休日は人と会ったり、アートプロジェクトや展覧会を親に出かけたり。テレワークが増え、運動不足からか肩こりが酷いのが最近の悩み。

## 非「縦型の意味疎通」で緩やかに繋がる

林 真実

TERATOTERAの活動は私にとって未知の世界への入口のようだ。仕事に慣れ、飽きてきた私は、2016年にのアートの人材育成プログラム「Tokyo Art Research Lab 思考と技術と対話の学校」(アーツカウンシル東京主催)を受講し、ディレクターの小川希さんが登壇されたことからTERATOTERAの活動を知った。すでにテラッコとして活動し始めていた受講生から「作家との距離が近い」「よくわからないけど面白い」「人手が足りない」「テラッコが提案した企画が実現してしまう(やってみたらという小川ディレクター凄いな)」といった感想を聞いていた。2016年の「西荻映像祭」や「TERATOTERA祭り」に足を運ぶと、本当に作家がいた。たしかに「作家との距離が近い」。現代美術家という破天荒で反骨精神の塊という、どこで刷り込まれたかわからないイメージを覆すように、気さくに作品の感想を尋ねたり、作品にまつわる話をしている。周囲には家族の姿もあったりして、ますます驚く。

TERATOTERAで見えてきた作品では、林千歩の『林千歩劇場「崖上のティボリ」編』、永畑智大のスピリチュアル似顔絵、うらあやかの『葬式のあと、赤ちゃんの話を少し大丈夫になったから』、山城知佳子の映像とビートボックスのパフォーマンスによる作品『ヒューマンビートボックス・War』、「駅伝芸術祭」の走者・佐塚真啓の匍匐前進、遠藤薫『ちゃんと空気を読んで、催眠術にかかったりしたい』などが印象深かった。

複合的な理由はあるのだろうが、ある時点の作家の私的な感情や、表現の背景から迫る問題提起に胸が痛むこともあれば、変化球すぎて何を受け取ったらいいのか、考えこんでしまう作品も多い。ただ、担当テラッコになると作家が試行錯誤しながら作品を生み出している姿勢を目の当たりにし、心を動かされたし、もっと見たい、もっと多くの人に見てもらいたいと思うようになった。作家の意向通りに作品を設置していくインストーラーの役割に興味も出てきた。

私は現代美術に造詣が深かったわけでも、美術表現を通して問題提起するといった姿勢に呼応して自分にできることを探しに来たわけでもなく、企業のCSR活動やコミュニティ形成の側面から興味を持ったわけでもなく、何となく新しいことを目指してきたら講座に辿りついたような有様だったため、きまり悪さを感じていた。それでも来る人を丸ごと受容する鷹

揚な雰囲気と、作品はよくわからないけれど、わからない分もう少し見ていたいという気持ちで翌年(2017年)からボランティアの定例会議「テラッコ屋」に参加するようになった。

テラッコ屋に参加して驚いたのは、上下関係がないということ、縦型の意味疎通を嫌うということ。後々TERATOTERAに限らないことを知っていくが、部活でも会社でも集団には上下関係が付き物だと思っていた分、衝撃を受けた。経験の長いテラッコや小川さんに敬意を表しながら、初めて参加した人であっても誰もが意見を求められ、経験が多いから偉いという様子もない。緩やかな集まりでありながら、企画したことは事務局のもと、皆が知恵と技術を持ち寄りどうにか実現してしまう。特別な技能を持った人がサードプレイスを求めてテラッコになるのかと思ったが、作家の要望に応えようと設営ができるようになり、展示場所を提供してくれる店に足を運んでコミュニケーション力を鍛え、展示を見てもらいたいから広報の技術を身につけ文章を書く、といった具合にひとつずつ企画を実現しようとする中で獲得してきたとのこと。純粹に面白い作品が観たいという熱意で動いてしまう人の凄みと、新しく入ってくるテラッコが歓迎される理由をみた気がする。きっとTERATOTERAをみつめてくれたことが嬉しいのだと思う。

展示の準備が終われば飲みながら、最近どんな展示を見たか何を見たいか話は尽きず、芸術祭があると声をかけあって自主ツアーを企画する。美術に対して貪欲、静かに熱いテラッコが多い。テラッコたちの中からアートを支える集団「Tera-collective」ができ、これからの10年も、TERATOTERA的なアートを見続けられる可能性に繋がったことが嬉しい。いつか三鷹で未知の表現に出くわしてしまったこどもが作家になったり、知らずにテラッコになったりする未来があったらいいなと思う。



「駅伝芸術祭リターンズ」に出場し、匍匐前進する佐塚真啓(2019年6月)。日没で完走できなかった前年「駅伝芸術祭」の雪辱を果たした

1991年東京生まれ。コーディネーター。パフォーマンスアーツを中心に企画制作をする傍ら、自らもアーティストとして活動し、大学卒業後に立ち上げた「身体企画ユニット ヨハク」ではこれまで12作品を発表。現代アートは勉強中の身。

## お金で動かないということー「オンライン・テラッコ屋」傍聴記

秋山きらら

ちょうど容易に家から出られない雰囲気の漂う6月~8月の期間、毎週のように「オンライン・テラッコ屋」が開催されていた。私は今年から「テラッコ屋」に参加して「TERATOTERA祭り2020」を盛り上げようと考えていたため、テラッコ1年生のひよっこであり、資料を読んだところで今年のことはまだしも、数年前の「TERATOTERA祭り」で何をやっていたかなんて見当がつかない。この記録集を編纂するためにテラッコが当時やっていたことの振り返り会をするということで、予定が入らない限り必ずオンラインで繋いで、家や移動の道すがら傍聴するようにしていた。毎週月曜日の夜、決まった時間にURLにアクセスすると知っている顔ぶれが必ず並んでいて、実施したプログラムの説明から愚痴めいたことまでゆるく話し合われている様子は、今の時代にとっても珍しく同時に大切な場であると毎回毎回実感し感動していた。

「対価を払わないなんて、やりがい搾取だ!」というセリフは、ここ最近よく聞かえてくる。働いた分の賃金が支払われることは当たり前のことで異論はない。しかし、こういったテラッコ屋のような場を一度経験してしまうと、ボランティア特有のお金で動いていないからこそ面白さというものがやみつきになってしまうのは私だけではないのではないか。

例えば、「TERATOTERA祭り」は、ボランティアであるテラッコが主体となって企画・運営を担うことができる。出展して

欲しいアーティストに直接依頼をして、イベント当日までアーティストとともに併走し、報告書まで書き上げるということをやっているコアメンバーを見ていると、まるで仕事と同じで大変なことも多くあるのに、なぜこんなに一生懸命になれるんだろうと思うこともしばしばだ。

しかしこのことは、本当に自分のやりたい分野でボランティア経験をしたことがある人であれば実感を持って語れるはず。私自身、ボランティアで自主的に動いてみるということを経験してやってみて、その面白さにまた魅了されている。お金で動かず、熱量と関係性と面白さで動くということ。経済的社会的で疲弊した平日の身体を労わりながら仲間の元に来ると、同じように自主的に能動的に動いて人生を楽しそうにしている人を見かけて、本当に元気になるものだ。それは目的に向かって完成させるという意味では同じでも、賃金をいいただきながら行う活動とはやはり似ていて異なる性質を持つものとなる。

お金と労働の関係と、お金とマインドの関係というのはやっぱり切っても切り離せない。お金があるからと言って、労働の対価としてだけやりとりされる関係性だとやっぱりうまくいかない。もちろん情熱だけでもうまくいかないが、自主性と目的意識が重なり合うメンバーが束になってシャキシャキと、時にゆるゆると絶え間なく活動が続いていくさまは、関わっているだけでも何か勇気をもらえるものがある。しかもそれを様々な世代、バックグラウンドや個性を持つメンバーとともに、思いついたことを試せる場所が自分の利害関係のあまり及ばないところにあるということとはとても貴重なことだと思う。

2020年6月から8月にかけて10回開催した「オンライン・テラッコ屋」のスクリーンショット。本記録集作成のため、過去の活動を1年度ずつ振り返った。カナダやドイツからも元テラッコが参加した





山城知佳子の映像パフォーマンス『ヒューマンビートボックス・War』(2017年11月)。太平洋戦争末期の沖縄戦や現代沖縄の日常などの映像が投影され、その前で2人のビートボックスが口腔から戦闘を想像させる轟音を放つ

# IV

## テラッコとともに歩んだ11年

### テラッコの活力を解き放った「ゆる〜くテキトーな」精神

TERATOTERAの特徴の1つは、「テラッコ」と呼ばれるボランティアが主体的に運営に関わったことにある。とはいえ、そうした態勢は自然発生的に立ち上がるものではない。様々な関心を持って参加するテラッコに向き合っ、主体性を促すディレクション、そして日々の活動に寄り添いケアするマネジメントが果たす役割が大きい。それぞれの役割を担った2人のディレクターと新旧の事務局長がTERATOTERAの11年を振り返る。

#### Eleven Years with TERACCO

**Unlashing the Power of TERACCO – A Spirit of “Loose and Flexible”**  
One of the defining features of TERATOTERA was its management by the volunteers of TERACCO. This is not something that just came together spontaneously. It required working closely with the members of TERACCO, each of whom joined the group for their own reasons, providing them direction so that they could work together effectively, and managing them so that their daily needs while being involved in TERATOTERA were met with the care they deserved. Here, two Directors and the former and recent Administrative Directors responsible for supervising TERACCO look back at the past eleven years.

### [TERATOTERA ディレクター対談] てらとてらを結んでみて

[日時]2020年10月18日13:00~15:00

[会場]Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)

#### 時代に呼応し、アートの可能性を探った TERATOTERA11年の歩み

TERATOTERAは、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、そして一般社団法人Ongoingとの協働によるアートプロジェクト。Ongoing代表で、吉祥寺で「Art Center Ongoing」を運営する小川希がTERATOTERAのディレクターを務めてきた。アーツカウンシル東京側のカウンターパートは「東京アートポイント計画」の森司ディレクター。連携してTERATOTERAを推進してきた2人のディレクターが、「TERATOTERA祭り2020」の最終日に11年間の歩みを語り合った。

**小川** 今日はTERATOTERAの歩みを「東京アートポイント計画」ディレクターの森さんと一緒に振り返ってみたいと思います。始まりは2009年秋。森さんがここ(Art Center Ongoing、以下「オンゴーイング」)に僕を訪ねてくれたんです。

**森** 東京文化発信プロジェクトが2008年に始まって\*、プロジェクトと一緒にやる団体を探していた頃だった。僕は美術館が長かったので、街なかのアートプロジェクトの展開の本格的な経験が弱く、街なかでのアートプロジェクトのやり手を探していた頃で、街なかで何かをしている人たちに頻りに会いに行っていたときです。

\*2008年4月、財団法人東京都歴史文化財団に「東京文化発信プロジェクト室」が設立。2009年4月、同室にて、東京都の文化政策として提案された(千の見世)を事業化し、「東京アートポイント計画」が始動。

**小川** 僕は自分がオンゴーイングでやっていることを話したんです。「他にもやりたいことないですか」と尋ねられたので、「オンゴーイングでやっつてることを外に向けてやるのも興味あります」って言ったら、森さんが「あー、それやってみなよ」って。

**森** 小川さんは、僕にはない手法とアプローチで現場に入っているから、「それをしてっ!」っていう感じだった。



TERATOTERAの歩みを語り合う小川希ディレクター(左)と森司「東京アートポイント計画」ディレクター(2020年10月)

**小川** オンゴーイングで展覧会を開くのは実験的な作家たちばかりで、作品は売れない。週末は必ずトークショーとか、音楽ライブやパフォーマンスのイベントで集客をして、なんとか潰れずに続けていたんです。そういう複合的なことを、街なかでやってみたら、と森さんがおっしゃったんですよ。ただ、1人じゃ無理だからと言われて、國時誠さんと長内綾子さんにもディレクターになってもらった。國時さんは西荻窪に店を構えてファッションブランドを展開していたし、長内さんはアート関係のキュレーター、コーディネーターとして活動していた。それで始まったんです。

#### 中央線「途中下車の旅」からスタート

**森** 2010年2月21日に「TERATOTERA はじまりの日」をやりましたね。

**小川** ディレクター3人とも街なかの経験がそれほどなかったから、地域のアートや文化の関係者となつたろう、という話になり、吉祥寺の老舗焼き鳥屋「いせや公園店」の2階を借り切って「前夜祭」をやったんです。國時さんも長内さんも顔の広い方だから、いろいろな方に声をかけてくれて、結局130人ぐらいが集まったんです。その次に吉祥寺のカフェで開いたのが「TERATOTERAお披露目の日」(2010年3月21日)。「contact Gonzo」のパフォーマンスとか「Open Reel Ensemble」の演奏もあったし、あとは「Chim ↑ Pom」の卯城竜太さんがトークに来たりとか、錚々たる人に出演してもらいました。

**森** どちらの集まりもそうだけど、人が多く集まる仕掛けの派手なことするなあと思っていました。美術館だとキュレーションはひとりでするから、チームで動くことはほぼない。小川さんたちのネットワークのまわし方とか全てが新鮮でした。

**小川** 2010年は「途中下車の旅」という小さなイベントのシリーズを、中央線沿線の各地で肅々とやって。その頃から、ボラ

ンティアの人にも「テラッコ」という名前で参加してもらおうという話になって、あちこちに声をかけて、ようやく集まった10人足らずのテラッコと、毎週ミーティングを続けました。

**森** TERATOTERAを含む「東京アートポイント計画」という事業のプロジェクトは、一つ一つが小規模で良いけど、継続的であることを大切にしているとは言え、全てが小規模というのはどうかと、あの頃は思っていた時期ですね。

**小川** 年度末には少し大きなイベントを、ということになりました。それで、音楽家の大友良英さんに井の頭公園の池で「船上ライブ」(2011年2月5日)をやってもらったら2500人ぐらいのオーディエンスが集まって、そこで規模感が変わったなと思います。

**森** 十数人規模のマイクロプロジェクトと言っていたけど、その対極もありだなと改めて確信した。その直後に東日本大震災(2011年3月11日)に見舞われた。

## 震災がきっかけ 大規模な「祭り」を挙行

**小川** TERATOTERAも何かりアクションしないとイケない。とにかくでかい規模のフェスティバルをやろうと、むちゃくちゃなスピード感で走り出しました。それでやったのが、秋の「TERATOTERA祭り」。作家十数人のアート展示から映像上映、音楽ライブ、2度のダンス公演にシンポジウムもありました。大友さんが震災後に立ち上げた「プロジェクトFUKUSHIMA!」とも連携して、井の頭公園での大規模な野外ライブをはじめ、こっちもいろんなイベントをやりました\*。当時、森さんはあの規模の「祭り」ができるというイメージはあったんですか？

\*詳細は140ページを参照

**森** 小川さんはオンゴーイングを開く(2008年)前は、都内の廃校になった小学校とか、営業中の店舗とかでディレクターとして展示をやっていたから、なんかできるだろうと思っていました。

**小川** でも、「TERATOTERA祭り」の規模は僕のキャパシティを超えていましたね。ディレクター3人体制も「船上ライブ」あたりで一区切りしていたし、森さんも「チームをつくらないと無理だよ」と話していたので、ボランティア募集の説明会を開いたんです(2011年6月11日)。そしたら30人以上が新しいテラッコとして参加してくれた。この人たちのパワーが11日間の会期に集約されていったと思います。僕が選ぶ「何、これ？」みたいアートに、テラッコがすごい情熱を燃やしてくれて、達成感まで感じているのは、何なんだろうと。今でもそれが何なのか、よくわかっていないんですけどね。

## 国分寺に「延伸」 テラッコ主導の企画を実施

**森** 小川さんの話で思い出したけど、僕が街場のアートに関わるきっかけになったのは「取手アートプロジェクト」でした。茨

城県取手市と東京藝大、市民が実行委員会を構成して1999年から続く草分け的なアートプロジェクトです。僕は2006年に大規模な街なかアート展を開催していて、あのイメージが原型としてあって、予算規模とかコミットしている人数と熱意、ディレクション、それから土地勘とかの要素があれば、できるなという感じはあって。2011年の「TERATOTERA祭り」は震災後の状況のなかで、小川さんが持っていたものを全部棚卸しさせたという感じでした。「黄金期は初期にある」とよく言うけど、その典型だね。

**小川** それでも森さんは、いつも「今年は何を上乗せしてくれるの?」という感じでプレッシャーをかけてくる。「TERATOTERA祭り」で燃え尽きた感もあったんですよ。2012年は、震災関連で上乗せされていた予算がなくなった。規模感を縮小しながら、どうやって去年を超えていくかを考えたときに思いついたんです。中央線にはもう1つ「寺」がある、国分寺駅があると。それでエリアを拡張して、国分寺から高円寺まで、各駅停車のように小規模なトークやパフォーマンス、音楽ライブを開催していきました。でも森さんにとっては、物足りないだろうな、と思ったんですよ。

**森** そんなことはないよ。

**小川** そこで、個々の企画はテラッコがやることにしたんです。前年の動きを見ていたから、テラッコ主導でやったら、僕とは違うことができるだろうと。それで、「テラッコ屋」という名前の月例ミーティングで、企画とアーティスト、出演者もテラッコが考えて、会場もテラッコが見つけてくる。でも、当時はまだまだテラッコには経験がないから、後ろから「こうしたらいいんじゃない」とこっそり言ったりして。

**森** それは僕も新鮮だと思っていました。東京アートポイント計画は、多いときは14カ所ぐらいで事業をやっていたから、僕が企画に対する判断のあるレベルに抑えないと、事業が全部同じ調子の「金太郎飴」になっちゃうんですよ。だから、小川さんが言うことは理解できた。それと、前年の「組織的にかがり」という方法は確立していたけど、2回やるとフェスティバル主義になっちゃう。小川さんは吉祥寺の住宅街にオンゴーイングを構えて、生活の中でかなり「毒」の強いアートに触れて「免疫



音楽家・大友良英が「船上ライブ」について語ったトークショー。多数の聴衆がつけかけ、TERATOTERAのイベントの規模感を変えた(2011年2月)

体質」をつくる、というようなことをしている。そのやり方がテラッコの中に入っていくのはいいなと思ったんですよ。

## 小川ディレクターが「祭り」で「毒」を吐く

**小川** テラッコ主導にしたけど、僕自身はフラストレーションがたまってきちゃう。企画に「毒」がないから。それで、秋の「TERATOTERA祭り(後期)」だけは全部、僕がやったんです。

**森** 1年分の「毒」を吐く、「毒祭り」だったの? やばい(笑)。

**小川** 2012年度の「TERATOTERA祭り」のコンセプトは「NEO公共」でした。テラッコたちは「公共の中で」という言葉を使う傾向があった。でも、僕は「毒」に公共の場所で出会ってしまうことが重要だと思っているから、新しい公共性とは何かを考えたかったんです。このときもかなり激しい企画をやりました。例えば、加藤翼さんの『いせやCALLING』。「いせや公園店」が建て替えるので、解体後の部材をもらってきて、井の頭公園の広場で原寸大で再現し、それを100人以上の参加者がロープを引っ張って引き起こし、引き倒すという作品だった。

**森** よくやったし、井の頭公園もよくやらせてくれたよね。

**小川** 2013年は「commit(委ねる)」というコンセプトでした。僕が「毒」を吐くのはやめて、テラッコに委ねた。僕がコーディネートしていた「アートプロジェクトを456(仕込む)」という講座があって、その受講者が企画した展覧会もやりました。2014年はさらに地域に入っていったんです。武蔵野市から依頼されて、武蔵野クリーンセンターというゴミ焼却場を会場にしたイベントとか、映画館の「吉祥寺バウスシアター」が閉館するので浅井裕介さんに壁画を描いてもらうとか。TERATOTERAが外に広がっていく感じの時期でした。

**森** 受け手側というか、街の方からも認知された感じがしていましたね。

**小川** 「TERATOTERA祭り」だけは、僕が少し「毒」を吐くという形で続けました。2013~2015年はテラッコ主導で安定していましたね。

**森** 行政と組むアートプロジェクトは、普通ならその頃で打ち切りになるよね。

## 「世界情勢の危機」をバネにした、2016年の「達成」

**小川** そうですね。ただ、2016年頃から、世の中がどんどんやばくなって行って、アメリカの大統領選でトランプが勝利したり、イギリスの国民投票でEU(欧州連合)からの離脱が支持されるとか。移民や難民、テロの問題もあった。日本でも安保法制とか、格差の広がりとかがあって、「このままだと、普通に生きていくということが壊れていく」という危機感がリアルにあった。ア



TERATOTERAが国分寺エリアで初めて開催したトークショー「『中央線文化』のきのう きょう あす」(2012年6月)

ートに何ができるのか、を考えるようになったんです。それで、2016年の「TERATOTERA祭り」は僕のディレクションだけでやったんです。「価値観の異なる他者と生きる術」というコンセプトで、すごく気合いをいれて真面目な文章も書いたんですよ。

**森** たしかに気合いが入ってたね。小川さん、またやる気になっちゃった、という感じだった。

**小川** それに対してアーティストの作品は、脱構築というか、ギャグというか、全然違う方向に打ち返してきた。それがすごくうれしかった。世の中が不安定になっていく中で、アーティストの存在はやっぱり重要なんだと再確認しました。僕の中では、この2016年と2017年の「TERATOTERA祭り」は、クオリティも担保しながら、エッジの効いた表現を街なかでできた、という達成感があります。

**森** 2011年は震災があったから予算もついて大規模になり、勢いで乗り切った。2年目は広域にして、「途中下車」の拡大版をテラッコに任せた。3年目になると塩梅がわかってくるから、最初よりも弱いものになって、アートプロジェクト自体が終わってしまうことがよくある。でも、僕には、TERATOTERAはもう少しできるはずだという思いがあった。だから、2016年は、「小川さんが本気を出したらこんなにできるんだ」とうれしかったですね。

**小川** 僕は社会的なことをあまりテーマにしないんですけど、もうやらざるを得ない感じに、世界が追い込まれていっている感覚もあって……。

**森** アートには、その時代の状況を上書きする表現と、それにカウンターをかける表現があるけど、そのさばき方が2016年にはっきりと変わったんです。アートプロジェクトに最初に関わると、どうしてもナイーブな関わり方になってしまう。そういう意味では2013年から2015年は、小川さんがテラッコに託したことから、ナイーブなものになった。でもアートのもう1つの面、「毒」はうまく扱わないと「毒」にやられちゃうから、小川さんが自ら手を下した。それが2016年だったということですね。

**小川** 2017年の「TERATOTERA祭り」は、例えば、沖縄出身の山城知佳子さんに「ヒューマンビートボックス・War」という

戦争を体感させるような映像パフォーマンスを発表してもらったりして、僕にとってはいい感じの展覧会でした。森さんは、それを見て「キュレーションががっつり入っているし、コンセプトもちゃんと提示している。視覚的な完成度も高い。街なかでできるクオリティーを達成できちゃった」と言いながら、また「これからどうするの?」(笑)。僕が考え込んでいたら、森さんが「コレクティブなんじゃないの?」っておっしゃったんですよ。

## 東南アジアで学んだ「コレクティブ」の可能性

**小川** 僕は2016年の春に東南アジアを回って、複数のアーティストが共同で表現活動が続ける「アート・コレクティブ」をリサーチしました。そして帰国後にすぐ、オンゴーイングで馴染みのある作家たちを中心に「Ongoing Collective」を立ち上げました。そのときに、森さんは「テラッコも一種のコレクティブでしょう」と話していました。それで2018年に、テラッコの中心的なメンバーで「Teracollective(以下、テラコレ)」を立ち上げた。その年から「TERATOTERA祭り」は、アートを支える裏方集団のテラコレが主導することになったんです。

**森** 2011年に続く、2回目のうねりだね。

**小川** 2018年ぐらいから、僕はTERATOTERAから少しずつ引退しているんです。基本的にテラコレだけでアートプロジェクトが実施できるから。10年間の活動がテラコレに集約していったんです。10人ぐらいのボランティアから始まってテラッコ主導になっていった、という流れを森さんはどう見えていますか?

**森** 小川さんは最初、「テラッコ1000人計画」を唱えていた。「テラッコが1000人いたら世の中が変わる」というイメージを持っていることがチャタリングだと思っていた。振り返ってみてわかるように、小川さんがガッツとやって「お腹いっぱいになったから」とテラッコに委ねる。3年たったら「やっぱり僕がやる」となって、また2年がっつりとやったら「ふうー」となって、またテラッコに委ねていった。テラッコも2回目のときは、すでに1回委ねられた経験があるし、小川さんが本気になった現場を見ているから一段と鍛えられている。この11年間の最大の成果は、コレクティブという「小川チルドレン」が立ち上がっていることだと思います。並行して開いてきた「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」などの講座の成果も大きい。入門編から実践編へと丁寧に状況を作り、それを現場で進めてきたことが、小川さんが望んだ帰結につながったんじゃないかな。

**小川** 受講者がテラッコとして関わってくれて、テラコレにも参加している。そういう連動がありますね。

## アート講座と「祭り」の連動が 成果をもたらした

**森** 僕も「取手アートプロジェクト」で、インターンの人たちに「0123」みたいな講座をやっていました。また、現場でOJT(On the Job Training)的に、アーティストとの折衝や広報などの課

題を聞いて修整していくという、合宿のようなことを3年間やっていた。その経験があるから、小川さんにとって「0123」が必要なことは、理屈抜きにわかります。東京アートポイント計画の中で、現場付きのスクールを持つのはTERATOTERAだけなんです。それが、小川さんのアプローチのユニークさなんだろうと僕は思う。

**小川** そういう構造は全然考えていなかったです。

**森** ある構造をつくったら、人材が輩出すると約束できるものではありません。「0123」と、TERATOTERAの現場の魅力が相まって、受講者がアートの世界にとどまっている事実が大きい。それで、TERATOTERAの11年間の活動記録は、小川さんが主語じゃなくて、テラコレが主語の本にしようと思案しました。小川さんのディレクションは各年度の冊子に記録されているし、オンゴーイングの10周年記念の本もある。むしろ小川さんと合わせ鏡のテラコレの人たちが主語で、小川さんがそこに寄稿するぐらいの方が、TERATOTERA11年間の成果として、次にバトンを渡せる感じがあると思ったんです。

**小川** 次にバトンを渡すという話なんですけど、テラコレは一般社団法人化する準備を進めています\*。テラッコからテラコレが立ち上がり、これからは法人化したテラコレがアートプロジェクトを運営していく。その流れを森さんはどう見えていますか?  
\*2020年12月に一般社団法人 Terccollective が設立された。

**森** 11年間続けて、結果的に手に入ったという意味での成果だから、僕はすごくいいと思っています。そのことをテラコレの人たちが自覚的に引き取るかというと、これまた別の話だけど。

**小川** 2021年にテラコレがどう動くか、楽しみでもありますか?

**森** 待っている感じかな。小川さんは依頼された仕事でも、それ以外の何かを自覚的に取りに行っている。それを行動様式として持っているから、いつも「次は何に挑戦するの?」という気持ちがありました。テラコレも初めて動くときに、メッセージを発動するはずなので、そのメッセージを待っている感じです。それは強制されるものではないけど、何か場がないと形にはならない。今回、TERATOTERAの記録集を作る中で、それが醸成されることに期待しています。



「TERATOTERA祭り2017」の展示の1つ、有賀慎吾『Unknown Material lab』(2017年11月)。謎めいたラボで、来場者がカルテに記入すると、黄色の液体を手渡される。服用するかどうかは来場者に委ねられる

# [TERATOTERA 事務局長対談]

[日時]2020年11月4日22:00~23:00

[会場]オンライン

## にこやかに、ゆるやかに テラッコに寄り添った日々

TERATOTERAの事務局スタッフはテラッコから起用された。事務局は経理など日常的な事務をこなしながら、イベント開催が近づけば、街なかの会場の所有者や管理者との折衝にあたった。テラッコの相談に応じ、当日ボランティアをケアするのも事務局の役割だった。2014年まで事務局長を務め、「たこさん」の愛称で親しまれた飯川恭子と、その後を引き継いだ「瑞世ちゃん」(高村瑞世)がそれぞれの経験をオンラインで語り合った。2018年から事務局スタッフに加わった「ゆうなちゃん」(森ゆうな)もオブザーバーとして参加した。(聞き手・西岡一正)

——たこさんがTERATOTERAに参加したきっかけは何かですか。

**たこ** 2010年度の「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」を受講したのがきっかけです。受講生に前川順子さんがいて、前川さんはすでにテラッコになっていました。それで前川さんが勧誘してきたんですよ、「テラッコにならない?」って。

——2010年度は、テラッコは何人いたんですか。

**たこ** よく知らないのですが、ミーティングに集まるのはいつも4、5人でした。

**高村** へー、そんなに少なかったんだ。

**たこ** 週末の朝に集まって話し合います。その頃はディレクターが3人いたけど、同時に集まることもなかった。ディレクターそれぞれが企画して、自分の企画のときに参加する。そういうスタンスのようでした。

——どんな企画をやっていたんですか。

**たこ** JR中央線の沿線で「途中下車の旅」という、小さなイベントを定期的で開催していました。以前、テラッコは中央線沿

線で文化を発信する場所やお店を点と点でつなぐマップを作成していたと聞きました。私が参加したときは、イベント当日の手伝いやチラシ発送作業をしていました。

## 震災後、テラッコ希望者が殺到

——テラッコを大々的に募集したのは、2011年になってからですね。

**たこ** 2011年の秋に大規模な「TERATOTERA祭り」を開催することが決まって、テラッコを募集しようという話になりました。それで6月に説明会を開きました。単なるボランティア募集ではなくて、「アートプロジェクトを現場で一から学ぶ、それをみんなでやりましょう」と呼びかました。会場が満員だったのにはびっくり。蓋を開けたら、ほとんどの人が参加してくれて、参加表明したテラッコは45人でした。

**高村** 私は、その年の「0123」を受講していて、そこでTERATOTERAを知ったんです。少し遅れて参加しました。「TERATOTERA祭り」に向けていろいろなチームができた頃でした。

——その頃には、たこさんは事務局長だったんですか。

**たこ** 5月頃には事務局をつくることが決まっていた。私は



**たこ(飯川恭子)** 2010年にTERATOTERAに参加。翌年から、2014年度途中まで事務局長を務める。アートマネージャーとして活動を続け、「Ongoing Collective」にも参加。



**高村瑞世** 2011年からTERATOTERAに参加。たこさんから事務局長を引き継ぐ。「Ongoing Collective」メンバー。墨田区で若手アーティストの作品展示を中心とする「Token Art Center」を運営。



**森 ゆうな** 大学在学中、Art Center Ongoingにインターンとして在籍。団体職員として人事労務の仕事をしなが、事務局としてTERATOTERAに携わっている。

契約でやっていた舞台関係の仕事がちょうど終わった頃、アートの仕事をやりたいと思っていたので、「お金が出なくても事務局をぜひやらせてください」と言っていたら、いつの間にか事務局長ということになっていました。

**高村** えーっ、そうなんだ。すごい覚悟。

**たこ** 実家暮らしだったからね。

—40~50人を束ねる仕事だから、大変だったのでは。

**高村** あの年は、大友良英さんと一緒に「TOKYO-FUKUSHIMA!」という大型イベントも同時にやった。当日、一緒にいろんな現場を回っていても、常にたこさんの電話にテラッコから問い合わせがあった。

**たこ** たしかにあのときの電話はすごかった。全ての現場が同時に動いていたからね。でも、準備期間中は全然気負いもなく、楽しくやっていた。人前でしゃべるのは得意じゃないけど。「TERATOTERA祭り」のようなイベントは私も初めてだったし、テラッコも初めて。ディレクターの小川希さんもあんなに大規模なイベントは初めて。だから上下関係もなく、みんなと一緒に作っていく感じがあった。

## 「夜遊び番長」が突然「事務局長」に

—たこさんのにこやかな人柄もあって、テラッコがついていった。お酒が入ると陽気になって、よく笑うし(笑)。

**たこ** いつから飲み始めたんでしょね。いつの間にか瑞世ちゃんが「夜遊び番長」になっていたものね(笑)。

**高村** 私は音楽系イベントのチーム。音楽家志望だった竹内友貴くんがリーダーだったから、私は事務局に行って情報を共有して、事務作業やチラシの仕上げを手伝って、という感じ。その後は、飲んでただけだった(笑)。たこさんは事務局長にな



2010年度の「アートプロジェクトの0123」の受講者。ここからテラッコが輩出した。後列中央が講師を務めた小川希(TERATOTERAディレクター)

ったとき、やってけるなという自信はあったんですか。

**たこ** 自信というより、この仕事が好きと思った。私はひとつのことを専門的に長くやったことがなかったけど、逆にマルチにやってきたことがこの仕事にマッチした感じ。経理も調整役もやって、発送もして、だから向いているなって気づきました。

**高村** 自分が楽しいと思うことには力を注げるタイプなんだ。

—前川さんがテラッコのお母さんとすれば、たこさんはしっかりした長女のような感じ。

**たこ** 前川さんがいてくださったのもよかったです。年代や職業、経験の幅があるのがTERATOTERAのよさだと思います。

—事務局長として、悩んだことはありますか。

**たこ** TERATOTERAの特徴として、場所を探してそこでイベントをやる。その場所の所有者や管理者とのやりとりが大変でした。とくに2011年は初めてだったから、実績がない。しかもTERATOTERAの展覧会って、内容の説明が難しいじゃないですか(笑)。いま考えると、やらせてもらえただけですごいな、と。

—2014年に瑞世さんが、たこさんから事務局長を引き継いだ。

**高村** たこさんから突然言われて、「えっ、はあ〜、がんばりませう」って、頼りなく答えたと思う(笑)。

**たこ** 私が結婚して神戸に引っ越すという状況になったときに、後任で思いついたのが瑞世ちゃん(笑)。

**高村** でも、たこさんを越えられたことは一度もなかったなあ。

**たこ** 違うタイプだからよかったのだろうね。ゆるやかな感じで(笑)。小川さんも「最初は心配していたけど、ほんとうに成長したよね」って。

—瑞世さんは2012年からは「西荻映像祭」という企画を始めた。

**高村** 「西荻映像祭」も最初に言い出したのは吉田絵美ちゃんだった。私も西荻に住んでいたから、一緒にやったら、となったのかな。

—その後も、2017年まで毎年、自分の企画を事務局長の仕事と並行して企画していた。

**たこ** 2013年から、青梅で友達と一緒にアートスペースも始めたよね。

**高村** そうそう、小川さんから「自分のスペースもあるのに、大丈夫?」って言われたことがある。

**たこ** 瑞世ちゃんは短期間がっつりアートにのめりこんだね。

**高村** 2012年に会社を辞めたから、なんか、ひましてたんじゃないかな。次どうしようかな、って感じだった。たしかに青梅のアートスペースは、企画なんかほとんどしたことない状態で始めたから、毎回大変だった。

—事務局長の引き継ぎ事項はあった?

**高村** ハードディスクにデータをまとめてもらったくらい(笑)。

**たこ** チョー適当だったね。でも、事務局と一緒に見ていたから、法的な書類が来るよ、くらいのことを話しておけば大丈夫だと思った。

**高村** 事務作業はもともと苦手だったので、めちゃくちゃ大変だった。経理は他のところで手伝ったことがあったけど、法人税などは全然わからなくて、ネットで調べたりしていた。いまだに書類が届いたらネットで調べて、前年の書類を取り出して同じように記入するとか……。

## 事務局長を支えた「大人」のテラッコたち

—ゆうなちゃん、事務局スタッフとして見た「高村事務局長」の働きぶりはどうですか。

**森** 私も企業で人を束ねるような仕事をしていたんですけど、そのときは全面で人と向き合って自分にもダメージを受けるようなことがあった。瑞世さんのテラッコとの接し方を見て、こんなやり方があるんだと目からウロコだった。うまい具合にかわしつつ、相手が不快にならず、みんなが納得するように落とし込むことが全員に対して平等にできていた。それも楽しそうにやっている。すごいなと。

**たこ** もとから持っているゆるやかな感じのままにテラッコに接している。

**高村** 私は新しく参加した人に十分気を遣えなかったけど、大人のテラッコたちが代わりにやってくれるようになった。結構安心だった。

**たこ** 私のときも、前川さんたちがそういう役割をやってくれました。

—事務局長という立場も経験して、得たものは?

**たこ** やっぱり楽しかった。一緒にやっていた人たちが現在それぞれに活動しているのを見聞きすると、みんな経験したこと

が実を結んでいるな、と感じます。私もあのときの経験があるから、今があると思います。私はある意味、TERATOTERAの典型的なサンプルになっているんですよ。「0123」を受講して、テラッコになって、そして旅立って「アートの何でも屋」になるみたいな(笑)。

**高村** TERATOTERAは作家との距離が近くて、作家たちと飲むのがすごく楽しかった。その経験があるから、アートセンターもやっているんだと思う。

—TERATOTERAは終わるけど、テラッコたちが新たに「Teracollective(以下、テラコレ)」というコレクティブを立ち上げました。今後への期待は。

**たこ** うーん、飲み会は続けてほしい(笑)。

**高村** 私も参加するけど、テラコレではやりたいことのある人が思いっきりやりたいことができるといい。それをみんなで手伝うような関係性が続いていけばいい。

**森** テラッコたちは、いい意味で他人に興味がない。それが私には新しく、心地よかった。そういう感じで誰でも受け入れてくれる土台がある。それを生かして、いろんな形をつくってってもらえれば。

**たこ** 違う背景を持った人たちが集まって、何かをする可能性はものすごく高い。それをうまく生かせたらいいなと思います。



テラッコの集まりは「テラッコ屋」と呼ばれ、アーティストを講師に招くこともあった(2013年5月)



高村瑞世は事務局長を務めながら「西荻レヂダンス」を企画した。写真は、滞在中のアーティスト集団「オル太」。左端が高村事務局長(2015年)

# [アートプロジェクトの0123]

## 入門から実践までテラッコを育んだ連続講座

TERATOTERAの活動の1つに、アートプロジェクトを学ぶ連続講座があった。当初は公益財団法人東京都歴史文化財団の人材育成事業「Tokyo Art Research Lab」の枠組みで行われていたが、2014年度からTERATOTERAの事業となった。コーディネーターはTERATOTERAの小川希ディレクター。講座の中には、アートプロジェクトを実践的に学ぶために、受講生が「TERATOTERA祭り」にボランティアスタッフとして参加する機会があった。それがきっかけとなってテラッコになった受講生も少なくない。

## アートプロジェクトの0から9まで

小川 希 (TERATOTERAディレクター)

アートプロジェクトを志す人たちに向けて知識や技術や経験を伝える、0から9までの数字を冠した連続講座。それが、2010年より2019年の10年間、TERATOTERAの現場と並行しながら開催した一連の座学シリーズだった。

まずは入門編として開催した「アートプロジェクトの0123」について。「0123」と書いて「オ・イチ・ニー・サン」と読むこの講座は、文字通りゼロからアートプロジェクトのノウハウを学べる連続講座としてカリキュラムを組んだもの。第1回目の授業では「コンセプチュアルアートを知る」というテーマで、便器を作品としたマルセル・デュシャンから始まって現在まで連続と続くコンセプチュアルなアート表現について学ぶ。続く講義でも、現代アートの活動に携わるうえで、最低限必要なアートの歴史や概念について次々と触れていき、そうした講義に対応すべく、現役で活躍するアーティストを授業に招き、彼らの活動の話の話を伺う。現代アートについてこれまで全く触れたことがなかったとしても、この初めの数回の講義でなんとなくわかった気になってもらうのが狙いである。

その後続く講義では、ライターや批評家をゲスト講師に招き、アートにまつわる文章の書き方について学ぶ。ここでは、文章の執筆の基本を教わるほか、受講生が自ら展覧会に赴き、展示についての文章を書き、それをゲスト講師に添削してもらう。自分の書いた文章に赤ペンをいれてもらえるという、大人になってからはおよそ経験することのない贅沢な時間を経ること、文章を書く力を培っていく。

「0123」の後半では、数々のアートプロジェクトを開催してきたプロデューサーやディレクターを招きお話を伺う。どんな状況で、どんな問題が起き、どのようにそれを乗り越えていくのか。受講生は、現場で起こる数々のエピソードを聞きながら様々な疑問を先人たちにぶつける。

2週に1回ぐらいの頻度で授業は開催され、連続講座の終盤を迎える頃には10カ月を超える月日が流れている。当然のことながら、一緒に講義を受けた受講生たちはお互いをよく知る間柄になっているのだが、「0123」の最後を締めくくるの

は、その同志に向けてのプレゼンテーション。これまでアートプロジェクトについて学んだことを踏まえ、自分がいつの日か手がけてみようとするアートプロジェクトについての構想を発表する。

2010年に始まった「0123」だが、僕にとっては誰かにアートを教える初めての体験であって、昔読んだアート関連の本を読み直したり、アートシーンの最新の動向を調べたり、講義の前日には深夜まで資料を用意していたことを思い出す。この「0123」、何気に好評で、2010年に続いて2011年、2012年と3回にわたり開催することとなるのだが、そのアドバンス版として2013年に開講したのが「アートプロジェクトを456」である。「456」と書いて「シ・コム」と読み、アートプロジェクトを実際に「仕込む」、入門編を超えた実践編である。ここでは、受講生が最終的に自分たちのプロジェクトを開催するところまでをカリキュラムとして組んでみたのだが、その無謀さに気づくのに、さほど時間はかからなかった。

当初の僕の予想では、「0123」の受講生が、そのアドバンス版として「456」を受けてくれるものだと思っていた。しかし蓋を開けてみれば、全員が新しい受講生で、しかもアートプロジェクトの未経験の人が大半を占めていた。入門編を飛び越えいきなり実践編ということである。またありがたいことに「みなさんのプランをもとにして、1年かけて専門の講師の方の指導を受けながらブラッシュアップし、TERATOTERAでアートプロジェクトとして実現します!」との一文がはっきりと募集要項に記してあったのである。

そして迎えた「456」の第1回目の授業。自己紹介を兼ね、それぞれのプランについて話してもらったのだが、その内容も、規模も、方向性も全くもって違って、あきらかにアートではないプランもちらほら。次々と続く自己紹介の途中から「これを全部実現するのは絶対に無理」と絶望的な気持ちに襲われる自分がそこにいた。後悔先に立たず。

もちろん初めから投げ出すわけにもいかず、「456」の前半は、受講生の多様な思いを実現可能なアートプロジェクトへ

と翻訳および変換する作業に従事する。「申し訳ないですが『0123』から受け直してもらえないでしょうか」という言葉をグッとこらえながら、それでも講義の回を追うごとに、少しずつだが光明が見え始める。徐々に皆のやりたいことが同じ方向を向き始めたのだ。今思えば、毎回、僕が死にそうな顔をしているのを不憫に思い、受講生が歩幅を合わせようとしてくれたのかもしれない。そして絞り出されたのが「シビックプライド」というキーワードであった。

このキーワードをもとに、参加アーティストやイベントやトークゲストなどを皆で考えていく。僕の中で「絶対無理」という悲観的な思いで始まった「456」であったが、最終的には「Civic Pride わたしたちのマチ わたしたちのアート」というアートイベントに結実。その達成感は今まで経験したことのない種類のものであったのは確かだが、しかし、これを毎年やるのは不可能と早々に結論づけている自分がいるのだった。「456」は幻の連続講座でもある。

そして、いよいよ「789」である。なにより悩んだのはこれをどう読むか。鍛錬を重ねたダジャレ脳を駆使しても一向に思いつかない。どうしようか悩む。なやむ。そうだ、「ナ・ヤム」だ。9は、頭をひねるイメージで6を反転させることに。かなり無理があったが最後のシリーズは「アートプロジェクトで789」に決定。

この「789」は、アートプロジェクトの各分野で活躍する、アーティスト、キュレーター、プロデューサー、ディレクターをゲストに招き、それぞれが抱える悩みを伺うトークイベント。賢人



2018年度の「アートプロジェクトの0123」。音楽プロデューサーで「Reborn-Art Festival」を主宰する小林武史が特別ゲスト講師として参加した(2018年11月)



「アートプロジェクトを456」受講生が企画した「Civic Pride わたしたちのマチ わたしたちのアート」のうち、永畑智大の展示(2014年2月)

であっても悩みは尽きないもので、2014年と2015年の2年間にわたって開催し、全10組のゲストから、アートプロジェクトにまつわる様々な悩みを聞きまくる。この時の10本の対談はのちに、1冊の本にまとめられるのだが、そのタイトルは『アートプロジェクトの悩み』となり、数字の悩みはきれいに消えていた。

その後もTERATOTERAの現場を手伝ってくれる人材を育てるべく、「789」が終わった次の年の2016年からは再び「0123」が開講されることとなる。アートプロジェクトというものが身近になってきたこともあってか、「0123」には毎年30人を超える申し込みがあり、その後2019年まで毎年続いていくことに。

最初の「0123」から「456」と「789」を経て最後の「0123」まで。一般公開のトークイベントの「789」を抜きにしても、アートプロジェクトにまつわるこの一連の講義を受けた受講生は200人を超える。それだけの人々が、たとえ一度の授業であったとしてもアートについて真剣に向き合ってくれたのだとすれば感慨深い。そして今回改めて、この連続講座に力をお貸しいただいたゲストの面々を見返してみたら、アーティスト、キュレーター、プロデューサー、批評家、ライター、デザイナー、カメラマン、コーディネーターなど、ありえないほどに豪華な名前がずらりと並んでいて驚かされた。次はどんなゲストを呼ぼうかなど、思えば僕自身が一番ワクワクしながらカリキュラムを考えていた気もしないではない。そして、こうして振り返っていたら、授業が終わった後、ゲストや受講生とともに終電ギリギリまで杯を交わしたあの中華料理屋さんの餃子がなんだか急に恋しくなってしまう。



未来美術家・遠藤一郎をゲスト講師に迎えた「アートプロジェクトで789 Vol.3」の講義。途中から遠藤のライブとなった(2014年10月)



インディペンデント・キュレーター遠藤水城(左)と画家・千葉正也(中央)をゲストに迎えた「アートプロジェクトで789 Vol.6」(2015年11月)

現代アートへの関心から、学生時代の2010年度から12年度までTERATOTERAに参加。大学では文化人類学・美術史・アートマネジメントを学び、アートプロジェクトを研究テーマとする。現在は公益財団法人職員として、都内公立文化施設に勤務。

## 都市におけるアートプロジェクト実践の地平

加藤 惟

TERATOTERA 始動時のテラッコ募集により参加し、2012年度末までテラッコとして活動した私は、活動としての芸術が成立・受容される場としてのアートプロジェクトの可能性を展望することを目的に、TERATOTERAを事例とした参与観察をもとにして修士論文を書かせていただいた。公共空間での芸術実践の事例として2012年度の企画のうち参加型アートプロジェクトを行った作家に着目し、作家とボランティアの協働や鑑賞者の参加、公共空間への芸術的行為という観点から活動をとらえた。

その夏、(今はもう取り壊されてしまった)阿佐ヶ谷の「けやき公園プール」では岩井優の映像インスタレーションの制作・上映が行われた。ボランティアを募集して屋外プールで撮影された映像作品を、中央線の車窓から見えるようにプール上に映像投影用の不織布を張って投影した。

同秋、「NEO 公共」をテーマに掲げて2日間限定で吉祥寺の井の頭恩賜公園を舞台に行われたTERATOTERA祭りでは、公共空間で人々を巻き込みながら作家の活動が展開された。

山本高之のワークショップ『チルドレン・プライド 11.4 in 吉祥寺』では、子どもたちが思い思いの願いごとを描いたプラカードを掲げながら、公園の池の周りを練り歩いた。公園内を歩く人々は何ごとかと振り返り、子どもたちが自分たちの願いごとを大きな声で主張しているのだと分かった、思わずほほ笑む。

公園西園グラウンドでは、老舗焼き鳥屋「いせや公園店」の廃木材を使って組み立てられた1分の1スケールの構造体を、集まった人々がロープで引き起こす。加藤翼はメガホンを使って、構造体から張られた何本ものロープに人々を振り分け、次第に多くの人を巻き込んでいく。20分ほどの時間をかけてグラウンドの芝生の上に引き起こされた構造体は、翌日には再びその場に集まった人々によって今度は引き倒すために引っ張られた。5分ほどの時間を要して引き倒された構造体は地面に着いた瞬間にバキバキと音を立てて崩れた。

山本篤は公園内に「パワースポット」を出現させた。テラッコは「パワースポット参拝所」スタッフとして、参拝方法を案内する。参加者が案内された通りに願いごとを書いた紙を貼りについていくと、ホームレスに扮した山本がビニールハウスから出

てきて「勝手に俺の家に張り紙するんじゃない。何がパワースポットだ」と怒って追いかけてくる。「アートイベント」や「パワースポット」という言葉に期待して参加した参加者は、いきなりホームレスの男に怒鳴られることとなり、驚き、あるいはあっけにとられ、怖じ気づく。山本はさらに、ボートで池の真ん中まで漕ぎだし、獅子を被って30分近く「獅子舞」を舞い続けるパフォーマンスも行った。獅子の口を開閉するパコンという音が周囲に響き渡り、道行く人もいったい何が行われているのかと騒然とする。「獅子舞です」とスタッフたちが説明をし、おもしろがって眺めていた人々も、獅子を脱いで出てきた男性の格好を見て、再び言葉を失う。

阿佐ヶ谷のけやき公園プールで行われた岩井優の映像インスタレーションと、吉祥寺井の頭恩賜公園で行われた加藤翼による「いせや」の引き起こしプロジェクトは、作家とボランティアの協働や鑑賞者の参加が重要な要素となっている。また、子どもたちが願いごとを書いたプラカードを掲げてデモ行進する山本高之のワークショップと、ホームレスに扮した作家が参加者とやりとりしたり獅子舞を舞う山本篤による観客参加型パフォーマンスでは、公共空間へ芸術的行為によって介入し、他者を巻き込みながら公衆からの反応を引き出す状況制作が行われた。岩井、加藤、山本高之のプロジェクトは、作家が他者の参加を歓迎的に受け入れる姿勢であり、公衆からも歓迎される現れ方をしている一方、山本篤は、何にも迎合しないかたちで公共空間に飛び出していったが、多くの公衆の注目を集め、巻き込んでいた。



山本高之『チルドレン・プライド 11.4 in 吉祥寺』のためのワークショップ(2012年11月)

## Observing TERATOTERA

### Volunteer Participation – What Young Scholars Witnessed

The volunteers of TERACCO came from different professions and were diverse in age. Among them were graduate students who participated as volunteers while studying TERATOTERA as a subject of research. How did TERATOTERA look to these young scholars from their respective fields of art history, sociology, and urban planning? Three such participant observers reflect on their experiences with TERATOTERA and what TERACCO meant to their master theses.

# V

## TERATOTERAを 観察する

### ボランティアとして参加した 若き研究者が見出したもの

TERATOTERAのボランティア「テラッコ」には、幅広い年代と様々な職業の人々が参加した。そのなかに、ボランティアとして参加しながら、TARATOTERAを研究対象として見つめた大学院生がいた。社会学や建築学を専攻し、いわゆる参与観察した若い研究者たちの目にTERATOTERAはどのような像を結んだのか。3人の院生テラッコに修士論文の概要を紹介するとともに、自身のTERATOTERA体験を振り返ってもらった。



加藤翼『いせやCALLING』。老舗焼き鳥屋の店舗を再現した構造体を引き倒す(2012年10月)

なお、これらのプロジェクトは構想段階より制作支援者であるテラッコの協力無しでは実現しえないものとして企画されている。テラッコは作家のもっとも近くで制作段階より協働し、作家の芸術活動を公衆へと提供する役割を果たしていることから、作家の共犯者であり、もっとも主体的な参加者=鑑賞者であったと言える。また、アートプロジェクトの運営を担う制作支援者の存在は、作家の行う芸術活動を「アート」として公衆に受容させることに貢献していることが分かる。

しかし、吉祥寺の路上でゲリラ的に行われた橋本聡のパフォーマンスでは、アートであるという説明が公になされなくとも、公衆が観衆へと転換させられていく状況が作り出されていたと言える。吉祥寺周辺各地で自身の用意したプログラムに沿ってパフォーマンスを行った橋本は、公共空間に密やかに、しかし大胆に介入することで吉祥寺の街なかに自らの表現を展開する空間を暫定的に作り出し、彼の行為に対する公衆の様々な反応を引き出した。橋本は自分の存在が目立つことがないようにするため、テラッコにスタッフ腕章を外させ、アートプロジェクトの一環で行っているということは誰も宣伝せず、説明もしない。

"Put shoes on the head"「頭の上に靴を置く」というプロ

グラムでは、靴を脱いで頭と肩に乗せ、「靴を交換してください。ズボンを交換してください。シャツを交換してください。」と書いた看板を掲げ、靴を乗せたまま移動をし、立ち止まってズボンを脱いで立つという行為を吉祥寺駅周辺各所で繰り返した。通りがかりの公衆が遠巻きに橋本の様子を見つめ、実際に靴を交換する者もいた。通報があったようで、警察とのやりとりもおこなわれた。彼の表現を鑑賞し、参加するためには、鑑賞者は居心地の悪さや負荷を引き受けなければならず、橋本の行為を見るか、見ないか、彼の行為に対して反応するかどうかの判断を迫られる。

TERATOTERAは、作家にとっては実験的な表現を展開できるチャレンジングな場であり、作家による芸術的な介入は、アートを前提としない公衆やアートをよいものにとらえる認識を裏切るものとなっていた。小川希ディレクターも、既存の美術制度やアートプロジェクトを批判的にとらえつつ、人々が予期せぬままに巻き込まれてしまうようなアートを展開していくことに可能性を感じているようである。TERATOTERAは、東京という都市で展開する、あらかじめ解決すべき社会的課題や共通の問題意識をもたないプ



ビニールシートの小屋の住人に扮した山本篤(左)。小屋から出て観客に向かってかかる(2012年11月)

ジェクトであったからこそ、様々な動機をもつ多様なボランティアが集まり、常にプロジェクトの意義を模索しながら領域横断的な活動が行われてきたと言える。TERATOTERAにおいて、主体的に参加し作家と協働するテラッコたちが占める役割は大きい。

TERATOTERAを公共空間での芸術活動が成立する空間装置としてとらえることで、アートプロジェクトがもつ公衆を前景化する空間装置としての性質が明らかになる。公共空間における芸術活動は本質的に、アートを前提としない公衆を必要としている。アートプロジェクトは、公共空間において芸術活動を成立させ、この芸術活動を公衆にアートとして認知させ、観衆へと転換させるための空間装置として機能している。しかし、公衆から観衆へと転換させられた人々の鑑賞体験は必ずしもアートを好意的に受け入れるものになるとは限らず、アートプロジェクトは公衆による無視や排除といったアートに対する否定的な反応や不調和をも前景化させるものである。

近年、アートプロジェクトの多くはイベント的に、あるいはアートの社会的領域への効用が期待される場で活動が展開されてきた。そこで展開される仮設的なインスタレーションやパフォーマンス、参加型のアートは展示終了後には跡形なく消えてしまうが、アートプロジェクトに対する記録や批評、言説形成が行われる場が不足している。この状況を受けて、結論として、都市におけるアートプロジェクトの展望を次のように示した。作品鑑賞を前提とした観衆が訪れる美術館という空間装置が美術作品についての知と言説を形成する制度として機能してきたことをふまえると、美術館や展覧会という制度を相対化してきた空間装置としてのアートプロジェクトには、公共空間における芸術活動についての知と言説を形成する制度として機能する可能性を見出すこ

とができる。そして、このように機能するためには、アートプロジェクトで生じた公衆との不調和をそのまま不調和として語る事が重要となる。それは、不調和が生じる瞬間とは公衆が芸術活動によって生じた相互作用からの影響を受ける瞬間であり、そこに人々の芸術経験が生じているためである。そして、制作支援者かつ主体的な鑑賞者として現場の状況を語る事ができるボランティアは重要な存在である。また、公衆との間に生じた不調和を前景化させるアートプロジェクトという空間は、同時に、現代社会における人々の関係性を再考し、その知と言説を生み出す空間として機能する可能性をも示している。

2012年当時からの変化として、展示室内の作品もSNSという公共空間にシェアされるようになり、リアルな公共空間での活動の自由さは限られている。不調和はより可視化されやすく、公衆の不調和に対する不寛容さが容易く拡散する世の中になったと感じる。それゆえ、不調和が語られることのリアリティも、より強くなっていると感じる。

\*本稿は、2013年1月に一橋大学大学院社会学研究科に提出した修士論文「公共空間における芸術活動についての考察-都市におけるアートプロジェクト実践の地平-」に基づく。



岩井優の映像「What happened on the pool」。撮影場所となった屋外プールで上映された(2012年9月)

## 芸術を通して開かれる公共性への可能性

梅澤光由

汚い廃屋のくぼみに水が溜まっている。いるはずのない魚を求めて釣りをするように命じられた筆者が逆さまにしたビール箱に座っていると、そばにいた男はキャベツの葉っぱを頭に乘せてきた。これが社会学の研究調査であると言って誰が信じてくれるだろうか。

現代芸術の中には、大衆には思いも寄らないあるいは見落としている価値観を、ギョッとするような手段で突き出すような表現がある。そのような作品は「アートってよくわからない」と突き放されることも少なくない。しかし激変する現代社会は創造性やオルタナティブな見方をこそ求めているのではないか。芸術と社会が接近し続ける近年の動向の中、芸術の持つ力を拡張していく社会的回路はないものか。そんな問題意識でアートプロジェクトを調べていた当時の私が見たのは、地域活性化策としての、あるいは芸術学の理論検証としてのアートプロジェクトばかり。そんな時フラッと立ち寄ったのが「TERATOTERA祭り」だった。なるほど釣り人の頭にキャベツを乗せるような作家は他のアートプロジェクトではまずお目にかからないが、筆者には同じくらい不思議に感じる人々がいた。テラッコである。

終電直前まで絵具でミニチュアを塗る。無言でかっぱのコスプレ衣装を縫い続ける。よく呑みよく笑い「まじわかんねー」と作家の意図を想像しつつ延々交わし合う。平日フルタイムで仕事しながらななしの過処分時間を喜んで費やすそんなテラッコも、よっぽど「変な人」たちだ。芸術と全く関係のない学部や会社に属している彼らがなぜここまで熱心に活動しているのか。これはある種の社会現象として記述できるのではないか。気づけば筆者は調査依頼を出していた。

2016年の4月から約半年間、参与観察とインタビュー調査を行った。インタビューの主役は協力してくれた7人のテラッコたちである。彼らの語りから浮かび上がってきたのは、非生産的、非社会的な作家の振る舞いに巻き込まれることで、テラッコたちの社会参加が始まっていくという逆説だった。

組織社会学では組織の性質を、トップダウンな機能を持つヒエラルキーと、水平的で相互性の高いヘラルキーとの対概念を使って説明する。インタビューで普段の活動内容を聞くとテラッコは驚きの声とともに、トークショーのゲスト選定と出演交渉、イベントの企画立案及びリソース確保、記録冊子の

原稿執筆など、素人ボランティアの枠を超えた取り組みを語っていた。彼らにとっては(ほぼ)丸投げだったボランティア活動は、大きな裁量を持って積極的に参加していく機会となっていた。またあらゆる職業の老若男女が自由に出入りできる点も、フラットなネットワーク型組織の特徴として挙げられる。おかげでテラッコには整体師も新聞記者もセールスマンもエンジニアもいた。大きな裁量権、出入り自由、どちらもヘラルキーの代表的機能である。

しかしフラットだけがこの組織の特徴ではない。テラッコだけで解消できない交渉上の問題解決や、「TERATOTERA祭り」のコンセプトメイクなどを通じて、小川希ディレクターが勘所とする指南が、テラッコたちに気づきを与えてきた。フリーハンドな作業にテラッコが呆然としている中でなされる小川さんの助言は、テラッコたちにTERATOTERAが目指す芸術表現の方向性を論していく。これはヒエラルキーの機能である。TERATOTERAには組織社会的な両機能が経糸にも緯糸にも張られていた。

複数のアートプロジェクトに参加するテラッコは、TERATOTERAの作家や展示の特徴に奇抜さや過激さを感じると語った。日常に非日常を滑り込ませ、突発的に作品に巻き込みながら観る者の既知を未知へと裏返す。こうした<異化ミーム>が、小川ディレクターのディレクションと大きな裁量を持った活動を通してテラッコたちに浸透していく。そして何かに気づき始めたおしゃべり好きなテラッコたちは、他のアートプロジェクトでは考えられないほど多い飲み会に積極的に参加しながら感想を交わし合う。彼らにとってTERATOTERAは家庭でも職場でもないサードプレイス≒「異化作用が埋め込まれたトボス」だったのだ。

そんなトボスに入り浸るテラッコは、何を感じ、どのように変化していったのか。作家と一緒にかっぱのコスプレをしつつ三鷹駅前でお茶をしたり、公園でホームレス生活をしながら社会活動・言論活動をする者の話を聞いたりすることで、現代アーティストたちが「世間のあたりまえ」から逸脱している時に見えている景色をテラッコは追体験した。すると家庭と職場の往復だけの生活を続けていた頃には忘れていたことを思い出してくる。勝手に心の中に作った「世間様の目」に縛られず芝生へ寝転がる幼心。職業も国籍も家族構成も政治信条も異なる

人が通勤風景にいたという事実。メディアが与える「みんなと同じは嫌だ」というみんなが共有する個性至上主義的スローガンへの違和感。日常生活を円滑に進めるためそのままにしてきた素朴な「なぜ?」の先には、階層間格差、貧困、移民問題に労働問題、排外主義とナショナリズム、フェイクニュース、そして感染症対策など大文字の社会問題が垣間見える。

そして現代アーティストというおよそ世間一般からは価値観が異なる「異質な他者」との邂逅を果たしたテラッコは、それぞれの日常へと帰っていく中で、長らく接してきた身近な人々がマクロの社会問題や日常の小さな違和感に無頓着であり、生活圏より外側の情報を学ぼうとする姿勢をむしろ煙たがることに愕然とする。TERATOTERAというトボスに居続けることで、テラッコは身の回りの人たちこそが異質な他者であったことに気づいてゆく。マクロな問題への無知や、日常の些事と置いていた既知が、全て未知へと反転する。ここにテラッコを突き動かす秘密があった。

テラッコたちの意識変化は社会学における社会参加のプロセスの一部である。複雑な現代社会には、一人で、あるいは親しい人たちの協力だけでは解決できない問題が山積している。そうした問題に立ち向かうため、私たちは見知らぬ他者や価値観の異なる他者と協力関係を築くこと、すなわち社会参加の必要性に迫られることがある。

社会参加とは、「一人で解決できないような問題の所在に気づく」段階と「気づいた問題について解消に向けた活動をする」段階に分けて考えられる。日本のアートプロジェクトの多くは、過疎化や復興といった具体的な政策目標のための手段として実施される。これは社会参加における問題解消の段階に該当する。芸術をこの段階に適用すると行政と芸術の間に溝が生じることがほとんどだ。一方TERATOTERAの関心はもっぱら問題提起である。作家によって問題が提起されたとしても、TERATOTERAの活動としてその解決に乗り出すことはない。しかし「問題」が存在することすらわからない者とは対話すらできないし、異質な他者の存在に気づかなければ、社会参加やその先にある「公共性」の意味など理解できない。TERATOTERAに招かれた作家たちによる芸術活動は一見「公共性」などという言葉から最も遠いもののように見える。しかし、非社会的、反社会的、脱社会的芸術表現とTERATOTE

RAというトボスは、テラッコを触発し、逆説的に社会参加へ導くという社会的接続を促していたのだ。

テラッコたちはTERATOTERAでの実践を通して、社会や人生の課題解決スキルのような鍵を手に入れたのではない。社会における大文字の問い、あるいは身近な他者との関係性という小文字の問いという鍵穴の方を手に入れたのだ。そこに刺さる鍵が見つかるのは来年かそれとも10年後か。TERATOTERAは終わろうとも、テラッコの社会参加はこれから始まっていくのである。

\*本稿は、筑波大学大学院博士前期課程 人文社会科学研究科修士論文『芸術を通して開かれる公共性への可能性』(2016年)に基づく。



東野哲史『たきお(実家)』。東野(写真奥)が客に「名言」の書を与えたり、頭にキャベツの葉をかぶせたり。奇妙な「おもてなし」が続く(2016年10月)



林千歩の映像作品『林千歩劇場「崖の上のティボリ」編』(2016年9月)に登場するキャラクター。テラッコが制作と撮影に協力した

2019年にTERATOTERAのホームページで「ボランティア募集」の告知を見て参加しました。現在は大学院で都市計画を専攻し、修士論文の執筆に取り組んでいます。

## 内側から見たTERATOTERAと街の関係

常泉佑太

大学院での研究テーマをどうしようかと思っていたところ、たまたま履修した比較文化論の先生から東京アートポイント計画の存在を知りました。以前、新潟の山間地で開かれる「大地の芸術祭」や瀬戸内海の島々を会場とした「瀬戸内国際芸術祭」を訪れたことがありました。そのころからアートと都市の関係について研究してみたいという漠然とした思いがありました。自分もボランティアとしてどこか参加してみたいなと思っていたころ、TERATOTERAのホームページを見つけました。まず目に入ってきたのは、2018年の「駅伝芸術祭」の写真です。駅伝形式の芸術祭って何だろう……？写真に写っている皆さんがすごく尖った集団に見えて、自分が参加して大丈夫だろうかとちょっと不安になったことを覚えています(笑)。

ボランティアとして関わらせてもらえることになりミーティングに参加してみると、すごくゆったりとした雰囲気であるんな世代の方々が構成されていることがわかりました。いい意味で予想に反した空気感で少し安心しました(笑)。内側から関わってみると、準備から「TERATOTERA祭り」当日までは想像していたよりも楽しいものでした。

2019年の「TERATOTERA祭り」で、タイのアーティスト、ヘンリー・タンのお手伝いをするようになりました。ヘンリー自身から、こういうことに興味があってこういうことがしたいんだけど、君はどう思う？と聞かれてびっくりしました。作家さんに意見を求められるなんて思っていなかったからです。作家さんそれぞれにスタイルがあるのだと思いますが、彼の場合いろんな人の話を聞きながら作品を構築していくスタイルのようでした。ヘンリーと一緒に初台のICC(NTTインターコミュニケーション・センター)へリサーチに行ったり、作品で使う香水を探しに行ったりもしました。ヘンリーと一緒にいるとシンガーソングライターの方や展示会場のオーナーさんなどいろんな人と知り合いになったり、一緒にバンドの演奏を聴いたり、スーパーでお寿司を買って外で食べたりと、お手伝いしているというよりは一緒に遊んでいる感じでした(笑)。

結局、どういう作品になるのかよくわからないまま開催当日を迎えることになりましたが、会場に行ってみるときちんと展示空間が出来上がっていました。パフォーマンスを側で見ていると、あの時のリサーチはこのためだったのか!と気づくとこ

ろが何箇所もありました。ヘンリーがすごいのは、周りの人に自分もこの作品を支えている一人なんだという気持ちを持たせてくれたことです。最終的にヘンリーの作品に何人もの人に関わっていました。コンセプトを全て理解しているとは言い切れなくても、お客さんにこの作品はこういう意図があつてとかを説明したくなります。ヘンリーは全てが正しく伝わらなくても全然構わない様子だったので、自分なりの解釈を加えながらたくさんの人に作品の内容を説明しました。自分がアート作品の一部になっているようで、すごく新鮮な経験をさせてもらいました。

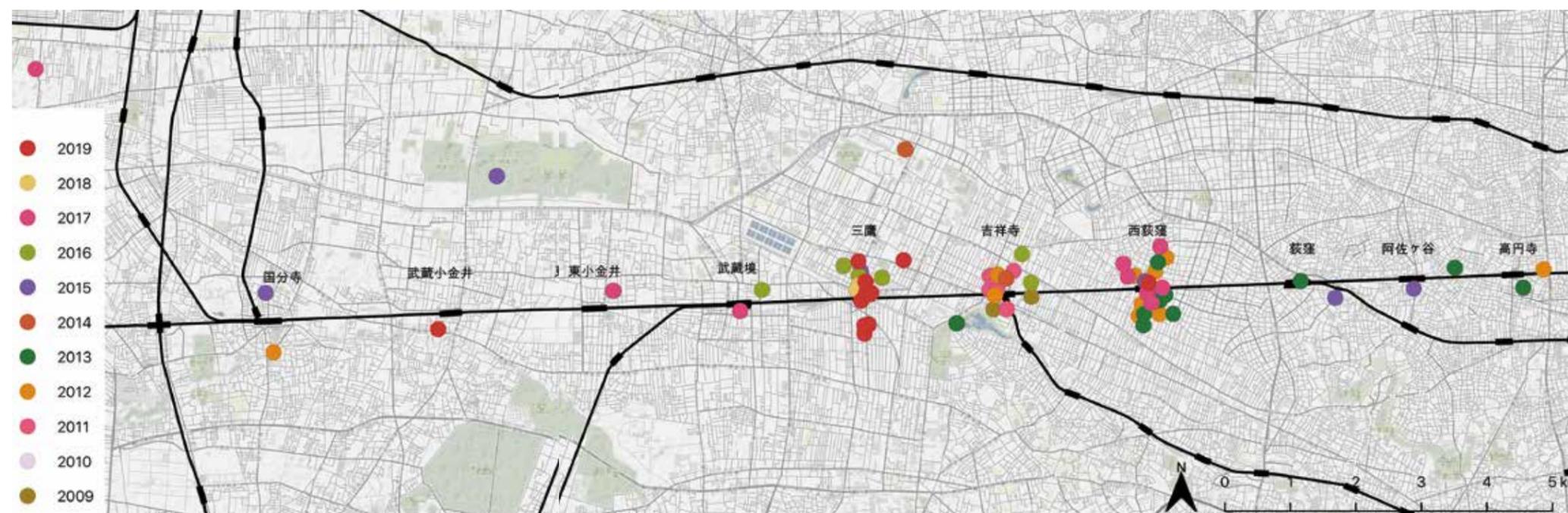
別の会場で開催されていた他の作家さんの作品も見に行きました。特にJR三鷹駅のデッキで行われたうらあやかさんの作品が印象的でした。足早にデッキ上を移動する人を脇目にその場で出会った人とバナナを食べるなんて経験なかなかできないと思います(笑)。その場所だけ別の回路が開かれているような不思議な体験でした。

「TERATOTERA祭り」最終日の日曜日、三鷹駅南口の通りでは大きなフリーマーケットが開催されていました。フリーマーケットをやっている近くで、よく見ると謎ののぼり旗が立っていて、ちょっと入ってみるとよく分からない活動をやっている(実はTERATOTERAの展示です)。すごく素敵な風景だと思いました。アートが街のなかに紛れ込んでいて、気づいた人が偶然立ち寄りたりしたところで展示やパフォーマンスを見ることが出来る。日常の中にアートが潜んでいる街はとても魅力的だと思いました。「TERATOTERA祭り」のあとアートプロジェクトについてもっと考えてみたいと思い、修士論文のテーマを「アートプロジェクトと公共空間の関係」として、研究を進めていくことに決めました。

日本の公共空間は様々な規制によって自



筆者が担当し、パフォーマンスにも参加したヘンリー・タン「Young Eel」(2019年11月)



TERATOTERA会場マップ 2009年度から2019年度までTERATOTERAのイベントが行われた場所をドットで示す(筆者作成)

Since the 2000s, a large number of so-called “regional art projects,” including art festivals and community projects of various scales, have taken place across Japan. TERATOTERA was one such project, sited along the JR Chuo Line in western Tokyo. Though most such projects bustle with visitors, it has been uncommon for regional projects of a smaller scale, open for only a short time, to be written about critically. We therefore asked an art critic and an art journalist, both of whom had visited and reported on TERATOTERA in the past, to provide their impressions.

# WI

## テラッコの可能性

### 「限界芸術」へアートを開き プロジェクトの主体に転じる

2000年代から2010年代にかけて、国内各地で様々な規模の「芸術祭」や「アートプロジェクト」、いわゆる「地域アート」が多数開催された。JR中央線沿線地域で展開したTERATOTERAもその1つ。総体としての賑わいにもかかわらず、小規模で会期の短い地域アートが批評的観点から記述されることは稀だった。そこで、TERATOTERAを鑑賞・取材対象とした経験のある批評家と美術ライターに、それぞれの観点からTERATOTERAを振り返ってもらった。

由な活動がどんどんできにくくなっていくように感じますが、公共空間は誰もが利用することができ、多様性が保障される必要がある空間であると思います。表現を伴う活動も同様に、ストリートライブや大道芸のようなものだけでなく、多種多様なものが存在していることが結果的にその街を豊かにし、魅力を高めてくれるのではないかと思います。

私より上の世代の方々が、吉祥寺や下北沢のような場所が昔に比べると面白くなったとおっしゃっているのをよく聞きます。今の吉祥寺や下北沢しか知らない私にとってはなんだか少し寂しかったのですが、TERATOTERAのように面白いことを画策されている方々が実はたくさんいることもわかりました。そういう活動がもっと公共の場所にどんどん出てきたら、また新しい街の魅力になっていくのではないかと思います。街をよくするためとかではなく、街を使ってやりたいと思うことがある人たちがやりたいことができる場所がたくさんあることが、街にとって大切なのではないかなと思うようになりました。

それからTERATOTERAの過去10年間の活動を調べてみると、公共空間で多くの活動が展開されていることに驚きました。特に、駅前広場や駅前デッキ、公園やビルの足元の公開空地のような公共空間での活動は、美術館とは違い、アートのファンではない方の目にも留まることになります。自治体が管理している空間を利用する際には自治体の許可を得なくてはなりません。特に公園などの空間は、様々な遊びが規制されていることが問題になっているように、クレームには敏感にならざるをえない側面があると思います。その中で交渉しながらイベントを実現させているTERATOTERAの活動はとても興味深いと思いました。

公共空間は誰もが自由に利用できることが大切な側面でもあると思いますが、作家さんや市民が表現活動に利用する自由はどのくらい考慮されているのかとても気になっています。



飲食店街の屋根や壁面に映像を投影した志村信裕『Crown』(2011年10月)

私たちには様々な文化や芸術にアクセスする権利があると思います。公共空間は予想しなかったいろんな人やものに出会える場所だと思います。気づかないうちにいろんな物事が最適化され、自分にとって心地いい情報ばかり目にしてしまっている状況が少し怖いと感じることがあります。そのような中でうらあやかさんの駅前デッキでの作品『バナナ・ミーツ・ステーション』のように、ひょっこりとアートに出会える経験はすごく大切なことのように感じます。

最初は興味本位で活動に参加しただけでしたが、次第に街のなかにアートがあるってどういうことなんだろうと思うようになりました。TERATOTERAのような素敵なアートイベントが街なかで成立するために必要なことは何か、作家さんは街なかをどんな風に捉えているのだろうかということが気になっています。まだまだ修論執筆途中なので頑張らねば……(笑)。アートが街にもたらすもの、アートと街はどんな関係を結んでいけるのかということにとっても興味があります。今後もアートと都市の関係について考えていきたいと思っています。

美術評論家。著書に『今日の限界芸術』(BankART1929、2008)など。「東京ビエンナーレ2020/2021」のソーシャル・プロジェクト「アトライティングスクール」のプロジェクトディレクター。

## TERATOTERA——未知のアートへの想像力

福住 廉

「あなたにとって駅伝芸術とは何か教えてください」。不意に投げかけられた問いに、アーティストたちは一瞬の戸惑いを見せながらも、それぞれ回答した。意気込みを語る者がいれば、そのコンセプトを自分なりに解釈する者もいる。「何なんだろう?」と正直に困惑を告白する者もいた。彼らの口が淀んだのも無理はない。「駅伝芸術」なるイベントも概念も、まったく新しいものだったからだ。

「駅伝芸術祭」とは、文字どおりスポーツとアートを組み合わせた芸術祭。区間ごとに分けられたアーティストたちがパフォーマンスをしながらタスキを受け渡していく。企画者のテラッコ、iwaoshoによるテキストによれば、日本の現代社会においては分断されがちなスポーツの人びととアートの人びとを融合させることを目的としていたようだ。

わたしは当日のライブ配信を視聴しただけなので、この新たな芸術祭を正確に批評することは難しい。だが、「駅伝芸術」という新しいアイデアが、スポーツにとってどんな意味があったのかはともかく、少なくともアートの側に軽い衝撃を与えたことは高く評価したい。アーティストたちにとって、それはまさしく青天の霹靂だった。当然、まだ経験もしていない「駅伝芸術」に自分なりの本質的な意味を見出すことなど論理的にできるわけがなかった。しかし、たとえ非論理的であったとしても、そのような新しさをアーティストに突きつける野蛮な挑発こそが、現在のアートシーンにもっとも欠落しているのではなかったか。

地域社会で催されるアートプロジェクトや芸術祭が日本社会に定着して久しい。だが、それらの大半は多幸感あふれる賑やかしゃ空間を美的に演出する作品に終始しており、今日のアーティストはそうしたコンテンツを提供する役割しか期待されていない場合が多い。プロデューサーやキュレーターにしても、そのような目的に合致するアーティストを選定しがちだから、同じようなアーティストが同じようなプログラムを各地で繰り返しという深刻な問題が統発している。これを問題視したいのは、類型的な作品を鑑賞することを余儀なくされるという点で鑑賞者にとって不幸なばかりか、つねに賑やかしゃ空間演出を期待されるアーティストにとっても、同じ課題に繰り返し模範解答を示すだけでは、いかなる成長も生産も見込めないからだ。そうしたなか、「駅伝芸術」はアーティスト

トにこれまで超えたことのないハードルを唐突に突きつけたのである。それは新たな成長や生産の契機となりうるにちがいない。

もうひとつ注目したいのは、「駅伝芸術」において主客の転倒が生じていたように見えた点である。参加したアーティストはいずれもれっきとしたアーティストではあるが、わたしが見た限り、このイベントの主役は明らかにiwaoshoだった。当日、彼はライブ配信のためにカメラでそれぞれのパフォーマンスを撮影していたから、本来であれば、裏方である。けれども、動画を見ていると、どういわけかカメラで撮影するiwaoshoがアーティストのようであり、彼のカメラの前でさまざまなパフォーマンスを繰り返すアーティストの方がむしろ裏方のようだった。アーティストが、まるで粉骨砕身するボランティアのように見えたのである。

かつて哲学者の鶴見俊輔は「限界芸術」という新しい芸術概念を提起した。それは非専門家がつくり、非専門家が受け取る、人間のあらゆる身ぶりを指す。鶴見によれば、絵画や彫刻など、専門家同士でやりとりされる創作活動は純粋芸術であり、映画や小説など、特定の専門家がつくり非専門家としての庶民が享受するそれは大衆芸術である。鶴見にとって限界芸術とは、純粋芸術でも大衆芸術でもなく、しかし双方になりうる芸術の母胎だった。

重要なのは、そのような両義性である。限界芸術とは、純粋芸術と大衆芸術に通底する原始的なものとして構想され



講座「アートプロジェクトの0123」で、作品評論の実践的な講義を担当する筆者(2018年10~11月)

ていた。たとえば口笛や手紙、盆踊りなどのように、限界芸術は芸術の様式でありながら同時に生活の様式でもあり、なおかつ、誰もが口笛を吹き、手紙を書き、踊るという点で、誰もが表現の主体になりうるのが限界芸術だった。ただ、こうした原始性は作者と鑑賞者を明確に峻別する近代化の過程で分解されてしまい、戦後の現代美術の中では完全に見失われてしまった。ところが近年、限界芸術がかつてとはちがったかたちで復活している現場が、じつのところアートプロジェクトや芸術祭なのだ。事実、それらは地域住民や観客を積極的に巻き込むばかりか、そもそもボランティアの働きによって成り立っているのであり、彼らがいなければ企画の運営すらままならない。

「駅伝芸術」で生じた主客転倒は、作り手と受け手の入れ替えを可能にする限界芸術の特徴とびつたり重なり合っている。たしかに「駅伝芸術」はわかりにくい。けれども、そのわかりにくさは、言ってみれば限界芸術の両義性に由来しているのではなかったか。すなわち、それは明らかにスポーツではないし、だからといって芸術であるとは断定しがたいが、双方になりうるような原始的な両義性にもとづいていたのだ。純粋芸術や大衆芸術という既成の芸術を信じて疑わない者にとって、限界芸術という第三の芸術への戸惑いは大きい。

そればかりではない。わたしにとってTERATOTERAの活動が興味深いのは、それがいわゆるボランティア団体の体裁を取りながら、限界芸術の可能性を内蔵しているからだ。アーティストの制作を補助したり、展示の監視や受付を担ったり、ボランティアとしての働きがTERATOTERAの屋台骨であることは間違いない。だが、「駅伝芸術」がまさしくそうだったように、アートプロジェクトの中に

胚胎する限界芸術の可能性が発芽したとき、TERATOTERAの魅力は倍増する。たとえば「アートプロジェクトの0123」で、わたしはアートにまつわる文章の書き方を教えたが、その目的は書く技術の習得だけでなく、その技術をとおして美術批評の特権性を相対化することにあった。つまり、自らも書く主体となることで、批評する側と批評される側という役割分業が必ずしも自明なものでも固定的なものでもないことを知ってほしかったのである。

ボランティアという従属的な立場からプロジェクトの主体への変容。彼らは決してアーティストやキュレーター、あるいは批評家に変身するわけではないが、だからといってボランティアからの例外的な逸脱として理解するだけではあまりにも惜しい。その逸脱はアーティストと鑑賞者という既存の役割分業の境界を揺るがしうるし、未知のアートへの想像力が生まれるのは、そのような「あいだ」にほかならないからだ。

TERATOTERAが11年の活動にピリオドを打ったとしても、限界芸術の可能性が潰えたわけではない。おびただしい数のテラッコは、多かれ少なかれ、「あいだ」の種子を持ち帰っている。いずれ他の現場で再び開花する日を楽しみに待ちたい。



スポーツと芸術を融合させた、おそらく世界初の「駅伝芸術祭」。企画者のテラッコが開催を宣言する(2018年10月)

ライター。1984年東京都生まれ。美術系雑誌や書籍で、記事構成・インタビュー・執筆を行う。主な媒体に『美術手帖』、『CINRA.NET』、アーツカウンシル東京関連。最近関わった書籍に卯城竜太(Chim ↑ Pom)+松田修著『公の時代』、森司監修『これからの文化を「10年単位」で語るために —東京アートポイント計画 2009-2018—』など。

## 「ボランティア主体」が開くアートの可能性

杉原環樹

美術のライターである筆者と「TERATOTERA」との接点は、主に、ディレクターである小川希さんへのインタビューを通してのものだった。2018年の年末と2020年の初春、ほぼ1年の間隔を空けて、それぞれ別の媒体からの依頼で、小川さん取材する機会を得た。

2018年のインタビューのテーマは、「コレクティブ」\*。アーティスト同士のネットワークを作りたいとの思いから2008年に立ち上がった「Art Center Ongoing」、その活動を街なかに展開した「TERATOTERA」、そして、そこから生まれたアーティスト主体の「Ongoing Collective」や、テラッコというボランティア主体の「Teracollective」まで、小川さんの活動にはつねに、多くの人の集まりから生起するものへの関心がある。興味深いことに、小川さんはアートの世界で広く「コレクティブ」が目されるだいたい前から、その可能性を実践してきた。その動機や狙いに触れることが、このときの取材の課題だった。

\*「社会実験としてのコレクティブ。緩やかなつながりから新たな表現を生む——小川希『TERATOTERA』インタビュー」(東京アートポイント計画通信、2019年2月20日公開)。https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/blog/33808/

いっぽう、2020年のインタビューでは、明確に、話題をボランティアとの関わり方に向けようと考えていた\*\*。通常、取材間隔が短いなかでの同じ対象へのインタビューは、切り口がどうしても焼き増しになるため、個人的には、依頼を受けてもあまり積極的に受けようしない案件である。にもかかわらず、1年ぶりの小川さんへの取材に前向きに臨む気持ちになったのは、その間に経験した、アートと社会の軋轢の出来事があったからだ。

\*\*「TERATOTERAの10年を辿る 自身の価値観の変化こそアートの意味」(CINRA.NET、2020年3月31日公開)。https://www.cinra.net/interview/202003-ogawanozomu\_myhrt

その出来事とは、「あいちトリエンナーレ2019」をめぐる一連の騒動だ。一部展示の中止問題に端を發したこの騒動のなかで、筆者が強く不満を感じたことのひとつは、ほとんどすべてのメディアが、芸術監督やアーティストなど、表に立つプレイヤーにしか取材をしないことだった。言うまでもなく、大規模な芸術祭は、そこに参加する市民ボランティアや行政職員など、「無名の人々」に支えられて初めて成り立つものであ

る。実際、例の一部展示に対する批判のなかで、ボランティアが大量に現場を離脱していれば、あいトリはその後の展示再開はもちろんのこと、芸術祭全体の運営も危うくなっていたはずだ。テロ予告のような脅迫があった「危険」な現場で、騒動の発生後も、多くの市民ボランティアがその場を離れることなく活動したのはなぜなのか。その背景を知る必要があると感じたのだった。

誤解のないように言えば、あいトリの運営において、ボランティアの存在やその育成はとても高い重要性を与えられていた。上記の疑問から筆者が行ったインタビューで、あいトリのボランティア研修の担当者は、「アーティストやキュレーターは多くは芸術祭が終われば現地を離れるのであり、重要なのは、ボランティアとして関わる現地住民に何を残せるかだ」と、その研修や関係構築に膨大な時間を割いたことを語ってくれた\*\*\*。こうした認識は、おそらく多くの芸術祭やアートプロジェクトに共有されているものである。にもかかわらず、ボランティアの役割の大きさが従来ほとんど語られなかった背景には、いささか乱暴に言えば、「アート活動を主導するのは、専門知識を持ったアーティストやキュレーターなどであり、ボランティアはあくまでその手伝いをする人」という、社会一般の前提があるのではないだろうか。つまり、そこにあるのは、芸術祭や地域で行われるプロジェクト型の活動における、「アートの主体」をめぐる認識の見直しの必要なのだ。

\*\*\*「『ミュージアム・エデュケーター』があいトリで果たした役割。会田大也に聞く『ラーニング』の重要性」(ウェブ版美術手帖、2020年2月16日公開)。https://bijutsutecho.com/magazine/interview/21252

そんな関心を抱きながら臨んだ2020年のインタビューで、小川さんはいつもの飄々とした口調で、先の社会の「前提」を覆すようなボランティア観を語ってくれた。とくに印象的だったのは、テラッコが「出しゃばる」ことの重要性を語る、以下の発言である。

小川: というのも、ボランティアの人は、普段の生活のなかでそれぞれ何かしらのプロではあるわけですね。そこには、僕や作家が知らないような知識や経験がたくさんある。もしかすると僕が采配をふるった方がイベントはスムーズに

進むかもしれないけれど、テラッコの経験に預けた方がおかしなことが起こる。作家も従来の常識が通じず、思い通りにならないからこそ、新しいことを考え始めるんです。

この一見さりげない発言には、「アートの主体」をめぐる「TERATOTERA」の実験性が端的に現れている。エンジニアや新聞記者、整体師、行政職員まで、さまざまな生業を持つボランティアが主導する「TERATOTERA」において、アーティストやディレクターは、あくまでその活動を形成する「一人」になる。もちろん、そうした立場のフラットさが実際の現場で十全に果たされたかは、外部の人間である筆者にはわからない部分が多い。けれども、各ボランティアの背景がプロジェクトのあり方や関係作家の制作に影響を与えることを厭わないこの場の作り方が、現在、重要な問いを発していることはたしかだ。

メンバーが互いに影響を与え合いながら変化する、こうしたピオトープのような組織は、そのまじり合うカラーの多さや複雑さゆえに、一言では名付けがたい特性を持つ。また、トップダウンに場を組織する人物や理念の不在は、結果的に、意思の決定に多くの時間を割くことを求め、個人にも受け身ではない自主性を求めるだろう。そうしたなか、「TERATOTERA祭り2020」の一環で開催されたTeracollectiveの「トーク」では、そのわかりづらさや自主性を積極的に楽しんできた、メンバーたちの横顔を見ることができた。

初期から現在までの参加者が集まった、テラッコの同窓会的なこのトークでは、それぞれのメンバーがプロジェクトに関わった経緯や、活動で感じたことを話した。そこで強く印象に残ったのは、多くのメンバーがまるで示し合わせたように、とても楽しそうに、「よくわからないけど……」とその経験を振り返る姿だった。この「わからない」は、あくまでも筆者の印象であることを前提に言えば、自分と一線を引いた場所に「アート」を置き、それと向かい合うときに人が発する、不安まじりの「わからない」とは異なるものだ。

たとえばあるメンバーは、会場使用の許可を取るため、飲食店に連日通い、店主とコミュニケーションした。別のメンバーは、

日頃のモヤモヤした関心を「駅伝芸術祭」というかたちで具体化した。「作家の座る椅子に観客が電流を流すパフォーマンス」に、戸惑いを覚えながらも参加し、感動を覚えたメンバーもいる。そこには、「アート」を外部から眺める視点はない。むしろ、そこに積極的に巻き込まれ、普段の社会的な常識が未知の方へと拡張していくさまを、言葉にしづらい感覚とともに楽しむ人の姿があるだけだ。

わかりやすい中心点を作ることなく、さまざまな背景を持つ人々が「アートの主体」として動き回るこの場のあり方こそ、筆者が考える、「TERATOTERA」が10年をかけて見せたアートの可能性だと思う。いっぽう、矛盾のようだが、その場の形成に小川さんの存在とマネジメントが大きく関わっていたこともたしかだろう。今後、ボランティア主体の「Teracollective」の活動が増えていくなかで、テラッコたち自身がその可能性をどのように引き取り、考え、活動へと反映させるのか。その挑戦の持つ意味は、意外なほど大きいはずだ。



コロナ禍の2020年6月から8月にかけて、本書のためにTERATOTERAの記憶を語るミーティングを10回行った。オンライン開催になったが、そのメリットを生かしてカナダやドイツに暮らす元テラッコも参加した



企画だけでなく、イベント当日の運営もテラッコの役割。2012年8月、「江戸東京たてもの園」(小金井市)の古民家で開催した音楽ライブ「納涼の音」には、テラッコの多くが浴衣姿で参加した

東京都生まれ。自身が置かれている身の回りの生活環境や人物、または展示場所に関係する風土・風景、環境や文化などに反応しながら、サイトスペシフィックな彫刻やインスタレーション、映像を制作している。現在、2021年完成予定の長編映画『Songs For My Son』を制作中。詳しくは：<http://songsformysonmovie.com/>

## ギトギトコテコテの制作 笑顔で支えたテラッコたち

和田昌宏

TERATOTERAの展示には、過去数回参加させていただききました。もともと東京は西の方出身なので、TERATOTERAの開催されるJR中央線界隈はギリギリ自分のホームランドという意識もあり、いつも気を遣わずに楽しくやらせてもらっていました。

特に、毎回展示のボランティアスタッフとして関わってくれていた、テラッコの皆さんがとても献身的なことも、リラックスして心穏やかに展示に集中できる要因だったと思います。TERATOTERAの展示の際(それ以外の時にも)は、まれにテラッコの方々には無理をお願いし、制作を手伝っていただきました。

テラッコの方々は、普段日常的には外でまっとうなお仕事をされている方が多かったので、アーティストとして活動している中では、なかなか深く知り合うことのなかった職種の方々にお手伝いをしていただけて、自分のいつもの作品では思いつかなかったような要素を取り入れることができました。なので、TERATOTERAで発表した作品は、やはりTERATOTERAがあったから制作発表できたものが多かったのではという感覚があります。もちろん他の大きな要素として、公共空間を使つての展示というお題も相まつの部分はありますが。

いずれにせよどこかで、「アートプロジェクトに関わりたんです」という何となくおしゃれで軽やかな、カフェのフレンチトーストみたいな響きに対して、ギトギトコテコテのラードまみれの豚骨ラーメン作りを手伝わせたいみたいな、少し意地悪な、テラッコの方々のアートというものに対する熱意や意識を試している部分もあったのかもしれない。

例えば、アトリエに落ちているゴミや自分の体毛、排せつ物をこねくり合わせた団子屋台を作り、井の頭公園で展示、パフォーマンスした際は、当時テラッコとして参加していたファン・タンミンちゃんという台湾出身の可愛いらしい女性に、少し肌寒い中、外で水商売風の恰好で売り子としてその団子を販売してもらいました。

またある年は、遠山尚江さんという普段は整体師として働いているテラッコの方に、その整体師という日常の職業を生かし、映像作品に出演してもらいました。展示期間中は、その映像作品の裏で遠山さんが、実際に来場者に対して施術をほどこすというパフォーマンスも行ってもらいました。この作品はその後、横浜市民ギャラリーあざみ野という所で開催された展覧会でも出品し、そこでも遠山さんには会期中施術パフォーマンス

スをお願いし、仕事との兼ね合いの中、快く引き受けてくれたことにとても感謝しております。

他にも潰れた焼き鳥屋で、会期中ずっと炭火で焼き肉を焼いているというパフォーマンスでも、テラッコの皆さん総出で、モクモクギトギトの焼き肉の匂い漂う空間の中で、雨合羽と髪の毛を覆うガードにマスクの完全防備姿で、汗をかきながらひたすら炭火で焼かれる肉に向き合い続けてくれていました。

またTERATOTERAとは関係のない映像作品でも、テラッコの山上祐介さんに、うっすら雪が残る山奥で、ワイシャツ1枚で映像作品への出演をお願いしたこともありました。

ギトギトコテコテの何かに付き合ってもらいながらも、内心はわからないけど、皆さん笑顔で協力してくれることに対して、こちらはもう頭が下がりはなしでした。

が、あの皆さんの楽しそうな顔を見ると、またもう少し難しそうなことをお願いしたいな。もっと楽しそうな笑顔が作れたらいいなと思ってしまいます。

長い年月をかけ、こうしてボランティアの方々と密に関わり、お互いにとってお願いして良い関係(勝手にそう思っているだけかも)が築けたということが、長い目で見て一番の成功だったのではと思う限りです。

さらに、こうした、アーティストとボランティアの方々との親密な関係を築けた理由として、「Art Center Ongoing」という場所があったことと、その代表でもあるTERATOTERAディレクターの小川希くんが、良い意味で適当にやらせてくれたからだということは一応最後にいっておいた方がいいかなと思います。



和田昌宏『晩秋』。古い木造アパートの一室を壁で2つに区切り、奥の空間でテラッコが肉を焼き続ける。その手元など細部をビデオ撮影し、手前の空間のモニターにリアルタイムで映すという作品。観客は換気扇から漂う焼き肉の匂いとともに映像を見ることになる(2015年11月)

## TERATOTERA and Me

Beyond “Neighborhood Art Projects” – Artists Who Create and the Locals Who Support Them

Whether they create objects or stage performances, artists are the main agents of all art projects. In the case of TERATOTERA, participating artists were chosen by the volunteer staff of TERACCO. They were responsible for negotiating with the artists and helping with the production of their work. Moreover, since neighborhood-based art projects require the cooperation of local residents, the task of community coordination was put largely in the hands of TERACCO. What did artists and local collaborators think of TERATOTERA and TERACCO?

# WII

## TERATOTERAと私

### 「街なかアート」の枠を超える 表現を創る作家、支える地域

アートプロジェクトの主役は、美術家やパフォーマーら広い意味でのアーティスト。TERATOTERAではしばしば、テラッコがアーティストを指名する。テラッコはアーティストとの折衝を担い、制作にも協力した。街を会場とするアートプロジェクトには地域の協力が欠かせないが、地域との連携も多くの場合、テラッコが担った。アーティストと地域の関係者にとって、TERATOTERAとテラッコはどのような存在だったのだろうか。

アーティスト。1980年、東京都生まれ。現代社会が抱える問題を切り口にしたフィクション作品から ごく私的なドキュメンタリー、コント的な実験作品など多彩な映像作品を意欲的に制作する。1年間のベトナム滞在で撮影した多くの作品の発表の機会を模索している。

## 私は待っていた、暴力的な「非日常」を

山本 篤

2012年11月、私はビニールシートと廃材で覆われた仮設テント内で、ぼろをまといながら、参加者が願いごとを書いた紙をテントに貼り付けるのを待っていた。

2014年2月、私はかつては飲食店舗であったであろう廃墟で、ぼろをまといながら、髪切りばさみを片手に、参加者が「理想の街」について絵を描くのを待っていた。

2015年2月、私は「武蔵野芸能劇場」の多目的スペース内で、フライドチキンの箱を膝にのせながら、地下アイドルの握手会会場に設置された椅子に座って参加者が来るのを待っていた。

2015年11月、私はJR三鷹駅南口から徒歩5分、地下商店街の貸しスペースの入口で、ピエロの恰好をして、バルーンアートを作りながら、参加者が来るのを待っていた。

2017年11月、私は「武蔵野芸能劇場」の多目的スペース内で、大きな黒板とピッチングマシンの間の空間で目隠しをして寝ころびながら参加者が来るのを待っていた。

私は待っていた。

多くの人が来てくれるわけでもない「祭り」と名づけられたイベントの中で。テラッコと呼ばれるボランティアスタッフと共犯関係を結びながら、参加者が来ることで、自分の表現行為のスイッチが入るのを待っていた。

主に映像作品を作り続けている自分にとって、「TERATOTERA祭り」は、来訪者の少なさ、会期の短さ、テラッコのサポートという3つの条件が絶妙にマッチし、自分をパフォーマンス作品に挑戦させる貴重な機会になっていた。そこでは参加者がいて初めて成立する一期一会の贅沢な空間設計が可能だったのだ。

自分の表現の可能性を大きく拡張してくれた「TERATOTERA祭り」を振り返ってみて、ふと我に返る。あれは「祭り」だったのだろうか。

別の角度から考えてみる。

私は「TERATOTERA祭り」について、無関心を決め込んで歩く市民たちと「俺が俺が」と主張し続ける商業サインに囲まれた、底なしの「日常」の風景の中で、自分の表現を成立させる闘いの場であったと認識している。もちろん大観衆の詰めかける闘技場ではなく、路地裏のストリートファイト、地下のファイトクラブ、そんな場所のイメージだ。

偏見であることは承知の上で、「TERATOTERA祭り」は、展覧会という枠に守られていないようにも、来場者の「見る」という姿勢も前提とされていないようにも思える。そして、街なかアート＝「街との融和」「街おこし」「新しいコミュニティの創造」というような耳触りの良いコンセプトとは真逆のベクトルを持っていたと私は信じている。

本当の「祭り」とは、古来の祭りの暴力性を考えれば、果てしない「日常」の強度を無効化するほどに、暴力的な「非日常」によって、意識をハイジャックする試みなのではないだろうか。

そう、「TERATOTERA祭り」はアーティストたちにとっては、日常と対峙し、表現の存在をかけた闘いであり、市民にとっては、日常風景の中に、罨のように設置された非日常へと引きずり込むブラックホール(非日常)として機能した可能性があるかもしれないと思う。

現在を起点とした「祭り」が生まれる可能性に興味を持つ自分にとって、様々なアーティストによる「祭り」の火種が撒かれる機会がなくなるのは寂しい気持ちはあるが、これからも路地裏のストリートファイトやファイトクラブがなくなることはないのだろうし、そんなアンダーグラウンドな行為を日常に表出させる機会が今も、日本のどこかでポコポコと噴出していることを夢見ている。



立ち入り禁止の土間で客を待つ床屋に扮した筆者(2014年2月)



ピエロに扮した筆者が客を待つ『It's a small world』(2015年11月)

非生産的生産活動家。滋賀県生まれ。2011、2012、2014、2016各年度の「TERATOTERA祭り」、2017年度の「西荻映像祭」に参加。最近は日々慎ましく暮らしています。

## 『たきを(実家)』再訪

東野 哲史

どうやら、確認してみたら何だかんだで5回ほど参加させていただいてたようです。有り難いことです。その中でもここでは、特に思い出深い2016年10月の「TERATOTERA祭り2016 Involve - 価値観の異なる他者と生きる術 -」での拙作『たきを(実家)』を改めて振り返ってみたいと思います。

・三鷹駅北口徒歩5分、ブルーシートの暖簾をくぐると焼き鳥屋跡の床の穴(排水溝?)に水を張った釣り堀。店員らしき人物(ツートンカラーのセル眼鏡、耳が隠れるくらいのボブに緑色のキャップ、タッタソールチェックのシャツをケミカルウォッシュのジーンズにイン、素足に水色のスニーカーっぽいスリッポン)がそれまで食べていたご飯、パン、魚肉ソーセージなどから少量ちぎって餌にした釣竿を来場者に渡し、ビールケースに座り一緒に釣り糸を垂らす。ともに過ごす無の時間。

・魚はフナの稚魚。餌と釣針が大きすぎて釣るのは非常に困難。〈結局会期中誰一人として釣れなかった。ちなみに実家の郷土料理といえば鮎寿司〉

・店内の隅にあるテレビには、流し打ちで有名な読売ジャイアンツの選手が故郷の銚子を紹介するドキュメンタリー「わがふるさと 篠塚利夫」(1981年 フジテレビ)が垂れ流されている。〈実家のある町に唯一の電器屋のおじさんが巨人の篠塚に激似で、店の看板にも篠塚の似顔絵が描いてあった〉

・店員はおもむろに立ち上がり、スーパーの袋詰め用の台などに置いてある通信講座の冊子をお客さんに手渡す。客の様子から独断でポイラー技士2級や大正琴など受講講座を薦め、傍らにあるキャベツから葉っぱを1枚ちぎって頭にそっと被せてあげる。〈熱さましの民間療法らしい〉

・神棚的な高い位置に置いてある「お〜いお茶」のペットボトルを脚立に上って取って見せる。俳句大賞に載っている佳作特別賞の一句「病院を出て春風とバスに乗る」を朗々と読み上げ「これ、実は僕の父親のなんですよ〜」と自慢げに紹介する。

・床の小さな穴に挟まっている使用期限が切れた色々な店のポイントカードやクーポン券の束を取り出し、もし手持ちに不要なカードがあれば交換を促す。なければこちらから1枚一方的に進呈。

・店内中央の棚に並べられた数冊の相田みつをの詩集から1ページを選び、画用紙に毛筆で真似て書く。ただし語尾は

関西弁になっている。「たきを」と署名、消しゴムで作ったハンコを押す。500円で売りつけるが大方は拒否、売れ残りが床を侵食していく。〈実家のトイレには相田みつをの日めくりカレンダー〉

・そのとなりの台(おそらくテイクアウトの焼き鳥を販売していたであろうカウンター?)には、釣り堀の底の排水口を塞ぐために使用した鉄板の端材がぶっ刺さった油粘土の彫刻とともに、壁面には郵便受けにたまに入っている水道工事のマグネットが多数貼られている。〈みうらじゅんが冷蔵庫に貼るマグネットということで「冷マ」と名付けて収集していることから、ヤフオクなどでも取引されていることを最近になって知ったが、2014年ごろから自分も何となく気になって集めていた。これは同時代性の現れですNE☆〉

・耐えかねた客が釣りをやめ出ていこうというその時、エコーの効いたマイクで「イツ・パーティー・タ〜〜イム!」。ディスコ・ライト点灯とともに80年代にRun-D.M.C. がPVで使っていた巨大なラジカセをスイッチオン。店員自作のボイスパーカッションのビートが炸裂する。〈近隣から何回かうるさいと苦情がきたが謝りつつ、めげずに続行〉

・オールドスクールラッパーよろしく爆音ラジカセを肩に担ぎ、客の希望する次の展示会場まで案内する。とは言えあまり話すこともなく、何となく気まずい時間を最後の最後まで共有する。

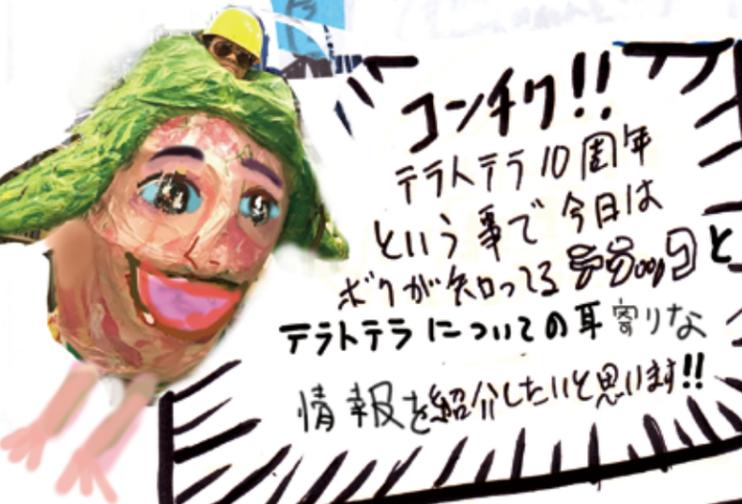
反省点など: 今回に限った話ではないのですが、テラッコのポテンシャルを引き出せずに、全くもって独りよがりになってしまいました。次回はもうちょっと改善したいと思っています。



爆音ラジカセを肩に担いで、観客を案内する筆者(2016年10月)

# テラッコと

## TERATOTERAについて知っていること、その事例



「コンキウ!!」  
 テラテラ10周年  
 という事で今日は  
 ボクが知っている事や  
 テラテラについての耳寄りな  
 情報を紹介したいと思います!!



まず紹介したいのが2011年の  
 テラテラ祭。吉祥寺パルコの屋上で  
 野獣たちが暴れまわる伝説的な展示でした。

永畑智大・中野トシノブ・高村 高村 高村「TERATOTERA祭」に参加する。  
 ファミリーレストランの客席の裏側で活動する。

どんなこんなで  
 Xマッチや気のあるボランティアが  
 いるアートイベントとして定着したテラテラ。  
 作家の間でもテラッコとどうコラボ  
 するのかに興味テーマとなる感じ  
 がありました。サトウハチロー  
 ならぬテラッコのイラスト  
 とでもいってあげよう...

2016年のテーマは「Involve」他者とどう生きるのか?  
 というシリアスなテーマだったので僕も初めての  
 コンセプトアートに挑戦しました!



たいてい重くもなり単管のランプを  
 テラッコ10人がかりでバケツル  
 まで階段がさおりました。相模原は  
 あつとこの間におおりました。テラッコ  
 おとすべしですトね!!

テラッコと作家のコラボで伝説になっているのが  
 鬼才 泉太郎さんの映像インスタレーションの中で  
 顔に布を被って足が半分埋まったテラッコ達が  
 泉さんの合図で不気味に動く奇妙な作品。



思わぬ被る布色はざしたテラッコの「私、なにやしてるの?」  
 的な表情は今でも忘れる事ができません。

この年のテラテラで知り  
 合った高村さん  
 の後、僕も屏風絵と一緒に  
 仕事をすること。  
 現在もToken Art Center  
 というアートスペースを  
 作ってあげて下さる。  
 この人の人生を動かす  
 アートイベント外には  
 かつてあった(は)か?

2014年にはテラテラが  
 ついに三鷹に進出します。  
 たしか「シビックプライド  
 (Civic Pride)」  
 というコンセプト  
 だったと思  
 います。



おまけ 似顔絵クイズコーナー



1992年神奈川県生まれ、2015年武蔵野美術大学油絵学科卒業。相反する物事を反転もしくは攪拌する装置としての作品を目指す。パフォーマンスをベースに、自身と観客の身体を扱った参加型作品を多く制作しており、展覧会やイベントの企画にも取り組む。2019年から美術に関わる女性たちのネットワーク「female artist meeting」を津賀めぐみとともに企画。

## 大事な作品はTERATOTERAで作ってきた

うらあやか

振り返ってみると、大学を卒業したあと最初の発表が「TERATOTERA祭り2015」のイベントで、その後2015、2016、2017、2019年と5回(!)の「TERATOTERA祭り」に参加した。自分の大事な作品はTERATOTERAでの発表に際して作ったことも多かった気がする。

もちろん、国内外の作家の仕事や芸術祭という形式にも多くの影響を受けているわけだが、私は「参加」が伴う作品を考え制作することの多い現在の姿勢は、TERATOTERAでの「現場対応的」なオーガニックさに学び、発表を通して実際に形づくってきたのではないと思う。良い機会なので、この場を借りてイベントで発表したものは割愛した4作品について振り返ってみようと思います(何か見つけることができるような気がする)。

2015年の「-Sprout-」では、『my body myth』をライブハウス「おんがくのじかん」で。お客さんの「ほくら」を銀色のペンで繋ぎ、それを星座に見立てて名前をつける参加型パフォーマンス作品で、その「ほくら星座」の形をもとにお客さんにどんな形に見えるか、その形をどこかで見たことあるかなど質問してゆき、個人的な記憶と身体の印とを身勝手に結んでしまうといった作品だった。天井には小屋やテントのイメージで布を張り巡らせたりしていた。この頃までは会場に装飾を施していたが、これ以降はほとんど身ひとつで作品を完結させるようになる。銀色は以降の作品にも度々登場するようになり、また他人の身体に触ることを少しずつ開拓し始めたのもこの作品からだ。会場であった「おんがくのじかん」ではその後もライブ企画にパフォーマンスバンドで参加したりした。

2016年「Involve -価値観の異なる他者と生きる術-」では、『ピースのネックレスがほどけて』を三鷹駅近くの路上などで。『新版 きけ わだつみのこえ』(岩波文庫)から詩を借りて、それを1音ずつに分けたものを、伝言ゲームの容量で一列に並んだお客さんに前から後ろへ流してゆく参加型パフォーマンス作品。この作品以前はパフォーマンスをするにも場所に装飾や構造物を取り入れることが多かったが、この作品以降「いつでも逃げられる」「特別な感じではない」などを強く意識することになった。場所とキュレーションについての当初の事務局からの提案は、同じく参加作家である橋本聡さん

の作品の置かれる部屋の中に私のパフォーマンスなどを共存させるといった相部屋のプランだったのだが、後に街を広く使いお客さんを(勝手に)巻き込むようなイメージで「お客さんを連れ出す」(身軽な)プランに変更することにした。「多少の摩擦を覚悟しつつ、絶妙に街に溶け込むように」「街にはたくさん人がいて、お客さんは観客という役割を負った状態で展覧会に参加しに来ていて、自分はアーティストで、という個別の身体に作品や展覧会を契機に割り当てられる役割の在り方を攪拌したり、操作するような感じ」とか、そんなことを考えていた。急遽スーパーの中でもやらせてもらえた。勝手にやっていたのを店長さんがその場でOKしたのだが、その時は本当になんて柔軟なスーパー、そして展覧会なんだろうと感動しました(そしてなんてケツタイな作家…)

2017年「Neo-political～わたしたちのまつりごと～」では『葬式のあと、赤ちゃんの話をして少し大丈夫になったから』を玉川上水の緑道にて。お客さんとうらがが2人で前後を向いたまま道を進み、帰りはその向きのまま来た道を戻りつつ数を数える参加型パフォーマンス。1回1人ずつ。終わりにボタンがついた黒い布の記念品をお渡し。記念品制作係はテラッコ。お客さんと対になってパフォーマンスを行う中で共有する気遣いのようなものによる繋ぎとめによって何か立ち上がらないかと実験した作品でもあり、ただ気まぐれに設定したルールを使いながら歩いただけのような気もして、自分にも分からない部分が多い(前後が見えていて足が4つある複合体のようなカメラ、気遣いによって脳神経が共有されているような……)。

2019年「選択の不自由」では『バナナ・ミーツ・ステーション』をJR三鷹駅南口のデッキにて。「単一のDNAを持つバナナをシェアし、バナナ化した身体を持つ人々/様々な芸術作品に様々な意味と価値づけを都度持って現れる魅惑の植物」というような、バナナと表現についての身勝手なレクチャーらしきものをお客さんにして、その後バナナをみんなで食べる参加型パフォーマンス。バナナ持参歓迎。こんなにも雑踏にさらされる場所でやることもなかなかない(今思えば、普段からいる弾き語りや宗教勧誘の人に積極的に交じってパフォーマンスを行ってもよかった)。食べ終わったバナナの皮

をしかけて、漫画のように誰かが転ぶのを待つという密かな企みもあったが、やめておくことにした。この年は「あいちトリエンナーレ」の一件があり、同じ日に文化庁の前でアーティストたちによるデモが行われるような状況の中にあった。誤解を恐れずに言うが、公共空間へ作品を実装させるにあたり出てきたアイデアはできるだけ積極的に試すような姿勢のもとTERATOTERAに参加してきただけ、それは何度も(なぜか!)誘っていただくことで培ったテラッコや事務局の皆さんの思考にかなり影響を受けていると思う。アーティストやキュレーター、そしてボランティアという役割の呼び分けに限定せずに、発表と同時に実験することを複合的に受容する「TERATOTERA祭り」と「Teracollective」(テラッコの新たな集団)の在り方が広く共有されたら、権威的ではない面白い試みももっとたくさん現れると思う。そしてそれは、私のようにテラッコに影響を受けたアーティストが媒介となって作り残していくようなものなのかも……。頑張る!



観客が1音ずつ伝言する『ピースのネックレスがほどけて』(2016年10月)



観客の腕のほくらを銀色のマーカーで結ぶ『my body myth』(2015年11月)



観客と筆者が逆方向を向いて方を並び、緑道を往復する『葬式のあと、赤ちゃんの話をして少し大丈夫になったから』(2017年11月)



JR三鷹駅南口のデッキで参加者全員で同時にバナナを食べる『バナナ・ミーツ・ステーション』。右から2人目が筆者(2019年11月)

美術作家。お笑いコンビ「そんたくズ」の田中寿司ロボットとしても活躍。最近の活動は個展「ジョナサン目の色めっちゃ気になる」(2020年、銀座・ガーディアンガーデン)など。第21回グラフィック「1\_WALL」グランプリ。第22回、第23回岡本太郎現代芸術賞入選。

## TERATOTERA 奮闘記

### 田中義樹

作家キャリアのスタートは自分にとってどこだろうと考えてみたらTERATOTERAでした。あれは美大の3年生だった時なんです。小川希さんからヘッドハンティングされたんです。2015年でした。「TERATOTERA祭り」というアートイベントのイベントとして野外展を三鷹の駐車場だった場所を借りてやるから、出品しないかと。生まれて初めて作品でお金をもらったのがその時でした。

その時はでっかい富士山を作りました。自分の中では良い出来栄えだったのですが、経験不足もあって、外に出すにはクオリティーが低かったのです。その年の「TERATOTERA祭り」の本イベントで初めて「TERATOTERA祭り」そのものを観たのですが、出している作家の作品が面白すぎて衝撃でした。こんなイカれた作品初めて観た！こんなに面白い作品初めて観た！何これ！すごい！意味わかんない！バンド！ピエロ！水のチューブ！破壊！イベントで出した、自分の作品との差を感じて落ち込みまくりました。同じフィールドで戦うと、やっぱり自分の作品は面白くなかったのだと痛感してしまいました。本気だったけども。

だからもう出品の話は二度と来ないだろうとか思ってたんですけど、次の年に「TERATOTERA祭り」のイベントではない本イベントの方に出ないかとまた連絡が来まして、その時自分は飛び上がって喜んでました。前の年には完全に作品で負けたと思っていたけど、もう1回戦えると思ったのです。次こそは誰よりも面白い作品を作りたいという情熱が明らかにありました。

その時出されたお題は「involve」で、鑑賞者を巻き込む参加型作品を作れとのことでした。4年生の秋に卒業制作をそっこのけで、初めて作る対話形式の作品の構想をずっと練ってました。三鷹の超アンダーグラウンド喫茶店の「上床」という場所が割り当てられ、なんとかその場所に負けない作品をと、ずっと頑張っていた気がします。外での展示の経験値も少なく、どうしたらいいか全くわからなかったのですが、闇雲に戦っていたのです。

それで結局イケメンアーティストをいっぱい集めてアートの話しかししないホストクラブを作ることにしました。僕の周りにはいい男の作家がいっぱいいたの。高いドンペリとかシャンパンじゃなくて、その作家の作品を買ってもらおう、シャンパンタワーの代わりに小作品のタワーを作って、売れたらコールとかしてガンガンはしゃごうとか考えたり。やってみて思いましたが、ホス

トとしてずっとアートの話するのは大変でした。自分含め、ホストの負担がデカかった。あの時ホストとして手伝ってくれた人たちかなり負担をかけてしまい、それを今でも反省しています。あと、自分のクラブを見て、「アートじゃないわ。こんなもの」とか言ってくる客として来たおばちゃんにイラッとしたり。

そんなこんなでお金持ちのお客さんがいい気分でガンガン作品を買うなんてことはなく、シャンパンタワーの代わりに作った作家の小作品を積んだタワーは最初から最後までそのままでした。でも3日間で200円の作品が2つだけ売れました。限界集落にホストクラブ作っても、もうちょっとは儲かるなってくらい何も売れなかった。今思うと散々だったかみただけど、でもあの時は本当に、関わってくれた人たちみんなでやり切った感じがして終わった後、酔って上床にあったギターを借りて、そこにいたみんなでヒロウズの「日曜日よりの使者」を熱唱したりして浮かれてました。

TERATOTERAは他のアートイベントと比べて泥臭い感じがします。テーマが「involve」でなくても作家が直接関わる参加型の作品が多いのもありますが、出る作家が全員体当たりで鑑賞者に何かギフトを渡そうとしてくるような感じがします。全身全霊で、超気持ちが入ってるから、超気持ち悪い。初めて自分がお客さんとして観に行った2015年の「TERATOTERA祭り」の時は、その熱量に当てられて次の年に、自分が出る時も気合が入りまくってしまった。周りの作家の作品も、観にきた人によっては逃げたくなるんじゃないかなとか思うような作品も多かった。意味わかんないし、怖い。でもそれが、ものすごく面白かった。

あれが作家キャリアのスタートだったせいか、自分の作品はいまだにサービス精神がすごいねとか言われます。いまだに作品を作る時、あの時に全身全霊で何かを伝えようとしてくれた彼らのことを思い出すし、必死だった自分のことも思い出します。(今も必死だけど)とにかく全身全霊で鑑賞者に何かを持って帰ってもらおうと考えて作品を作るのは、あれがスタートだったのかもしれない。

ホストクラブが大変すぎて、もう二度とリレーショナルとか息巻いて作品の中で対話などするかとは思いましたが。

最後に上床のお敬ちゃん、三郎さん、モリモリのサービス精神と一緒に遊んでくれて本当にありがとう。いつかまた遊ぼうね。

## TERATOTERA に関してフスケた一考察、というか楽しい思い出

### 遠藤一郎

いやいやいやいや、、なんというか。

あれもこれもすっかり薄れゆく記憶のはしばしで。TERATOTERAは、、、楽しかった!!!

だって楽しいことしかおぼえてないっていうか。テラッコの人たちがオモシロイ。かなりオモシロイ。ぜんぜん堅くないから、なにかとみんな笑える。それがすごく好き、楽しい。。それってユルってことなんじゃないの?!なんて言われがちなものじゃなくて、そんな野暮なことじゃなくて、一生懸命だから、たぶん。だとしたら「現場で仕事やってます」なんていうプライドを誇ったクダラナイもんじゃないから、楽しくて一生懸命だから出来事がホットでリアルで笑えてしまう。充実って要はそれ。

だいたいテキパキ汗流して頑張る女性が2人くらいいて、サークル乗りよりはわりかし意識が高めのウキウキした男女がワイワイいて、状況とかに敏感で不安が募りがちな真面目な人がちょっといて、社会人の羽目を外してこどものようにイベントを謳歌してるおじさんが数人いて、社交とかお世辞とかを往年らしく立ててカバーしてくれるおばさんがいて、なんかやたらメンツが揃ってる。これ全部めっちゃくちゃ大事よ。そして嬉しくもあり面倒くさくもあり、もういいやってなったりならなかったり、離脱したり復帰したり。そりゃ渦は濃くなるわい。充実した喜怒哀楽の訪れ。流石だなあ〜って思う。ナニが流石かはもういいんだけど、、、まあ、、流石としか言いようがないわい、、、現グローバル激流のさなか別次元の潮流を渦巻かせながらねじこんでいくあたり。そのあっけらかんとしたブレない態度、それでしか無理。そんなボスが1人いて。そんな、、かどうかは断定しないけど、いいの。もうこっちは主観で楽しみまくってるから。たまんないのよ。

テラッコのみなさんがカッパの衣装を作ってくれたり、担当現場の合間にカッパ族\* になってマクドとかドトール行ってウロウロしてたり、カッパ族に参加するためにシフトを入れてカッパ茶屋で酒飲んでへべレケになってゴザでイビキかいてる素晴らしき相応しきカッパの姿を実演してたり、昨今は条例とかあるらしいから公園でタバコ吸うなっつってのにあっちの方で街の人間と火つけあってスパスパ談笑してるメスカッパがいたり、そもそもカッパ茶屋なんて開始30分で通報されて警察きてんのにかッパ族がおまわり囲ってバカバカしく対応してるもんだから、はやく誰かこいよ〜って空気の中でスタッフもカッパ族にまぎってるもんだから、もうわけわからん。ホストクラブ\*\* のいわゆる黒

服でキメキメになってたかと思えば少しでもカッパにならなきゃとか言って15分くらいかけてカッパに着替えて15分くらいカッパ族やって15分くらいかけてキメキメ黒服に着替えてホストクラブ戻っていたり、、、もうめっちゃくちゃフラッシュバックしてきたぞ!!! いやこれ全部、TERATOTERAのアートイベントのお客さんじゃなくて、スタッフのテラッコの話だからね。

やっぱ楽しんでなきゃこんなことならないし。そのくせ後日カッパ族の懇親会にぜんぜん来なかったり、テラッコカッパ誰一人。おいおいめっちゃオモシロイ。だからTERATOTERAとか、テラッコとかそのムーブメントが好きだな。そりゃそうだ、エラそうじゃないし。

設定されたフレームに一応はとどまろうとするけど結局はとどまらず、無数に起こるクロスに楽しく共振して照らしていく。楽しいという揺れをパワー源に。

やっぱ一生懸命にて、哀しく楽しい。

ちなみに小川希さんを感涙させるというのは私の一つの目標でもある。なぜかその涙というのは漠然と「オッケイ!!!」という世界観の指針の一つであるのだ。というわけで、すげー楽しい。

いやはや、、、めっちゃオッケイ!!!! ってことじゃん。わおつつ。\*遠藤一郎「カッパ族」(2016年)に、カッパのコスチュームを着て参加したテラッコを指す。  
\*\*『カッパ族』と同時期に行われた田中義樹の作品『ホストクラブ uwatoko 君の瞳をインポルプ』。テラッコが「黒服」に扮した。



JR三鷹駅近くの公園で行われた遠藤一郎「カッパ族」。遠藤が「カッパ師匠」としてカッパ姿のテラッコらとお茶を飲みながら過ごした(2016年10月)



2016年10月の「TERATOTERA祭り」で実現した出会い。JR三鷹駅前で壁画を公開制作していた美術家・浅井裕介を、「カッパ師匠」(未来芸術家・遠藤一郎)が率いるカッパの一群が訪問。駅前広場が和やかな「異類交歓」の場となった

画家、現代美術作家。土やテープ、道路用白線素材とともに様々な場所での植物的な思考で制作を続けた先に、2019年から鹿の血、油絵の具を使い、動物的な思考方法とともに作る絵画を模索中。TERATOTERAには2011年、2014年、2016年に参加。

## TERATOTERAの幽霊

### 浅井裕介

阿佐ヶ谷で少年時代を過ごした僕にとって吉祥寺も、高円寺もとても身近な街で、吉祥寺に「Art Center Ongoing(以下、オンゴーイング)」があることは、街を歩くときに大人の自分と子どもの自分が同時にそこいるようでなんとなく嬉しいことだった。それでも自分がオンゴーイングに足繁く通っているのかといえそうでもなく、さらに言えば今テキストを書いているTERATOTERAへだって不義理なこと自分の参加した回しか見てないし、どちらもここで何かを書こうと考えてみるとあまり詳しくないのだなと思いついて、ひとまず、前提として、事実として。

とはいえ、それじゃあ他の何かに自分は詳しいかといえ何も詳しくない。この15年ほどあっちこちとアートプロジェクトや美術館の仕事などでウロウロしているものの、どの場所のことだって胸を張って話せるほどにリサーチをしたり、そこにいる人と仲良くなってその後もずっと密に付き合いがあるところなんてまずない。書いていて少し寂しくなってきたが仕方がない。それはなぜかといえば作家としてどこぞに呼ばれてここへどうぞと場所をもらい、作るべき作品を相談したら、あとはもう与えられた場所と時間めいっばいに大急ぎで全力で作って、作り終えたら大慌てで次の場所へと去っていくからに他ならないのであって。作る→去る→帰ってこない=どこかで描いている、お互いに便りのないのは元気な証拠、遠くであって懐かしい故郷くらの感覚でいたりするものも事実である。

何が言いたいのかといえば、いわゆる美術空間の外で作品を作るために一度生まれた関係性というものはちょっと特殊な感覚なのである。制作をしたその場所に立ち返ったその瞬間、長い間見てなく詳しく知らなくなつて(それがどれほど大変なのか知っているがゆえにも)自分の中にしっかりと残っているものが動き始めて、そこで何があったのか感じ取れちゃったりするものなのである(これは別にスピリチュアルな話ではない、さあここから話をもう少しだけ進めてみよう)。と、いうことは、スタッフのみんなが11年、様々な作家、様々な空間、様々なスタッフで編み上げてきたこの膨大な時間は、それぞれの記憶に重なり合いながら目に見えない幽霊のように、TE

RATOTERAをつなぐこの間の空間のそこかしこにペロッとへばりついているのだらうなと思うのだ。だからあの濃い作家の面々(やそれをサポートする人)たちの記憶が染み込んでいそうな壁や高架下、空き店舗などを通るたび、ひよっとしたら行われていたかもしれない何かを思いたちソワソワゾワゾワワクワクとするのである。

最後に一つだけ、自分の作品の話を。僕は2011年に吉祥寺の西友の柱ヘマスキングプラント、2014年に今はなき爆音映画祭聖地の「吉祥寺バウスシアター」のラストを飾る作品『世界中の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている』、それから2016年に三鷹の駅前で仮設した壁に現地の土を使い泥絵、と3回制作をさせてもらったのだけれども、どの場所でも朝から夜までヤモリみたいに壁にへばりついて描き続けていると、朝に夕にディレクターの小川希さんが颯爽とスポーティーな自転車でやってきては嬉しそうに「やばいねー」と話してくれるその姿はなぜだか日本人離れして見えた。フットワーク軽いこの感じ、失敗を恐れてないこの感じ、謎の寛容さ、なんだろうなと考えてみると「ああそうかアジアだ」と、思った。そしてそこには文化を育てるためにとても大事な要素が詰まっているように思えた。

TERATOTERAの間で、アジアを感じながら、僕らはまだまだ変化を続けよう。



「TERATOTERA 祭り2016」ではJR三鷹駅前の広場で壁画を制作。通行人に手形を押してもらう形で、制作に参加してもらった(2016年10月)

タイ・チェンマイ大学で臨床心理学の学士、メディアアートデザインの修士を取得。タイの政治情勢や社会構造をテーマに、ユーモラスかつ風刺的なパフォーマンスやビデオドキュメンタリー、ライブなどを企画制作している。

## レジデンスで夢が実現した

### ターウィーパツ・プレーヌーン (通称ヨド Yodo)

皆さん、こんにちは。私は2016年12月から翌年2月まで、TERATOTERAのレジデンスプログラム「TERATOSEA(テラトセア)」で東京に滞在しました。リサーチを続け、その成果として2月に開催「Brackish Tomorrow」を開催しました。その間、「Art Center Ongoing」の関係者やテラッコに助けられました。それは私にとって忘れがたい、素晴らしい思い出です。(なかでも、吉祥寺の宿舎で過ごした最初の夜の体験は忘れられません。タイから東京に着いたばかりだったので、どうすれば温水になるのかわからないまま、シャワーを浴びたのです。東京の12月の夜に)

初めての日本は何もかもが刺激的でした。タイとは全く異なる社会で、右も左もわからず、言語と文化の壁に直面しました。それでも、テラッコやアーティストの友達に助けられて、異郷で暮らしつつリサーチを続け、個展を開催することができました。東京でのプロジェクトで私は、ティラピアという魚を題材として、冷戦期のタイ王室と皇室との関係を探りました。それはタイの現代史と政治、とりわけ人々の愛憎や恐怖、苦痛を形成するメディアとプロパガンダに関わるものでした。

そのプロジェクトを私はテラッコとともに進めました。実はティラピアという魚は、1960年代に、魚類研究者でもある皇太子(現上皇)から、食糧不足に直面していたタイの国王に友好の証として贈られたものです。それに関連する調査にTERATOTERA事務局の池田佳穂さんらが同行してくれました。国会図書館新聞資料室で、冷戦期のタイと日本の関係を日本人がどのように見ていたのかについて、興味深い情報が得られました。両国の友好を深めるために、タイがいつも象を日本に贈っていたこともわかりました。

私はまた、テラッコを対象にワークショップを実施しました。ワークショップでは、ティラピアが皇室から王室に贈られた記録を示し、その史実がタイ国内でプロパガンダとなったことを説明しました。そのうえで参加者に、プロパガンダとしてのストーリーを考えるように促し、それを私がタイから持参した教育用ポスターの上に表現してもらいました。その後、参加者が創作したストーリーを読み上げる声を、ポスターの画像とともに録画しました。プロパガンダ用テレビ番組をDIYで制作したわけです。個展では、その映像をティラピアの魚拓や調理法とともにインスタレーションとして発表しました。

個展の初日には、テラッコが特別なイベントを準備してくれました。タイの政治・社会を研究する浅見靖仁・法政大学教授をゲストに招いたトークショーです。浅見教授はタイ語に堪能だったので、ほとんどタイ人と話している感覚で、自分の展示について話すことができました。わずか5日間でしたが、テラッコの厚意で素晴らしい展示になりました。

タイに帰国する時期が近づいた頃、何人ものテラッコから「東京でしておきたいこと」を尋ねられました。高村瑞世さんはディズニールランドに誘ってくれました。とても魅力的だったのですが、費用も時間もかかるので辞退しました。その代わりに、もっと簡単に費用もかけないで、私の夢を実現できることをお願いしました。「野球がしたい!」。1週間後に夢が実現しました。井の頭公園の広場で野球を楽しむ、ビールで乾杯をしたのです。私にとってはすごい体験でした。あまりに嬉しくて、満面の笑みとともに叫び出しそうなるのを一生懸命抑えていました。

小川希さんが私の人生に素敵な機会をもたらしてくれました。西岡一正さんは築地市場に連れて行ってくださいました。楽しいツアーでした。岩尾庄一郎さんとのクールでファニーな会話も楽しかったです。佳穂さんはリサーチに協力してくださいました。瑞世さんと阿部葉子さんにもお気遣いをいただき、いい友達になれました。井手賢嗣さんをはじめ「Art Center Ongoing」で出会ったアーティストとは、特別なアートツアーと超クールな時間をともにしました。テラッコの皆さまの支援も忘れられません。そして、TERATOTERAと「Art Center Ongoing」のすべての友人たちに、深く感謝を申し上げます。TERATOSEAのレジデンスは、生涯忘れられない、貴重な経験となりました。

皆さまのご健勝とご幸福を祈念しております。また会いましょう\*。  
\*原文では、最後の一文は日本語で記されている。



個展の初日に開かれたトークショー。左から2人目が筆者。その右が浅見靖仁・法政大学教授(2017年2月)

シンガポール在住。アーティストグループ「Post-Museum」に参加し、社会問題を軸に、アートを通して人と人をつなぐ場作りのためさまざまな企画を実施している。

## 金銭が介在しない「市場」の試み テラッコが引き継ぐ

ジェニファー・ティオ

「Really Really Free Market(RRFM)」は、ジェニファー・ティオが参加するアーティストグループ「Post-Museum」がシンガポールで始動し、国外にも広がっている活動。モノを無料で交換したり譲ったりする「フリーマーケット」をさらに進めて、スキルやエピソードなどを金銭を介さずに交換し、交流する試みです。ティオは2017年7月、TERATOTERAの招きで来日。市民の交流や学習の場でもある図書館「武蔵野プレイス」との共同企画として、東京版 RRFM を開催しました。武蔵野プレイス前の芝生の広場に市民やアーティストが出店した RRFM を中心に、館内の一室でモノを交換する「Tokyo Really Really Free Store」、ティオも参加したトークショー、アーティスト Aokid による展示やパフォーマンス、市民とともに作り上げたオーケストラの演奏など、多彩なイベントが18日間に渡って繰り広げられました。(編集部)

2017年の夏、東京で TERATOTERA、武蔵野プレイスと協働して東京版「Really Really Free Market(RRFM)」を開催し、多くの市民の方々に来場していただきました。TERATOTERAのスタッフおよびテラッコたちの献身的な協力のおかげだと思います。テラッコたちは、私たちがこれまで協働したなかでも最良のボランティア集団のひとつでした。いくらかは言語の障壁があり、RRFMをアート作品とらえていない人も少なくなかったのですが、それは日本では社会的な実践活動に対する認識が広がっていないからだと思います。それでも全員がいっしょになって参加し、RRFMを成功させようと協力してくれました。

RRFMに集まった人々は、自分たちの活動を心から楽しんでいました。そのなかでも、テラッコのメンバーはフルタイムで働きながら、ボランティアとして参加していました。彼らとともに過ごした時間はいまでもいい思い出です。ここに掲載するのは、私が撮影した写真の一部です。

もちろん RRFM 自体も、とても楽しいものでした。興味深い



「Really Really Free Market(RRFM)」にはアーティストやミュージシャン、市民らがさまざまな「店」を出して交流した(2017年7月)

出店が多く、穏やかで親切な人々が集まりました。嬉しいことに、私が帰国した後も、2人のテラッコが東京版 RRFM を続けてくれています。

TERATOTERAのスタッフとテラッコが、今後もいい活動を続けることを期待しています。

最後になりましたが、TERATOTERAは東京の各地域にアートを持ち込むプロジェクトです。それぞれ地域で多くの人々が TERATOTERA と出合っています。その人たちにとって、TERATOTERA は暮らしに楽しみや喜び、さまざまな関心と人生の意味をもたらすプロジェクトとなることを確信しています。



市民が不用品を提供する「Tokyo Really Really Free Store」の準備作業。RRFMと同時に開かれた



テラッコが引き継いだ東京版 RRFM。井の頭公園などで開かれた



RRFMのトークショーで話すジェニファー・ティオ

ベトナム・ハノイ在住。ビデオやインスタレーション、パフォーマンスなどの表現方法で瞑想的な作品の発表を続ける。2013年に「Na San Collective」(ハノイ)設立に参加。San Francisco Art Instituteの客員教授なども務める。

## 忘れがたい TERATOTERA との協働

トゥアン・マミ

トゥアン・マミはベトナムを拠点とするアーティストで、2018年の「TERATOTERA祭り」に参加した。会場はJR三鷹駅北口にある「武蔵野芸術劇場」2階の小ホール。約100人収容可能という大空間に、映像と写真によるインスタレーションをどのように立ち上げるか。来日から展示開幕まで時間は限られている。その中でマミは、TERATOTERAのスタッフやテラッコと協働しながら、展示プラン練り上げていった。

私は2018年の「TERATOTERA祭り」で、『In A Breath-Nothing Stands Still, Chapter 4』という作品を展示しました。両親の故郷でベトナム北部のハナム地域にある鉱山をテーマとした作品です。その地域の農村は過去20年間、鉱山採掘によって深刻な汚染にさらされ、荒廃しています。私は2014年からこの地域を対象としたプロジェクトを続け、「TERATOTERA祭り」ではその記録と映像をインスタレーションとして展示しました。風景の変容を追った映像や、地域の暮らしと文化に着想したフィクショナルな動画などで、地元の人々が直面している苛烈な現実を照らし出し、物理的および心理的に何が起きているのかを描きました。会場にはテントを設営し、そこで観客を迎える酒席を開きました。周辺地域の米と野生の植物と果実から作ったリカーを振る舞ったのです。そのリカーの製法は地元ではほとんど失われています。かつては、その素材をもたらした自然が失われ、風景も破壊されてしまったからです。

展示にあたっては、TERATOTERAのスタッフとテラッコに多大なご協力をいただきました。彼らは高い技能を備えているだけでなく、熱意にあふれていました。私の展示会場は公立の劇場でした。シンポジウムなども開催可能な大きな部屋で、広いホ

ワイエでも展示が可能でした。しかしながら、公共施設には様々な規制があります。その一方で、設営のための時間は限られていました。そのため自分が思い描いていた展示プランが実現できるのか、ひどく不安になりました。それでも、TERATOTERAのスタッフは、私の野心的なアイデアを理解し、様々な知恵を絞ってくれました。彼らとの協働の結果、私のインスタレーション展示は無事にオープニングを迎えることができました。彼らのおかげで、私の東京での滞在はより意義深くなり、展示と社会との関連についても理解が進みました。

テラッコとの交流も楽しみでした。ボランティアでありながら、プロフェッショナルな技能を発揮して「TERATOTERA祭り」を運営していることが印象に残っています。私のプロジェクトに参加してくれたテラッコに改めてお礼を申し上げます。

TERATOTERAが今後も継続して、アーティストが地域コミュニティと交流する機会をもたらすことを願ってやみません。



壁面に展示された写真作品。開発で変貌する山岳地域の風景を空撮した



トゥアン・マミのインスタレーション展示『In A Breath-Nothing Stands Still, Chapter 4』。映像、写真、ドキュメントなどで構成した(2018年11月)



会場に設置したテントのなかで、観客と語り合うトゥアン・マミ

長野県岡谷市出身。2001年から2014年の閉館まで「吉祥寺バウスシアター」に勤務。番組編成や宣伝業務を務めた。2010年からは長野県諏訪郡原村で開催される「星空の映画祭」の実行委員長も務める。共著に『あたらしい「路上」のつくり方』(DU BOOKS)がある。現在は都内映画館に勤務。

## 吉祥寺の「隙」

### 武川寛幸

2014年の5月、14年間務めた「吉祥寺バウスシアター」が閉館した頃に、友人から「吉祥寺に新しく映画館を作るとしたら、どんな映画を上映して、何スクリーンで、キャパはどのくらいが良い?」と聞かれたことがある。メジャーもミニシアター系も全部やる。たまにライブやアート展も。スクリーン数は3つが望ましいと答えたあと、「それってバウスじゃん」と笑われたのだが、まあそのくらい大好きな職場だった。その真っ只中にいるときはそのごちゃまぜ具合にまったく気が付かず、転職してからようやくその規格外な自由さを知り、ちょっと呆れた。

少し話が逸れますが、映画の宣伝方法に「チラシ配り」というのがありまして。映画館に勤める人間は暇な時間に街に繰り出して映画のチラシを撒くんです。喫茶店に定食屋、書店やレコード店に古着屋。銭湯の脱衣所の映画ポスターや、居酒屋のトイレにチラシが貼り付けてあるの、見たことありますよね? ああいうのはすべてお店のご厚意で置いたり貼ってくれたりするんですね。で、バウス閉館後に転職したわたしは「ザ・レジデント」\*のドキュメンタリー映画の日本公開を手掛けることになって、久しぶりに吉祥寺に降り立ったんです。なぜかってチラシを撒くために。そうしたらですよ、なんとということでしょう。チラシを置いてくれるお店がまったくなくなっていたんです。というかチラシを置いてくれる「隙」がないんですね。いや、もしかしたらわたしが付度したのかもしれない。奇怪なめだまの被り物をした紳士が描かれた映画のチラシを大量に抱えたわたしは「場違いなところに来てしまったかもしれない」と感じてしまったのだ。そうだ、もうバウスはないのだ。

相変わらず人々でごった返した「サンロード」を、ずいぶんお店が変わったなーとぼやき、とぼとぼ歩きながら、ふと、もしかしたら様々な「隙」が吉祥寺という街の「場違いじゃない」雰囲気を形成していたのかもしれないと閃いた。その「隙」の一部がバウスだった。多種多様な人々が好き勝手に作り上げたコレクティブ、それが吉祥寺そのものだったのだ。大量に余ったチラシを会社に持って帰る言い訳を考えていただけかもしれないのだが。

TERATOTERAとバウスシアターのコラボレーションも「隙」があったからこそ成し得たものだろうと思う。ディレクターの小

### ICHIRO TEZUKA

㈱ビデオインフォメーションセンター(VIC)代表取締役。VICは1972年、国際基督教大学の学内有線テレビをやるうとあつまったグループがハジマリ。1970年代はアングラのパフォーマンスの記録ファイリングをめざし、赤テント、黒テント、天井積敷、菅木志雄アートパフォーマンス、暗黒舞踏のアスベスト館、大野一雄、笠井勲などを収録。情報機材専門店をオープン。1998年には吉祥寺の「ハモニカ横丁」に「ハモニカキッチン」をオープン。エリア密着のマーケティングをめざし、ハモニカ横丁の「イマ」「ココ」「ココの人」を中心にお店を展開、現在ハモニカ横丁は13店舗に。VICのココロザシは唐十郎いうトコロの「特権的肉体のイマ、ココ、トリカエシのつかないワタシであることへのコダワリ」「二度目は茶番」を合言葉にフランチャイズしないココロを大切に、生きているのです。

## マチへ

### 手塚一郎

トッテモオモシロカッタヨ。
イロンナ人と会えたしネ。
マタヤッテホシイネ
モット「マチ」をカキマワシテ欲しい。
モットモット。

「テラッコ」もイイネ。
今ミンナドウシテルダロウネ。
たこチャンなんか
ドウシテルダロウネエ。

小川君外国にゆくらしい\*ケド、ウラヤマシイネエ。
キット エラクなってカエツテクルンダロウネ。
マタ ナニカヤッテ欲しいナア。
キタイシテルヨ。

小川クンはモテルラシイ。
カレをミルト 大谷翔平を思い出す。
背が高くて万能デアル。
人相がニテイル
チビでデブのボクからミレバ
ウラヤマシイカギリデアル。
「テラッコ」は彼のファンクラブだ。
トコロデ、ヴォランティアとは
お金をモラワナイデ、パブリックなコトをやるコトである。
「ノーマネー、ノーライフ」
という考えもある
お金をカセグ、ハタラクって
ナンダロウ。

トコロデ
「時給概念をコワセ」って思ってるんだ

「働き方改革」といったところで
自分と他人を比較して
時給、月給、年収、とヒカクしていく。

根本は時間アタリクラにナルカ
ということは
時間がイチリツにナガレテユクという
ニュートン ユークリッドの近代の概念で計算している。

一方に過重労働の問題がアル。
ナイキはもうアジアの人を
低チンギンでコクシスルのはやめたんだろうか。

一方に深夜労働25% マシとかいうのもアル。

タブン人はアカルイウチニハタラキ
クラクナッタラネルのだから
夜ハタラクのは大変だという考えでアル。
夜がオモシロイのにネエ。

前提がヨク考えられないで
ドンドン慣例をカサネテユク
「同一労働 同一賃金」
フザケンジャネエヨ
バカバカシイ
ダケド
それで世間はウゴク。
ハズレルとバッセラレル。
ナンカヘンダ。

ハナシがズレテシマッタ。

タダでハタラク集団の、人のナカデ
ダカラコソ「NPOにマネージメントが必要ダ」
とドラッカーは随分前にいっている。
タダでハタラキ
タダでクランタイネエ。
今度 そういうお店ヤルヨ。
期待してね。

\*TERATOTERAディレクターの小川希は2021年春から、文化庁の派遣でオーストリアに1年間滞在する予定。

やがて2018年冬。吉祥寺PARCOに完成した映画館「アップリンク吉祥寺」はわたしのなかの「吉祥寺の映画館全然足りなくて観たい映画やってない問題」をすっかり和らげてくれた。足の遠のいていた吉祥寺を訪れる理由を与えてくれる。「空族」の新作や『ROMA／ローマ』。モータウンやザ・バンドのドキュメンタリー……。カラフルで猥雑な「隙」が吉祥寺に誕生したことを喜びたい。

2019年10月、某ヘイトスピーチ団体があろうことか吉祥寺で街宣をやると予告。それに対して有志のプロテスターたちがカウンター行動を起こすとのこと。いてもたってもいられず、集合場所の丸井吉祥寺店の前で「こういうの得意なんですよ」と言ってヘイト街宣反対のチラシの束を受けとった。路上でチラシを配るのは久しぶりで少し緊張した。街宣が予告された日は、娘の七五三。田舎から両親も出てくる。当然、妻には反対されたが、七五三を少しだけ抜け出してカウンターに参加する計画をたてていた。迎えた当日、大型の台風が日本を襲い、「場違い」なヘイト団体の街宣はすっ飛んだ。当然、七五三も延期になったので、娘を連れて吉祥寺へ映画を観に行ったのだった。

<sup>[1]</sup> 1970年代にデビューしたアメリカの前衛音楽・実験音楽のバンド。
\*\*1960年代の前衛芸術グループ「ハイレッド・センター」が、1964年10月、東京オリンピック開催中の東京・銀座で行った、街を清掃するパフォーマンス。

# TERATOTERA 2010 → 2020 全記録

## ビジュアル・アーカイブ

11年間にわたる「TERATOTERA」の活動記録を各年度の記録冊子とチラシ、ホームページのアーカイブのデータに基づいて集成した。記述は原則として、単独イベントの場合は、イベント名、日程、会場、参加者・関係者などの順。■内はイベントの種類。複合イベントの場合は、イベント名、日程、会場の下に、各イベントを種類別に日程、会場、参加者・関係者などの順で掲載。\*はその直前のイベントの一部として開催されたことを示す。イベントのうち、「トークショー」「シンポジウム」などは「トーク」とする。参加者・関係者の肩書は開催当時のもの。また、「TERATOTERA」が発行した記録冊子やチラシなどのイメージを「ビジュアル・アーカイブ」として掲載する。

TERATOTERA  
2010-2020:  
A Complete Survey  
TERATORA Visual Archive

TERATOTERA's activities were nothing if not diverse. We organized not just displays of artworks, but also dance and other performances, theatrical productions, live music, and symposia, among other events. Here we have organized those activities according to year. We have also included flyers and posters used to promote these events, as well as the layouts of the annual pamphlet recording our activities, in the form of a "TERATOTERA Visual Archive."

## 2009 年度

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団による「東京文化発信プロジェクト」(現・アーツカウンシル東京)が2009年に開始した「東京アートポイント計画」の一環として、「TERATOTERA」が始動。JR中央線沿線地域を対象とし、地域の文化・アート関係者に周知するとともに、交流をはかるイベントを相次いで開催した。「TERATOTERA はじまりの日」には約130人、トークやライブなどの複合イベント「お披露目の日」には約260人が参加。地域からの文化発信への期待がうかがわれた。

### TERATOTERA はじまりの日

#### トーク

日程:2010年2月21日(日)18:00~21:00  
会場:いせや総本店公園店(武蔵野市吉祥寺南町)

### TERATOTERA お披露目の日

日程:2010年3月21日(日)17:30 OPEN 18:00 START(~ 24:00)  
会場:CAFE ZENON(武蔵野市吉祥寺本町)

#### トーク TERATOTERA お披露目の話題その1「街と○▲□と私」

ゲスト:武川寛幸(吉祥寺バウスシアター)、箕島裕二(吉祥寺シアター支配人)、山口昌彦(『散歩の達人』編集長)、ヨシムラヨシゾー(デザイナー、デビルロボッツ)、森司(東京アートポイント計画ディレクター) / 司会:小川 希(TERATOTERA ディレクター)

#### トーク TERATOTERA お披露目の話題その2「はみだしの美学!?!」

ゲスト:浅井裕介(アーティスト)、粟田大輔(美術批評)、泉太郎(アーティスト)、卯城竜太(Chim↑Pom リーダー) / 司会:長内綾子(TERATOTERA ディレクター)

#### ライブ Open Reel Ensemble, the teachers eri tomioka

#### 応援 遠藤一郎(未来美術家)

\*「BEPPU PROJECT 2010 アート・ダンス・建築・まち」よりネット中継

#### パフォーマンス contact Gonzo

## 2010 年度

「TERATOTERA」の実質的な初年度となる2010年度は、JR中央線沿線地域との連携を意識した「途中下車の旅」シリーズを中心に展開。沿線各地の文化施設などを会場にトークやライブを開いた。異色だったのは、2月に井の頭恩賜公園で行われた、音楽家・大友良英による「船上ライブ」。寒気の中、夜間のイベントにも関わらず約2500人の観衆を集め、「TERATOTERA」の存在をアピールした。3月12日に予定していたフォーラムは、前日に起こった東日本大震災の影響で中止となった。

### 途中下車の旅 VOL.1 停車駅:高円寺 AMP café

日程:2010年6月6日(日)14:00~16:00  
会場:AMP café 杉並区高円寺南  
協力:AMP café

#### トーク

パネリスト:大黒健嗣(AMP café ディレクター)、荻野竜一(アーティスト)、小川希(Art Center Ongoing, TERATOTERA ディレクター) / 司会:長内綾子(TERATOTERA ディレクター)



## 途中下車の旅 VOL.2 停車駅:吉祥寺 バウスシアター

日程:2010年6月19日(土)～22日(火)21:00～23:00

会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)

協力:吉祥寺バウスシアター、(株)アチーブス

**映画『しゃったあず・4』レイトショー関連イベント**

〈6月19日〉上映前出演者による舞台挨拶

登壇者:池内万作、油井昌由樹、高橋直樹、ちはる ほか

〈6月20日〉上映後ゲストトーク

ゲスト:高田漣(ミュージシャン)

〈6月21日〉上映後ゲストトーク

ゲスト:あがた森魚(ミュージシャン、映画監督、俳優)

〈6月22日〉上映前シンポジウム「地域活性とアートと映画」

パネリスト:北川フラム(大地の芸術祭総合ディレクター)、宇佐見義尚(亜細亜大学経済学部准教授)



## 途中下車の旅 VOL.3 停車駅:吉祥寺 Art Center Ongoing

日程:2010年9月10日(金)、11日(土)

会場:Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:Art Center Ongoing、(株)skylink

**トーク**

〈9月10日19:00～21:00〉「ボランティアの視点から考える」

パネリスト:取手アートプロジェクト運営スタッフ、墨東まち見世2010事務局、テラッコ(TERATOTERA ボランティアスタッフ)

〈9月11日16:00～18:00〉「中央線の視点から考える」

パネリスト:桑谷哲男(座・高円寺)、佐藤広輝(風呂ロック)、武川寛幸(吉祥寺バウスシアター)

〈9月11日19:00～21:00〉「企画者の視点から考える」

パネリスト:曾我高明(墨東まち見世2009企画担当)

※いずれも司会是小川希(TERATOTERA チーフディレクター)



## 途中下車の旅 VOL.4 停車駅:西荻窪 トロールの森2010

日程:2010年11月23日(火・祝) 14:40～16:00

会場:都立善福寺公園・上の池「トロールの森2010」ステージ「Joy'n」(杉並区善福寺)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:トロールの森実行委員会、遊工房アートスペース、(株)skylink

**トーク**「まちと森をつなぐかたちトロールの森のこれから」を考える

パネリスト:O JUN(画家)、小川希(TERATOTERA 代表)、鳥越けい子(サウンドスケープ研究家)、仲世古佳伸(アート・ディレクター)、村田達彦(遊工房アートスペース・共同代表)、本永安芸夫(桃井第四小学校図工教諭)、渡辺真千子(ラジオぱちぱち)／司会:高城佐知子(ラジオぱちぱち)



## 途中下車の旅 VOL.5 停車駅:西荻窪 STORE

日程:2010年12月4日(土)、5日(日)、11日(土) 19:30～21:30

会場:STORE(杉並区西荻北)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:STORE、(株)skylink

**トーク**

〈12月4日〉「町をみて<観>」

ゲスト:アナ・グリーンソン(アーティスト)

〈12月5日〉「町をみて<見>」



ゲスト:小峰恵子(ギャラリーみずのそら)、小林和人(Roundabout, OUTBOUND)

〈12月11日〉「町をみて<視>」

ゲスト:川内倫子(アーティスト)、伊藤剛(『GENERATION TIMES』編集長)

※司会はいずれも國時誠(TERATOTERA ディレクター、STORE)

## 途中下車の旅 VOL.6 停車駅:吉祥寺 武蔵野公会堂

日程:2010年12月17日(金) 18:30～20:00

会場:武蔵野公会堂(武蔵野市吉祥寺南町)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:財団法人武蔵野文化事業団、(株)skylink

**トーク** ジャンルを超えろ/ジャンルを繋げ

ゲスト:宇川直宏(メディアレイピスト)、大谷能生(批評家、音楽家)、西島大介(漫画家)／司会:小川希(TERATOTERA チーフディレクター)

## 途中下車の旅 VOL.7 停車駅:荻窪 荻窪ベルベットサン

日程:2011年1月8日(土) 19:30～21:30

会場:荻窪ベルベットサン(杉並区荻窪)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:荻窪ベルベットサン、(株)skylink

**ライブ** さまよえる三つ子の魂

アーティスト:泉太郎(アーティスト)、木村覚(批評家)

## TERATOTERA 祭り

**トーク** 大友良英トークショー「音に遊ぶ」

日程:2011年2月5日(土) 15:30～16:30

会場:PEPACAFE FOREST(三鷹市井の頭)

ゲスト:大友良英(音楽家)

**ライブ** 大友良英 井の頭公園 船上ライブ

日程:2011年2月5日(土)日没開演(17:30ごろから約30分間)

会場:井の頭恩賜公園内 井の頭池・七井橋西側(三鷹市井の頭)

アーティスト:大友良英(音楽家)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:東京都建設局西部公園緑地事務所、井の頭恩賜公園100年実行委員会、PEPACAFE FOREST、GOK SOUND、(株)skylink

## TERATOTERA FORUM ※東日本大震災の影響で中止。

**トーク** 東京のTTエリアをデザインする

日程:2011年3月12日(土) 14:30-16:30 (14:00開場)

会場:杉並リボン館(杉並区阿佐谷南)

助成:公益財団法人 花王 芸術・科学財団

協力:(株)細田工務店、(株)skylink

パネリスト:三浦展(マーケティングプランナー/カルチャースタディーズ研究所主宰)、芹沢高志(アートプロジェクト・ディレクター/P3 art and environment 主宰)、大澤奈々(テラッコ)、小川希(TERATOTERA 代表/Art Center Ongoing 代表)

モデレーター:森司(東京アートポイント計画ディレクター)



# 2011年度

3月11日に東日本大震災が発生、地震と津波による甚大な被害に加え、東京電力福島第一原子力発電所の事故で放射能被害が広がった。日本社会が混乱と不安に包まれるなかで、プログラムの再検討を迫られた。6月に開かれたボランティア「テラッコ」募集の説明会には、多くの希望者が駆けつけ、40人以上が参加することに。10月の「TERATOTERA祭り」は11日間という長い会期に多彩なプログラムを組んだTERATOTERA史上で最大のイベント。テラッコたちの熱気あふれる取り組みで実現した。

## TERATOTERA FORUM the first term

### トーク 西荻ぶらぶらと、インプロビゼーション

日程:2011年6月4日(土) 13:30~15:30  
会場:こけし屋 別館(杉並区西荻南)  
ゲスト:近藤良平(「コンドルズ」主宰、振付家、ダンサー)、大日本タイポ組合(実験的タイポグラフィ集団、秀親と塚田哲也のユニット) / 司会:國時誠(TERATOTERAディレクター) / 映像作品:山本篤(アーティスト)

## ディレクターくにときの 途中下車の旅

### ウェブ版コラム

日程:2011年9月12日~2015年3月30日、全10回  
筆者:國時誠(TERATOTERAディレクター)

## TERATOTERA祭り POST

日程:2011年10月20日(木)~30日(日)  
会場:JR 吉祥寺駅周辺地域  
後援:武蔵野市  
協力:井の頭公園100年実行委員会、財団法人武蔵野文化事業団、吉祥寺活性化協議会、武蔵野市立吉祥寺美術館、株式会社 skylink、株式会社パルコ(吉祥寺)、株式会社アトレ(吉祥寺)、株式会社 東急百貨店(吉祥寺店)、合同会社西友(吉祥寺店)、小野山興産株式会社、プロジェクト FUKUSHIMA! 実行委員会、DOMMUNE FUKUSHIMA!、ARATANIURANO、hiromiyoshii、青山目黒、island JAPAN、三菱商事都市開発株式会社、ハモニカキッチン、無人島プロダクション、武蔵野市防災安全部防災課

### アート

日程:2011年10月20日(木)~30日(日) 11:00~20:00  
会場:吉祥寺 PARCO[屋上]、ハモニカ横丁、コピス吉祥寺[A館3F 吉祥空間 sora]、西友入口(武蔵野市吉祥寺本町)、  
アーティスト:浅井裕介、有賀慎吾、遠藤一郎、岩井優、利部志穂、齋藤雄介、志村信裕、SONTON、タムラサトル、永畑智大、東方悠平、松原壮志朗、村田峰紀、和田昌宏

### 映像

日程:2011年10月22日(土)~11月4日(金)  
会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)  
アーティスト:泉太郎、大木裕之、小沢裕子、小泉明郎、小鷹拓郎、COBRA・千葉正也・その他、鷲山啓輔、柴田祐輔+山本篤、地主麻衣子、鈴木光、高田彦彦、田中功起、Chim↑Pom、東野哲史、松本力、山本篤、山本高之

### \*トーク

日程:2011年10月22日(土) 21:00~22:10  
アーティスト:泉太郎、大木裕之、Chim↑Pom / 司会:小川希(TERATOTERAチーフディレクター)

### 街歩きツアー 「酒とお惣菜」「コーヒーとパン」

日程:2011年10月22日(土)、28日(金)



会場:JR 吉祥寺駅周辺地域

アーティスト:パウロ野中、DJ ぶりぶり

### ワークショップ 子どもワークショップ「日常アニマルズ!」

日程:2011年10月22日(土)

会場:コピス吉祥寺(武蔵野市吉祥寺本町)

アーティスト:齋藤雄介

### ダンス

日程:2011年10月22日(土) 18:00~20:00「オープニングパーティ&ダンス」 / 10月30日(日) 16:00~17:00「クロージングダンス」  
会場:東急百貨店吉祥寺店[屋上](武蔵野市吉祥寺本町)  
アーティスト:[10月22日] KENTARO!、森川次朗×フロム東京 / [10月30日] 熊谷和徳、小尻健太、contact Gonzo

### ライブ

日程:2011年10月27日(木) 19:30~  
会場:武蔵野公会堂(武蔵野市吉祥寺南町)  
アーティスト:高田漣、タテタカコ、前野健太

### トーク TERATOTERA FORUM the second term ~震災・地域・再考~

日程:2011年10月29日(土) 15:00~  
会場:武蔵野公会堂(武蔵野市吉祥寺南町)  
パネリスト:芹沢高志(アートプロジェクト・ディレクター)、三浦展(マーケティングプランナー) / 司会:小川希(TERATOTERAチーフディレクター)、國時誠(TEARTOTERAディレクター)

## TERATOTERA祭り 特別企画 TOKYO-FUKUSHIMA!

日程:2011年10月20日(木)~30日(日)

会場:JR 吉祥寺駅周辺地域

### ワークショップ 嵐揚げワークショップ「未来龍東京大空凧」

日程:2011年10月22日(土) 14:00~17:00  
会場:アトレ吉祥寺[B1ゆらぎの広場](武蔵野市吉祥寺南町)、井の頭恩賜公園(武蔵野市御殿山)  
アーティスト:遠藤一郎

### 野外ライブ オーケストラ TOKYO-FUKUSHIMA!

日程:2011年10月23日(日) 14:00~15:30  
会場:井の頭恩賜公園[井の頭池~西園グランド](三鷹市下連雀、武蔵野市御殿山)  
アーティスト:大友良英、七尾旅人、原田郁子、深川パロン倶楽部、ピカ☆、ほかゲストミュージシャン多数

### トーク シンポジウム TOKYO-FUKUSHIMA!

日程:2011年10月28日(金) 19:30~  
会場:武蔵野公会堂(武蔵野市吉祥寺南町)  
パネリスト:大友良英(音楽家)、遠藤ミチロウ(音楽家)、和合亮一(詩人) / 司会:小川希(TERATOTERAチーフディレクター)

### ライブ TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!

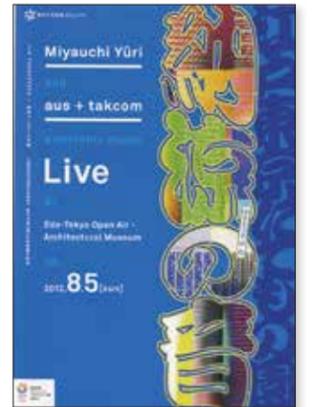
日程:2011年10月29日(土) 21:00~  
会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)  
アーティスト:大友良英、遠藤ミチロウ、七尾旅人

### 展示 プロジェクト FUKUSHIMA! ドキュメント展示[福島大風呂敷]

日程:2011年10月20日~30日(日) 10:00~21:00  
会場:武蔵野市立吉祥寺美術館ロビー[コピス吉祥寺A館7階](武蔵野市吉祥寺本町)  
ディレクター:中崎透(美術家)、アサノコウタ(建築家) / プロデューサー:大友良英(音楽家) / 原案:木村真三(放射線衛生学者)



▲ 2011記録冊子



## TERATOTERA FORUM the third term

### トーク 演劇と文学と中央線のかおり

日程:2012年2月25日(土)15:00~16:30

会場:杉並リボン館(杉並区阿佐谷南)

協力:株式会社細田工務店、株式会社 skylink

ゲスト:宮沢章夫(劇作家・演出家・作家)、戌井昭人(劇作家・作家) / 司会:小川希(TERATOTERAディレクター、Art Center Ongoing代表)

# 2012 年度

TERATOTERAの名称は、JR中央線の高円寺駅~吉祥寺駅間の地域を結ぶことに由来するが、本年度から、国分寺駅方面にも活動を拡大。いわば西に「延伸」した。イベントの多くは、ディレクターの投げかけに応じて、ボランティアが発案、企画したもの。作家や出演者との折衝や作品制作の支援、開催当日の運営までをボランティアが担い、「テラッコが主導するアートプロジェクト」の方向性を打ち出した。イベントの会場も民間の店舗や区営プールなど、意外な場所に広がっていった。

## TERATOTERA WEST 途中下車の旅11@国分寺

### トーク 「中央線文化」のきのう きょう あす

日程:2012年6月30日(土)18:30~

会場:カフェスロー(国分寺市東元町)

協力:カフェスロー、株式会社 skylink

ゲスト:柏木博(デザイン評論家)、穂村弘(歌人)、西加奈子(小説家)

## TERATOTERA WEST 途中下車の旅12@武蔵小金井

### ライブ 納涼の音

日程:2012年8月5日(日)18:00~20:00

会場:江戸東京たてもの園(小金井市桜町)

協力:江戸東京たてもの園、株式会社 skylink

アーティスト:宮内優里、aus+takcom[with Twings & Yarn]

## TERATOTERA 祭り 前期@高円寺・阿佐ヶ谷・荻窪・西荻窪

### TERATOTERA 祭り2012 NEO 公共

日程:2012年9月17日(月・祝)~10月14日(日)

会場:高円寺、阿佐ヶ谷、荻窪、西荻窪周辺

後援:杉並区、武蔵野市

協力:株式会社ビデオインフォメーションセンター、ART FRONT GALLERY、Takuro Someya Contemporary Art、株式会社 skylink

## TERATOTERA 祭り 前期@高円寺

### ライブ オープニングスペシャルライブ!!!

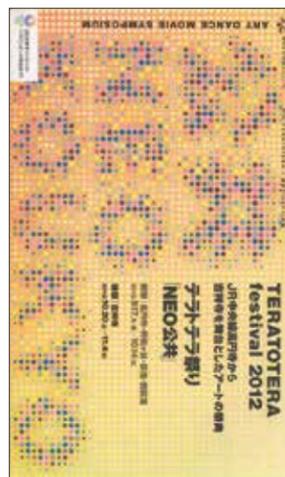
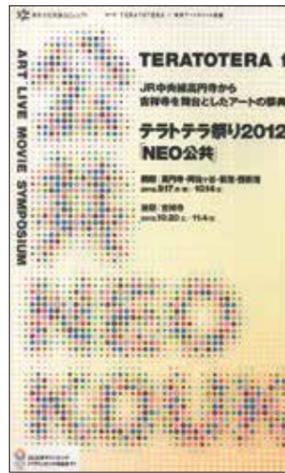
日程:2012年9月17日(月・祝)19:00~20:30

会場:カフェ&レストラン アンリ・ファープル[座・高円寺2F](杉並区高円寺北)

アーティスト:core of bells

## TERATOTERA 祭り 前期@阿佐ヶ谷

### 映像 What happened on the pool?



日程:2012年9月22日(土)~9月30日(日)18:00~20:00

会場:阿佐ヶ谷やき公園プール(杉並区阿佐谷北)

アーティスト:岩井優

## TERATOTERA 祭り 前期@荻窪

### トーク ボランティアをてつがくする!

日程:2012年9月22日(土)15:00~17:00

会場:旅館西郊(杉並区荻窪)

パネリスト:鷺田清一(大谷大学教授、哲学者)、稲葉剛(NPO法人自立生活サポートセンター・もやい)、磯部昌子(武蔵野傾聴クラブ)、片山実季(NPO法人越後妻有里山協働機構)

## TERATOTERA 祭り 前期@西荻窪

### 映像 西荻映像祭 —TEMPO de ART—

日程:2012年10月3日(水)~10月14日(日)

会場:JR西荻窪周辺の13店舗(杉並区西荻北、西荻南、松庵)

協賛:株式会社シーマ・ラボラトリー、TAXAN

アーティスト:池田拓馬、泉太郎、奥田栄希、河地貢士、最後の手段、佐久間洗、林千歩、東野哲史

### \*トーク 「店舗での展示の感想と、西荻の地域性、印象について」

日時:10月6日(土)18:00~19:30

会場:ZEN PUSSY(杉並区松庵)

ゲスト:泉太郎(アーティスト)、林千歩(アーティスト)、國時誠(TERATOTERAディレクター) / 司会:高村瑞世(TERATOTERA事務局)

## TERATOTERA 祭り 後期@吉祥寺

### TERATOTERA 祭り2012 NEO 公共

日程:2012年10月20日(土)~11月4日(日)

会場:JR吉祥寺駅周辺地域

後援:杉並区、武蔵野市

協力:井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺バウスシアター、株式会社アトレ(吉祥寺店)、株式会社ビデオインフォメーションセンター、株式会社 skylink、無人島プロダクション、YUKA TSURUNO、ARATANIURANO、SNOW contemporary、KAYOKO YUKI、TALION GALLERY

### 映像 NEO ネオ公共「MOVIE」

日程:2012年10月20日(土)~11月2日(金)21:00~

会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)

協力:井の頭公園100年実行委員会、吉祥寺バウスシアター、株式会社アトレ(吉祥寺店)、株式会社ビデオインフォメーションセンター、株式会社 skylink、無人島プロダクション、YUKA TSURUNO、ARATANIURANO、SNOW contemporary、KAYOKO YUKI、TALION GALLERY、TAXAN

アーティスト:ALIMO、岩井優、大木裕之、利部志穂、加藤翼、小鷹拓郎、COBRA、柴田祐輔、鈴木光、Chim↑Pom、山本高之

### \*トーク

日程:2012年10月21日(日)

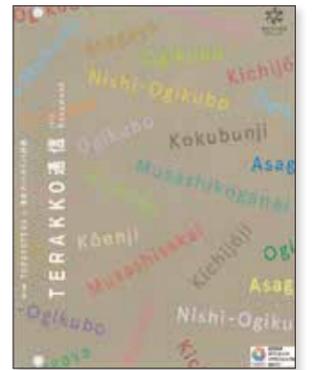
会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)

アーティスト:利部志穂、加藤翼、小鷹拓郎 / 司会:小川希(TERATOTERAチーフディレクター)

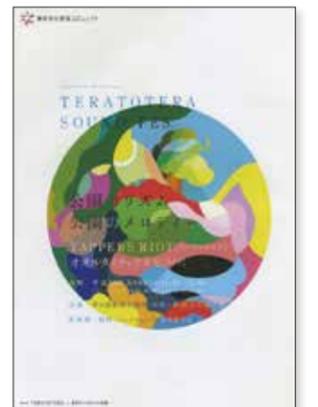
### トーク NEO 公共「まちプロ会議」

日程:2012年10月21日(日)15:00~17:00

会場:武蔵野商工会館4F ゼロワンホール(武蔵野市吉祥寺本町)



▲ 2012記録冊子



パネリスト:松本哉(高円寺:素人の乱)、國時誠(西荻窪:西荻茶散歩)、小川希(吉祥寺:TERATOTERA)

**トーク シンポジウム-新しい公共へ-**

日程:2012年10月31日(水)19:00~21:00

会場:武蔵野商工会館4F ゼロワンホール(武蔵野市吉祥寺本町)

パネリスト:伊東豊雄(建築家)、川俣正(アーティスト) / 司会:小川希(TERATOTERAチーフディレクター)

**アート ネオ公共「ART」**

日程:2012年11月3日(土)、4日(日)10:00~18:00

会場:井の頭恩賜公園(三鷹市御殿山)

アーティスト:assistant、太田遼、加藤翼、志村信裕、橋本聡、原田賢幸、山本篤、山本高之、和田昌宏

**家主リレー**

日程:2012年10月27日(土)、28日(日)12:00~18:00

会場:アトレ吉祥寺〔花火の広場〕(武蔵野市吉祥寺南町)

アーティスト:村上慧

**いせや CALLING**

日程:2012年11月3日(土)、4日(日)15:00~

会場:井の頭恩賜公園グラウンド(三鷹市下連雀)

アーティスト:加藤翼

**チルドレンズ・ブライド 11.4 in 吉祥寺**

日程:2012年11月4日(日)13:00~14:30

会場:井の頭恩賜公園(三鷹市御殿山)

アーティスト:山本高之

**ライブ/ダンス クロージングスペシャルパフォーマンス**

日程:2012年11月4日(日)16:00~

会場:井の頭恩賜公園グラウンド(三鷹市下連雀)

アーティスト:テニスコート、ほうほう堂

**TERATOTERA WEST 途中下車の旅14@武蔵境**

**アート バスのなかのひみつ〜子どもだけに訪れる不思議な出会い〜**

日程:2012年12月13日(木)~12月24日(月・祝)

会場:武蔵野ブレイス(武蔵野市境南町)

共催:公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団

アーティスト:遠藤一郎、松本力

# 2013年度

「TERATOTERA 祭り」の年間テーマは「commit」。東京や大阪、横浜の商店街など地域にコミットして活動続ける人々を招いたトークが行われた。杉並区西荻窪の13店舗の協力を得た映像祭「TEMPO de ART 2013」では、キュレーターによる公開批評を試みた。また、公益財団法人東京都歴史文化財団による人材育成事業「Tokyo Art Research Lab(TARL)」と連携。TARLが主催するアートプロジェクト講座の受講生が企画した「Civic Pride」を、テラッコが支援して三鷹市街で実施した。

**途中下車の旅15@三鷹**

**トーク 私を委ねる場所**

日程:2013年6月29日(土)18:00~20:00

会場:HYM〔ハモニカ横丁ミタカ〕(武蔵野市中町)

協力:HYM〔ハモニカ横丁ミタカ〕



▲ 2013記録冊子

パネリスト:藤浩志(十和田市現代美術館副館長、美術家)、松本哉(古物商)、手塚一郎(ビデオ・インフォメーション・センター代表)

**途中下車の旅16@吉祥寺**

**野外ライブ TERATOTERA SOUND FES. 公園のリズム 公園のメロディー**

日程:2013年9月8日(日)[ワークショップ]14:00~16:00/[ライブ]17:00~18:00

会場:井の頭恩賜公園(武蔵野市御殿山)

後援:武蔵野市

協力:井の頭公園100年実行委員会

アーティスト:[ワークショップ]TAPPERS RIOT/[ライブ]オオルタイチ+ウタモ

**TERATOTERA 祭り2013 “commit”**

後援:杉並区、武蔵野市

[TERATOTERA 祭り@高円寺]

**トーク 商店街サミット**

日程:2013年10月5日(土)19:00~21:00

会場:AMP cafe 2F(杉並区高円寺南)

パネリスト:新雅史(社会学者)、松本哉(東京・高円寺、古物商)、セルフ祭り代表者(大阪・浪速区)、六角橋商店街代表者(横浜・白楽)

[TERATOTERA 祭り@吉祥寺]

**アート 映像インスタレーション**

日程:2013年10月11日(金)~11月4日(月・祝)日没後

会場:コピス吉祥寺内〔吉祥寺空園 sora A 館3F 屋上〕(武蔵野市吉祥寺本町)

協賛:コピス吉祥寺

アーティスト:志村信裕

[TERATOTERA 祭り@荻窪]

**アート 先こぼれ芝天狗 in ルミネ荻窪店**

日程:2013年10月15日(火)~10月31日(日)11:00~22:00

会場:ルミネ荻窪店5階(杉並区上荻)

アーティスト:東方悠平

[TERATOTERA 祭り@西荻窪]

**映像 TEMPO de ART 2013**

日程:2013年10月20日(日)~11月17日(日)10:00~24:00〔各店舗の営業時間による〕

会場:JR西荻窪駅周辺の13店舗(杉並区西荻北、西荻南)

助成:杉並区文化芸術助成事業

アーティスト:秋山由希、池田拓馬、岩崎が、榎田愛、苦肉、関川航平、津田翔平、福井拓洋、山崎悠人、渡辺俊介

**\*公開講評会1**

日程:2013年10月26日(土)19:00~21:00

会場:旅の本屋のまど(杉並区西荻北)

ゲスト:高橋瑞木(水戸芸術館現代美術センター主任学芸員)

**\*公開講評会2**

日程:2013年11月3日(日)19:00~21:00

会場:STORE(杉並区西荻北)

ゲスト:浦野むつみ(ARATANIURANO代表)、藤城里香(無人島プロダクション代表)

[TERATOTERA 祭り@阿佐ヶ谷]

**ダンス 街にひそむ**

日程:2013年11月16日(土)17:30~18:00

会場:阿佐ヶ谷やき公園プール(杉並区阿佐谷北)

アーティスト:off-Nibroll



## Civic Pride わたしたちのマチ わたしたちのアート

### アート

日程:2014年2月22日(土)、23日(日)12:00~18:00

会場:JR三鷹駅北口周辺地域

後援:武蔵野市、スウェーデン大使館

協力:武蔵野市中央地区商店連合会、学校法人東海大学望星学塾、(有)三協住宅社、株式会社永谷、(有)ロボット

企画:『アートプロジェクトを456』受講生

アーティスト:中島由夫、山本篤、飯川雄大、永畑智大、山本高之、福永信/特別上映「つみきのいえ」

### \*トーク「アートとシビックプライドの交差点」

日程:2014年2月23日(日)15:00~16:30

会場:HYM[ハモニカ横丁ミタカ](武蔵野市中町)

パネリスト:大田佳栄(スパイラル/株式会社ワコールアートセンター キュレーター)、紫牟田伸子(編集者/プロジェクトエディター)、藤田宜久(武蔵野市中央地区商店連合会副会長兼路線商業活性化委員会委員長)/司会:スズキヨウコ



日程:2014年4月27日(日)11:20~13:30

会場:吉祥寺バウスシアター(武蔵野市吉祥寺本町)

協力:吉祥寺バウスシアター

アーティスト:泉太郎、井出賢嗣、大木裕之、小鷹拓郎、鷲山啓輔、柴田祐輔、鈴木光、地主麻衣子、山本篤、和田昌宏

### \*トーク

ゲスト:宮沢章夫(劇作家、演出家、作家)

### アート THE LAST BAUS×TERATOTERA 世界中の何でもないところに、大事なものは何でもなく隠れている

日程:[滞在制作]2014年5月9日(金)~5月17日(土)/[作品公開]2014年5月17日(土)~6月10日(火)

会場:吉祥寺バウスシアター外壁および館内の壁面(武蔵野市吉祥寺本町)

アーティスト:浅井裕介

### \*トーク

日程:2014年6月27日(金)20:00~22:00

会場:Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)

パネリスト:武川寛幸(吉祥寺バウスシアター)、浅井裕介(画家)、小川希(TERATOTERA チーフディレクター)/司会:細川葉子(写真家)



## アートプロジェクトで789(なやむ)

### 講座

コーディネーター:小川希(TERATOTERA チーフディレクター)

### <Vol. 1>溢れるモノゴトシクミと情報の整理整頓と処分についての悩み(テクニック)

日程:2014年7月13日(日)13:00~15:00

会場:井の頭恩賜公園(武蔵野市御殿山)

後援:武蔵野市

ゲスト講師:藤浩志(美術作家、十和田市現代美術館館長、十和田奥入瀬芸術祭アーティストディレクター)

### <Vol. 2>アートの現場での労働環境とキャリア形成についての悩み

日程:2014年8月31日(日)13:00~15:00

会場:AMP café(杉並区高円寺南)

協力:AMP café

ゲスト講師:相馬千秋(アートプロデューサー)

### <Vol. 3>ああああ、洗練されたデザインと胸を打つキャッチフレーズと街に馴染んだ作品と……って、もうイヤ~!!

日程:2014年10月25日(土)13:00~15:00

会場:レストラン喫茶「上床」(武蔵野市中町)

後援:武蔵野市

協力:レストラン喫茶「上床」

ゲスト講師:遠藤一郎(未来美術家)

\*特別ライブ「D.O.D.Z.1.NAYAMU」

アーティスト:遠藤一郎(未来美術家)、會田洋平(core of bells)、小川希(TERATOTERA チーフディレクター)

### <Vol. 4>税金使ってアートをやる意味。

日程:2015年1月18日(日)13:00~15:00

会場:小金井アートスポット シャトー2F(小金井市本町)

協力:小金井アートスポット シャトー2F

ゲスト講師:林曉甫(プロデューサー/林曉甫事務所代表)

### <Vol. 5>アーティストって誰に何を求められているのでしょうか?

日程:2015年2月22日(日)15:00-17:00

会場:HYM[ハモニカ横丁ミタカ](武蔵野市中町)

後援:武蔵野市

協力:HYM[ハモニカ横丁ミタカ]

ゲストアーティスト:泉太郎、出津京子、太田祐司、東野哲史、山本篤、和田昌宏



## テラッコラム

「テラッコラム」は2013年度に7回発行したボランティア向けの通信。定例ミーティングの内容に加えて、アーティストによる講演の記録「テラフォンショッキング」や、小川希ディレクターをモデルにした4コマ漫画などが、A4判の両面にぎっしりとつまっている。事務局の手作りで、「テラッ」にちなんでラッコのイラストが表紙を飾った。イラストは後に事務局長となる高村瑞世が担当した。



## 2014 年度

2010~2013年度に「Tokyo Art Research Lab(TARL)」で実施していた「アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)」などの講座を、本年度からTERATOTERAの事業の一環としてJR中央線沿線の各地で開催。アート関係の英語力向上を目指す講座「TERA English」も始まった。市民に親しまれてきた映画館「吉祥寺バウスシアター」の閉館決定を受けて、TERATOTERAの企画として映像作家10人の作品を上映し、画家・浅井裕介が映画館内外の壁面をライブペインティングで彩るなど、同館の閉館を惜しんだ。アーティストが地域に長期間滞在して制作する「西荻レヂダンス」が始まった。

## 途中下車の旅17@吉祥寺

映像 THE LAST BAUS×TERATOTERA 10×10 映画と映像と



## TERA English

### 講座

日程:2014年9月4日(木)~2015年2月26日(木)隔週木曜日 19:30~21:30  
会場:東京文化発信プロジェクトROOM302(千代田区外神田)  
講師:弘川有希絵(Art Center Ongoing)、内藤貴美子(同)

## 西荻レヂデンス

### 滞在制作・展示 星降る聖夜、あなたのために乾杯を。／西荻サンタクロース

日程:[滞在制作] 2014年10月1日(水)~12月22日(月)／[展示・上映] 2014年12月19日(金)、20日(土)12:00~20:00  
会場:西荻レヂデンス(杉並区西荻北)  
後援:杉並区  
アーティスト:小鷹拓郎

## 途中下車の旅18@東小金井

### ライブ／アート TERATOTERA SOUND FES. 一音とアートが高架下に舞うー

日程:2014年11月8日(土)、9日(日)11:00~19:00  
会場:コミュニティステーション東小金井(小金井市梶野町)  
アーティスト:滞空時間・影絵部(川村亘平齋、さとうじゅんこ、GO ARAi、トンチ) 灰野敬二、山川冬樹、林千歩、村田峰紀、山下拓也、武藤亜希子  
協力:株式会社 リライト

## 武蔵野クリーンセンター×TERATOTERA クリーンセンターとあそぶ

日程:2014年12月7日(日)12:00~16:00  
会場:武蔵野クリーンセンター(武蔵野市緑町)  
共催:武蔵野市

### ワークショップ ともとのガラクタワークショップ・ガラクタ音楽会

アーティスト:山口とも(日本廃品打楽器協会会長・打楽器奏者・写真家)

### 展示 すてたいけどすてられないモノ

アーティスト:藤浩志(美術作家・十和田市現代美術館館長)

### トーク 藤浩志×山口ともトークショー

## TERATOERA祭り Encounter—邂逅—

日程:2015年2月20日(金)~22日(日)11:00~19:00  
会場:JR三鷹駅周辺地域  
後援:武蔵野市  
協力:レストラン喫茶「上床」、HYM[ハモニカ横丁ミタカ]

### アート

アーティスト:泉太郎、出津京子、太田祐司、東野哲史、山本篤、和田昌宏

### 映像

アーティスト:泉太郎、井出賢嗣、大木裕之、小鷹拓郎、鷲山啓輔、柴田祐輔、鈴木光、地主麻衣子、山本篤、和田昌宏

### ライブ

アーティスト:Jim O'Rourke、巻上一

### パフォーマンス 白玉村始末記

出演:羊屋白玉(指輪ホテル)、北川フラム(アートプロデューサー)



▲ 2014記録冊子

# 2015年度

本年の「TERATOTERA祭り」は、主に小川希ディレクターが「Sprout」(萌芽)をテーマに企画した。とくに「プレイベント」では、東日本大震災以降に活動を始めた若手アーティストたちを招き、新たな表現の芽生えを感じさせた。「TERATOTERA SOUND FES.」は、江戸東京たてももの園(小金井市)内の古民家を会場として、同園のイベント「下町夕涼み」と合わせて開催。ノスタルジックな夏の情緒が漂うなかで、独自の世界観を持った演奏家4組がライブを披露する異色の音楽イベントになった。

## アートプロジェクトで789(なやむ)

### 講座

コーディネーター:小川希(TERATOTERAディレクター)

### 〈Vol. 6〉プロジェクトは誰に向けて発信するのか

日程:2015年6月14日(日)19:00~21:00  
会場:ヒガコプレイス(小金井市梶野町)  
協力:株式会社リライト  
ゲスト講師:服部浩之(キュレーター)

### 〈Vol. 7〉美術館とビエンナーレ／トリエンナーレの関係

日程:2015年7月5日(日)14:00~16:00  
会場:旅の本屋のまど(杉並区西荻北)  
協力:旅の本屋のまど  
ゲスト講師:飯田志保子(キュレーター)

### 〈Vol. 8〉プロジェクトをどう残す!? —作品・アーカイブ・言葉・価値— Nadegata Instant Partyの試み

日程:2015年10月3日(土)13:00~15:00  
会場:Roof(国分寺市本町)  
協力:Roof  
ゲスト講師:Nadegata Instant Party(アーティストユニット)

### 〈Vol. 9〉遠藤水城さんの悩み:キュレーションにおけるコンセプトとはなにか。／千葉正也さんの悩み:作品が完成しなかったらと想像すると超怖いのでいつも体力的に限界までやってしまう事

日程:2015年11月8日(日)18:00~20:00  
会場:旅館西郊(杉並区荻窪)  
協力:旅館西郊  
ゲスト講師:遠藤水城(インディペンデント・キュレーター)、千葉正也(画家)

### 〈Vol. 10〉悩みは企画の悪友なのか?

日程:2015年12月12日(土)13:00~15:00  
会場:杉並リボン館(杉並区阿佐谷南)  
協力:株式会社細田工務店  
ゲスト講師:森司(東京アートポイント計画ディレクター)

## TERA English

### 講座

日程:[初級クラス]2015年7月22日~2016年2月24日(隔週水曜日)19:30~21:30/  
[中級クラス]2015年7月29日~2016年3月2日(隔週水曜日)19:30~21:30  
会場:アーツカウンシル東京ROOM302(千代田区外神田)  
講師:弘川有希絵(Art Center Ongoing)、内藤貴美子(同)

## TERATOTERA SOUND FES.一音の陽炎ー

### ライブ

日程:2015年8月1日(土)、2日(日)17:30~19:30



会場:江戸東京たてもの園(小金井市桜町)  
協力:江戸東京たてもの園  
アーティスト:[8月1日]齋藤徹、八木美知依/[8月2日]Torus Vil.、東京中低域より7名のバリトンサクソ

## TERATOTERA祭り2015 -Sprout- プレイベント

### アート

日程:2015年9月20日(日)11:00~17:00  
会場:三井住友銀行三鷹支店 駐車場(武蔵野市中町)  
アーティスト:うらあやか、田中義樹、パンク侍(パンケキ侍)、野口竜平

## TERATOTERA祭り2015 -Sprout-

後援:三鷹市、武蔵野市  
協力:おながのじかん、(有)三協住宅社、学校法人 東海大学 望星学塾、独立行政法人都市再生機構、永谷商事株式会社、株式会社 まちづくり三鷹、協同組合 三鷹中央通り商店街、レストラン喫茶・上床

### アート

日程:2015年11月21日(土)~11月23日(月・祝)11:00~19:00  
会場:JR三鷹駅周辺地域  
アーティスト:うらあやか、江藤佑一、小鷹拓郎、阪中隆文、瀬川祐美子、玉山拓郎、野口竜平、山本篤、和田昌宏

### ライブ

日程:2015年11月21日(土)13:00~15:30  
会場:東海大学望星学塾松前柔道場(武蔵野市西久保)  
アーティスト:井手健介、藤田陽介、マヒトゥ・ザ・ピーポー

### 演劇 贅沢貧乏「みんなよるがこわい」

日程:2015年11月21日(土)~11月23日(月・祝)17:00、19:30、22:00[各回50分]  
会場:三鷹北口共同ビル 2階(武蔵野市中町)  
脚本・演出:山田由梨  
出演:青山祥子、大竹このみ、田島ゆみか、山田由梨

## 西荻レヂデンス

### アート Ⅱ:幽霊トリオをうつⅡ

日程:[滞在リサーチ]2015年8月1日(土)~8月31日(月)、10月1日(木)~10月25日(日) / [展示]2015年10月21日(水)~10月25日(日)14:00~21:00  
会場:[滞在リサーチ]西荻レヂデンス(杉並区西荻北) / [展示]ピリヤード山崎(杉並区西荻北)  
アーティスト:オル太

# 2016 年度

相次ぐテロや難民問題、イギリスのEU離脱や「アメリカ・ファースト」を掲げたトランプ氏が米大統領選挙で勝利するなど、世界の揺らぎがあらわになった。国内でも原発再稼働の準備が進む。そのような社会状況のなかで「Involve—価値観の異なる他者と生きる術—」をテーマとした「TERATOTERA祭り」では、カッパに扮したテラッコが緑地で憩う、観客が宇宙人の質問に答える、といった作品が披露された。東南アジアのアーティストを招く新企画「TERATOSEA(テラトセア)」では、タイ人アーティストの制作をテラッコが支援した。



## アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)

### 講座

日程:2016年7月8日(金)~2017年3月3日(金)原則として隔週金曜日 20:00-22:00 全17回  
会場:吉祥寺グランキオスク(武蔵野市吉祥寺本町)  
協力:株式会社ビデオインフォメーションセンター  
コーディネーター:小川希(TERATOTERAディレクター)  
ゲスト講師:遠藤一郎(未来美術家)、小鷹拓郎(アーティスト)、松本哉(素人の乱)、福住廉(美術評論家)、服部浩之(インディペンデントキュレーター)、芹沢高志(P3 art and environment 統括ディレクター)、佐脇三乃里(認定NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター アシスタントディレクター)

## TERA English

### 講座

日程:[初級クラス]2016年7月13日(水)~2017年3月8日(水)隔週水曜日 19:30~21:30全15回 / [中級クラス]2016年7月20日(水)~2017年2月15日(水)隔週水曜日 19:30~21:30 全15回 / [上級クラス]2016年7月7日(木)~2017年3月1日(木)隔週木曜日 19:30~21:30 全15回  
会場:アーツカウンシル東京 ROOM302(千代田区外神田)  
講師:弘川有希絵(Art Center Ongoing)、本村桜アリス(アーティスト・研究者)

## TERATOTERA SOUND FES.—ヒガコ、高架下の夕立ち—

### ライブ

日程:2016年8月20日(土)、21日(日)16:00~18:00  
会場:コミュニティステーション東小金井(小金井市梶野町)  
協力:株式会社リライト  
アーティスト:[8月20日]Aokid、センチメンタル岡田、ラッキーオールドサン / [8月21日]Aokid、宇治野宗輝、川村美紀子×HIKO

## 暮らすアート

### トーク

日程:2016年8月26日(金)19:30~21:30  
会場:flower cafe コリウス武蔵境(武蔵野市境)  
協力:flower cafe コリウス武蔵境  
ゲスト:いちむらみさこ(アーティスト)、奥山理子(みずのき美術館キュレーター)、米田年範(ファッションデザイナー)

## 西荻映像祭2016—あなたとわたしの間のこと—

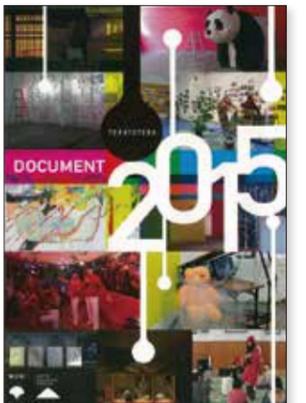
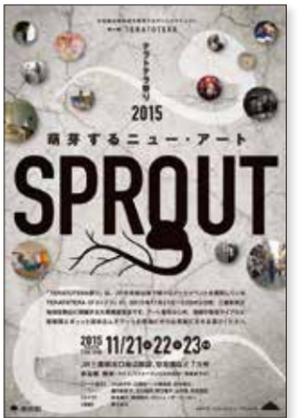
### 映像

日程:2016年9月9日(金)~9月11日(日)18:00~22:00  
会場:JR西荻窪駅周辺の3店舗(杉並区西荻北)  
アーティスト:秋山由希、キュンチョメ、林千歩

## TERATOTERA祭り2016 Involve—価値観の異なる他者と生きる術—

### アート

日程:2016年10月8日(土)~10日(月・祝)11:00~19:00  
会場:JR三鷹駅北口周辺の施設、空店舗など10カ所  
後援:三鷹市、武蔵野市  
協力:喫茶上床、グランキオスク、永谷商事、東海大学松前柔道塾、株式会社 まちづ



▲2013記録冊子



くり三鷹、武蔵野タワーズ団地管理組合、UR 都市機構  
アーティスト：浅井裕介、うらあやか、遠藤一郎、利部志穂、河口遥、田中義樹、永畑智大、橋本聡、ハンバーグ隊、東野哲史

**ライブ**

日程：2016年10月8日(土)13:30～15:30  
会場：東海大学望星学塾松前柔道場(武蔵野市西久保)  
アーティスト：渋谷サイファー、蜻蛉-TOMBO-、BATIC+ermhoi

**パフォーマンス**

日程：10月10日(月・祝)17:00～17:30  
会場：武蔵野タワーズ スカイゲートタワー前広場(武蔵野市中町)  
アーティスト：阿日虎南(大駱駝艦)

**トーク**

日時：10月10日(月・祝)19:30～21:00  
会場：三鷹中央ビル2階(三鷹市下連雀)  
ゲスト：上田紀行(東京工業大学教授、文化人類学者)

**TERATOSEA**

**アーティスト・イン・レジデンス**

日程：[滞在]2016年12月13日(火)～2017年2月20日(月)

**アート Brackish Tomorrow**

日程：[展示]2017年2月1日(水)～2月5日(日)12:00～21:00  
会場：Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)  
アーティスト：Thawiphat Praengoen(ターウィーパッ・プレーヌーン)

**\*トーク**

日程：2017年2月5日(日)17:00～19:00

会場：Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)  
ゲスト：浅見靖仁(法政大学教授)

# 2017年度

「リアリー・リアリー・フリー・マーケット」(RRFM)は、貨幣が介在しない市場(free market)で人々がスキルやエピソードを交換しつつ交流する。シンガポール発のこの企画が、夏の日、図書館前の広場で開かれ、多くの市民で賑わった。秋の「TERATOTERA祭り」は「Neo-political—わたしたちのまつりごと—」をテーマとして、観客参加型の作品を作家に依頼した。そこには、RRFMにも通じる「政治の手触り」を観客と共有したい、という小川ディレクターの期待が込められていた。

**アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)**

**講座**

日程：2017年6月22日(木)～2018年2月22日(木)原則隔週木曜日 19:30～21:30 全17回  
会場：アーツカウンシル東京 ROOM302(千代田区外神田)  
コーディネーター：小川希(TERATOTERAディレクター)  
ゲスト講師：いちむらみさこ(アーティスト)、小泉明郎(アーティスト)、山本篤(アーティスト)、ペビン結構設計(演劇集団)、福住廉(美術評論家)、港千尋(NPO法人 Art Bridge Institute 代表理事)、窪田研二(インディペンデント・キュレーター)、Minato machi Art Table、Nagoya[青田真也(美術家)、野田智子(アートマネージャー)、吉田有里(アートコーディネーター)]、相馬千秋(芸術公社 代表理事)

**リアリー・リアリー・フリー・マーケット**



共催：公益財団法人武蔵野生涯学習振興事業団

助成：公益財団法人 花王 芸術・科学財団

**アート Tokyo Really Really Free Store**

日程：2017年7月13日(木)～30日(日)9:30～22:00  
会場：武蔵野プレイス(武蔵野市境南町)  
アーティスト：ジェニファー・ティオ(Post Museum)

**アート Aokid city meets Musashino Place**

日程：2017年7月13日(木)～30日(日)9:30～22:00  
会場：武蔵野プレイス(武蔵野市境南町)  
アーティスト：Aokid

**パフォーマンス/ライブ Aokidの海開き!～君はもう泳いでいる。～**

日程：2017年7月17日(月)15:00～16:00/19:00～20:00  
会場：境南ふれあい広場公園/武蔵野プレイス(武蔵野市境南町)  
アーティスト：Aokid/Aokid、よだまりえ、米澤一平

**アート Really Really Free Market**

日程：2017年7月22日(土)15:00～18:00  
会場：境南ふれあい広場公園(武蔵野市境南町)  
アーティスト：ジェニファー・ティオ(Post Museum)、Aokid

**トーク コミュニティを築くアートとは**

日程：2017年7月22日(土)19:00～21:00  
会場：武蔵野プレイス(武蔵野市境南町)  
ゲスト：ジェニファー・ティオ(Post Museum)

**パフォーマンス むさしのかぜのオーケストラ—耳をすましてダンスをすれば、さあコンサートが始まっている—**

日程：2017年7月27日(木)18:00～20:00  
会場：武蔵野プレイス(武蔵野市境南町)  
アーティスト：Aokid

**西荻映像祭2017—不可分な労働と表現—**

**映像**

日程：2017年 8月23日(水)～27日(日)12:00～23:00[会場により異なる]  
会場：JR西荻窪駅周辺の7店舗(杉並区西荻北、西荻南)  
助成：公益財団法人 花王 芸術・科学財団、杉並区文化芸術活動助成事業  
アーティスト：伊阪柊、奥田栄希、田中良佑、土屋萌児、橋本匠、林千歩、東野哲史

**パフォーマンス・デー—秋のカラダ収穫祭—**

**パフォーマンス**

日程：2017年10月15日(日)15:00～18:00  
会場：コミュニティステーション東小金井(小金井市梶野町)  
協力：株式会社 JR 中央ラインモール、株式会社リライト  
アーティスト：FAIFAI—快快—、KPR/開幕ペナントレース

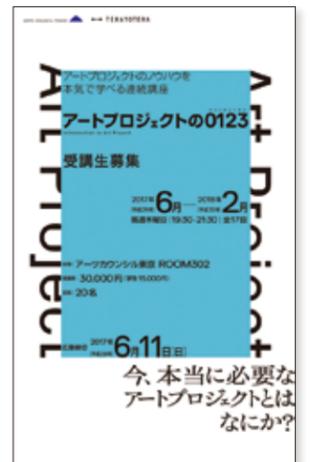
**TERATOTERA祭り2017 Neo-political—わたしたちのまつりごと—**

**アート**

日程：2017年11月10日(金)～11月12日(日)11:00～19:00  
会場：JR三鷹駅周辺地域  
後援：三鷹市、武蔵野市  
助成：公益財団法人 花王 芸術・科学財団  
協力：HYM[ハモニカ横丁ミタカ]、UR都市機構(独立行政法人都市再生機構)、株式会社まちづくり三鷹  
アーティスト：有賀慎吾、うらあやか、江上賢一郎×Michael Leung、off-Nibroll、中崎透、二藤建人、村上慧、山城知佳子、山本篤、和田昌宏



▲ 2016記録冊子



## ＊トーク 「政治と芸術」

日程：11月12日(日)19:30～21:30

会場：三鷹中央ビル2階(三鷹市下連雀)

## ライブパフォーマンス

日程：11月12日(日)13:00～14:00

会場：JR三鷹駅北口交番横(武蔵野市中町)

アーティスト：切腹ピストルズ

## シンポジウム「西を動かす」

### トーク

日程：2017年12月1日(金)18:00～19:45

会場：武蔵野美術大学 9号館515教室(小平市小川町)

後援：三鷹市、武蔵野市

協力：武蔵野美術大学芸術文化学科

パネリスト：及川賢一(NPO法人AKITEN代表、八王子市議会議員)、酒井博基(コミュニティマネジメント、法政大学非常勤講師)、長島剛(多摩信用金庫地域連携支援部長)、宮下美穂(NPO法人アートフル・アクション事務局長)

モデレーター：小川希(TERATOTERA ディレクター)

# 2018 年度

テラッコが企画した2つの街頭パフォーマンスが行われた。「踊り念仏」は、十数人の参加者が街頭で人知れずパフォーマンスを行い、通行人の反応に「街の条件」を探った。「駅伝芸術祭」では、アーティストたちが芸術表現をしながらタスキをつなぎ、スタートから日没による中断までの4時間あまりを生中継。すべての運営をテラッコが担った。秋にテラッコのコアメンバーを中心に、アートを支える集団「Teracollective」が発足。「TERATOTERA 祭り2018」は、Teracollective がコンセプトから立ち上げた。

## アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)

### 講座

日程：2018年6月21日(木)～2019年2月21日(木)原則隔週木曜日 19:30～21:30 全18回(特別講座を含む)

会場：アーツカウンシル東京 ROOM302(千代田区外神田)ほか

コーディネーター：小川希(TERATOTERA ディレクター)

ゲスト講師：高嶺格(美術家、演出家)、西野達(アーティスト)、山城知佳子(アーティスト、映像作家)、福住廉(美術評論家)、藪前知子(東京都現代美術館学芸員)、飛生芸術祭[木野哲也(TOBIU CAMP代表)、国松希根太(彫刻家、飛生アートコミュニティ代表)、奈良美智(美術家)]、佐塚真啓(アーティスト、国立奥多摩美術館館長)、亜女会[羊屋白玉(劇作家、演出家、俳優)、矢内原美邦(振付家、演出家、俳優)]、小林武史(音楽プロデューサー)

## 踊り念仏

### パフォーマンス

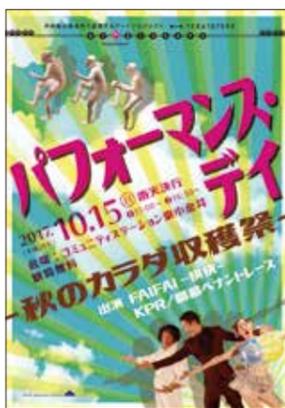
日程：2018年8月18日(土)17:00～19:00

開催場所：スターロード商店街(杉並区阿佐谷南)ほか、JR阿佐ヶ谷駅周辺地域

アーティスト：武田力

## 駅伝芸術祭

### パフォーマンス



日程：2018年10月13日(土)13:00スタート

開催場所：JR高円寺駅～西荻窪駅の沿線地域

アーティスト：山崎皓司+前川遙子、村田峰紀×松原東洋、佐塚真啓

## TERATOTERA 祭り2018 Walls—わたしたちを隔てるもの—

### アート

日程：2018年11月16日(金)～18日(日)11:00～18:00[一部は18:30まで]

会場：JR三鷹駅北口周辺施設、空店舗など7カ所

後援：三鷹市、武蔵野市

協力：HYM[ハモニカ横丁ミタカ]、JR三鷹駅、UR都市機構(独立行政法人都市再生機構)、株式会社ビデオインフォメーションセンター、株式会社まちづくり三鷹、公益財団法人武蔵野文化事業団、スペースエルベ、武蔵野タワーズ団地管理組合

アーティスト：遠藤麻衣、キュンチョメ、小林清乃、地主麻衣子、砂連尾理、高田冬彦、Tuan Mami、林千歩、maadm、本間メイ

### ＊トーク

日程：2018年11月17日(土)18:30～20:30

会場：三鷹中央ビル2階(三鷹市下連雀)

## TERA English

### 講座

日程：2019年2月27日(水)、3月1日(金)19:45～21:15

会場：Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)

講師：吉崎ゆきえ(Art Center Ongoing)

# 2019 年度

東南アジアに広がる「アートコレクティブ」の動きに呼応して、国内外の関係者を招いて「コレクティブ」の在り方を考えるフォーラムを2度にわたって開催した。「TERATOTERA 祭り」も、前年度に続きTeracollective が主導。討議をへて「表現の不自由」をコンセプトとした。開催に向けて準備しているさなかに、「あいちトリエンナーレ」の「表現の不自由展・その後」展が脅迫的な内容の非難によって休止を余儀なくされた。期せずして問題意識を共有する結果となった。

## コレクティブ フォーラム vol.1—なぜ今コレクティブなのか?—

### トーク

日程：2019年5月19日(日)15:00～17:00

会場：ピリヤード山崎(杉並区西荻北)

パネリスト：アジア女性舞台芸術会議(亜女会)=羊屋白玉(「指輪ホテル」芸術監督)、前田愛実(劇評ライター、パフォーマー)/Teracollective=岩尾庄一郎、三浦留美/美学校=皆藤将(写真家、アーティスト)、三田村光土里(現代美術作家)

ゲスト：毛利嘉孝(社会学者、東京芸術大学教授)

モデレーター：小川希(TERATOTERA ディレクター、Ongoing Collective メンバー、Teracollective メンバー)

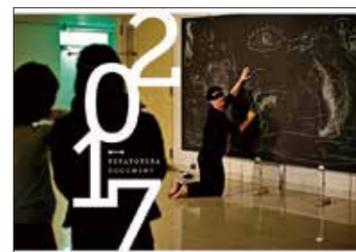
## 駅伝芸術祭 リターンズ

### パフォーマンス

日程：2019年6月1日(土)8:00スタート

開催場所：JR中央線荻窪駅～三鷹駅沿線地域

アーティスト：佐塚真啓、新人Hソケリッサ!、若木くるみ



▲ 2017記録冊子



パブリックビューイング会場:HYM(武蔵野市中町)

## アートプロジェクトの0123(オイッチニーサン)

### 講座

日程:2019年6月20日(木)~2020年2月6日(木)原則隔週木曜日 19:30~21:30 全17回

会場:アーツカウンシル東京 ROOM302(千代田区外神田)

コーディネーター:小川希(TERATOTERAディレクター)

ゲスト講師:宇治野宗輝(アーティスト)、やなぎみわ(現代美術作家)、泉太郎(美術作家) 福住廉(美術評論家)、篠田千明(演出家、作家)、森村泰昌(美術家)、櫛野展正(アウトサイダー・キュレーター)、hyslom / ヒスロム(アーティストグループ)

## TERATOTERA祭り2019—選択の不自由—

### アート

日程:2019年11月8日(金)~11月10日(日)11:00~18:00

会場:JR三鷹駅北口周辺施設、空店舗など9カ所

後援:三鷹市、武蔵野市

協力:HYM[ハモニカ横丁ミタカ]、JR三鷹駅、おんがくのじかん、株式会社ビデオインフォメーションセンター、株式会社まちづくり三鷹、公益財団法人武蔵野文化事業団

アーティスト:青木真莉子、うしお、うらあやか、遠藤薫、岡田裕子、前後(神村恵+高嶋晋一)、ヘンリー・タン、movingscape 連続展 vol.1「乱立する筒」、李晶玉×鄭梨愛

### \*トーク

日時:11月9日(土)18:30~20:30

会場:武蔵野芸能劇場 小ホール(武蔵野市中町)

## コレクティブフォーラム vol.2—サステナビリティの獲得—

### トーク

日程:2020年1月18日(土)15:00~17:00

会場:KOGANEI ART SPOT シャトー2F(小金井市本町)

パネリスト:Ongoing Collective =うらあやか(アーティスト)、たこ(Ongoing Collective マネージメント) / Gudskul = MG Pringgotono(Gudskulディレクター)、Leonhard Bartolomeus[Barto](インディペンデント・キュレーター) / Sapporo Dance Collective =羊屋白玉(ゲストディレクター、演出家・劇作家)、櫻井ヒロ(パフォーマー)

ゲスト:服部浩之(キュレーター) / 秋田公立美術大学大学院准教授)

モデレーター:小川希(TERATOTERAディレクター、Ongoing Collectiveメンバー、Teracollectiveメンバー)

# 2020年度

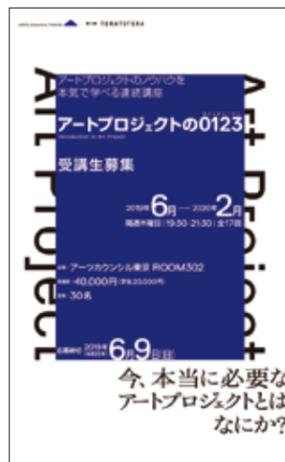
TERATOTERAの最終年度。5月に国内と東南アジアから6組のアートコレクティブを招く「TERATOTERA祭り」を予定していた。ところが、中国から全世界に広がった新型コロナウイルスの感染が、日本でも3月から深刻化。各コレクティブとSNSを通して協議を重ね、結果的に10月にすべてオンラインで公開する形で開催した。コレクティブの個性を生かしたパフォーマンスやライブが披露され、その多くをアーカイブ化。コロナ禍におけるアートプロジェクトの記録を残した。

## TERATOTERA祭り2020 Collective —共生の次代—

\*日程はすべて日本標準時



▲ 2018記録冊子



### アート

日程:2020年10月15日(木)~10月18日(金)

会場:現地からオンライン配信[一部ライブ配信]

参加コレクティブ:Chiang Mai Art Conversation(タイ)、hyslom / ヒスロム(日本)、Ongoing Collective(日本)、Ruang MES56(インドネシア)、Sa Sa Art Projects(カンボジア)、Sapporo Dance Collective(日本)

### ライブ

日程:2020年10月17日(土)18:00~19:00

会場:現地からライブ・オンライン配信

アーティスト:AMOK(インドネシア)、Senyawa(インドネシア)、テニスコート(日本)

### トーク Collective Forum

日程:2020年10月17日(土)19:00~21:00

会場:現地からライブ・オンライン配信

パネリスト:Chiang Mai Art Conversation(タイ)、Ongoing Collective(日本)、Ruang MES56(インドネシア)、Sa Sa Art Projects(カンボジア)、Sapporo Dance Collective(日本)

### トーク The Artist's Milk Tea Alliance

日程:2020年10月18日(土)17:00~19:00

会場:タイ、台湾、香港からライブ・オンライン配信

パネリスト:タイ、台湾、香港のアーティスト各2名

### トーク Teracollective トーク

日程:2020年10月16日(金)19:00~21:00

会場:アーツカウンシル東京 ROOM302(千代田区外神田)からライブ・オンライン配信

参加コレクティブ:Teracollective(日本)

### トーク ディレクターズトーク「てらとてらを結んでみて」

日程:2020年10月18日(日)13:00~15:00

会場:Art Center Ongoing(武蔵野市吉祥寺東町)からライブ・オンライン配信

対談者:小川希(TERATOTERAディレクター)、森司(東京アートポイント計画ディレクター)



▲ 2019記録冊子



## TERATOTERAが、終わる。

2011年、OLだったわたしは定時に退社して友人と飲みに行く毎日を送っていた。新たな展開のない日々にもものたりなさを感じ、就職する前に登録したアート関連のメーリングリストを久しぶりに開いた。そこに講座「アートプロジェクトの0123（オイッチニーサン）」の情報が届いており、軽い気持ちで応募した。それがすべての始まりだった。

講座の中で、コーディネーターの小川希さんが「実践の場ありますよ」と、自身がディレクターを務めるTERATOTERAを紹介していたので、テラッコの集まりに顔を出してみた。テラッコたちは、10月に吉祥寺で開催する「TERATOTERA祭り」に向けて準備を進めていた。わたしは右も左も分からない状態だったが、アート好きの人たちと企画の準備をするのは楽しかった。「TERATOTERA祭り」が開幕すると、酒に飲まれないわたしはいつの間にか打ち上げ担当となり、仕事終わりで会場に着くと、その日の打ち上げ会場の手配を頼まれるようになっていた。自分がほとんど関わっていない企画の打ち上げにもなぜか参加し、11日間の会期中、毎夜日付をまたいで出展者と酒を飲んだ。朝になると出勤し、早々に退社してはまた吉祥寺に向かう日々だった。

2013年度の終わりに突然、事務局長のたこ（飯川恭子）さんから「わたし、東京を離れるんだけど、瑞世（みずよ）ちゃん、事務局長、やらない?」と言われた。引き継ぎなどはほとんどないまま、数カ月後に後任になった。小川さんとの企画内容の確認と決定、会場の使用交渉、共同主催のアーツカウンシル東京や、関連する行政との調整、年間予算の経理処理業務等々、訳も分からないまま、ただただ降ってくる仕事を受け止め、なんとか打ち返していくという状況がしばらく続いた。

元来うっかり者であるにも関わらず、自分の頭の中に業務を溜め込みがちなわたしをフォローしてくれたのは、他ならぬテラッコだった。いつも「こうした方がいいんじゃない?」「それやりますよー」と、率先してわたしの業務を引き取ってくれた。

2020年も終わりに差し掛かったころ、わたしは別の地域で街なか展覧会を実施した。年末で、コロナ禍のさなか、しかも急なお願いにも関わらず、多くのテラッコが二つ返事で手伝ってくれた。いつもの通り「これもやっておこうか?」とわたしの頭の中に詰まっている作業を引っ張り出し、難なくこなしてくれた。これまでこの人たちの存在に支えられ、助けられ

てきたのだなと改めて実感した。

TERATOTERAは、2020年度で終わる。それでもテラッコは、TERATOTERAで育まれたアートへの愛情を携えて、アートの現場を支えていくのだろう。それがわたしは、とても嬉しい。わたしはこのプロジェクトに関わることで、1から100まで、たくさんのことを学ばせてもらった。事業が終わるのが悲しいというよりは、「もう卒業し、自分の道をしっかりと歩んでいくのだよ」と、背中を押されている気分だ。美術家の活動を発信していくことや街なかで展覧会をすることには、一筋縄ではいかないことが多分にある。ひとつひとつ立ち向かっていくしかないのだけど、わたしの中にある、現場の大変さと楽しさ、そして作品の面白さの基準が、TERATOTERAによって培われたものであることは、心強く、頼もしいなと思う。

これまでTERATOTERAの事業の実施にあたりご協力いただいた地域の方、行政の方、またご来場いただいた方々に、心より感謝いたします。そして今後も、生きづらいと言われるこの時代を必死に生き抜くアーティストたちの作品を、寛容な気持ちで受け止め、少しでも関わっていただければと、願ってやみません。

TERATOTERA事務局長  
高村瑞世

## TERATOTERA is Over

The year was 2011. I was an “office lady” who went drinking with friends at the same hour every day after work. One day was practically identical to the next. Then, for the first time in a long time, I opened a message from an art-related mailing list that I had joined before getting my job. There was information about a lecture series titled “An Introduction to Art Projects.” Though I signed up to attend on a whim, this became the beginning of everything for me.

“There are also opportunities to get involved, you know?” said Nozumu Ogawa, coordinator of the lectures, referring to TERATOTERA, for which he served as Director. So, I decided to attend one of TERACCO’s meetings. The group was in the midst of preparations for the next TERATOTERA Festival, to open that October in Kichijoji. Though I had no idea what was going on, it was fun being involved in planning events with other art lovers. Being a seasoned drinker, I suddenly found myself being put in charge of organizing the get-togethers when the festival opened. They just appointed me for the task one day when I got to the event site after work. I had contributed practically nothing to the event itself, yet I was invited to the parties nonetheless. For the eleven days the festival was on, I drank with the participating artists past midnight every night. Then I would head for work the next morning, then go back to Kichijoji again as soon as I was off.

Near the end of 2013, Tako-san, TERATOTERA’s Administrative Director, approached me and said, “Mizuyo-chan, I’m moving away from Tokyo. Do you have any interest in taking over my job?” With hardly an opportunity to think the offer over, I found myself her successor a few months later. I worked with Ogawa on event planning and execution, negotiating the use of venues, coordinating with our partners at Arts Council Tokyo and other governmental organizations, supervising the annual budget and bookkeeping… I did pretty much anything and everything that came my way, somehow managing to get it all done. That situation continued for some time.

As I am naturally absentminded and have a hard time focusing on

work, I would have drowned without the help of the members of TERACCO. “How about we do it like this?” “I’ll do it!” They were always taking the initiative to get things done.

As 2020 came to a close, I was responsible for organizing a neighborhood art project in another part of Tokyo. Despite it being the end of the year with everyone busy, despite the pandemic, despite the sudden request and short turnaround, most of the members of TERACCO readily agreed to help. They extracted whatever tasks needed to be done from my spinning head and effortlessly dispatched with them one by one. I was reminded, once again, how indebted I was to their existence.

TERATOTERA ended with 2020. I imagine the members of TERACCO will take the passion for art that grew while they were involved in TERATOTERA and reinvest it elsewhere in the art world. That would make me very happy.

I learned so much during my time with TERATOTERA. I am less sad to know that it is ending, than confident that the experience I gained will enable me to graduate and find my own path forward. Facilitating artists’ projects and organizing exhibitions that span multiple venues across multiple neighborhoods never goes completely as planned. One has no choice but to deal with the uniqueness of each situation. However, because of all that TERATOTERA taught me, I can say with certainty that my appreciation of both the difficulties and joys of what goes on behind the scenes in the art world has deepened, as has my understanding of what makes an artwork and its staging successful.

I would like to express my deepest gratitude to the local residents, government staff, and festival visitors who made the success of TERATOTERA possible. I hope that I continue to have opportunities to work with artists and enjoy their work with an open mind, especially as they struggle through these challenging times.

Mizuyo Takamura,  
TERATOTERA Administrative Director

雑誌編集者、新聞記者をへて、現在は「フリーランス編集者」という肩書の初老フリーター。2011年からテラッコとしてTERATO TERAに参加する。趣味は居酒屋探訪。その経験を生かしてTERATOTERA「宴会部長」を自任するも、2020年3月以降は、新型コロナウイルスの影響で実質的に「職務停止」状態に。同年度末のTERATOTERA終了とともに、失意のうちに「退任」する。

うとはしませんでした。勉強が苦手という理由もあるけれど、ボランティア活動が面白くなったのです。正確にいうと、テラッコとの交遊が愉しかったのです。第IV章の「事務局長対談」で、たこさんが「（テラッコたちは）いつから飲み始めたんでしょね」と発言されています。文字量調整のために省いたのですが、その後には実は「そうだ、西岡さんが来てからだ!」とおっしゃっていました。反論をすれば、先ほどの「原体験」で、テラッコの集まりの後は飲みに行くものだ、と刷り込まれていたのですよ、たこさん! もちろん、僕は昭和気質のオヤジですから、仕事終わりに飲みに行くのが習性となっていました。

閑話休題。紙幅も限られているので、急いでまとめます。近藤さんとの再会がきっかけとなってTERATOTERAに導かれた僕にとって、テラッコの活動はどこかで「コンドルズ」の舞台とつながっています。学ラン姿の男子たちが、夕陽を浴びていつまでも遊び続ける――。そう、「放課後」のイメージです。ボランティア活動の場は、仕事や学業の場でも自宅でもない、いわゆる「サードプレイス」です。そこに、年代も立場も異なる様々な人々が集い、それぞれの技能と経験を生かして愉しみつつ協働する。そうした在りようが「放課後」に重なって見えたのです。

2011年から参加した僕にとって、TERATOTERAの11年間は「放課後」の愉しみとともにありました。飲み会は、ボランティア「活動終わり」の、もうひとつの「放課後」でした。また、テラッコの皆さんと「上海ビエンナーレ2014」をはじめとする国内外の芸術祭にでかけたことも嬉しい思い出です。旅もまた、「日常」を抜け出すことで「日常」を賦活する行為です。飲み会とアートツアーが、テラッコの皆さんの日々を活性化できていたとすれば、「宴会部長兼旅行部長」冥利に尽きます。いずれも非公式的な活動であるため本書には記録されません。参加された皆さんの記憶にとどまり、それぞれの場所で「放課後」を引き継いただければ幸いです。TERATOTERAの残照のなかで、いつまでも遊び続けるテラッコたちのシルエットを夢想しつつ筆を擱きます。



岩井優「横丁の旗」から。2011年の「TERATOTERA祭り」で岩井は、テラッコがタオルで吉祥寺の「ハモニカ横丁」を掃除する、というプロジェクトを実施し、その写真を店舗の外壁に展示した。テラッコたちの姿は、東京オリンピック開催中の1964年10月、銀座の街頭で前衛芸術集団「ハイレッド・センター」が実施した「首都圏清掃整理促進運動」を連想させる。一方、岩井のプロジェクトから10年後の現在、東京オリンピックの帰趨が定まらない中、私たちは日々、文字通りに至るところで洗浄を繰り返している。偶然の符合とはいえ、アートの「予知力」を感じさせる。

## それでも「放課後」は終わらない

本来の「編集後記」は以上です。ここから先は個人的な回想を中心とした「余談」です。お急ぎの方はここでページを閉じてください。

僕が初めてTERATOTERAに接したのは2011年。西荻窪の自宅近くで行われたイベントに観客として参加しました。巻末の「全記録」にもありますが、6月4日の「西荻ぶらぶらと、インプロビゼーション」です。出演者の一人がダンサーの近藤良平さんでした。実は、近藤さんとは2004年に、当時赴任していた福岡で会ったことがありました。約束の時間に取材場所に行ったのですが、待つこと30分。ようやく現れた近藤さんは開口一番、「すみません、スーパー銭湯があまりに気持ちよくて」と上気した顔をほころばせたのでした。その笑顔がとびきりチャーミングでした。近藤さんは「コンドルズ」というカンパニーを主宰しています。メンバー全員が学ラン(学生服)姿で登場し、切れ味鋭いダンスの合間に、コントめいた寸劇を繰り広げます。その舞台の愉しみを伝えたくて、取材の後、「コンドルズ 終わらない『放課後』』という記事にまとめました。

西荻窪の会場で「ボランティア募集」のチラシを受け取りました。気になったので、1週間後の説明会に出かけました。当時の手帳を見ると、同じ月の26日に吉祥寺で「テラッコ屋」に参加しています。夕刻には「焼き鳥『いせや』交流会」のメモが残っています。これが、僕にとってテラッコの「原体験」です。

ところで、なぜ「ボランティア募集」が気になったかといえば、話はその数年前に遡ります。当時、僕は名古屋で美術関係の取材を担当していました。2010年夏に第1回「あいちトリエンナーレ」があり、前年には「プレイベント」がありました。その過程を取材していると、いやでもボランティアの姿が目に入ります。しかも、全員が喜々として熱心に作業をしています(お金も出ないのに)。その様子が不思議で、記憶に残ったのです。そして翌年3月に東日本大震災が起こり、5月に東京に転任したら、たまたま先述のチラシを手にしたわけです。自宅に近い吉祥寺なら週末は参加できる、と考えて「参与観察」気分で開催したのでした。その発想は、第V章に登場したテラッコたちに通じるかもしれませんが。残念ながら、僕は論文を書く

美術ライターからも寄稿をいただきました。そうした多くの声が重層的に響き合うなかで、テラッコの「熱量」が駆動力となったTERATOTERAの姿が像を結ぶことを願っています。

最後のパートは、書名と同じ「TERATOTERA 2010→2020全記録」です。TERATOTERAの記録集として、その活動を細大漏らさず記録にとどめたいという、編集者／偏執者の欲望が炸裂した結果です。

その第1の犠牲者となったのが、事務局の高村瑞世さんと森ゆうなさんです。アートプロジェクトに限りませんが、ある目的に向けて疾走している最中は記録を残すことなど念頭にありません。TERATOTERAのイベントの記録やチラシ類の画像も、かなり乱雑な状態だったようです。事務局の2人がそれらを整理し、欠けていた記録や画像を探し出してくれました。時期によって、あるいはイベントごとに異なる表記を一定のルールを定めて整えましたが、どうしても間尺に合わない部分がありました。文字だらけの膨大な原稿を確認してくださったのが、アーツカウンシル東京の嘉原妙さんと村上愛佳さん。第2の犠牲者です。精査された、けれどもデータだらけの文字原稿を視覚的に読みやすく、美しいデザインにするための労苦を強いられたデザイナー、トール至美が第3の犠牲者です。トールさんはまた、チラシなど多数の画像をなるべく関連する文字データの近くに配置する、という繊細な心遣いで視覚的にも楽しめる「全記録」に仕上げてくださいました。

本書は、テラッコやアーティストをはじめ多くの方々との協力をいただいで作成することができました。深く感謝を申し上げます。TERATOTERAの全体像を俯瞰することを密かに目指していたのですが、最終年度の活動と並走しながら企画・編集を進めるという制約もあって、俯瞰できるだけの視座を持ちえませんでした。とくに「TERATOTERA祭り2020」のパートでは、「パンデミック下のアートプロジェクト」という特異な様相を客観的に把握しえていません。後世の検証に期待したいと思います。それでも、TERATOTERAを11年間にわたって駆動してきた「熱源」をまなざすことはできたのではないか、と考えています。

TERATOTERAは2020年度で終了します。テラッコたち、そしてテラッコに協力してくださった皆さまが、これまで共有してきた「熱源」を胸に、新たな日々を創造的に過ごされることを祈念してやみません。

編集担当  
西岡一正

編集後記

## TERATOTERAの「熱源」を探って

『TERATOTERA 2010→2020全記録』。これが本書のタイトルです。編集作業が終盤に至った現在、誇大な書名だったかも、という反省が兆してきました。「全記録」と謳いながら、個々の展示やパフォーマンス、ライブなどの詳細にはほとんど触れていないからです。TERATOTERAでは2011年度から各年度の活動を記録した冊子を作成してきました。それらの冊子と合わせて本書をご覧いただければ、なんとか「全記録」としての面目を保てるかもしれません。

本書は大きく分けて3つのパートから成り立っています。1つは冒頭の「TERATOTERA祭り2020」です。2020年度は単年度の記録冊子を作成する予定がなかったのも、いわば簡易版記録冊子という位置づけです。従来と異なるのは、新型コロナウイルスの影響で、全ての企画がオンライン化されたことです。当初は、国内外から6つのコレクティブが参加して、5月に吉祥寺を中心に開催することを予定していました。春先から感染が広がり始めたので、その状況をにらみつつ開催の形を検討していたのですが、最終的には「全てオンラインで10月開催」と決まりました。企画の内容については、それぞれを担当したテラッコの寄稿をご覧ください。コレクティブとはSNSで連絡をとりつつ、最終的な展示やトークはモニター画面でしか鑑賞できない、という担当者のもどかしさも感じ取っていただければ幸いです。

第2のパートは、第II章「はじまりの日々」から第七章「TERATOTERAと私」までです。本書の副題「ボランティアが創ったアートプロジェクト」の証左となることを期待しています。「TERATOTERAはボランティアが企画を主導している」という評価をしばしば耳にしてきましたが、一介のボランティアに過ぎない立場からは、客観的な評価はできません。ただ、小川希ディレクターの開放的なディレクションのもと、テラッコが自ら企画を立てて実現させる例を数多く見てきました。そこで、小川ディレクターの示唆を受けて始めたのが、テラッコのオンライン・ミーティングです。2020年6月から8月にかけて合計10回開催し、2019年度から遡る形で各年度の活動を振り返りました。その参加者に呼びかけて、39人の寄稿を集めたのが第三章「テラッコの熱量」です。

また、大学院生としてTERATOTERAをテーマに修士論文をまとめたテラッコがいました。その「参与観察」の経験を綴ってもらったのが第V章「TERATOTERAを考察する」です。テラッコとともに制作したアーティストや、TERATOTERAを支援してくださった地域の関係者によるエッセイをお願いするとともに、批評家と



TERATOTERAの最初のイベント「TERATOTERAはじまりの日」(2010年2月)。吉祥寺の老舗焼き鳥屋「いせや公園店」の大広間に、JR中央線沿線の芸術家や文化関係者ら約130人が集った

## TERATOTERA 2010→2020

ボランティアが創ったアートプロジェクト

監修・ディレクター 小川 希  
事務局長 高村瑞世  
事務局スタッフ 森 ゆうな  
編集 西岡一正  
デザイン トール至美  
翻訳 Ryan Holmberg ライアン・ホームバーグ

発行日 令和3年3月11日  
発行元 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
〒102-0073 東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス8階  
TEL 03-6256-8430 FAX 03-6256-8827  
<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>  
印刷・製本 株式会社グラフィック

主催 東京都  
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京  
一般社団法人Ongoing

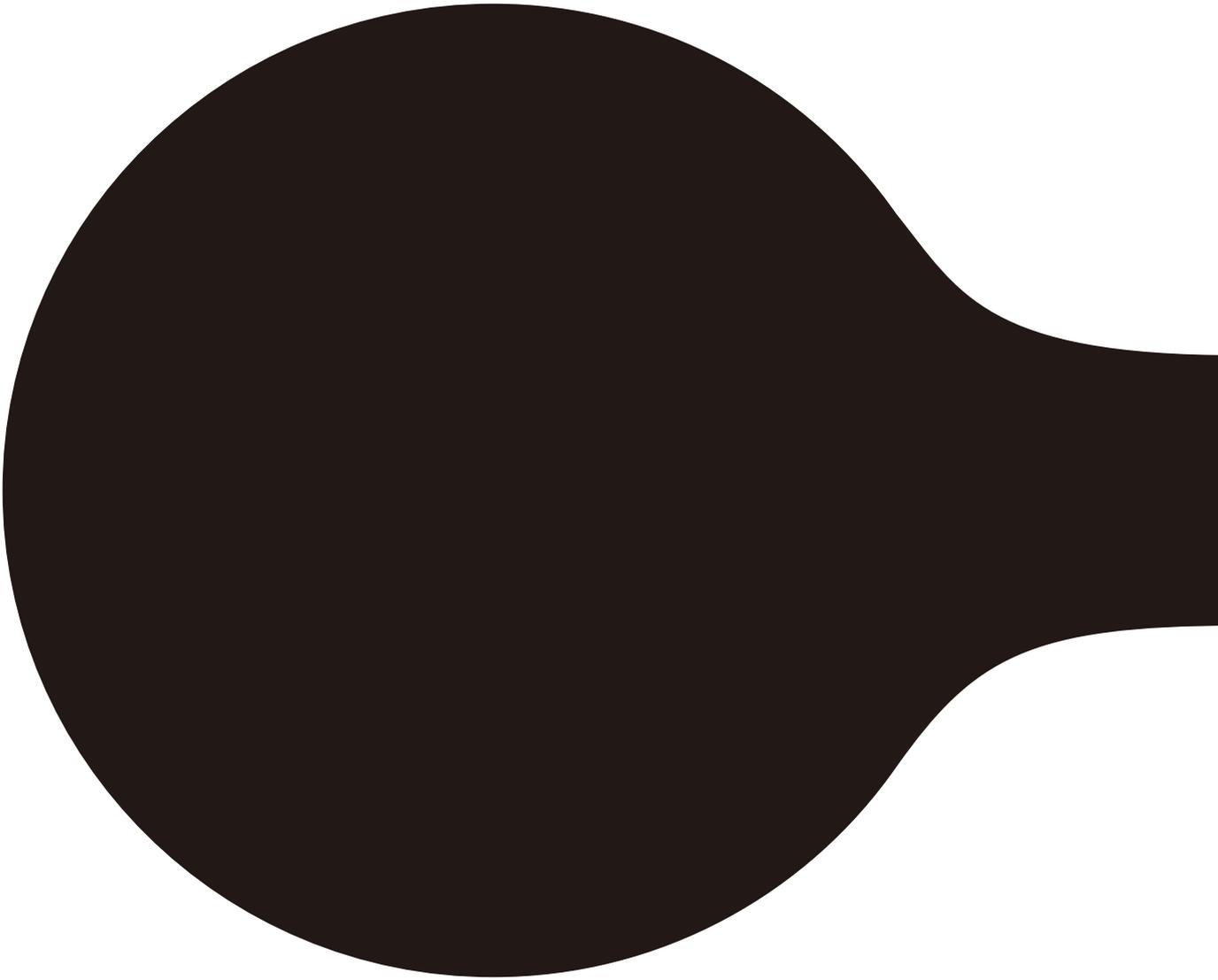
問合せ 一般社団法人Ongoing  
〒180-0002 東京都武蔵野市吉祥寺東町1-8-7  
TEL/FAX:0422-26-8454  
Email:info@teratotera.jp  
<http://teratotera.jp>

東京アートポイント計画は、地域・市民が参画するアートプロジェクトを通じて、東京の多様な魅力を創造・発信することを目指し、東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が展開している事業です。街なかにあるさまざまな地域資源を結ぶアートプロジェクトを、アーティストと市民が協働して実施・展開することで、継続的な活動を可能にするプラットフォームを形成し、地域社会の担い手となるNPOを育成します。

<https://www.artscouncil-tokyo.jp/>

※本書はTokyo Art Research Lab 研究・開発の「流通・発信プログラム」の一環として制作されました。

ISBN 978-4-909894-17-5  
C0070









アートには、かつてなかった回路を発生させてつなぐ力があります  
つないだ先が軋轢に満ちてなめらかでない関係となる場合もあります  
自分のアイデアが現実となる景色を見られる **ワクワク感**  
出会ってはいけないものに出会ってしまった……

大事なものは、**ある意味極端に歪んだ「熱量」**  
芸術に対する

**お金で動かす、** 熱量と関係性と面白さで動く **夢** 制作支援者かつ主体的な鑑賞者として現場の状況を語る事ができるボランティアは重要な存在である  
多様な人々と出会い、未知の感覚を呼び覚ます **作家を通じて実現したい** **夢** を描いていた

TERATOTERAは終わろうとも、**これから始まっていく**  
テラッコの社会参加は

私はきっと、テラッコたちの文章を  
**羨望の眼差しで**  
読むことになるだろう

**テラッコ**